ＩＳ　桜の花纏う真剣

エドワード・ニューゲート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　桜の花纏う真剣

【Ｎコード】
Ｎ０２７３Ｔ

【作者名】
エドワード・ニューゲート

【あらすじ】
世界でただ一人、ＩＳを使える“男性”の登場。
そのニュースは瞬く間に広がり、世界中を驚愕させた。
そんな折、ＩＳ学園に一組の男女が入学してくる。
その男は、世界で二人目のＩＳを使える男にして、話題の男性「織斑　一夏」の義弟だった。

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の二次小説です。

それが嫌な方は、回れ右をして戻ることをお勧めします。

ご意見、ご感想、ご指摘を遠慮なく送ってください。

プロローグ　桜、義兄と再会す

本能寺の変

織田信長が、家臣、明智光秀の謀反に遭い、京、本能寺にて自害した事件。
これにより、天下統一目前とまで言われた織田信長の野望は、光秀のたった一言の号令によって、水泡と化したのである。

歴史の教科書にも百％出てくる有名な事件であり、おそらく当時の戦国大名達は度肝を抜かれたことだろう。
天下人に最も近いと言われた人物が、家臣の裏切りに遭い、非業の死を遂げたのだから。

だが歴史全体でみてみると、こうした些細なことで、国家や時代というのは変わるものなのだ。

漢王朝の腐敗により起こった黄巾の乱然り、
民主主義の幕開けとなったフランス革命然り、
太平の世だった日本を動乱の時代に追い落とした黒船来航然り、
ソビエト連邦誕生のきっかけとなったロシア革命然り、

いずれの事項も、ほんの些細な出来事で起こり、今まで積み上げられてきたものが崩され、新たな時代、新たな国家の誕生のきっかけとなったのだ。

歴史は繰り返すとはよく言ったものだが、こういった事象こそ、言いえて妙なのかもしれない。

そしてそれは、今の社会においても例外ではないだろう。

インフェニット・ストラトス、通称「ＩＳ」

開発された当初は注目すらされなかったが、『ある』一つの事件が、その存在に注目させ、はては世界の軍事レベルと社会構造を一気に変化させた。

『白騎士事件』と呼ばれるその事件により、世界はＩＳに注目し、その開発に躍起になり、今はその存在が世界の抑止力となっていた。

だが、ＩＳには二つの欠点があった。

一つは、核となるコアがブラックボックスであること。

つまり使い方は解るが、中身が一切わからないというのだ。

とはいえ、別にこちらはさして問題ではない。

問題はもう一つの方だ。

それは……女性にしか扱えないことだ。

これにより、世界各国は極端な女性優遇政策をとるようになり、

今では「女性というだけで偉い」と言う、所謂「女尊男卑」社会が形成されてしまった。
とはいえ、現実昔は「男尊女卑」があったから、歴史的に考えればそれが逆になっただけだ、深い意味はないだろう。
しかし、その風潮に風穴を開ける事態が勃発する。

世界でたった一人、ＩＳに乗れる男性が登場したのだ。

このことはすぐに世界中に知れ渡り、震撼させた。
まさしく青天の霹靂、大番狂わせと言ってもいい。

だが、ここに世間の甘さがある。
こういった大番狂わせは一度しか起きないと認識している人が多いことだろう。

だが、忘れてはならない。

本能寺の変の後、信長の後釜、つまり天下人となったのは誰なの

かを。

誰もが、信長を討った光秀が次の天下人であると、当時は予測できただろう。

しかし、その予想は大きく裏切られた。

そう、大番狂わせは二度続くのだ。

そしてそれは、ここ、ＩＳ学園で起ころうとしていた。

「うわ、広っ！」

手に持ってる地図と目の前の光景を見比べながら、腰に日本刀を差したグレーっぽい髪の少年がそう呟いた。

「これは、教室に着く前に迷子になるかなあ」

「大丈夫。直人の方向感覚はコンパスより確かだから、迷子になることはない」

「そりゃどうも」

隣にいる、透き通るようなきれいな白髪の少女の言葉に、直人と

呼ばれた少年はそう答える。

「と言うか、ここで待ってろって言ってたけど、良いのかなあ？」

「下手に迷うよりはましだと思うけど？」

「そりゃそうだけど、そろそろＳＨＲが始まる頃だろ？　教室の方で待ってた方が良いと思うんだよ」

「うーん、そうかもしれないけど」

そんな会話をしていると……

「待たせたな」

黒い髪とスーツを着た、鋭い目つきの女性がやってきた。
そしてその姿を確認するや、少年は深々と頭を下げる。

「お久しぶりです。千冬師匠」

「頭を上げろ。そんなに畏まらなくていい。それとここでは織斑先生と呼べ」

「はい。し……織斑先生」

「相変わらずだな、馬鹿弟子」

少年の真面目すぎる対応に、目の前の女性、織斑千冬は苦笑した。

「でっ、お前は？」

そう言うと、千冬の視線は隣の少女に向けられる。

「……」

しかし、少女はなぜか答えようとしない。

「おい真白。挨拶ぐらいしろ」

「……うん、わかった」

少年の問いかけに、真白と呼ばれた少女はしゃべり始める。

「風花真白です」

ただそう言って、真白は軽く頭を下げる。

「すいません。こいつはこういうやつ何で」

「まあ良い、教室まで案内する。二人とも、ついてこい」

「「はい」」

こうして二人は廊下を歩き始める。

「私が呼んだら入ってこい。後馬鹿弟子、その刀はここに置いてけ」

「いくら先生でも、それは承服しかねます。これは俺のアイデンティティーみたいなものですし」

「そうだったな。とは言え、むやみに振り回したりしたら即没収だからな」

「ご心配なく」

そう言って千冬が入ってくと、二人はしばらく廊下で待つことに。

「ところで直人」

「ん、何だ？」

真白に呼ばれ、少年、直人は振り向いた。

「確かここに、直人の義兄がいるって聞いているけど？」

「ああ、そう言えばそうだな」

「どんな人？」

真白はその義兄に余程興味があるのか、強い渇望の眼差しで聞いてくる。

「そうだな……一言でいえば良い奴だ。誰にでも優しいしな」

「ふーん。強いの？」

「……それは如何だろうな」

とぼけるように言ってはいるが、実際のところ、本人にもよくわからないのだ。

「まあ、腕っぷしとかでは俺より弱いな。いや、俺が異常なだけなんだが」

「それは私も」

「まあな。でも、あいつの強さは、そんなもんじゃないと思うんだ」

「えっ？」

「なんつーかさ、俺より力はないのにどこか強い感じがするんだよ。在り来たりな言葉で表すとしたら、「心が強い」……って言うのかな？」

「心……か」

「まあ、そういうところを見てると、さすがあの人の弟だよなあ、って思うんだよ。それに比べたら、どれだけ腕っぷし強くたって、俺はまだまだあいつにはかなわないと思うんだ」

「そうなんだ」

真白がどこか思うところがあるような顔をした途端、教室の方から誰かが殴られる様な音が聞こえ、その直後に「げぇっ、千冬姉！？」という声が聞こえ、間を置かずに二度目の音が聞こえた。

「ねえ、今の」

「全く。何やってんだ？　あいつ」

『それではＳＨＲを終わりにする。・・・と言いたいところなのだが、まだ自己紹介を終えてない奴らがいてな・・・。おい、入れ』

二人がやや呆れていると、千冬が呼んだので、二人は教室のドアを開けて入る。

（うわ、予想以上に緊張するなあ……）

目の前の光景に、直人は思わずたじろいでいた。

ＩＳの特性上、クラスの全員が女子であることはある程度覚悟していた。

だが実際目の前にしてみると、その光景は意外に応える。

これからこのクラスで過ごすことを考えれば、彼が気後れするのは無理からぬことだ。

「おい、どっちでもいいから自己紹介しろ」

「あっ、はい」

緊張していた直人は千冬に催促される。

ちらっと真白の方を見るが、相変わらず無表情で自分からしゃべる気はないようだ。

「やれやれ。じゃあ、まずは俺から」

覚悟を決めた直人は咳払いをすると、自己紹介を始めた。

「えー。本日より編入となった、桜庭直人と言います。いろいろ不便をおかけするでしょうが、よろしくお願いします」

最後に頭を下げて自己紹介を終える。

その後しばらくは静粛が支配していたが……。

「き……」

「き？」

『キャァァァァァァ！！！！』

突然湧き上がる歓声に、直人は完全に面喰ってしまった。

「男よ男！　二人目の！！」

「うわー、カッコいい！！」

「それでいてどこか優しそう！！」

すごいハイテンションの女子たちに、直人は完全に面喰ってしまった。

「なあ、女子って皆こうなのか？」

「多分、同い年ぐらいの男の子が来ることはないから、興奮してるんだと思う」

「納得……」

そんな風に小声で真白と話していると。

「静かにしろ！」

千冬の一喝が教室を鎮めた。

「これが初めてじゃないんだ。あんまり騒ぐな馬鹿ども」

（さ、さすが師匠。厳しい）

ま、それでこそだけど。とか考える直人だった。

しかし、女子たちの黄色い声はとどまるところを知らず、それば
かりか、千冬が担任ということもあってか、余計に騒がしくなった
ようだった。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラス
にだけ集中させてるのか？」

頭に手を置きながら呆れる千冬の横で、

（師匠。心中お察しします）

と、心の中でその心労を感じ取る直人だった。

「それと桜庭。お前もあまり畏まるなと言ったはずだ。女子とは言
え、こいつらはお前と同年代なんだぞ」

「ですが師匠、こういうのは第一印象が大事だと思いますし……」

パシィィィン！！

「織斑先生だ。馬鹿者」

「す、すいません……」

ついうっかり口が滑ってしまい、千冬に出席簿で殴られてしまった。

その意外な攻撃力の前に、直人は思わず額を抑えたが、涙が出るのだけは必死に堪えていた。

「ねえ、今千冬様の事「師匠」って言ったよね？」

「えっ？　じゃああの子、お弟子さん！？」

「羨ましい！！」

しばらくして持ち直した直人は、額を抑えながら教室を見渡し、ある人物を確認するや女子たちの黄色い声には目もくれず、その人物の前に近づいた。

「あっ……お前」

その人物が直人を確認するや、直人はにっこり笑って言った。

「三年ぶりか。久しぶり、元気にしてたか？」

そう言うと、懐からあるものを取出し、それを見せながら言った。

「誓い通り帰ってきたぞ。我が義兄、織斑一夏！」

第一話　再会と幼馴染とスパルタ？（前書き）

連続投稿です。

プロローグだけはあかんだろう、と言うことで、投稿いたします。

作者は基本、アニメの方で行きますので、第四巻以降はそのうち買う予定です。

ただ、それ以前に原作情報を提供いただければ幸いです。

それではどうぞ。

第一話　再会と幼馴染とスパルタ？

「直人……直人なのか！？」

直人の目の前にいる、このクラス、否、ＩＳ学園唯一の男子生徒、織斑一夏はわが目を疑っていた。

「おいおい。まさか忘れたとかいうんじゃないだろうな？」

手に懐から取り出した物、刀の形をしたキーホルダーをぶら下げながら、直人は目の前の義兄、織斑一夏に聞く。

そして返ってきた答えは……

「……忘れるわけ、ねえだろ！」

そう言って一夏も、ポケットから同じ形のキーホルダーを出した。

違うところは、一夏のが金色で、直人のが銀色だということだ。

「久しぶりだな。直人」

「おお、久しぶり。一夏」

二人は手を握り合って再会を喜んでいた。だが……

パシィィィン！！×２

「「痛っ！！」」

「再会を喜ぶのは構わないが、まだ自己紹介の途中だぞ、馬鹿者ども」

黒い出席簿がものの見事に二人の頭を直撃したのだった。

「「何するんだよ（ですか）！　千冬姉（師匠）！！」

パシィィィン！！×２

「織斑先生だ」

「「はい、すいません」」

二度目の出席簿を食らって、二人はただただ平伏するしかなかった。

「それより桜庭。こいつを何とかしてくれ、さっきから何も喋らん」

そう言って千冬は真白の方を指さす。

「あっ、はい。ほら真白、自己紹介しろ」

「ん。解った」

直人が催促すると、真白は身なりを整えて深々とお辞儀をしながら自己紹介を始めた。

「風花真白と言います。これから三年、よろしくお願いします」

その変わり身の早さに、千冬は驚いた。

「ずいぶん礼儀正しいな、さっきとは大違いだ」

「こう見えて、礼儀はしっかり叩き込みましたから」

千冬の疑問に、さも同然のごとく応える直人。

「はい」

そしてそれに呼応するように真白もうなずいた。

「まあいい。桜庭の席は織斑の隣、風花はそうだな、その後ろが空いてるな、座れ」

「「解りました」」

そういうと、二人は指定された席に着いた。

「まさか隣通しになるとは。狙ったのかなあ、千冬姉」

「ま、知らない奴の隣よりずっといいさ。またよろしくな、一夏」

「ああ、直人」

二人は教師二人に見えないように、机の内側でこぶしを握りあった。

一時間目の終了後、一夏と直人は二人で会話していた。
三年ぶりの再会ということもあって、周りの女子のささやき声などどこ吹く風、二人は会話に熱中していた。
しかし、一夏にしてみれば、この会話はある意味真剣な物だった。

「にしてもさ。連絡もよこさねえで、三年間何してたんだよ？」

そう、小学校の卒業とともに、自分を見つめなおす旅に出かけ、三年間ずっと音信不通だったのだ。
いろいろ彼としては聞きたいことがあった。

「いろいろさ。話すと長くなるし、連絡をよこさなかったのは悪いと思ってるさ。でも、おかげでいろいろ勉強になったよ」

「そっか」

直人の返事に、一夏は問い詰めるでもなく、癪に障った感じもなく、ただそう言った。

「まあ、今度機会があったら話してもらうぜ。それよりさ」

言葉を区切ると、一夏は後ろを振り向いて聞いてきた。

「あいつ、さっきから話しかけてもうんともすんとも言わねえんだけどさ。俺、嫌われてるのかな？」

そこには、やたら分厚い本を読む真白の姿があった。

それを見て苦笑しながら、直人は言った。

「ああ、真白は他人には無関心だからな。でも、今は違う理由みたいだけど」

「へっ？」

「読書してる時の真白はな、そのことしか集中してなくて人の話なんて聞こえないんだよ」

「そうなのか？」

「ああ。こうなったら、梃子でも動かねえ。俺の話も全然聞こえないよ」

直人はやれやれといった感じで肩をすくめながら呆れる。

「ま、意識を向けさせる手がないわけじゃないけどな」

「へー、どうするんだ？」

「それはな……」

と、直人が真白の意識を向けさせる方法を実践しようとした時だった。

「ちょっといいか？」

「「ん？」」

突然、声をかけられた二人はその方向を向く。
するとそこには、凛とした顔つきのポニーテールの女性が立っていた。
二人はすぐにそれが誰なのか一目でわかった。

どうやら彼女は一夏に用事があるらしく、察した一夏はどうしようかと直人の方を向く。
それに対し直人は「行ってこい」とジェスチャーを送ったため、一夏はその女生徒と一緒に教室を出て行った。
その際、何人かがついて行ったのは見なかったことにしようと思った。

「……さてと」

見送った直人は、真白の方に向くや、思いっきり猫騙しをした。

「ん、何？」

猫騙しされた真白は、驚く風でもなく、直人の方に意識を向ける。

「いや、熱中していたからさ。それにしてもまた分厚い本読んでるな」

真白の手に持ってる本を見ながら、直人は呆れた。

「そう言えば、さっきの子、誰？」

「何だ、見てたのか？」

「休憩入れてたら目に入ったから、それで誰？」

しきりに催促してくる真白に対し、直人は、彼女がここまで他人に興味を示したことに驚きながらも答えた。

「彼女は篠ノ之箒。小四のころまで一緒にいた、俺と一夏の幼馴染だ」

「小四まで？」

「引っ越したんだよ、身内の関係で……な」

「……ああ、そういうこと」

どこか暗そうな表情をしながら言った直人の言葉に何かを察し、少し考察した真白は、それ以上何も聞かなかった。

「では、ここまでで質問のある人ー？」

休み時間が終わって二時間目、クラスの副担任、山田真耶の授業を受けていた。
真白は勤勉にノートにいろいろ書いており、直人は教科書にアンダーラインを引きながらあれこれ考察していた。
ここまでは良い、問題は直人の隣にいた。

（こいつ……いや、そうだな、絶対そうだ）

隣で何やら気まずい顔をしている一夏を眺めながら、直人は何か確信を持っていた。
とはいえこのまま放置というのも可哀そうなので、小声で話しかけようとした時……

「織斑君、何かありますか？」

山田先生が先に声をかけてきた。

「質問があったら言ってくださいね。何せ私は先生ですから」

すごくいい笑顔で聞いてくる先生に、一夏は挙手しながら言った。

「せ、先生……」

「はい、織斑君」

「殆ど全部、解りません」

「えっ、全部ですか？」

冷や汗だらだら掻きながら答える一夏と、それを聞いて驚愕する山田先生だった。

この時彼は気付いていなかったが、隣にいた直人は「やっぱりか」と小声でつぶやきながら呆れ、答えを聞いた真白は直人の後ろでくすくす笑っていた。

「今の段階で、解らないって人はどのくらいいますか？」

先生の質問に誰も挙手しない。

すると、さっきまで黙っていた千冬が近づきながら言ってきた。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「えーっと、あの分厚いやつですか？」

「そうだ、必読と書いてあっただろ」

すると、これまた予想外の返答が返ってきた。

「いや、古い電話帳と間違えて捨てました」

その刹那、千冬が手に持ってた出席簿を喰らわせた。

鈍痛に耐える一夏に、とうとう我慢できなくなった直人が聞いてきた。

「一夏、お前この三年間で何があった。確かに勉強ができる方とは言えなかったが、いくらなんでも必読品を間違えて捨てるなんて馬鹿なことしなかっただろ！」

「いやー、余りに分厚かったから、つい……」

「表紙をちゃんと見ろ表紙を」

至極もっともな答えが返ってきたので、とうとう一夏もぐうの音が出なくなった。

「織斑、再発行してやるから、後で教務室に取りに来い。桜庭、お前は如何だ?」

「えーっと、一通り読んできたんですが、乗ってる時の感覚と単語とがいまいち合致しないんです。知識だけなら問題ありません」

「そうか……」

それを聞くと、少し一息ついた後……

「桜庭、悪いが……」

「解ってます。一週間以内に覚えさせろって言うんでしょ」

「ふっ、流石だな」

まさに以心伝心、その様子を見た山田先生や他の生徒たちも驚いていた。

「と言うわけだ一夏。全部覚えるまで、地獄の日々が続くものと覚悟しとけよ」

「何だよそれ!!」

突然のスパルタ宣告に一夏は叫ぶが、当の直人は聞く耳持たずだった。

「これ以上お前が醜態をさらすのは義弟として心苦しい、一週間と言わず五日で物を叩き込んでやる！！」

「いや、あの厚さで一週間は無理だって！　まして五日だなんて……」

どうにかしようと奮闘する一夏だったが……

「織斑、やれ」

「とのお達しだ」

「……はい」

必死の抗議もむなしく、千冬という援護を受けた直人に負けてしまった。

「真白。お前も手伝ってくれ」

「うん、解った」

さっきまでくすくす笑ってた真白は、その言葉を聞くや二つ返事で承諾した。

「とりあえず次の休み時間に、２０ページ分覚えさせるか。全体の五分の一終わるまで今日は寝かさんからな」

「なっ！」

「一ページでも間に合わなかったらノルマとして追加するからな、覚悟しておけよ！！」

「勘弁してくれーーーーー！！」

直人の恐るべきスパルタ宣告に、一夏の悲鳴が教室全体に響き渡った。

直後、千冬の出席簿が一夏の頭を直撃したのは言うまでもない。

第一話　再会と幼馴染とスパルタ？（後書き）

いかがでしたか？

ここおかしい、とか、ここが変、みたいなご指摘をいただければ幸いです。

次回は金髪ロール、そしてオリキャラをもう一人登場させます。

ご意見、ご感想、よろしくお願いします。

第二話　代表候補生と紅葉色（前書き）

水曜に更新するといっておきながら、更新したのが深夜とはこれいかに？
すいません、アニメ情報があるからと、少し油断していました。
まあ何はともあれ、第二話投稿です、それではどうぞ。

第二話　代表候補生と紅葉色

「ここがこうなるから、こうなるの」

「ああ、成る程」

二時間目の終了後、一夏は休み時間を利用して参考書の内容を真白から教わっていた。

「しっかし、真白の教え方は解りやすくて助かるぜ、ありがとうな」

「ん……」

一夏に礼を言われた途端、真白は黙り込んでしまった。

「どうした？　俺なんか嫌なこと言ったか？」

「ううん。直人意外の人に、褒められたこと、あんまり無くて……」

「そうなのか、でも、そんだけ教え方うまいんだから、良い先生に教わったんだな」

そう言った途端、真白は今度はくすくす笑い始めた。

「何だよ、いきなり」

「ううん、面白いこと言うなあって思って」

「は？」

「だって、私の先生は……」

真白が言葉を紡ごうとしたその時、

「い～ち～か～」

突然、直人のアイアンクローが一夏の頭を捕らえた。

直人の額には日の丸を挟んで「努力」と書かれた鉢巻が巻かれていた。

「なーにくっちゃべってるんだ？　お前にはそんな暇がないってわかってんのかなー！」

「いてててててて！！」

相当強く掴まれた一夏の頭から、みしみしと音がしているのは気のせいではないだろう。

「解ったらさっさと続きをやれ！！　終わらなかったら次の時間にノルマでプラスするからな！」

「か、勘弁してくれーーー！！」

相当なスパルタでしごきに来る直人に、一夏も従うよりほかになかった。

「……私の先生は、今目の前にいるんだけどなあ」

そんな真白の呟きが、聞こえたとか、聞こえなかったとか。

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

「「ん？」」

スパルタの直人、解りやすい説明をする真白、そしてそんな二人の講義を受けてる一夏の三人は、突然話しかけられた。

三人が振り向いてみると、そこには腰まであるくらいの金髪をした、青い瞳の女性が立っていた。

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「悪いな、俺、君が誰だか知らないし」

「右に同じく」

「うん」

女性の高飛車な態度をさして気にもせず、三人は異口同音の答えを言った。

その答えがお気に召さなかったのか、両手で机を強くたたくと、興奮したような様子で言ってきた。

「わたくしを知らない？　セシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あっ、質問良いか？」

すると、一夏が途中で口を挟んだ。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

ポーズをとりながら、見下したような態度で言うセシリアに、一夏の口から飛び出した言葉は、

「代表候補性って、何？」

その瞬間、セシリアは凍りつき、周りの生徒たちは一斉にずっこけ、直人は頭を抱え始めていた。

「……真白、俺なんだか頭痛くなってきた」

まさかここまでＩＳ関連の知識が欠落してるとは思わなかった。

一夏のとんでも回答に、直人は最早呆れることしかできなかった。

頭を抱え込みながら後ろの方を見てみると……

「くくく……」

必死に笑いをこらえている真白がそこにいたのだった。

「あ、あ、あ…」

「あ？」

するとここで、先ほどまでフリーズしていたセシリアがようやく再起動した。

「信じられませんわ！　日本の男性というのは、皆これほど知識に乏しいものなのかしら？　常識ですわよ、常識！」

「日本中の男性を代弁して言ってやる。古今東西これほど知識が欠落してるのはこいつだけだ」

セシリアの言葉に、直人は声を上げて反論するが、一夏を貶めてることには変わりなかった。

高飛車な態度が気に入らなかったものの、さすがにこればっかりはセシリアに同調せざるを得なかった直人だった。

「でさ直人、代表候補性ってなんだ？」

「ここで俺に振らないでくれ、俺今頭が痛いんだ」

「そうなのか？　どっか具合悪いのか？」

本人にしてみれば純粋に心配しているのだが、直人はこの時、誰かに代弁してほしかった。

この頭痛の原因はお前だと。

「はぁ、まあいい。代表候補性っていうのはだな、ＩＳの国家代表の候補として選抜される実力者のことだ。まあ、在り来たりな言葉で言えばエリートってことだな。つうか単語から想像できるし、テレビとかでも結構やってるだろ」

「ああ、そう言われればそうだな」

「……やべ、俺本気で頭痛くなってきた」

最早ここまで来ると呆れを通り越して感心させられかねないが、直人の頭からは完全に頭痛しかしなかった。

「そう！　エリートなのですわ！」

ここにきて、セシリアはようやく本調子になったらしく、声高らかに言葉を紡ぎだす。

「本来なら、わたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「そうか、それはラッキーだ」」

流石義兄弟、と褒めてやりたい位、一夏と直人の言葉はシンクロした。

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか」

「そうそう」

「大体、あなたはＩＳについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一、いえ、今は二人ですが、男でＩＳを操縦できると聞いていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても、困るんだが……」

「そうだな、お前にそんなこと期待するのは、高望みってやつだな」

少し困った表情をする一夏に、肩に手を置いて直人がフォローした。

フォローになってないフォローではあるが、否定できないのがまた悲しいところである。

「ふん。まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ」

表情こそ変えなかったが、この時内心、直人は見下したような発言をする彼女の態度に嫌悪感を抱き始めていた。

「分からないところがあれば、まあ、泣いて頼まれたら教えてあげ

てもよくってよ？　何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ、俺も倒したぞ、教官」

「……はあ！？」

一夏のまさかの発言に、セシリアは間抜けな声で聴き返してきた。

「倒したっていうか、いきなり突っ込んで来たのを避けたら、壁にぶつかって動かなくなったんだけど」

「早い話、相手が自滅したと？」

「そうなるかな。そういや、お前と真白は如何だったんだ？」

ここで、一夏は直人に、入試は如何だったかを聞いてくる。

「まあ、倒したには倒したんだが、その後訓練機のフレームがぶっ壊れてな、引き分けってことになったんだ」

「ぶっ壊れたって、整備不良か？」

「いや、俺と真白の動きについてこれなかっただけだ」

平然と言う直人だったが、この時、話を聞いていた周りの女子たちがざわめいていることには気づかなかった。

「わ、私だけと聞きましたが？」

「それって……」

「多分……」

「「女子では、ってオチじゃないか？」」

二度目のシンクロをなした二人の言葉にセシリアは再びフリーズしてしまう。

そして、やけに後ろの席が騒がしかったので、二人が振り向いてみると……

「あはははははは！！」

腹を抱えて大声で笑っている真白がいた。

直人はその姿を見るや大いに驚愕していた。

普段無表情な真白が、これほど大声で笑った事は無かったからだ。

「あっ、でもよく考えたら、真白も教官を倒してるわけだから、もう唯一じゃないな」

「ああ、そうだな」

冷静さを取り戻した直人の言葉に、一夏も頷いた。

「まさか！　貴方達も教官を倒したっていうの！？」

するとここで、再び再起動したセシリアが、一夏達に迫ってきた。

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーン、コーン、カーン、コーン

ここで次の授業のチャイムが鳴った。

「…ッ！　話の続きは、また改めて！　よろしいですわね！！」

そう言って、セシリアはそのまま自分の席に戻っていった。

「何だったんだ、一体？」

「さあ？」

「はぁ、はぁ、やっと収まった」

二人で首をかしげていると、後ろで真白が腹を抱えながら喋った。
どうやらさっきまでずっと笑っていたらしい。

「あっ、そうだ一夏」

「何だ？」

一夏を呼ぶと同時に、直人は自分の参考書に付箋を貼りながらす

っごい良い笑顔で言ってきた。

「さっきの話で中断されてた分、次の昼休みのノルマにプラスするからな」

「なーーーーーーーー！！！！！」

放課後、一夏と直人、そして真白は寮に向かって進んでいた。
その後方には、無数の女子生徒たちがつかず離れずの距離でついてくる。

「はぁ、初日でこれじゃあ、先が思いやられるよ」

「同感だな」

初日は二人、特に一夏にとっては疲れる一日だったことだろう。
厳しい姉が担任で、授業にはついていけず、休み時間は直人のスパルタ勉強を受け、その上高飛車な代表候補性に絡まれて。
これで疲れるなという方が、どだい無理なことなのだろう。

しばらくして、二人はそれぞれの指定された部屋に着いた。

「ここか」

「んで、俺がその隣っと」

一夏は１０２５室、直人は隣の１０２６号室だった。
ちなみに、真白とは部屋が別の階にあるので途中で別れた。

「じゃあな、直人」

「おお、荷物纏めたら来いよ、真白が着いたら、勉強再開だからな」

「解ったよ」

こうして二人はお互いの部屋に入っていった。
部屋に入った直人の目の前には、高級ホテルの一室と見間違えるほどの寮の部屋があった。
早速直人は、二つあるベッドの一つに腰掛け、感触を確かめる。

「んー、なかなか気持ちよさそうだな。流石ＩＳ学園、うわさには聞いていたが、結構至れり尽くせりだな」

きっと一夏も同じこと考えてるんだろうなあ、などと考えていると、突然扉が開く音が聞こえた。

「ん？」

この時、直人はふと疑問に思った。
確か話では、自分は一人部屋になったと聞いていたのだ。
そしてそんな疑問を浮かべながら、音のした方向へ視線を移して

みると。

「……あっ」

そこには、タオル一枚の姿の女性が立っていた。

「あんた、もしかして……」

「失礼しました！！」

状況を確認するや、光の速さで部屋を出て行った直人。

そして少し遅れて、一夏も隣の部屋から出てきたが、同時に扉の方から木刀が一夏めがけて突き刺された。

「一夏！」

「直人！」

「どうした一夏、誰に襲われた！　鷹の目か！　カスザメか！　烈火の将か！　龍の右目か！　それとも阿修羅をも凌駕する存在か！！」

「何動揺してんだよ直人！？　ちょっと落ち着け！！」

この後、どうにかして直人を落ち着かせた後、直人と一夏はお互いの状況を確認し合った。

「つまり、部屋に入ったら先客がいて、それが箒で、しかもバスタオル一枚の姿だったから木刀でいきなり襲い掛かられたと」

「ああ。んで、お前も似たような状況だったってことか」

「その通り。少し、いや、かなりテンパった」

はぁ、と二人で同時に深いため息をついた。

するとそこへ、徐々にラフな格好の女子生徒たちが集まってきた。

この後、一夏は扉越しで箒に散々謝って、ようやく中に入れてもらったが、

「こっちの受難は終わってないんですけどーーーーーーー！！」

一夏が部屋に入るのを確認するや、今度は直人に女子たちが群がっていった。

何とか姿を見まいと必死に目を閉じており、自分のすぐ横には部屋に入る扉があるが、あんなことがあった手前入るわけにもいかず、最早壁際状態だった。

「俺、今日が厄日だったのか？」

そう言って半ばあきらめかけた、その時だった。

「おわ！」

突然扉が開き、直人はその中に引きこまれた。

「いたた、でも助かった」

そう言って立ち上がると、さっきの赤い髪の女性が、ジャージを着て立っていた。

「……すいませんでしたあ！！」

神速、まさにそう言える速さで女性に土下座をした。

「ああ良いよ、さっきのは事故みたいなもんだし、気にしてないからさ。それよりさ……」

すると女性は、さして気にしていないような口調で言うと、次の言葉を言ってきた。

「私のこと、覚えてる？」

「……は？」

そう言って、目の前の女性を見つめる。

モミジのような赤い髪に、黒い瞳、どこか元気な感じを受ける顔と雰囲気。

「……あっ」

直人は、目の前の人物にある心当たりがあった。

幼いころに出会った幼馴染たち。

だが彼女は、真白は無論、一夏も、箒も知らない。

あってさほど時間はなかったが、決して忘れることは無かった。

「お前、紅葉……紅葉なのか？」

「うん！　久しぶり、直人！」

信じられないという風に聞いてくる直人に、目の前にいる、彼の三人目の幼馴染、秋宮紅葉は、満面の笑みを浮かべながら答えたのだった。

第二話　代表候補生と紅葉色（後書き）

テンパってる時に直人が言った五人、誰が誰だかわかりますよね？

他にいいネタもなかったので、どうか貧困なこのＺＤＳに、アイデアをください！！

ご意見、ご感想、ご指摘など、どしどしご応募ください。

第三話　キレる真剣（前書き）

最近、ゲームセンターで太鼓の達人にはまってるＺＤＳの親父です。

今回で第一話分が終わります。

そして最後ら辺には、あのセリフが！

それでは、ぜひ楽しんでください。

第三話　キレる真剣

「お前、本当に紅葉か？」

「そうだよ、正真正銘、本物の秋宮紅葉だよ！」

部屋に連れ込まれた直人の目の前にいたのは、かつての幼馴染の一人、秋宮紅葉だった。

「もう十年ぐらい前かな？　しばらく見ない間に格好よくなったねえ」

「アホか、十年だぞ十年、そりゃ様変わりもするっての」

「あはは、それもそうか」

さほど気にする様子もなく、笑顔で返してくる。

「っていうか、なんでここにいるんだ？」

「あれ？　忘れたの？　私の実家がどこなのか？」

「……ああ、そういうこと」

その言葉で、直人は彼女がこの学園にいる理由がわかった。

「実家の用事か？」

「当たり♪」

彼女の家は日本でも有数のＩＳ企業「秋宮重工業」で、彼女はその社長の娘だ。
このＩＳ学園はどこの国家にも属さず、どこからも干渉されないという規約により、多国間でのＩＳの比較や、新技術の試験などに非常に適している。
大方、彼女がこの学園にいるのも、そういった理由からだろう。

「にしても、なんで相部屋になってるんだ？　確か俺、一人部屋だって聞いてたけど」

「そうなの？」

「ああ」

そんな会話をしていると、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「おいおい、さっきの女子たちじゃないだろうな？」

「そんなことないと思うけど、ちょっと様子見てくる」

そう言って、紅葉が扉を開けてみると、そこにいたのは、

「えーっと、あなたは？」

「……」

真白だった。

「つまり、山田先生が俺とおまえの部屋を間違えたと？」

「どうもそうみたい」

真白を部屋に招き入れた後、直人と紅葉は真白から事情を聞いていた（自己紹介を済ませた後で）。

どうも山田先生が直人と真白、おまけで一夏の部屋を間違えたらしく、今は隣の部屋の前で一夏に謝り倒しているそうだ。

「って、お前はどうして来たんだ？」

「直人と一緒に寝に来た」

「ガキか」

「私、１３」

「うっ……」

それを言われて直人は黙り込んでしまう。

「別に私は構わないけど、ベッドは二つだよ？」

「ああ、お前と真白はベッドで寝ろ……っと、その前に」

そう言うと、直人は突然立ち上がり、鞄から参考書を取り出す。

「行くぞ、真白」

「うん、解った」

直人が呼ぶと、真白も立ち上がって筆記用具やらノートやらを取り出し、直人についていく。

「どこ行くの？」

「ちょっと馬鹿をしごきに」

「行ってきます」

そう言い残し、二人は部屋を後にした。

その後、何が起こったかはその場に居合わせた者たちのみが知ることであった。

次の日、普通に起きた直人、真白、紅葉の三人は食堂で朝食をとっていた。
向かい側には箒と、抜け殻に様になってる一夏がいた。
「これはひどい。直人、あんた何やったの？」
「何って、この馬鹿の頭に必要なものの五分の一を叩き込んでやったが？」
「それが何か？」みたいな口調であっさりと返してきた。
「そして今日もその五分の一を叩き込む予定だよ」
相槌を打つように真白が本日の予定（一夏の）を言う。
「直人、あれは私でもやりすぎだと思うぞ？」
「顔合わせ早々に木刀で襲いかかった奴の言う台詞じゃねえだろそれ」
一夏の勉強は彼の部屋、つまり箒の部屋で行われたので、その様子を見ていた箒は昨日の風景を思い出しながら呆れるように言った。
だが、実際問題彼女も風呂上り姿を見られたとはいえ、一夏に木刀で斬りかかったのだ、人のことは言えない。
それは察したのか、直人にそう言われた瞬間、黙り込んでしまった。
「まあ何、今日の授業の初めには復活するだろ」

と、鮭の切り身を口に頬張りながら言う。
と言うより、もしそれで復活しないようなら、容赦なくあの人の攻撃が炸裂することだろう。

「そういや聞きそびれたが、紅葉、お前何組だ？」

「あたし？　一組だけど」

「マジか！！」

そして一時間目、一夏も（ようやく）復活した。
ちなみにさっき確認してみたところ、紅葉は箒の席の近くだった。
そして、一時間目の担当は誰かと言うと……

「これより、再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決める！」

千冬だったとさ。

「クラス代表者とは、代表戦だけでなく、生徒会の会議や委員会への出席など……まあ、クラス長と考えてもらっていい」

ようするに、クラスのまとめ役を決めようということなのだ。
しかも、一度決まると一年間は変えられないらしい。

「自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

と、千冬が聞いてはいるものの、この時直人は、すでにこの後の展開が読めていた。

「はい、織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「お、俺！？」

混乱する一夏の横では、直人が「やっぱり」といった感じで顔に手を当ててため息をついていた。

すると……

「じゃあ、私は桜庭君を推薦します」

「私も！」

「……何！？」

突然、誰かから推薦され、驚く直人。

「他にはいないのか？　いないのなら多数決で決めるぞ」

「ちょっと待ってくれ！　俺はそんなのやらないからな」

「俺だってそうです！　それに俺は……」

推薦された二人は明確な拒否の意思を示す。そして、直人がさらに言葉を続けようとしたとき……

「納得いきませんわ！！」

強く机を叩きながら、この結果に反論を唱えるものが一人いた。

セシリア・オルコットである。

「そのような選出は認められません。男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！　このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

身振り手振りを加えながら言ってくるセシリア、だが、一夏と直人は、その言動に顔を険しくして言っていた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛……」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で、何年覇者だよ」

とうとう一夏は我慢の限界に達した。隣の直人は怒りこそしていないが、顔をうつむかせておりその表情はうかがい知れなかった。

「おいしい料理はたくさんありますわ！　あなた！　私の祖国を侮辱しますの！？」

一夏の反論にセシリアも顔を真っ赤にして怒る、しばらく両者はにらみ合いを続けていたが、やがて……

「決闘ですわ！！」

「おおいいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

「わざと負けたりしたら私の駒使い、いいえ、奴隷になってもらいますわよ」

こうして話はどんどん進んでいるが、この時、千冬以外のものは気付かなかった。
直人の体が、小刻みに震え始めているのを……

「で、ハンデは？」

「あら、早速お願いですの？」

「いや、俺がどのくらいハンデをつければいいのかって聞いてるんだけど」

そういった瞬間、教室は笑い声に包まれた。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強いなんてＩＳ登場前の話だよ？」

そう、それがこの世界の常識なのだ。
一瞬一夏は「しまったあ」と心の中で自分の失敗を自覚した。
だが、次の瞬間……

ドオォォン！！

突然、大きな音が教室全体に鳴り響いた。
一瞬、地震でも起こったような錯覚に襲われ、生徒たちは机にしがみついたりきょとんとした目で周りを見渡したりした。
いや、実際少し揺れたかもしれない。
そして暫くして、全員が音の震源地に視線を向けると……

「おい、いい加減にしろよ、お前ら……」

そこには、目が座り、どすの利いた声を放つ直人の姿があった。
しかも、さっきまでとは体勢も変わっていた。
足を大股に開き、右手に腰に差してた刀の一本を握り、それを強く床に突き刺していた。
この時誰も気づかなかったが、鞘に収めた状態で強く突き刺したらしく、その部分には小さい罅が蜘蛛の巣のように入っていた。
その姿は、さながら本陣で構える総大将のようであった。

「おい、金髪。前出ろ、前」

「な、何ですの？」

ゆっくりと立ち上がりながら、直人はセシリアを呼ぶ。
だが、彼の醸し出している雰囲気はさっきまでとは打って変わり、明確な怒りがこもっていた。
その姿と相まって、それはまるでヤクザ、極道のようであった。

「その決闘、俺も受けて立ってやる。いくらハンデをつけてほしい？」

直人はそういうが、一夏の時とは違い、笑いを巻き起こらなかっ

た。

誰もが、今の直人の姿に恐れを抱いていたからだ。

「い、いりませんわ！　この私が、あなたたちに負けるわけがありませんもの！！」

「いや、つけてもらった方がいいよ」

ここで口を出したのは、真白だった。

「どういうことですか？」

「直人はあなたとは格が違うから。ＩＳも、技量も」

「ちょっ！　それはどういう……」

「おい真白。あんまりべらべら喋るな」

「ん、解った」

セシリアの言葉を、直登の言葉が遮った。

そのどすの利いた声におびえもせず、淡々と真白はしゃべり続けた。

「でもこれだけは言っておく、このクラスで直人に勝てる人は万に一つもいない。あなたも、副担任の山田先生も勝てない。もし勝てる人物がいるとすれば、織斑教諭しかいないよ」

『えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！』

このカミングアウトに、一年一組が揺れた。
まあ当然だろ、彼女のカミングアウトは要点を言えば「直人の実力はクラス一」と言うことになるのだ。

「言ってくれますわね」

「事実だもん、それでもいらないっていうなら構わないけど？」

「結構です！！」

「そうか、なら一つだけ言っておく」

セシリアの返答を聞くと、直人は先ほどの雰囲気を出しながら、セシリアに言ってきた。

「お前が俺たちをどう思おうがそんなのは勝手だ。だがな、一夏を、俺の義兄を浅い思慮で侮辱することは許さん」

「なっ！　浅い思慮ですって！」

「そうだ、その浅い思慮と傲慢で一夏を侮辱するなら、俺が容赦なくたたっ斬る！　剣の腕と心を教えてくれた師匠と、俺の魂であるこの菊一文字ど虎徹にかけて……」

言葉区切ると、彼は懐から三日月のエンブレムをしたネックレスを取り出し、言った。

「この俺の、ＩＳ（刃）でな！」

第三話　キレる真剣（後書き）

ようやく第一話分が終わりました。

ただせっかく書いても感想が来ないので結構不安です。

読んでいただいてる方、どんな些細なことでも構いませんのでご感想をください！

さて、次回から第二話目です。

頑張って書くぞー！

第四話　義兄弟（きょうだい）の絆、降り立つ白（前書き）

アニメ第二話目の始まり始まり。
バトルは次の回です。
とりあえず、どうぞ

第四話　義兄弟（きょうだい）の絆、降り立つ白

クラス代表選出は、セシリアと一夏、直人との決闘と言う形で決まることになった。
期限は一週間後、第三アリーナで行われることとなった。

尚、一夏のＩＳは予備の機体がなく、専用機が宛がわれる事となっている。
本来専用機は、国家、或いは企業に属する者にしか与えられないが、一夏の場合、状況が状況なので、データ収集を目的として与えられることとなったのだ。

そして今、一時間目終了後の休み時間の教室では。

「なんとまあ、勇み良いと言うか無謀と言うか……」

そう席に座りながらため息をついたのは紅葉だった。

「ねえねえ、篠ノ之さん」

「何だ？」

紅葉は前の席の箒に語りかける。

「織斑君と直人って、いつもあんな感じだった？」

「まあ、一夏は昔から女性に媚びるような事はしなかったが、まさか代表候補生に勝負を挑むとは……」

「いや、まあ、気持ちはわかるけどね。あんなに明らかに見下したように言われちゃあ、私が同じ立場でもムカついてるよ」

頭を抱え込む箒に、紅葉はフォローを入れる。

確かにあのセシリアの態度は腹を立てるには十分すぎるものだ。

「それに、直人も変わってなかったしな」

「そうなの？」

「ああ、一夏を馬鹿にされると、ああいう風にキレてたな。あそこまで静かに怒ってはいなかったが」

「ふうん」

箒は昔を思い出すように喋り、紅葉もそれをじっと聞いている。

「ところでさ……」

すると突然、紅葉はそう言いながら、視線を横の方に向ける。

「あれ、何だろう？」

「知らん」

視線の先には、三つの籠を席の上に置いている真白だった。

「ねえ真白ちゃん、何してるの？」

気になった紅葉と箒は真白の席に移動して聞いてみた。

「賭け」

「賭け？」

「うん、誰が勝つか」

三つの籠にはそれぞれ、「セ」「一」「直」と書かれた紙がセロハンで貼ってあった。

「ちなみに発想者はあの子」

そう言って指差した先に居たのは、のんびりした雰囲気の女子だった。

「まあ、結果は予想通りだけどね」

「相手は代表候補生、普通に考えれば、これは当たり前かな」

籠の中身を見てみると、「セ」と書かれた籠に十円玉から五百円玉まで差はあれど多くの硬貨が集まっていた。

「この一万円札は誰が入れたんだ？」

箒が指差した先には、「直」と書かれた籠に入っている一万円札があった。

「それ、私」

「嘘！？」

驚きの声を紅葉があげた。

「良いの！　負けたら大損じゃん！！」

「大丈夫。勝つのは直人だから」

「随分自身があるな、根拠はあるのか？」

何やら確信めいたように言う真白の態度が気になった箒が問い詰める。

「私知ってる。直人のＩＳの事も、直人が旅の間してきた努力も」

そう聞いた途端、二人の中からこれ以上何かを問おうという気は消えて行った。

「……そういえばさ」

ここで紅葉が気になったことを一つ口にする。

「その問題の二人はどうしたの？」

目の前の席にいるはずの一夏と直人はそこにいなかった。

本来だったら、あの鉢巻をまいて一夏を扱く直人の姿がそこにあろうはずなのだが。

「二人なら、さっき教室を出て行ったよ」

「何、どうしてだ？」

「解んない。織斑が直人を呼んで、そのまま二人で行っちゃった」

「何なんだろう?」

紅葉の疑問に答えるものは誰もいなかった。

その頃、肝心の二人、一夏と直人は屋上に来ていた。

「なあ、話ってなんだ?」

「ちょっとな」

一夏に「大事な話がある」と呼ばれ、直人は一緒に屋上に来ていたのだ。

「早く済ませろよ。って言うか、お前こんなことしてる余裕ないんだぞ」

「解ってるよ」

至極まっとうなことを言う直人だが、振り返った一夏の瞳を見て、ただの世間話の類じゃないことを悟った。
そしてしばらく黙っていると、一夏が口を開いた。

「直人さ、さっきの授業の時なんだけど……」

「おお」

授業の時、恐らく一夏が言ってるのは、直人が切れた時のことを言っているだろう。

「あの時、お前……昔に戻ってたぜ」

「！！！！」

その言葉を聞いた瞬間、直人は大きく動揺した。
昔の彼、それは最も忌むべきものだからだ。

「そう……なのか？」

「一瞬だったけどな、何か、雰囲気的に」

「そう……か」

そう呟くと、直人は顔に手を当てる。
表情は見えないが、何か愁いを帯びてるようだった。
それからしばらく、二人の間を重い沈黙が支配する。

「でもさ、安心したよ」

「えっ？」

しかし、その沈黙を破ったのもまた、一夏だった。

「何年経っても、直人は直人なんだなって思えてな」

「それ、褒めてねえ」

「いや、褒めたつもりもねえし」

あっさりと返してきたが、直人にはその返事が、どこか嬉しかった。

「まあ、別に責めてるわけじゃねえんだ。俺のために怒ってくれたのはわかってるしな。でもな……」

そこで直人の肩に手を置き、言葉を続けた。

「あんまりやりすぎるなよ。俺のために怒ってくれるのは嬉しいけど、その所為でお前を孤立させたくねえしな」

「一夏……」

その言葉に、ふぅと軽く息を吐きながら、直人は向き直っていった。

「解ったよ、他ならぬ義兄（お前）の頼みだしな」

直人がそう言うと、二人は互いの拳を軽くぶつけ合った。

二時間目、三時間目の授業を終え、昼休みに昼食をとってる間、一夏、箒、直人、真白、紅葉の五人で一夏のＩＳ練習をどうするかについて話し合った。

とりあえず動かすのに必要な基礎体力を見極めるために、放課後に剣道で箒と勝負をすることになり、今まさにその様子を残りの三人が見ていたわけなのだが……

「これは……」

「ＩＳ以前だね」

「論外」

三人の辛辣な言葉が道場に響く。

無論、その元凶は……

「いてて……」

目の前にあるわけだが。

「どういうことだ」

「どうって言われても」

「「どうしてそこまで弱くなっている（んだ）！！」」

見事に箒と直人の言葉がシンクロした。

この三人は小さいころから剣道をやっており、一夏も二人には劣っていたが、それでもそこそこ強かった。

だがどういう訳か、今の彼はその時以上に弱くなっている。

相手が大会優勝者となるほど強くなっていることを差し引いてもだ。

「ねえ、織斑君。中学の時、何部に所属してたの？」

「帰宅部、三年連続皆勤賞だ！！」

それを聞いた瞬間、真白と紅葉は同時にこけた。

そりゃ、弱くもなるわけだ。

「……の……」

「ん？」

「この、あほんだらーーーーー！！」

刹那、やり投げの要領で投げた直人の竹刀が、一夏の額を直撃した。

「へぶっ！？」

そして、それを喰らった一夏はその場に倒れ伏してしまう。

「箒、後頼む」

「解った」

そう言って直人はその場を後にし、真白もその後をついていった。
唖然とする紅葉と妙にやる気満々の箒、そして気絶から目を覚ました一夏を残して……

そして一週間、一夏を鍛え上げながら、ついに迎えた、クラス代表決定戦の日。
五人は第三アリーナのピットにいた。

だが、直人の表情は憮然としていた。
そしてその元凶である箒を睨む。

「何か言うことはあるか？」

「……」

直人の問いに何も答えず、箒はただ目をそらす。
それを見て、腹を立てるでもなく、呆れながら言った。

「いやな、お前のやったことが無駄とは言わん。確かにＩＳを動かすのに体力は必要だし、今のこいつはそれ以前の問題だってのも解ってる。でもな……」

一区切りつけた後、再び勢いをつけて喋りだす。

「この一週間剣道の稽古しかしてこなかったってどういう事だ！お前は一夏を勝たせる気がないのか！！」

「し、仕方ないだろ！　お前はともかく、一夏のＩＳはまだ届いてないんだから！」

「だったら訓練機でも借りて、最低限の動き位マスターさせろ。っていうか、それならＩＳでやった方が確実にこいつのためになっただろう！！」

「うっ……」

確かにそうだ、同じ稽古をやるにしても、ＩＳを装着してやった方が動きも覚えるし体力も普通に稽古するよりつくだろう、まさに一石二鳥のはずだ。
最も、やりすぎで体を壊すようでは元も子もないが、そこは紅葉もいるので適度に休憩をとれただろう。

「まったく、知識に関しては俺と真白で叩き込んでやったが、どうするんだこれ」

「どうもこうも、今さら終わったことをぐだぐだいってもしょうがないよ」

「それはそうだが……」

真白の言葉に同意しつつも、直人の頭には、最早一夏が敗北した時の光景しか頭になかった。

無論、どのような光景になるかなど言わずもがなだ。

「大丈夫なのか？」

「まあ、駄目で元々でしょ」

「駄目すぎるだろ」

紅葉の言葉に、直人は冷ややかに突っ込む。

「んで一夏、どうするんだ？」

「どうするって？」

「先に行くか？　不安なら俺が先に行くが」

今尚到着してないことを考えると、一夏が戦うとなれば、確実に『初期化（フォーマット）』と『最適化（フッティング）』を行わない初期状態で戦うことになるだろう。

もしこれで自信がなければ、直人は自分から行こうというのだ。

「いや、俺が先に行くよ」

「良いのか？」

「ああ、せっかく直人や箒が俺のためにいろいろ教えてくれたしな、その期待に応えてやらねーと」

「そうか、お前がそういうのなら、もう何も言わない」

そうして会話を終えると、五人は表示されてるディスプレイに目を向ける。

映像には、すでにＩＳを展開させて飛行しながら待つセシリアの姿があった。

「あれがあいつの専用機か」

「イギリスの第三世代型ＩＳ『蒼い雫（ブルー・ティアーズ）』」

「真白、知ってるのか？」

「先生から名前だけ聞いた」

「お前ならその先も知ってそうで怖いよ」

そんな風に軽口を叩いていたが、直人は内心心配だった。

手に持ってるライフルと周囲に浮いてる細長い武装を見て、彼女のＩＳは遠距離戦に特化したものだと容易に想像がついた。

しかし反面、一夏はこれまでの経過を鑑みるに、戦闘は近接主体とならざるを得ないだろう。

つまり、相性が最悪なのだ。

（うまく懐に入れれば勝機も生まれるかも知れないが、相手は代表候補生、そう簡単に間合いに踏み込ませてはくれないだろうなあ）

やっぱり自分が先に行くべきだったか？　と言う考えが頭をよぎり始めたその時、

《織斑君！　織斑君！　織斑君！》

突如、山田先生のアナウンスが響く。

《来ました！　織斑君の専用ＩＳ！！」

《織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使える時間は限られている、ぶっつけ本番でものにしろ》

（相変わらずむちゃくちゃ言うなあ。ま、そうするしかないけどな）

直人がそう心の中でつぶやくと、搬入口の扉が開く。

そして、扉が開いたその先に、先ほど到着したＩＳがその姿を現す。

《これが、織斑君の専用ＩＳ　『白式』です！》

白式、名前の通り、白、とは若干言い難い色のＩＳがそこにあった。

「ほうほう、中々いいじゃん」

すると紅葉が顔を覗かせ、機体を見ながらそう呟いた。

「解るのか？」

「私はＩＳ企業の社長の娘だよ？　小さいころから見てきたから、見ただけでいい機体なのかどうかすぐわかるよ」

一夏の問いかけに、あっけらんとばかりに応える。

「そんなことより一夏、さっさと装着しろ、時間ないし」

「あ、ああ」

直人に急かされ、教師陣の指導を受けながら、一夏は白式を装着する。

「よし、行って来い！」

「そして勝ってこい！」

「ああ！」

二人の声援を受けて、一夏は大空高く飛び立った。

第四話　義兄弟（きょうだい）の絆、降り立つ白（後書き）

うーん、今回は結構文章滅茶苦茶かも。

まあ、一番書きたかった前半が書けたから、良いっちゃ良いんだけど。

えー、何度も言っていますが、どこが悪かったのかとか、どこが良かったのか、意見や感想を遠慮なく申し上げてください。

次回もよろしく。

第五話　光る刃、乱れ舞う桜（前書き）

いよいよ主人公のＩＳの登場です！

どんな戦いをするのか、そしてどんな勝負になるのか、楽しんでいただければ幸いです。

ただ自分、描写がまだまだなので、その辺は期待しないでください。

それではどうぞ。

第五話　光る刃、乱れ舞う桜

結論だけを言うと、勝負は一夏の敗北で決着した。

序盤は誰もが予想した通り、セシリアの優勢で戦いが展開された。遠距離主体の彼女に対し、近接武装しかない一夏は防戦一方で追いつめられる。

それでも善戦し、さらに白式が第一形態移行（ファースト・シフト）を終えると、形勢は一気に逆転した。

だが、あと一歩と言うところでシールドエネルギー残量がゼロになり、勝敗が決したというわけだ。

理由は二つ、一つは、序盤に攻撃を受け過ぎたこと。

そしてもう一つが……

「零落白夜か……」

そう直人はため息をつきながら呟いた。

もう一つの原因は、直人が先ほど言った、白式の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）、「零落白夜」だ。

これは、対象のシールドエネルギーを消滅させるという能力を持ち、バリアを無効化して、相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えるという代物だ。

だが、これは自身のシールドエネルギーをかなり消費するため、

これと序盤の損傷が、敗北につながったのだ。

「つまるところ、装備の特性を理解しなかったからと言う訳か」

「そう言うことになるな」

「まあ、浮かれすぎてたのも敗因だな。手が閉じたり開いたりしてたし」

直人の簡潔した答えに、千冬も肯定の言葉を言い放ち、さらに直人が辛辣な言葉をぶつける。

ちなみに手が閉じたり開いたりするのは一夏の癖で、この動作をする場合は初歩的なミスをするのだ。

「でもまあ、かなり危うい状態であそこまでいけたわけだし、上出来だと思うよ、私は」

「うん」

紅葉と真白が、辛辣な二人に対し一夏をフォローする。

二人の言うことも最もだ。

片や実績ある代表候補生、片や今回を含め二回しか起動していないズブの素人。

しかも、序盤は初期化と最適化すら終わってない状態で戦闘していて、それであと一歩のところまで食いついたのだ。

勝利を逃したとはいえ、始めとしてはかなり上々だと言ってもいいだろう。

「それより桜庭、次はお前だぞ」

「はいはい、解ってます」

千冬に促され、直人は首に掛かってる三日月型のネックレスを取り出す。

すると、そこから光が発せられるとともに、直人は桜の花びらのようなものに包まれる。

そしてそれが晴れると、そこに光沢を帯びた灰色のＩＳに乗った直人がいた。

「それが……」

「ああ、俺のＩＳ「灰桜（かいおう）」だ」

その姿を見た一夏に、直人がにやりと笑っていった。

胸部には仏胴を思わせる丸みを帯びた装甲に、肩に装備された装甲。

そしてその右手と肩の装甲に装備された、四本の刀。

さながら、日本の鎧武者のような姿だった。

「ふっ、お前らしい姿だな」

「まったくだぜ」

「ああ」

「それ、褒めてるの？」

千冬、一夏、箒の呟きに、どことなく苦笑が混じってるような気がした直人が聞き返す。

三人は何も言わなかったが、さほど気にも留めず、直人は準備をする。

「じゃ、弔い合戦といきますか。ああ、それと一夏」

「何だ？」

出る直前、直人が一夏を呼び止める。

「しっかり見ておけよ、俺の戦いぶりを。お前のためにもなるからな」

そう言うと、直人は飛び立った。

「来ましたね」

先の戦いで失った装備の補充を終えたセシリアが空中で待機していると、太陽の光に照らされて、ＩＳを纏った直人が現れた。

「待たせたな」

「いいえ、それより、貴方はどうします？」

「どうって？」

「先ほどのように、今謝るというのなら、許してあげないこともありませんよ」

これは、一夏の時も言っていたことだ。

無論、彼は突っぱねたが。

「あのなあ……」

それを聞いた途端、ゆっくりと地上に足をついた直人は呆れるように言った。

「あんな啖呵きっといて、今さら降参なんてするか？　それにな……」

そして、手に持ってる刀を構えながら、言葉をつづけた。

「義兄が、俺よりずっと不利な立場で戦ったんだ。ここで俺が逃げ出しちゃあ、師匠にも、義兄（一夏）にも、合わせる顔がねえんだよ！！」

「なら……お別れですわ！」

そう言った直後、セシリアはレーザーライフル「スターライトｍｋ？」を構え、四基の自律兵装「ブルー・ティアーズ」を展開する。

「さぁ、踊りなさい！　私、セシリア・オルコットとブルー・ティ

アーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

そういった刹那、に攻撃、五本の光線が、一気に直人に襲いかかり、着弾と同時に土煙が舞った。

（当たった！）

そう思ったが、すぐにそれは間違いだと気付いた。

「もらったーーー！！」

「なっ！」

突然、後ろから振りかぶった直人が斬りかかったのだ。

間一髪のところでかわしたが、掠ったらしく、僅かにシールドエネルギーが削れた。

「あ、貴方！　一体どうやって！」

「どうやってって、普通に前進した後飛んで、斬りかかっただけだが？」

驚きを隠せないセシリアに、直人は平然と答えた。

「くっ、それなら！」

すると今度は、自律兵装で攻撃を仕掛けてきた。

だが、直人はそれに慌てず、全身のスラスターを稼働させて回避運動に徹する。

全方位からくる攻撃を見事にかわす直人には、直撃どころがかすりもしなかった。

「もらいましたわ！」

そういうと、二つの光が襲い掛かる。
止まるところだったため回避は不可能と思われた。

「……ふっ」

そう直人が不敵に笑った途端、驚きの事態が起きた。
腰の装甲が左右９０度展開し、スラスターを稼働させる。
すると、突然方向転換し、その攻撃をかわしたのだ。

「嘘っ！」

まさかの事態に、セシリアは再び驚きの声を上げる。

「どうした？　まさかこれだけってわけじゃないよな？」

「あ、当たり前ですわ！！」

直人の挑発で我に返ったセシリアは再び攻撃を開始する。
だが、直人はそれをただかわすだけだった。

「す、すげー……」

二人の戦いを見ていた一夏は、驚きの声を上げる。

しかし、驚いているのは箒と紅葉、そして管制室にいる山田先生と千冬も同じだった。

「おい、風花」

「はい」

すると通信で、千冬は真白を呼び出した。

「データでも見せてもらったが、何だあのＩＳは、確かに機動力と加速能力に優れている様だったが、それにしてもあれは異常だぞ」

そう、戦闘前に開示されたデータでは、灰桜は近接戦闘型で、機動性と加速能力に関しては優れているを通り越して異常と言わざるをえなかった。

「織斑先生、直人が戦闘において心がけていることは知ってますか？」

すると、真白はそう聞き返してきた。

それに間を置かず、千冬は答えた。

「奴は昔から、先手必勝と一撃必殺を心掛けていたな。相手がどんな手を持っていようと、先に仕掛けることで機先を制し、尚且つ一撃で仕留めることで、それも意味をなさなくする」

「そうです。しかし、実戦ではそう簡単に距離を詰めれるわけではありません。ましてＩＳの戦闘は高機動戦闘です。セシリア・オルコットのように、距離を取って戦うタイプとはまさに水と油、相性は最悪です」

先ほどの一夏など、第一形態移行（ファースト・シフト）を済ませるまでは全くの防戦一方だったわけであるから、その通りと言っても過言ではない。

「ならどうすればいいか、簡単なことです、相手が反応できないほどのスピードで近づけばいいのです。その為に灰桜には、背部の高出力メインスラスターのほかに、肩の装甲に加速用のブースター、腰部装甲と脚部に推進方向を自在に変えられる偏向スラスターが装備されています。もしこれを前方に移動する目的で、このスラスター全部を展開すれば……」

「そのスピードは計り知れないな」

「はい。最も、考えなしに直球で突っ込むほど、直人も馬鹿ではありませんから、ここぞというとき以外は使いませんけど」

「ちょっと待って」

ここで紅葉が待ったをかけた。

「たしかにそれだけスラスターを装備すれば、機動力と加速能力は

約束されるけど、その分、搭乗者に掛かるGは相当なものの筈だし、エネルギーの消費だって大きいんじゃないの？」

紅葉の言葉に、真白は頷きながら答えた。

「確かにそうだよ。でも、灰桜には、重力質量と慣性質量を別個で変化させる装置が搭載されていて、高効率の推進を可能にしているの」

「そ、そんな装置があるの！？」

「灰桜の製作者が作ったの、まだ実験段階って言ってたけど」

「あれで……」

真白の言葉に、紅葉はただ唖然とするばかり。

「それだけじゃない、エネルギーの大半を推力に回した結果、その他の性能は第二世代型と同クラス、良くてもラファール・リヴァイヴと同じ位になってしまったの」

「それでこんな性能なのか」

真白の説明に、灰桜の性能票を見ながら箒が呟いた。

「そして、紅葉の言うとおり、確かに莫大なGが搭乗者に掛かる。だけど、直人はそれを乗りこなした」

その言葉に、誰もが息をのんだ。

それが意味するところは、一つしかないからだ。

「灰桜はまさしく、正真正銘の直人専用機。仮に他人が乗って動かそうものなら、そのGとスピードに翻弄されて気絶、酷いと全治一か月はお約束できる」

「全治……」

「一か月……」

箒と紅葉がその言葉に、唖然とする。

だがそんな中で、一夏と千冬は、直人の戦いをしっかりと見つめていた。

「もうそろそろいいか」

そう言うと、直人は回避一辺倒だった動きをやめ、上空に舞い上がり制止する。

これまでの戦いで直撃こそしていないが、ところどころ掠っており、シールドエネルギーは三分の二ぐらいまで減っていた。

「あら、もう観念いたしましたの？」

「いや……」

セシリアの質問に反論すると、直人は続けて言った。

「お前の円舞曲（ワルツ）の終了時間だ！」

そう言うと、肩の装甲に装備されていた四本の刀がはずれた。

「行け！　安綱！　國綱！　光世！　恒次！」

そう言うと、四本は一斉に飛び散り、直人の周囲を飛び回る四基のブルー・ティアーズを一瞬で切り裂いた。

「そんなっ！」

その光景に思わず声を荒げるセシリア。

そんな彼女を無視して、直人はしゃべり始めた。

「悪いが、俺はワルツなんて高尚なものは踊れないが……」

「剣舞ならいくらでも舞ってやるぜ！」

そう言うと、四本が一斉にセシリアに襲いかかった。

そのスピードにセシリアは反応しきれず、四方から襲い掛かる刀の攻撃にどんどんシールドエネルギーが削れていった。

（こ、このままでは……）

徐々に焦りが見え始めたその時、一気に直人が近づいてきた。
全身のスラスターを展開し、一気に距離を詰めようとする。

「速い！　でも、直線なら！！」

そういうと、腰のブルー・ティアーズから、ミサイルが発射された。
このままでは、確実に直撃するはずだった。
だが……

「安綱！　恒次！」

直人がそう言った瞬間、二本の刀によってミサイルは切り裂かれてしまった。

「一意専心！！」

そう言うと、手に持っている刀「三日月宗近」の刀身がエネルギーに覆われていた。

そして……

「チェストォォォオ！！」

その掛け声とともに、宗近を思いっきり振り下ろした。

そして交差の後、しばらくの沈黙が続いたが、その沈黙を破った

のは……

「一刀、両断！！」

直人だった。

《勝者、桜庭直人！！》

そして、試合の終了を告げるブザー音とアナウンスが鳴り響いた。

第五話　光る刃、乱れ舞う桜（後書き）

いかがだったでしょうか？　ちゃんと書けたか不安ですが、楽しんでいただけたなら幸いです。

ちょっと主人公無双になってしまった感はありますが、どうですか？

灰桜の武装は、知ってる人は知ってるかも、次は本編とキャラ、ＩＳ紹介を載せますので、その時にばらそうかと。

本編は第二話の終わり、後話です。またオリジナルをはさみます。

オリジナルキャラ、ＩＳ紹介（前書き）

キャラ紹介と直人のＩＳ「灰桜」の説明をします。

ここでいうＩＣ（イメージキャラクター）とは、外見的なものなのでそこを留意してください。

オリジナルキャラ、ＩＳ紹介

桜庭直人　（さくらばなおと）

性別：男

年齢：１５

髪：灰色っぽい銀、長髪（肩甲骨のあたり）。

瞳：灰色

好きなもの：織斑姉弟、時代劇

嫌いなもの：一夏または千冬を穢すもの、馬鹿の仕掛ける悪戯

趣味：鍛錬、刀の手入れ

性格

質実剛健

自分を誇らず対等に接してくる為、驕りや傲慢とは無縁。
義侠心と正義感が強く、卑劣な行為を嫌う。目上、年上には基本敬語。
怒ると口調が荒くなり、本気でキレると静かに、だが荒々しくなる（一夏曰く「極殺モード」）。
他人の気持ちには極めて敏感だか、自分に対する好意に関しては一夏と同レベル。

備考

千冬の剣道の弟子で、プライベートでは彼女を「師匠」と呼び慕う。

旅の途中である人物に鍛えてもらった経緯もあり、剣術に関しては達人級の腕を持つ。

「先手必勝」と「一撃必殺」を心掛けており、示現流の達を好んで使う。

腰に差してある刀は「菊一文字」と「虎徹」。

イメージキャラクター
ＩＣ：ＢＬＥＡＣＨ　黒崎一護（髪型は機動戦士ガンダム００のミハエルみたいな感じ）

イメージキャラクターボイス
ＩＣＶ：森田誠一（ＢＬＥＡＣＨ　黒崎一護、戦国ＢＡＳＡＲＡ前田慶次、ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　不死鳥マルコ）

風花真　（かざはなましろ）

性別：女

年齢：１３

髪：白、光沢あり、腰に届くほどの長髪

瞳：黄色

好きなもの：直人、甘いもの

嫌いなもの：直人を傷つけるもの、居場所を奪われる事

趣味：銃の手入れ、読書、お菓子作り

性格

冷静沈着

無表情で感情表現に乏しい。
基本的に誰に対しても無口なのだが、直人には比較的素直に受け答えしている。
強い意志を秘めており、事自分の居場所（直人）を奪われることに関しては抵抗し、それを傷つける、或いは貶すものには一切容赦がない。

備考

射撃を得意としており、拳銃を六丁、アサルトライフルを二丁、スナイパーライフルを一丁持っている。

ＩＣ：スーパーロボット大戦ＯＧ　ラトゥーニ・スゥボータ

ＩＣＶ：高垣彩陽（機動戦士ガンダム００　フェルト・グレイス、デルトラクエスト　ジャスミン）

秋宮紅葉　（あきみやこうよう）

性別：女

年齢：１５

髪：紅葉色（ちょっとオレンジっぽい紅）

瞳：黒

好きなもの：友達、ＩＳ弄り、甘いもの

嫌いなもの：Ｇ（ある虫の隠語）、暗いところ、怪談話

性格

明朗快活

明るく社交的で誰とでも仲良くできる、時々周りをまとめるリーダーシップを発揮することも。

真白と同様強い意志の持ち主で、一度決めたことは絶対やり遂げる、よく言えば実直、悪く言えば頑固。

備考

ＩＳ企業「秋宮重工」の社長の娘のため、ＩＳ関連の知識量はトップクラス。

直人の幼馴染だが、彼と一緒にいた期間は一か月足らずで、しか

もたいてい彼が一人の時だったため、一夏や箒の事は知らなかった。

ＩＣ：探偵オペラ　ミルキィホームズ　銭形次子

ＩＣＶ：林原めぐみ（スレイヤーズ　リナ＝インバース、ポケットモンスターシリーズ　ムサシ、ロストユニバース　キャナル・ヴォルフィード）

ＩＳ紹介

灰桜　（かいおう）

世代：第四世代

待機状態：三日月型のネックレス

形状

鎧武者のような出で立ちで、胸部に丸みを帯びた胸当て、両肩に装甲を装備しており、背部に高出力のメインスラスター、両肩の装

甲に加速用ブースター、腰と両脚にの装甲に偏向スラスターを装備している。

詳細

近接戦闘特化型。
「先手必勝」と「一撃必殺」を旨とする直人専用に調整されており、特に体各部にあるスラスターと、重力・慣性質量を変化させる特殊装置により、相手が反応しきれないスピードを誇り、機動性・加速力に関してはＩＳトップクラスの性能を誇るが、その他の性能は第二世代型とさして変わらない。

武装

三日月宗近　（みかづきむねちか）

本機体の主力武装で右手で保持して使用する。
斬撃特化の近接武装だが、装甲を展開してエネルギーを放出、纏うことで強化したり、エネルギーの刃を飛ばすことができる。

童子切　（どうじぎり）・鬼丸　（おにまる）・大典太　（おおてんた）・数珠丸　（じゅずまる）

両肩に装備される四本の刀。鍔にあたる部分に三基のバーニアを装備している点を除けば、構造上は宗近と同じ。
自律兵装として飛ばすことが可能、こちらは半自動制御となっているため、少し意識するだけでその方向に自動的に飛んでいき攻撃を加える。
また、このうち一本を左手で持つことで二刀流として使ったり、万が一宗近が使えなくなった場合の予備兵装としての側面も持つ。

オリジナルキャラ、ＩＳ紹介（後書き）

名称はすべて天下五剣からとらせていただきました。

イメージキャラは、ほとんど思いつきに近かったですが、自分ではかなりマッチしてると思います。

第六話　真剣の思い、真剣の誓い（前書き）

昨日の時点で、ＰＶアクセス数が一万を突破しました。

多くの方々にご愛好いただいてるようで、誠にうれしい限りです。

今回は戦闘後のお話、ここで直人にフラグが立ちます。

それでは皆さん、今後とも、「桜の花纏う真剣」を、よろしくお願いします。

第六話　真剣の思い、真剣の誓い

「っ……」

「大丈夫？」

「ああ、まあな」

クラス代表決定戦が終わり、空がすっかりオレンジ色に染まったころ、五人はアリーナから出て寮に向かっていた。

試合の終了後、難なく戻ってきた直人だったが、灰桜のスピードに身体が少し悲鳴を上げてるらしく、体が軋む感じが彼を襲っていた。

「駄目だな、ほんの一か月と半月動かしていなかっただけで身体が悲鳴を上げるなんて」

「無理ないよ、あれのスピードは半端じゃないんだから」

「と言うより、よくそれで済んでるな」

ポキポキ鳴らしながら肩を回してぼやく直人に、仕方ないとばかりに言う真白と、少し呆れる箒。

普通の人間が乗れば、一か月病院おくりにできる代物を使ってこれなのだから、この三年間、相当鍛えたことが窺える。

「って言うか、動かしてなかったのか？」

「と言うより、動かす必要がなかったってのが正しいな。しかし、

これじゃいかんな」

一夏の質問に平然と答えながらも、直人はそう声を漏らした。

「これからいろいろこいつに教えなきゃいけないのに、これじゃ不味いよな」

そう呟いて少し考えた後、直人は意を決したように言った。

「真白。悪いけど、一夏の勉強、今日はお前一人で教えてやってくれ」

「良いけど、直人は？」

「ちっと鈍った体を鍛えなおそうと思ってな」

そう言うと、軋む体に鞭打って、直人はさっさと戻ってしまった。

「と言う訳だから、後で部屋に寄らせてもらうけど。良い？」

「ああ、別に構わないが」

直人が去った後、真白は部屋の主である箒に許可を取る。

特に断る理由もない、寧ろ必要なものであることもあり、箒もあっさり許可を取る。

「にしても、これで直人がクラス代表かあ」

「いや、それはないと思うぜ」

「「うん、うん」」

クラス代表に直人がなるであろう事を紅葉が呟くと、一夏がその予想を否定し、箒と真白もそれに頷く。

これに紅葉はきょとんとした。

「何で？　だって織斑君が最初に負けて、次に直人が勝ったわけでしょ？　クラス代表には直人がなるんじゃ……」

「いや、直人の事だからな、あいつならきっと……」

所変わって、ここは寮の部屋の一角。

一夏達の部屋とは違う、豪華と言う言葉が似合いそうな部屋のシャワールームから、一人の女性が出てきた。

セシリア・オルコットである。

彼女は今回の戦いのことで、二人の人物の事を考えていた。

一人は織斑一夏

勝負は自滅に近い形で彼に勝ったものの、なぜか彼の事ばかり考えていた。
だが、彼以上に心惹かれる人物がいた。
それが二人目、桜庭直人だ。
自分に勝ったという事、彼の明らかに卓越した操縦技術にも驚かされた。
しかし、何より印象的だったのは、彼の目だった。
一夏と同じように、決して誰にも媚びない強い瞳。
だが、直人の瞳には、それとは別の何かがあるように感じた。
（あの目は、一体。それに……）
それと同時に、先ほどから彼の事を思うたびに、胸の鼓動が高鳴るのを感じる。
（どうしてですの？　この気持ちは一体……）
その正体が気になり、窓に手を置きながら外を見ていた時だった。
「……あら？」
下の方に視線を落としたとき、その人物が視界に入ってきたのだ。
剣道着に身を包み、腰に日本の刀を差して移動する、直人の姿が。
（一体、何ですの？）
先ほどの疑問の事もあり、非常に気になったセシリアは、手早く

着替えると、部屋を後にした。

「んー、この辺でいいか」

辺りを確認しながら呟くと、直人は腰から一本の刀を抜く。
刀の銘柄は「菊一文字」直人の愛刀にして、新撰組一番隊隊長、沖田総司が使っていたとされる刀だ。

それを抜くと、直人はそれで素振りを始めた。
一回、また一回と刀を振るたびに、鋭く風を切る音がする。
しかし、それと同時に、灰桜のスピードによる体の軋みが直人を襲う。
しかし、それを苦にもしてないように、直人はひたすら刀を振り続けるのだった。

そして、それを物陰から見つめる人物がいた。

直人の姿を見かけ、部屋を出てきたセシリアだった。

「……」

セシリアは少し驚いていた。
剣術に詳しくない彼女でも、一目で解る程、鋭い風切り音のする素振りを、一心不乱に行う。
そんな彼の姿に見惚れていたのだ。

「ふぅ……」

しばらくすると、彼は素振りをやめ、ため息をつく。

「やっぱりちょっと鈍ってるな。身体もあちこち痛いし、素振りも少し悪くなってるな」

（えっ！　鈍ってる！　あれで！！）

さっきの言葉に、声にこそ出さなかったものの、胸中で驚きの声を上げるセシリア。
だが、彼の前ではそれがいけなかった。

「誰だ！」

気配を察し、直人は刀を構えながらすごい剣幕を放つ。
その剣幕に、思わずセシリアは物陰から出た。

「あっ、何か用？」

相手がセシリアだと解ると、先ほどまでの剣幕は鳴りを潜め、いつもの雰囲気に戻った。

「いえ、お見かけしたものですから、気になって」

「そっか」

「えっと、ここで何を？」

一週間前の荒っぽい口調がまるで嘘のように接してくることに少し戸惑いながらも、セシリアはなにをしていたのかを聞いてみる。

「何って、鍛錬」

「鍛錬？」

「そ、まあ日課みたいなものになってるんだけどな」

手に持ってる刀を鞘に納めながら、先ほどやっていた素振りについて説明する。

「でも、今回の戦闘とさっきの素振りで解ったよ、やっぱ鈍ってるわ」

「さっきもおっしゃってましたね、あんなにお強いのに」

「そうでもないさ、一か月と半月動かしてなかっただけで体が軋むんだからな」

「あっ、そうですわ」

一週間前の険悪ムードはどこへやら、二人はいろいろ話し合っていた。

するとここで、何か思い出したようにセシリアは言ってきた。

「その、何時ぞやは失礼なことを言って、申し訳ありませんでした」

頭を深々と下げながら、セシリアは一週間前の事を謝罪してきた。

「ああ、いいよ。いつまでも細かいことをねちねち言う趣味はないし」

一方の直人も、もう気にしていないとばかりに手を振ってきた。

「俺の方こそ、怒ったりしてすまなかった」

「えっ？」

「いや、昔からな、一夏を馬鹿にされたりすると、すぐ頭に血が上っちまうんだよ。よく注意されたのに」

「随分ご執心なんですね」

セシリアがそう言うと、少しなつかしそうな顔をして、直人は喋りだした。

「俺は昔、あいつに救われたんだ」

「えっ？」

以外と言う顔をするセシリアに、乾いた笑をしながら直人は言った。

「言っとくけど、多分想像してるのと違うぞ」

「えっ？」

「小さい頃なんだけど、ちょっといろいろあって、俺は一人だったんだ。そこを一夏に助けてもらって、と言うより、仲良くなってくれてな。あいつは俺にとって、かけがえのない存在なんだ」

詳しくは話さなかったが、話してる時のうれしそうな顔を見て、彼にとって一夏が、どれほど大事かを悟っていた。

「それでな、小5の時に義兄弟の契りを交わしたんだけど。その時、俺は誓いを立てたんだ」

「誓い？　どのような？」

聞かれた直人は、懐かしそうな、それでいて嬉しそうな顔をして、その誓いを口にした。

「俺が一夏の剣となって、奴に刃を向けるもの、奴の守りたいものを侵すものを切り捨てるってな」

その時の彼の瞳は、戦闘中に見たその瞳と全く同じだった。

そして、彼の瞳を見て、セシリアは先ほどの疑問が何なのかが分かった。

彼のさっき言った誓い、それこそが、あの瞳の正体であり、彼の強さの原動力なのだろうと。

そして同時に、自分の中にある感情の正体も理解した。

（私は、この人を……）

自分の思いを自覚したセシリアは、その思いを乗せた視線で直人を見つめる。
そんな彼女の考えと思いに気づかないまま、直人は言葉をつづけた。

「それにな、お前は強いって言うけど、俺はまだ弱いよ」

「謙遜しすぎですわ」

「いや。少なくとも、俺の求める強さには程遠いよ」

決して謙遜などではない、と言わんばかりに、その言葉には自身がこもっていた。

「ごほん。まあ、何はともあれ、クラス代表はあなたになるわけですが」

「ああ、その件だが……」

「俺、辞退するわ」

「……はぁ!?」

そんな答えが返ってくるなどと思ってなかったのか、思いっきり声が裏返る。

「な、なぜですの!?」

「いや、何故って言われても……」

そして返ってきた答えも、ある意味単純なものだった。

「俺は一夏の剣だからな、主より偉い剣なんて、聞いたこと無いだろ?」

その答えに、セシリアは少し拍子抜けしてしまったが、今までの話から納得してしまう。

「まあ、そういう訳だから、クラス代表を譲るから」

「うーん、なんか納得いきませんわね」

「そう言われてもなあ……あっ」

お互い納得が行かず、このままでは水掛け論になりそうだったが、ここで直人はあることを閃いた。

「ならさ、こういうのはどうだ……」

「……成程、それなら納得ですわ」

こうして二人はお互いに納得する方法を思いついた。

まあそのために、一人犠牲になることになった訳だが……。

第六話　真剣の思い、真剣の誓い（後書き）

取り敢えず、セシリアフラグを立てた直人でした。
ちゃんとできたか怪しいですけど、いかがですか？

後半の直人とセシリアの対談は書きたかったところです。
形にできてよかったです。

次はアニメ第三話、いよいよツンデレ猫娘の登場です。

第七話　実習とクラス代表決定パーティー（前書き）

アニメの第三話目突入です。

この作品では通信での台詞は≪≫とさせていただきます。

ただし、基本的にあまり使わないと思いますので、あまり気にならさらず。

それではどうぞ。

第七話　実習とクラス代表決定パーティー

「これより、ＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう」

クラス代表決定戦から少し経ったこの日、グラウンドでＩＳスーツを着て、一年一組の生徒たちは千冬の授業を受けていた。

「織斑、オルコット、桜庭、ためしに飛んでみろ」

「はい」

「承知」

「解りました」

三人は返事するや、ＩＳを展開し始める。

一秒と掛からずしてセシリアが展開を終えてＩＳを身に纏い、程なくして直人も展開を終え、ＩＳに身を包む。

だが、未だに展開ができない奴が一人……

「あ、あれ？」

「早くしろ！　熟練したＩＳ操縦者なら、展開に一秒と掛からないぞ」

千冬に急かされ、一夏はＩＳを展開するために集中する。

「集中……来い！　白式！！」

そう言って、ようやく一夏もＩＳを展開し終える。

「はぁ、やっと展開したか」

「桜庭、お前も人の事は言えないぞ」

展開におおよそ数秒掛けた一夏に呆れてる直人に、千冬はそういってきた。

「お前も展開に一秒以上は掛けている、その展開方法を何とかしろ」

直人のＩＳ展開方法は、待機状態のＩＳから桜の花びらに似たエネルギーが全身を包み完成する。

だがこの方法では、どうやっても一秒以上かかってしまうのだ。

「すいません、こいつを作った馬鹿がこうプログラミングして、自分以外に変えられないようにしたんです。文句ならその馬鹿に言ってください」

「前から聞こうと思ったのだが、その馬鹿とは誰の事だ？」

するとここで、ふと疑問に思った箒が聞いてくる。

千冬も興味があるのか、直人の言葉を待つ。

「天才と書いて馬鹿と読む奴です。し……織斑先生と箒なら心当たりがあると思いますが、それの同類です」

「……」

「苦労してるんだな、お前も」

直人の答えを聞いた途端、千冬は頭に手を置いてため息をつき、箒は同情の言葉を投げかける。

「まあ、無駄話はこれくらいにして、三人とも、飛んでみろ」

『はい！』

「ああ、桜庭は一寸待て」

「はい？」

いざ飛ぼうとしたとき、直人は千冬に止められる。
その間に、セシリアはさっさと垂直に飛び上がる。

「お前は出力が半端じゃないからな、背中のメインスラスターのみ、それも出力を通常の７０％に抑えて飛べ」

「ま、妥当ですね。承知しました」

こうして了承した矢先、一夏が飛び始めたのだが、かなりふらふらしながら飛んでいった。

「何やってんだか、本当に」

「桜庭、お前も早く行け」

「はい」

そう言うと、直人も背中のスラスターを展開して飛行を始める。

「７０％なら、すぐに二人に追いつ……いや、今ひとり抜いた」

その一人と言うのは、言うまでもなく一夏だ。

≪遅い。スペック上の出力は、白式の方が上だぞ≫

「そう言われても……」

≪おーい、一夏≫

「あっ、直人」

千冬にどやされる一夏が見ていられなくなり、直人は通信を入れる。

「お前、ちゃんとわかってるか？」

「自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ？　言葉だけじゃわかんねえよ。なんかコツとかないか？」

「俺はほとんど感覚で手にしたからあーだこーだ言えないけど、やっぱり自分がしっくりくる方法を見つけるのが一番だな」

≪直人さんの言うとおりですわ≫

すると、セシリアからも通信が入る。

「イメージはしょせんイメージ、自分がやりやすい方法を模索する

方が建設的でしてよ」

「大体、空を飛ぶ感覚自体、まだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ？」

「その辺りは真白か紅葉に聞け。どうせ放課後やるんだろ？」

「ああ」

「ま、数こなしてりゃ慣れるさ」

≪織斑、オルコット、桜庭、急降下と完全停止をやってみせろ≫

「了解です。では、お二人とも、お先に失礼します」

そう言うとセシリアは一気に急降下したのち、そのままグラウンドに着地する。

「うまいもんだなあ」

「そりゃ代表候補生だからな、じゃ、次は俺だ、よく見ておけよ」

そういうと、直人もセシリアがやったのと同じ要領で急降下と完全停止をやる。

「よし、俺も」

そして、一夏も一気に急降下を始める。

だが……

「あ、わあぁ！！」

その瞬間、グラウンドに轟音と共に一夏はグラウンドに墜落した。

「一夏！！」

「織斑君！！」

箒と山田先生が名前を呼びながら墜落地点に向かい、千冬、真白、紅葉がこれに続く。

そして、噴煙が晴れ、中心には……

「うわあ……」

「一夏くーん、生きてますかー？」

真白の呆れ声と紅葉の言葉からわかる通り、ＩＳが解除された一夏が、顔から地面に突っ込んでいた。

「まったく、ここまで予想通りだと逆に笑える……な！」

「ぷはっ！」

そう言って、いつの間にか近づいていた直人が、一夏を引っ張りぬく。

「馬鹿者、グラウンドに穴をあけてどうする」

「すいません」

この後、一夏は一人でグラウンドの穴埋めをすることになったという。

「織斑君、クラス代表おめでとう！！」

『わーーーーー！！』

クラッカーが一斉になり、生徒たちが一斉に拍手を送る。

何をやってるのかと言うと、一夏のクラス代表決定のパーティーだ。

最も、当の主役はと言うと……

「なんで俺がクラス代表なんだよ？」

「それは俺と」

「私が辞退したからですわ」

疑問を投げかける一夏に直人とセシリアが答える。

「いや、直人は解ってたよ、俺より目立つことはしないってわかっ

てるし、でもなんでセシリアまで？」

「と言うより、二人は何時からそんな仲良しに？」

一夏の後に、真白も疑問を呈す。

「クラス代表選の後、鈍ってる体を鍛え直すために鍛錬してたらセシリアが来てな、いろいろ話してクラス代表の事で、俺が辞退するって言ったんだけど、本人も納得いかなくてさ、どうしようか考えた結果、二人で辞退して、一夏に代表の座を譲ろうという事になったんだ」

「まあ、勝負はあなたの負けでしたけど、しかしそれは考えてみれば当然の事、何せ私が相手だったのですから」

「確かに」

「寧ろ、あそこまで食いつけた一夏君はすごいと思うよ？」

セシリアの言葉に、真白と紅葉も同意の言葉を示す。

ちなみに、紅葉は今まで名字で呼んでた一夏の事を名前で呼んでいる。

これはクラス代表選の後、「名字だと堅苦しいから名前で呼んでいい？」と聞いて、一夏があっさりＯＫを出したからである。

ちなみに同様の理由で、箒の事も名前で呼ぶことになったが、ちゃん付けされるのは嫌だろうし、かといって呼び捨てにするのも失礼だという事で「箒さん」と呼ぶことになった。

「それで私も、大人げなく怒ったことを反省しまして、直人さんの

提案に乗って、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたの」

「いやー、セシリア解ってるねー」

「せっかく男子がいるんだから、持ち上げないとねー」

クラスのメンバーに持ち上げられる一夏だが、そんな様子が面白くない人物が隣にいた。

「人気者だな、一夏」

「そう思うか？」

「ふん！」

一夏の返事に不機嫌そうにそっぽを向く箒。

「「ねえ、直人」」

「何だ？」

ここで真白と紅葉が直人にさっきの様子を見て思ったことを聞く。

「箒さんってさ、もしかして一夏君の事……」

「ああ、古い言い方するとほの字だ。だが、箒はあの通り素直じゃないし、一夏は呆れるほどの鈍感だからな、まったく気づいてない」

「そうなんだ」

「でもさ、それ直人が言える口？」

「はっ？　どういう意味だ？」

「「……はぁ」」

本人に自覚はないが、直人もまた、一夏の同類であったのだった。

「はいはーい、新聞部でーす！」

その時、フラッシュがしたので見てみると、目の前にカメラを構えた女子生徒が立っていた。

彼女の名は黛薫子、先ほども言った通り、ＩＳ学園の新聞部だ。

「注目の専用機持ち三人のスリーショットといきましょうか。ほら握手」

「三人で握手って、どうするんだ？」

「とりあえず、こんな感じでどうだ？」

「な、直人さん！？」

直人がした三人での握手と言うのは、直人とセシリアが握手し、その上に一夏の手を置く形になった。

当然、直人と手を握ったセシリアの顔は真っ赤になってるわけだが。

「……むぅ」

紅葉はその顔を見てどこか面白くない様子。

「はい、それじゃとるよー、はい、チーズ」

そうしてとられた写真には……

一組のメンバーが全員入っていた。

「なぜ皆入っていますの！？」

「まあまあ」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょう」

「む～」

全員に丸め込まれ、セシリアは一寸不服のご様子。

「やれやれ、じゃ、俺はそろそろこの辺で」

「何だ、もういくのか？」

「ああ、そろそろ時間なんでな」

そう言って直人は鍛錬を行うために立ち去ろうとした時だった。

「じゃあみんな、精々師匠に見つからないように楽しんで……！！？？」

突然、直人の体が身震いをした。

「ど、どうしたんだ、直人？」

「い、いや……なんか言い知れない悪寒が背中を走った」

「悪寒？」

「い、いやなことの前触れじゃなきゃいいんだが……」

背中を走った悪寒が杞憂であることを願いながら、直人はその場を去って行った。

だが、この悪寒が、二重の意味で彼に災難を振りまくことになることを、この時は直人をはじめ、誰も知る由はなかった。

第七話　実習とクラス代表決定パーティー（後書き）

後書きコーナー（仮）

作者「と、いう訳で、この話から、後書きコーナーを設けたいと思います」

直人「何をとち狂った？」

作者「酷！　いや、大体この辺でやろうかな？　って思ってたんだよ、キャラ紹介とかもしたわけだし、それにやってみたかったんだよ」

直人「そんだけか？」

作者「まあ、そんだけっちゃあ、そんだけ」

直人「はぁ、で、なんでタイトルが仮なんだ？」

作者「いやさ、アイデアが貧困な作者に、凝った名前を求めるなんておかしいだろ？　まあ、今考えてないだけで、アニメの第四話目に入るまでにはつけようと思う」

直人「勿論、読者の方からも募集するんだろ？」

作者「モチコース！　と、いう訳で、このコーナーのタイトルと、やってほしいことなどを募集します」

直人「基本作者の思いつきとかが形になると思うが、付き合っても

らえるとありがたい」

作者「さて、ではそろそろこの辺で」

直人「待て、まだ話は終わってない。あいつが出てくるんじゃなかったのか？」

作者「いや、最初はそのつもりだったんだよ、でもさ、この作品はアニメの一話分を三話に分割して書いてるじゃん。そのスタンスで行くとこの辺が区切り良いかなあって思って」

直人「まあ、出てこられても困るがな」

作者「安心しろ、ちゃんと伏線は張っておいたしな」

直人「この悪寒、二重の意味の災難ってどういう意味だ？」

作者「それは話が進んでのお楽しみ、とにかく、次回は正真正銘偽りなしで、彼女が登場します！」

直人「これからも、【ＩＳ　桜の花纏う真剣】を、よろしくお願いします」

第八話　転校生来襲！　その名はセカンド幼馴染！！

クラス代表決定パーティーの次の日。
一組では、もうすぐおこなわれるクラス対抗戦とは別に、もう一つの話題が持ち上がっていた。

「そうだ、二組のクラス代表が変更になったって聞いてる？」

「ああ、何とかって転校生に変わったんだよね？」

一夏と直人の席の近くに集まって、女子たちが件の話題について話す。
当然、その近くにはセシリア、真白、紅葉もいる。

「転校生？　今の時期に？」

「うん、中国からの転校生だって」

「……っ！？！？」

その言葉を聞いて、再び身震いを起こす直人。
そしてそのまま、机に突っ伏してしまう。

「おい、直人大丈夫か？」

「大丈夫って言いたいけど、流石に堪えてる」

パーティーを去る際に感じた悪寒。
あの後も直人は、鍛錬時、入浴（正確にはシャワー）時、就寝時

と、一日中その悪寒を感じていたのだ。
直人は最早不吉の前触れではないかと気が気でなく、朝食を摂っての登校後（この間も悪寒を感じた）、教室に入ってから精神的に少し消耗してしまい、ずっとこんな感じである。
そして、先ほどのクラスメイトの言葉「中国からの転校生」と言う言葉を聞いて、直人はこれまでにないほど強い悪寒を感じた。

「ったく、何だってんだよ、この悪寒は」

流石の直人も、そう愚痴らずには言われなかった。

「ふん、私の存在を今さら危ぶんでの転入かしら？」

「どっちかって言うと、ＩＳの試験のためじゃないかな？」

転校生の事で腕を組みながら言うセシリアに、紅葉は企業の娘らしいセリフを言う。
このＩＳ学園は、いかなる国家、組織からの干渉を許さないという国際規約により、他国間のＩＳの比較や新技術の試験などに非常に重宝する場である。
なので、そういう可能性で送り込まれたとしても、何ら不思議ではない。
かく言う紅葉も、自社のＩＳ新武装試験評価のためにここにいたりする。

「どんな奴なんだろうな？　強いのかな？」

興味があるらしく、一夏は転校生の事について聞いてみる。

「確か、今のところ専用機を持ってるのって、うちと四組だけだよ

ね？」

「そう聞いてるよ？」

紅葉の言うとおり、専用機を持っているのは一組と四組。

しかも、一組には三機も専用機があるという、「何者かの陰謀か？」と聞き返したくなるほどの集中ぶりである。

「その情報、古いよ」

すると、突然声が聞こえてきた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝できないんだから」

全員が視線を向けた先には、長いツインテールをした、勝ち気そうな女子が立っていた。

制服は改造してあるのか、肩の部分が露出していた。

そしてその顔を見て、一夏は驚きの表情を、直人はどこか気まずそうな顔をしていた。

「鈴……お前、鈴か？」

「そうよ。中国の代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）！　今日は宣戦布告に来たってわけ！！」

信じられないという風に聞いてくる一夏の問いかけに件の転校生、凰鈴音は、ビシッと指を一夏に差して声高らかに宣言する。

「……マジか」

そして一夏の隣では、さっき以上に気まずそうな顔をしながら、直人が誰にも聞こえない声でそう呟いた。

「直人さん、どうしましたの？　今朝からそうでしたけど、なんだかお顔の色が優れませんけど？」

ここで、直人の様子がおかしいのに気付いたセシリアが聞いてくる。

「ああ、大丈夫。ちっとばかしまいってるだけだから」

だが当の本人は、そういって手をひらひらと振る。

（それにしても……）

ここで直人は、あることを思った。

「（何かっこつけてんだ？　すっげえ似合わねえぞ？）」

ここでも義兄弟シンクロ炸裂。一夏と直人は同じことを思い、そして鈴にそう言った（直人は心の中で）。

「なっ！　なんてこと言うのよアンタは！！」

「あっ……」

一夏に「似合わない」と言われ怒り出す鈴。

するとここで、真白が何かに気付いたが、時すでに遅し。

刹那、鈴の頭に鈍い音と衝撃が炸裂した。

「いったー。何すんの！　……げっ！」

当然、殴られた鈴は文句を言うが、その相手を見て硬直する。

「もうＳＨＲの時間だぞ」

「ち、千冬さん……」

一組の支配者、千冬だった。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

「す、すいません」

苦手意識があるのか、先ほどまでの強気が嘘のようにあっけなくドアから退く。

「また後で来るからね。逃げないでよ一夏、そして直人！！」

そう言って、鈴は二組へと戻っていった。

「あいつが代表候補生……」

そして教室には、意外な事実を聞いて唖然とする一夏と……

「真白」

「何？」

「この世界に神はいないんだな」

「……何を今さら」

額に手をつきながら、暗い顔をする直人がそこにいたのだった。

授業終了後、六人は食堂へ行き、そこで先ほどの転校生、鈴と合流した。

「びっくりしたぜ。お前が二組の転校生だとはな、連絡くれりゃいいのに」

「そんなことしたら劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ」

「……はぁ」

一夏と鈴の会話の後ろで、いまだにため息をつく直人。

「何よ直人、さっきからため息ばっかついて」

「何でもない。それよりお前、まだ師匠が苦手なのか？」

ここに来てずっとため息ばかりついてる直人に食いついてくる鈴に、先ほどの様子から聞き返す。

「違うわよ、ちょっと、その、得意じゃないだけ」

「人、それを苦手と言う」

それに鈴はそう答えるが、パロディっぽく答える紅葉。

「丸一年ぶりになるのか、元気にしてたか？」

「してたわよ。あんたこそ、たまには怪我病気しなさいよ！」

「どういう希望だよそれ」

「全くだ」

滅茶苦茶な鈴の要望に、呆れ気味に返す一夏と直人。

そして食事を受け取り、七人は席に着く。

「にしても、俺はともかく、よく直人のこと覚えてたよな」

「そりゃあ、あの髪と目の色してる奴って言ったら、アタシの知ってる中じゃ、あいつしかいないでしょ？」

「だとよ」

「……さいですか」

鈴の答えを聞いて、一夏は直人にその答えを返し、直人はまたため息をつく。

「んで、何時代表候補生になったんだよ」

「あんた達こそ、ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「ん？　ちょっと待て」

ここで、直人がふと疑問を呈する。

「一夏はともかく、俺もニュースに出たのか？」

「知らないの？　あんたの事、一夏のニュースの翌日に流れたわよ」

「……一応聞くが、誰が流したかわかるか？」

「誰かまでは解らなかいけど、確かニュースだと、「創世の芸術家」とか名乗る奴が発信元らしいわよ」

それを聞いた途端、直人の中から怒りが沸々と湧いてきた。

「あいつ、今度会ったら三枚に卸す！！」

「「おい（ちょっと）！　何物騒なこと口走ってんだよ（のよ）！！」」

突然刀に手を掛けながら物騒なことを言い出す直人に、一夏と鈴は見事にシンクロした。

その後暴れかけたのだが、二人だけでなく、箒、セシリア、紅葉も加わって、どうにかなだめることができた。
ちなみにこの間、真白は普通に食事を食べていた。

「すまん、少し取り乱した」

「まったく。そんなことより、入試の時にＩＳ動かしちゃったんだって、なんでそんなことになっちゃったのよ？」

「何でって言われてもなあ」

ここで、鈴が話題を一夏の事に変えたため、矛先を向けられた一夏は、当時の事を思い出しながら話した。

本来、一夏は私立藍越学園に入学するはずだったのだが、試験会場である私立の多目的ホールで迷ってしまったそうだ。
そこで歩き回ってたらＩＳを見つけ、それに触れたら反応したというのだ。

「んで、いろいろあって、この学園に入れられたって訳だ」

「ふうん、変な話ね。それで直人、あんたはどうなの？」

「俺か？　俺は確か……」

ここで直人も話題を振られたため、何があったのか考え込むが……

「いや、頼む、思い出させないでくれ。あいつの事を思い出すと、さっき収まった怒りが……」

そう言い区切った途端、再び腰の刀に手を掛ける。
しかも今度は二本。

「あいつぅぅぅ！　三枚卸しじゃ生ぬるい！！　いっそのこと微塵切りにしてくれるーーーーー！！！！」

「「「「「だから落ち着け（落ち着いてください）ーーーーー！！！！」」」」」

再び怒り心頭の直人を、再び五人が抑えつける。
ちなみにこの間、真白は何事もないようにお茶を飲んでいた。

「それで一夏、直人、そろそろ説明してほしいのだが」

直人の怒りをなだめた後、鈴の事について、箒が説明を要求してきた。

「そっか、ちょうど入れ違いだったな」

「入れ違い？」

直人の説明に、箒は首を傾げる。

「ほら、箒が転校したのは、小４の時だろ？　鈴が入ってきたのは小５の時だから、ちょうど入れ違いなんだよ」

「成程、だから箒さんは知らないんだ」

「そういうことだ」

直人の説明に、紅葉がぽんと手を叩いて納得する。

「まあつまりな、箒はファースト幼馴染、鈴はセカンド幼馴染ってとこだ」

「俺からしてみれば、紅葉がセカンドだがな」

一夏の説明に、直人が少し自己補足を加える。

「初めまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

と、あいさつは普通に平静を装っているが、箒と鈴の間に火花が散っているように見えるのは、恐らく気のせいではないだろう。

「散ってるねえ」

「散ってるね」

と、冷静に二人の様子を見守る紅葉と真白だった。

「……はあ、一夏、悪いけど、先に教室に戻ってるぞ」

「え？　良いのか？」

「ああ、色々思うところがあってな。真白、行くぞ」

「うん」

と、直人は逃げるように真白とその場を後にした。
ちなみにその際、後ろでなにやらセシリアと箒と鈴が揉めだしたことについては、直人は全力で聞こえないことにした。

「……」

だが、そんな直人の様子を、紅葉は何か確信を持ったような目で見つめていたのだった。

第八話　転校生来襲！　その名はセカンド幼馴染！！（後書き）

後書きコーナー（仮）

作者「と言う訳で、後書きコーナー第二回目！」

直人「今回は企画を行うんだと？」

作者「おおよ！　タイトルも決まってるぜ」

直人「ほお」

作者「と、その前に、前回の話に感想をくださった、三月語様、こもも様、本当にありがとうございます」

直人「三月語様に至っては、真白がお気に召したようで」

作者「作った身としても、光栄の極みです」

直人「これからもよろしくお願いします。これから見られる方も、是非ご感想をください」

作者「それじゃあさっそく、企画その一、その名も「直人の目安箱」！！」

直人「三月語様からのアイデアだな、にしても、何だ目安箱って？」

作者「江戸幕府八代将軍徳川吉宗が、庶民からの意見を聞くために設けた箱の事だ。まあ、コーナー自体は普通の質問コーナーなんだ

けどな」

直人「まあいい、それで」

作者「早速、三月語様から質問を頂いていますので。直人に答えてもらおうと思う」

直人「答えられる範囲でならな」

作者「えーっと、「一夏を義兄とする直人に質問。今まで一夏を見た中で、『ああ、馬鹿だ・・・』最もと思えたことは？」だそうだが」

直人「最も馬鹿だと思えたこと？　そうだな、ここ最近の一夏は本当にそう思う事の連続だな」

作者「うわ、手厳しい」

直人「だってそうだろ？　必読品を古い電話帳と間違えるとか、勉強を教えてても、本人解ったつもりでも、聞き直すと「解らねえ」って返してくるし」

作者「まあ、確かにあきれることは多いな」

直人「だが一番となると難しいな。敢えて挙げるとすれば、あの鈍感さで、手痛い目にあった時かな？　なんであれで気づかないんだ？　って、何度思ったことか」

作者「成程、でもそれは君の言える義理かな？」

直人「何だよ？」

作者「何でも。とまあ、こんな風に、皆様から頂いた素朴な疑問を、直人に答えていただきます」

直人「俺に限らず、真白や紅葉についても、質問をおくってもらって構わないぞ」

作者「それでは二つ目の企画「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」だ！」

直人「これはお前が考えたんだっけか？」

作者「そ、原作、オリキャラ問わず「この人にこう言う台詞を言わせたい」と言う企画だ。今回も、直人の目安箱の質問同様、三月語様から頂きました。

直人「んで、誰が何を言うんだ」

作者「それはこれから、では登場していただきましょう。この二人です！！」

「どうも」

「いきなり呼ばれたんだけど。何なの？」

直人「真白！　それに鈴！」

作者「と言う訳で、本日は真白と鈴音をご指名です。じゃあ二人とも、この紙に書いてある台詞を言ってね」

鈴「どれどれ……」

真白「……うん、解った」

作者「それじゃ、まずは真白から」

真白「時は戻らない・・・それが自然の摂理・・・」

作者「【テイルズオブシンフォニア】から、プレセア・コンバティールの秘奥義終了時の台詞です」

直人「……違和感ねえ」

作者「まあ、真白は感情表現が乏しいし、背も一応、現メンバーの中では低いからな」

直人「んで、次は鈴か」

作者「準備はいいか？」

鈴「良いわよー」

作者「それじゃ、どうぞー」

鈴「バーカ」

作者「こちらは、バカとテストと召喚獣、通称「バカテス」から、第四話冒頭の島田美波の台詞だそうです」

直人「作者はバカテスを知らないが、鈴なら普通に言うと思うぞ？」

作者「確かに」

直人「とまあ、こんな風に、俺達でも一夏達でも、この台詞を言わせたいってのがあれば、是非応募してくれ。

作者「応募の際は、次の事を守ってください」

・誰に言わせるか

・作品名と登場人物の名前

・何と言ったのか

作者「以上を踏まえてご応募ください。今後登場のキャラでもいいですが、その場合は本編で登場するまで保留させていただきますので、ご注意ください」

直人「後、この後書きコーナーのタイトル名と、企画も応募しています。皆さんの応募、お待ちしております」

作者「次回でアニメ第三話は終わり。食事シーンでは解りづらかっただろうけど、何故直人が鈴に苦手意識みたいなのを持っているか、その理由についてを書きたいと思います。

真白「直人、一体何があったの？」

作者「それは次回だな。だが安心しろ、呆れるくらいさっぱり洗い流す予定だから、今はともかく、今後の話に禍根は残さないつもりだ」

真白「ふーん」

作者「と言う訳で、今回はここまで、次回もお楽しみにー！」

第九話　悩む真剣、そして始まるクラス対抗戦（前書き）

今回でアニメ第三話の話は終わりです。

後皆さん、この作品の後書きコーナーの企画案やタイトルなどを募集しています。

ぜひ、ご応募お願いします。

第九話　悩む真剣、そして始まるクラス対抗戦

放課後、一夏の訓練を終えた直人は、いつものように胴着に着替え、菊一文字と虎徹を携えて鍛錬を行っていた。

「……」

一心不乱に刀を振り続けるが、その刀にはいつものような鋭さがなかった。

名人などが言うように、剣の太刀筋はその人の内面を映すと言う。

実際、今の彼はあることで迷いが生じており、それが振り下ろす刀に出ていた。

「……駄目だ」

何度か振って、自分の太刀筋に納得が行かない直人はそう呟いて素振りをやめる。

「はぁ。やっぱりあいつの事が気がかりで集中できねえ」

あいつとは無論、本日転校してきた鈴のことだ。

鈴が転校してきた時から、直人はあることが気がかりで落ち着かないのだ。

（あいつ、あの事まだ覚えてるかな？　覚えてるだろうなあ……）

鈴が未だに「あの事」というのを憶えてると思い、直人の顔はうかなく、また気まずそうな顔になってきた。

（もし憶えてたとして……いや、憶えてなくても同じか。どっちにしても、これからどう付き合えば……）

素振りをしてる時も、ずっとそのことばかりを考えており、直人はずっと悩んでいた。

「やっほー」

すると、背中から声がしたので振り向くと、そこには紅葉が立っていた。

いつもなら気配で気づくだろうが、悩んでいた直人はその気配に気づくことはなかった。

「紅葉か。真白は？」

「部屋に一緒にいたけど、もうそろそろ一夏君に勉強教えに行くんじゃないかな？」

「そうか。んで、お前は行かなくていいのか？」

自分を鍛え直す事を始めて以降、直人に代わって真白と一緒に紅葉が教えるようになった。

ＩＳの企業の娘である彼女なら、知識を教えるには申し分ないとのことで、当人も暇つぶしになるというので二つ返事で了承した。

「良いの、真白ちゃん一人でも教えるには十分だし。それに、聞きたいことがあってね」

「聞きたいこと？」

直人の言葉に紅葉は頷く。

「うん。あの子、鈴ちゃんの事」

「!?」

その言葉に、直人は顔が強張る。

「直人、明らかにあの子を避けてたよね。お昼の時はそんな風に見えなかったけど、あの子が来てから、ずっと態度が変だったもん。明らかに幼馴染にとるような態度じゃないよ、あれは」

「……」

紅葉は真剣な表情で聞き、それに直人はただ黙りこむだけだった。

「いったい何があったの?」

「……」

紅葉に聞かれて、しばらくは黙り込んでいたが、やがて考え出すようなしぐさをし、そして……

「……お前になら、別にいいかな」

しばらくの沈黙の後、直人はそう呟いた。

「言っておくけど、他言無用だからな。あんまり話したくないんだ」

「いいよ、それで」

紅葉から了承を取ると、直人はその訳を話し始めた。

「昔、小5の時に、鈴と喧嘩したことがあるんだ」

「えっ？」

「もうほとんど覚えちゃいないけどな。何が原因だったのかも、どっちが悪かったのかも。ま、もうどっちでも良いんだけどな」

「何？　まさかそれだけで避けてるの？　特にあの子は気にしている様子は無いけど」

「まさか、原因も何も覚えてないような喧嘩で、あそこまで避ける気はないよ」

「じゃあ何で？」

紅葉がさらに問い詰めると、少し戸惑ったような表情をしながらも、続きを話す。

「その喧嘩でな。俺、鈴を泣かせちまったんだ」

それを聞いて、紅葉は驚いた表情をする。

「まあ、そうなるとさ、どっちが正しいか関係なく、なんか、こっちが悪い気がしてくるだろ？」

「それは解るけど」

「それでその後先生が来て、その場は収まったんだけど。何か、気まずくてな」

「成程、それで避けてたんだ」

直人が鈴を避けてた理由は、過去の喧嘩で泣かせてしまったことにくる負い目だったのだ。

「でも、もう気にしてる風じゃなかったけど？」

「どうだろうな。忘れてるとは考えにくいし、仮にもう気にしてなくても、やっぱり俺は気になるんだよなあ」

「でもさ、もう理由も何も忘れちゃってるような喧嘩なら、もう気にしなくても」

「そうじゃない」

気にする必要は無い、と言おうとした紅葉に、直人はそうじゃないと言ってきた。

「喧嘩自体じゃない。俺があいつを泣かした。それが問題なんだ」

そう言うと、直人はそのまま、寮へと戻っていった。

その時の顔と背中は、どこか寂しそうだったと、紅葉は思いながら、その後を追いかけて行った。

部屋に戻り、汗を洗い流した直人は、真白と紅葉の手伝いをするべく、一夏と箒の部屋に向かっていた。

しかし、その間も鈴とどう付き合えばいいのかについて思い悩んでいた。

（いつまでもこのまま避けてるのは悪いよなあ。でも、今さらどんな顔して向き合えば……）

そんな風に考えてると、二人の部屋である１０２５室に到着しようとした。

「ん？」

だがここで、部屋の中が妙に騒がしいことに気付く。

「何だ？　また一夏と箒が何か言い争ってるのか？」

と、呆れ気味に部屋に入る。

「おーい二人とも、痴話喧嘩も良いが程々に……げっ！？」

しかし、確かにそこでは言い争いが起こっていたが、一夏と言い争っていたのは箒ではなく……

「何怒ってんだよ！　ちゃんと覚えてただろう！！」

「約束の意味が違うのよ！　意味が！！」

「だから説明してくれよ！！」

一夏と言い争っていたのは鈴だった。

しかもよく見てみると、一夏の頬に平手打ちの跡があり、くっきり紅葉を形成していた。

「「「あっ、直人」」」

「真白、箒、紅葉、一体どうなってんだ？」

状況が呑み込めない直人は、声を合わせて呼んだ三人に事の次第を聞く。

説明中……

「つまり、鈴との約束を憶えてない一夏に、鈴が怒ったと。そういう事か？」

「正確には、約束の意味をはき違えているみたい」

事の次第を聞いた直人は、紅葉のその言葉の後にため息をつく。

「それで直人。一夏がした約束とはなんだ……」

そう聞いてくる箒は、どこか黒いオーラを纏っていた。

「い、いや、俺も知らん。さっき聞いて初めて知った」

「そうなの？」

「ああ、俺だって四六時中一夏と一緒にいるわけじゃないから、それに中学の時の約束とかだったら完全に蚊帳の外だぞ？　俺その時旅してたから」

「そ、そうだったな」

箒のだす黒いオーラにたじろぎながらも、正直に話す。

その言葉に嘘偽りがないと悟ったのか、箒も落ち着き、黒いオーラも引っ込んだ。

「じゃあこうしましょ。次のクラス対抗戦で勝った方が、負けた方に一つ言う事を聞いてもらうって言うのは！」

「おお、良いぜ。俺が勝ったら、説明してもらうからな！」

「あんたこそ、覚悟していなさいよ！　それと直人！！」

「なっ！　何だ？」

突然鈴に名前を呼ばれ、狼狽えながらも返事をする。

「あんたには聞きたいことがあるから、対抗戦の後、アタシに会いに来ること！　逃げるんじゃないわよ！！」

そう言って鈴はボストンバックを引っ提げて部屋を後にするのだった。

「はぁ、今あいつの事で悩んでるってのに……気がめいるなあ」

「まあまあ、取り敢えず、対抗戦終わったら、話だけでも聞いたら？」

「だよな、流石にこのままってのは不味いと思ってたし」

紅葉に言われ、腹をくくった直人は、取り敢えず対抗戦の後、鈴と話をすることを心に誓った。

「ま、それはそうと……」

そして直人は一夏の方を向く。

「「一夏」」

「ん？　何だ？」

「「馬に蹴られて死ね」」

「ええ！？」

一夏の時に負けず劣らぬシンクロっぷりで、直人と箒はそう言い放つのだった。

そして、対抗戦当日。

初戦から、一組と二組の対決、つまり一夏と鈴が激突するのだった。

「中国の第三世代ＩＳ，甲龍（シェンロン）。白式と同じパワータイプで、燃費効率も良い。これはかなり厄介だね」

「今度はちゃんと調べたんだ」

「織斑先生に頼んだら、「ビットの中でのみ開示を許す」って条件で貰った」

真白は貰った鈴のＩＳ甲龍のデータを見ながら話した。

「これは、下手したら鈴に軍配が上がるかもな」

「どういう意味だ？」

直人の言葉に真意がわからない一夏は聞いてくる。

「前回は、まったく異なるタイプ同士の戦いだったろ？　お前が近距離戦特化で、セシリアが遠距離型、だけど今回は、同じタイプ同士の戦いだ。場合と状況にもよるが、こういう場合は、互いの技量と経験が勝敗を分ける。剣道とかと同じだ」

「成程な」

「だから気を引き締めて行けよ。出ないと、冗談抜きでぼこぼこにされるぞ」

「解ってるよ。じゃ、行ってくるぜ」

そう言うと、一夏はアリーナへと飛んで行った。

「……」

「どうした、直人？」

ここで、直人の表情がどこか曇ってることに気付いた箒が尋ねる。

「あっ、いや」

「大丈夫ですわ。一夏さんは勝ちますわ」

「それとも、やっぱり鈴ちゃんと会うのが気まずい」

「どっちでもない」

「じゃあ、どうして？」

セシリアと紅葉は、それぞれの考える懸念を聞いてみるが、直人はどれでもないと否定する。

そして真白の言葉に、直人は胸を押さえながら言った。

「何か、妙な胸騒ぎがするんだ」

「胸騒ぎ？」

「ああ、こういう胸騒ぎがするときは、大概碌なことが起こらない。杞憂で終わってくれれば良いんだが……」

直人は嫌な予感を憶えつつ、その胸を強く抑える。

そんな不安の中で、クラス対抗戦が始まるのだった。

第九話　悩む真剣、そして始まるクラス対抗戦（後書き）

後書きコーナー（仮）

作者「そろそろこのコーナーの名前を考えないとな」

直人「何時までもこれで通すわけにはいかないしな」

作者「今回は直人の目安箱だけです。ぶっちゃけアフレコ委員会の方に応募が一つもなかったので」

直人「それぞれ事情があるんだ。一通来ただけでもめっけもんだろ？」

作者「ま、そうだな。質問の投稿者は、前回と同様、三月語様からだ」

直人「で、どんな質問だ？」

作者「えーとだな、『こちらで一回行った『パスタ選手権』で食べてみたいと思ったもの、或いは絶対に食べたくないと思ったものは？（論外扱いになったものは除外）』だそうだ」

直人「ああ、あれか。お前結構笑ってたよな」

作者「いや、中々面白くて。んで、どうなんだ？」

直人「まあ、髑髏組以外は皆美味しそうではあったが、やっぱり箒

の奴かな？」

作者「幼馴染補正入ってないか？」

直人「そうじゃない。ちゃんと理由もある」

作者「ほー」

直人「いやな、確かにどれも美味しそうではあった、唯……」

作者「唯？」

直人「ルティアのごはん○すよパスタに、シャルロットの焼きパスタとか見てて、これってある意味炭水化物に炭水化物って組み合わせだよな？　って思ってな」

作者「あー、リースのうま○棒　たらこ味パスタもそうだったしな」

直人「それでそれらを除外して、一番の候補に挙がったのは、箒、鈴、真琴の三人だったんだが、悩んだ末に箒に決めたんだ。まあ、どれも美味そうだから、実際甲乙付け難かったけどな」

作者「成程」

直人「ま、実際はこれ考えてた時、丁度県民ＳＨＯＷで大阪の奴をやってたからだけどな」

作者「ちょ！　メタ発言禁止！！」

直人「良いだろ？　どうせ本編と関係ないんだから」

作者「まったく。んで、一番食いたくない奴は？」

直人「ダントツでラウラのフリスクパスタだ」

作者「……だな、コメントいらずだな」

直人「そういうことだ」

作者「取り敢えず、三月語様のために直人が選んだ好みのパスタをランキングにしてみました。上に行けば食いたいと思ったので、下に行けば食いたくないものです。

一位：箒　『野菜炒めパスタ』

二位：鈴　『酢豚あんパスタ』

三位：真琴　『エビチリパスタ』

四位：ルティア　『『ごはん○すよ』パスタ』

五位：シャルロット　『焼きパスタ』

六位：リース　『うま○棒たらこ味パスタ』

七位：沙霧　『すき焼きパスタ』

八位：ルシエラ　『フォアグラパスタ』

九位：セシリア　『チョコレートパスタ』

十位：オリヴィエ　『冷製スイカパスタ』

十一位：ラウラ　『フリ〇クパスタ』

直人「と、こんなところか」

作者「なあ、やっぱりこれ幼馴染補正入ってないか？」

直人「そんなつもりはないんだが、まあ、二人とも料理がうまいし、食べ慣れてるからかな？」

作者「と、そろそろ時間が来たため、本日はここまで」

直人「ご意見、ご感想と、目安箱への質問、アフレコ、企画案、そして来週いっぱいまで、このコーナーのタイトルを募集します。皆さん、どしどしご応募ください！」

作者「さて、次回はアニメ第四話の話だ」

直人「いよいよ始まった一夏と鈴の戦い」

作者「誰もがその行方を固唾をのんで見守る中、一人直人は胸騒ぎを覚える」

直人「そしてそれは的中し、事態はとんでもない方向へ！」

作者「次回もお楽しみに！！」

第十話　招かれざる者、襲来（前書き）

この小説のＰＶ数が、２５，０００を突破しました。
多くの方々にご愛好いただいているようで、誠にありがとうございます。

これからもＩＳ　桜の花纏う真剣を、よろしくお願いします。

第十話　招かれざる者、襲来

「ふんふふんふーん♪」

どこと知れない、薄暗いラボの中で、一人の人物が鼻歌まじりにディスプレイを見つめていた。

ディスプレイに映っているのは、今クラス対抗戦が行われている、ＩＳ学園だった。

「さーって、そろそろかなあ～♪」

子供のように言いながら、どことなく楽しそうに言う。

「束（たば）ちゃん、ＩＳ学園の諸君、そして直人、これから楽しい時間の始まりだよ♪」

そして、ディスプレイを見つめながら言った。

「Ｉｔ，ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ♪」

謎の人物が不敵な、しかし子供のような笑いを浮かべていたころ、アリーナでは、一組代表の一夏と、二組代表の鈴による、クラス対抗戦が行われていた。

まず手始めに、先手必勝と言わんばかりに一夏が突っ込むが、鈴は不敵な笑いを浮かべた後、それを難なくかわす。

そして鈴は、甲龍の主武装である大型の青龍刀「双天牙月」を手に持ち、一夏に斬りかかり、そしてそれを防ぐ一夏。

「ふーん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。でも……」

そう言うと双天牙月をもう一本取出し、再び斬りかかる。

再び雪片でそれを防ぐ一夏。

勝負は一見互角に見えながらも、徐々に鈴の方に傾きつつあった。

一方、アリーナにいた箒達は場所を変え、試合の様子を見守っていた。

「一夏……」

「あああもう！　何をやってますの！！　私が教えたクロスグリットターンを使いなさい！！」

「まあまあ、落ち着いて」

心配そうに見つめる箒とその様子に苛立ちを覚えるセシリア、それをいさめる紅葉。

三者三様とはこのことだが、その中で一人、冷静に分析をしている人物がいた。

「……」

それは真白だった。

「風花、お前はこの状況をどう思う？」

先ほどから黙りこくっている真白に、千冬が問いかける。

「ひどい言い方になりますが、予想通りとしか言えません。試合前に直人も言っていましたが、同じタイプ通しの戦いでは、相手の技量や経験が勝敗を分ける大きな要因になります」

「ふむ……」

「そして、一夏がその二つを持っているかと言われれば、ＮＯと答えるよりありません」

「確かに、それらは本来、時間をかけて身に付ける物だ、一週間そこらで身に着く技術や経験など、たかが知れているしな」

真白の理路整然とした問いの答えに、千冬は感心しつつ言う。

「ですが……」

「何だ？」

「このままでは終わらないでしょう」

「ほお、何故だ？」

何となく予想しているが、千冬は意地悪そうに聞いてくる。

「根拠は二つあります。一つは、人間が持つ爆発的な力、火事場の馬鹿力とでも言いましょうか。それらは時として、技量や経験を上回る力を発揮するものです」

「ほお。だが、それだけで勝てるほど戦いは優しくないぞ。もう一つの根拠は何だ」

「それは、織斑先生が一番ご存知じゃないんですか？」

その言葉に対し、千冬は表情も変えず、何も答えようとはしなかった。

それを見越していたのか、真白も特に問い詰めようとせず、二つ目の根拠を口にした。

「クラス代表決定戦から今日まで、貴方の弟を鍛え上げたのは、貴

方の弟子だからです」

一方、その弟子はどこにいるのかと言うと。

「うわあ、解り切っていたとはいえ、容赦ないなあ、鈴の奴」

箒達が移動したのに対し、直人はいまだにピットに残って試合の様子を見ていた。

「一夏も押されてるな、今頃セシリア辺りが「私が教えたクロスグリットターンを使いなさい！！」とか喚いてるだろうなあ」

寸分違わず当たってた。

まあ、状況的に使った方が良いというのは直人も理解しているため、彼女の性格なども考慮すれば想像はつくだろう。

だが、試合の様子を見守る傍ら、その右手は胸を強く押さえていた。

それは、今尚している胸騒ぎから押さえていた。

（杞憂で済むならそれに越したことはないが……）

気のせいで済んでほしいと願う反面、既に確信めいたものを感じていた。

（この戦い、何かが起こる……！）

そして胸を押さえていた右手は、いつの間にか首に掛かる待機状態の灰桜を握りしめていたのだった。

一方、アリーナで鈴と対峙する一夏だが、状況は完全に押されていた。

再び距離を置いた後、鈴は双天牙月を連結させ、回転を加えながら斬りかかる。

その攻撃に守勢に立たされるのを余儀なくさていた。

（このままじゃ、消耗戦になるだけだ、一旦距離を取って……）

このままでは自分が危ないと危惧した一夏は、距離を取って体勢を立て直そうとする。

「甘い！！」

だが、距離を取った途端、甲龍の肩の装甲が展開、そこから見えない「何か」が放たれた。

「うわ！？」

間一髪それをかわすが、その後ろで爆発が起こる。

「今のはジャブだからね！」

そう言って鈴は再び放つ。

今度は直撃し、一夏は地上に吹っ飛ばされる。

「何だ、今のは！！」

突然何が起こったのか解らず、箒が声を上げる。

実際、見ている側からすれば、突然一夏が吹っ飛ばされたようにしか見えなかったからだ。

「あれは、衝撃砲（ショック・カノン）だね」

「そうです。空間自体に圧力を掛け、砲弾を撃ち出す武器です」

「私のブルー・ティアーズと同じ、第三世代型兵器ですね」

攻撃の正体を答える紅葉、そしてそれに補足説明を加える山田先生とセシリア。

「あれは厄介だね。砲弾だけでなく、砲身も見えないわけだからね、回避は困難だよ」

「それに、正面だけに撃てるとは思えない。恐らく、射角に制限はないよ」

「それはつまり、死角がないと？」

「そういう事」

紅葉達の言葉に、なお一層不安そうな顔をする箒だった。

そして、起き上がった後も、状況は何ら変わらず、むしろ悪化の様相さえ呈していた。
起き上がった直後に、鈴の衝撃砲による攻撃が襲い掛かり、それを回避するので精一杯だったのだ。

「よくかわしたわね。この龍砲は、弾丸も砲身も見えないのが特徴なのに」

そう言いながら、鈴は尚も砲撃をやめない。

（目に見えないのは厄介だけど、あの位のスピードなら……）

そんなことを考えながら、一夏は少し前の事を思い出していた。

それは、クラス対抗戦の五日ほど前の事だ。

「なあ」

「何だ？」

放課後、二人で練習していた一夏は、素朴な疑問を直人に聞いて

きた。

「白式の装備って、この雪片二型だけなんだよな？」

「そうみたいだな、それは俺も気になってた」

白式の装備と言えば、この刀の形をした、かつて一夏の姉、千冬が世界大会で優勝した時と同じ武装の後継機、「雪片二型」のみだ。

「でもま、師匠はそれで大会を勝ち抜いたんだ。俺も実質刀だけだし、お前にはその一太刀があれば十分だよ」

「世界大会優勝者や、三年間武者修行してた奴と一緒にされても、困るんだけどなあ」

「大体、俺が言えた義理じゃないが、素人のお前に射撃戦闘何ぞできるわけねえだろ。銃を構える、狙いを定める、引き金を引くの三動作の間に、反動制御、弾道予測、距離の取り方、その他諸々の事を考慮に入れてやらなきゃいけないんだ。それをお前、自分ができると思ってるのか？」

「うぅ、すまん」

直人の言葉に散々打ちのめされた一夏は少し落ち込んでしまう。

「セシリアも簡単に銃を撃っちゃいるが、頭の中ではこれらの事を計算して撃ってるんだ。射撃は目で見るのと実際に撃つのとは違うんだ」

「そうなんだなあ」

「それに、師匠なら、きっとこう言うと思うぞ」

まだ落ち込み気味も一夏に対し、直人は手に主武装である三日月宗近を持って言った。

「一つの事を極める方が、お前には向いているってな」

「直人……」

「俺たちはどうやったって、物事を並列で進めるなんて器用な真似はできない。だったらひたすら我武者羅に、一つの事を極め様じゃないか、その方が、よっぽど俺たちらしいだろ？」

「……ああ、そうだな」

「よし、立ち直ったところで、もう一本いくぞ！」

「おお！　来い！！」

（バリアー無効化攻撃、いけるか？）

五日前の会話、そして今までの事を思い出しながら、一夏は反撃の機会を窺っていた。
そして彼には、勝機を掴む方法が、一つだけあった。

《鈴》

《何よ？》

《本気でいくからな！》

そう言った瞬間、一夏の目が変わった。

《な、何よ！　そんなこと、当たり前じゃない！！　とっ、とにかくっ！　格の違いってやつを見せてあげるわよ！！》

そう言った鈴は、再び双天牙月を構えつつ、龍砲を発射する。
一夏はそれをただ避けてるだけだが、今度はただ逃げ回ってるわけではなかった。

（イグニッション・ブースト、千冬姉と直人が教えてくれた、これなら）

イグニッション・ブーストとは、一瞬でトップスピードをだし、相手に接近する奇襲攻撃である。
出しどころさえ間違えなければ、まだ技量が低く、経験の浅い一夏であっても、代表候補生と渡り合うことは可能だ。

（でも、直人も言ってたな……）

「良いか一夏、イグニッション・ブーストに限らず、奇襲や不意打ちと言った類の攻撃は、決して二度目は通用しない。なぜならこういうのは、相手の油断を突いてこそ、意味があるんだ。一度かわされれば、相手はそれを警戒するし、対処法も思いつく、だから二度目は通用しない。決めるなら一発で決めろ！」

（ああ、解ったよ！）

直人の言葉を胸に、一夏はイグニッション・ブーストの使いどころを探る。

（……ここだ！！）

そしてそれを見つけ、飛んでくる攻撃を掻い潜り、一気に鈴に近づく。

「なっ！？」

突然の奇襲に驚きを隠せない鈴。

この時、勝敗は決した、誰もがそう思った。

だが、次の瞬間、アリーナに大爆発が響いたのだった。

第十話　招かれざる者、襲来（後書き）

後書きコーナー　桜爛の間

作者「後書きコーナーの名称、応募がなかったので、「桜爛の間」と決めました」

直人「まずは感想返信、三月語様、相変わらずありがとうございます」

作者「他の方々も、感想を頂ければありがたいです。それではまずいってみよう。『直人の目安箱』！！」

直人「今回も前回、前々回に続き、三月語様からの質問らしいが、どんなのだ？」

作者「奏の一問一答に出た質問をそのっま送ってもらいました。えーっと、まず一つ目、『ルティア（萌殺兵器Ａ）の涙目＋上目遣いとシャル（萌殺兵器Ｂ）の上目遣い、断り辛そうに感じるのは？』だそうだ」

直人「どっちも断りづらいが、やはり涙目で攻められると、尚更だな」

作者「女の涙ほど適わない物はないってね」

直人「まして、ルティアは小動物を連想させるからな、そんな子に涙目で迫られたら、断れないだろ？」

作者「そうだな、それじゃ二つ目、『直人的に次の中で一番社会的に抹殺されそうなのは？

1　見ず知らずの女子に突然キスされた
2　朝起きたら裸の女子がベッドにもぐりこんでいた
3　事故とはいえ、女子を押し倒してしまった』だそうだ」

直人「これは、上記二つは奏が実際に受けたものだな」

作者「そうだな、んで、どうなんだ？」

直人「個人的に言えば3だな、1も2も、まだ説明すれば不可抗力だと解ってもらえる。だが3は事故だろうが故意だろうが、恐らく払拭は不可能だろう。ま、結論言ってしまえば、どれもその場の状況次第だな」

作者「ご尤も、それでは企画その二『抱腹絶倒？　アフレコ委員会！！』、今回は、君と、さらに二名来てもらいました」

直人「今度は誰だ？」

作者「それでは、ご登場いただきましょう！」

真白「どうも」

一夏「いきなり呼ばれたんだけど、何なんだ？」

直人「また真白、んで今回は一夏か」

作者「今回は台詞が長いのもあるし、結構あるけど、頑張ってね、まずは直人から、ほいこれ」

直人「どれどれ……おいおい、これは長いし、あんまり俺のがらじゃない気が」

作者「せっかく送ってもらったリクエストなんだから、文句言わない。あっ、真白はこれ、一夏はこれな」

真白「ん」

一夏「おう」

作者「さて、準備は良いか？」

直人「何時でも良いぞ？」

作者「それじゃ、一気にいってもらいましょう！　どうぞ！！」

その一

直人「今ここにある世界を信じてみろ！！」

その二

直人「今はそれでいいかもしれない！だが、マリーメイアは歴史を繰り返すだけだ！哀しく惨めな戦争の歴史をな！ここで流れを食い止めなければ、また俺達と同じような兵士が必要となってくる！！・・・そうなれば、悲劇という名の歴史がいつまでも続く・・・！五飛（ウー フェイ）、教えてくれ・・・！俺達は後何人殺せばいい・・・？・・・俺は後何回・・・あの子とあの子犬を殺せばいいんだ・・・！・・・・・・ゼロは俺に何も言ってはくれない・・・。・・・教えてくれ、五飛！！」

その三

直人「俺は・・・俺は・・・もう、誰も殺さない・・・。・・・殺さなくて済む・・・」

作者「台詞はどれも、ＯＶＡ　新機動戦記ガンダムＷ　ＥＮＤＬＥＳＳ　ＷＡＬＴＺより　ヒイロ・ユイの台詞です。

直人「言っておいてなんだが、やっぱり柄じゃねえ」

作者「お前はどっちかって言うと、ＢＡＳＡＲＡ小十郎みたいなキャラのつもりだからな。でも似合ってたぞ？」

直人「あんまり嬉しくない」

作者「次は刹那とか来たりしてな」

直人「それも柄じゃねえな」

作者「まあまあ、次は真白だ、準備は良いか？」

真白「うん」

作者「よし、あっ、次はキャラが違うので、間にコメントを挟みたいと思います。それではどうぞ！！」

その一

真白「・・・マスター・・・」

作者「そらのおとしものより、イカロスの台詞、と言うより呼び名でした」

直人「まったくもって違和感ないな」

作者「まあ、無感情であまり喋らない子ってのが真白の初期のキャラだからな、最近は結構喋ることが多いけど」

直人「お前のせいだろ」

作者「まあね、それじゃ、真白の台詞その二、どうぞ！！」

その二

真白「少し・・・頭冷やそうか・・・」

作者「こっ、これは、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳより　高町なのはの台詞です」

直人「彼女が「魔王」と呼ばれる所以になった、第八話の台詞だな」

作者「いや、一瞬だが、この台詞を言ったとき、真白のキャラが変わった気がしたんだが、気のせいか？」

直人「いや、多分それは気のせいじゃないかｔ……」

作者「解ってる、解ってるから皆まで言わないで！！　き、気を取り直して！　最後は一夏！　準備は良いか！？」

一夏「お、おぉ……」

作者「それでは、どうぞ！！」

一夏「撤退するくらいなら、最初から逃げてるぜ・・・！」

作者「直人と同様、ＯＶＡ　新機動戦記ガンダムＷ　ＥＮＤＬＥＳＳ　ＷＡＬＴＺより　デュオ・マックスウェルの台詞です」

直人「これも違和感がないな、だが一夏なら地で言いそうだぞ」

作者「それは俺も思ったり、思わなかったり、えー、まだリクエス

トはありますが、キャラが本編未登場のため、登場までストックさせていただきます」

直人「皆様も、質問したいことやアフレコしてみたいというのがあったら、どしどしご応募してください。

作者「さて、次回予告をちょっと」

直人「今さら始めるのか？」

作者「いやー、前話でそれっぽいことしちゃったからさ」

直人「まあ、良いが」

真白「クラス対抗戦の中、突如現れた所属不明の二体のＩＳ」

一夏「生徒たちが非難する時間を稼ぐため、二体のＩＳに挑む俺と鈴」

直人「そしてそこに、再び桜が舞い降りる」

作者「次回、『切り裂く白、吠える龍、舞い散る桜』を、お楽しみに！！

第十一話　切り裂く白、吠える龍、舞い散る桜

「！！」

「何？」

一組と二組、一夏と鈴のクラス対抗戦の最中、突如としてアクシデントが起こる。

突然、アリーナの遮断シールドが破られ、何者かが侵入して来たのだ。

《試合中止！！　織斑！　凰！　直ちに退避しろ！！》

非常事態であることをすぐに察した千冬が、二人に退避を命じる。

「な、何だ？　何が起こってるんだ！？」

《一夏！　試合は中止よ！　直ぐにピットに戻って！！》

未だに事態が掴めない一夏に、鈴が直ぐに退避するように言う。

だがその刹那、白式のハイパーセンサーに警告が表示される。

―警告―　ステージ中央に熱源複数　所属不明のＩＳと断定　ロックされています

「所属不明のＩＳ？　ロックされてる？　俺があいつらにロックされてるのか！！」

ハイパーセンサーからの情報に、漸く事態を確認する一夏。
理由は解らないが、侵入して来た所属不明のＩＳは、一夏が目的のようだ。

《一夏！　早くピットに！！》

「お前はどうするんだよ！」

《あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！》

「逃げるって、女を置いてそんなことできるかよ！！」

《馬鹿！　あんたの方が弱いんだからしょうがないでしょ！！》

「！！」

鈴の言ってることは尤もだ。
この非常事態、技量、経験共に鈴に劣る一夏は、この場合残っても、鈴の足を引っ張ることになりかねない。

《別にアタシも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、学園の先生たちがやってきて事態を収拾……》

鈴が言葉を紡いでるその時、突如として噴煙の中から二色のビームが鈴に襲い掛かる。

「危ねえ！！」

間一髪、一夏が助けに入り、先ほどまで鈴がいたところにビームが飛んでくる。

「ビーム兵器かよ。しかも、セシリアのＩＳより出力が上だ」

「……ちょっ、ちょっと馬鹿！　放しなさいよ！！」

一夏に助けられたものの、お姫様抱っこされてることに顔を赤らめ、一夏に自分を解放するように催促してくる。

「お、おい、暴れるな！」

「うるさい、うるさい、うるさーい！！」

「馬鹿、殴るな！　来るぞ！！」

ハイパーセンサーの感知で、二射目をかわす。

そしてしばらくすると、噴煙の中から、二体のＩＳが現れる。

一体は黒く、全身が装甲に覆われていた、ＩＳと呼ぶには異様で威圧感のある姿だった。

だが……

「ねえ、あれってなんだと思う？」

「俺に聞くなよ……」

何故か呆れ気味の一夏と鈴。

それもそのはず、二人は黒いＩＳの隣の、もう一体のＩＳを見て、呆れかえっていた。

もう一体のＩＳは全身黄色という何とも派手派手しいカラーリングをしていた。

全身が装甲で覆われている点は同じだが、右手に身の丈以上ある巨大な剣、左手には円筒状のビーム砲が装備されており、それぞれ三本のケーブルのようなもので肩の部分に接続されている。

そして、肩の装甲には、右肩に「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ」、左肩に「ＨＩＴ　ＭＥ」と書かれていた。

これを見て、アリーナにいる二人だけでなく、管制室にいた面子も、同じことを思っていた。

（（（（（（……悪趣味　（だ）　（ですわ）　（だね））））））

一夏、箒、セシリア、鈴、そして紅葉の五人が、ほぼ共通の認識を異口同音で思うのだった。

ちなみに、山田先生と千冬もこの二機を見ているわけだが、山田先生は二人に連絡を取ろうとしていることに神経がいっており、千冬は黒いＩＳを睨みつけており、黄色い方はｏｕｔ　ｏｆ　眼中だった。

《織斑君！　凰さん！　直ぐにアリーナから脱出してください！　直ぐに先生たちが、ＩＳで制圧に向かいます！！》

管制室から、一夏と鈴に退避するように指示する山田先生。

「いや、皆が逃げ切るまで、食い止めないと！」

しかし、一夏は退く気はなかった。
まだアリーナの観客席には、シャッターが閉まったとはいえ、逃げ遅れた生徒たちがいる。
アリーナのシールドを突き破るほどのビーム砲を装備している以上、もしそれが観客席に放たれたりすれば、逃げ遅れた生徒たちに被害が出る。
それがわかってるからこそ、避難までの時間を稼ごうというのだ。

《それはそうですけど、でも、いけません！　織斑君！！》

今尚説得を続けるが、すでに一夏の胸中は決まっていた。

「鈴、いけるな？」

「だ、誰に言ってんのよ！　それより放しなさいよさいよ！　動けないじゃない！！」

「ああ、悪い」

じたばた暴れる鈴を解放した刹那、再び攻撃が二人を襲う。
それを回避した刹那、黒いＩＳが一夏を、黄色いＩＳが鈴にめがけて襲ってきた。

「ふん！　向こうはやる気満々みたいね！！」

「みたいだな！！」

「一夏、アタシが黄色い方を引きつけながら援護するから、あんたは黒い方をなんとかしなさいよ。武器、それしかないんでしょ！」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか！」

二人で作戦を確認し合った後、そのまま近づいてきた敵に、攻撃を仕掛けるのだった。

「もしもし織斑君！　織斑君、聞いてますか！！　凰さんも！　聞いてますか！！」

一方、管制室では、山田先生が尚も一夏達に通信を送っているが、二人は戦闘中で全く通信にこたえる気配がない。

「当人たちがやると言っているのだから、やらせてみても良いだろ」

するとここで、今まで黙していた千冬がそう呟く。

「お、織斑先生、何を呑気な事を言っているんですか！」

「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからいらいらする」

そう言って、千冬はコーヒーに「ある物」を入れてしまう。

「……あの、先生」

「何だ、秋宮」

「足りなくなるといらいらするのはカルシウムですよ？　それに先生がさっき入れたの、砂糖じゃなくて塩ですよ？」

「……」

二重の意味で間違いを指摘され、その場を嫌な空気が漂う。

「一夏……」

そんな空気は露知らず、箒とセシリアはただアリーナの状況を見つめていた。

「先生！　私にＩＳの使用許可を！　直ぐに出撃できますわ！！」

とここで、見てるだけの自分に耐えられなくなったのか、セシリアがＩＳの使用許可を求めてくる。

「そうしたいところだが、見てみろ」

そう言って千冬が指摘した場所を見ると、そこには、とんでもないことが表示されていた。

「遮断シールドが、レベル４に」

「あの二機の仕業、ですか？」

「そうだ、これでは避難することも、救援に向かうこともできない」

その言葉が意味するところは一つだった。

今の一夏と鈴は、まさに孤立無援という事だ。

「……ところで風花」

「はい」

とここで、千冬は真白を呼び出す。

「何故お前は、ピットの開閉ボタンを押しているのだ？」

「えっ？　……ああ！？」

千冬の言葉に、山田先生も気づいた。

見てみると、真白はいつの間にか、ピットの開閉ボタンを押していたのだ。

「ま、真白さん！！　勝手にいじったらだめですよ！！　それに、何時から押してたんですか！！」

「シールドが破られたとこから。みんなが騒いでるうちに押しました」

淡々と質問されたことに答える真白。

「何故、そんなことをしたのだ？」

ここで、箒がその行動の意味を聞いてくる。

「今打てる最善の手を打った。それだけ」

答えになってない答であったが、千冬は、その言葉の意味を理解した。

「あいつか……」

「はい、きっとやれます」

どこか確信めいたその言葉を聞くと、アリーナの状況を見ながら、千冬は一言つぶやいた。

「これでしくじったら、また一から叩き直してやるからな。馬鹿弟子」

一方、アリーナの状況は悪くなる一方だった。

何度も一撃必殺の間合いに入って攻撃を仕掛けるが、黒いＩＳは器用に攻撃をかわす。

「一夏馬鹿！　ちゃんと狙いなさいよ！　これで四回目じゃない！！」

「狙ってるっつーの！！」

と、二人で口喧嘩してる間に、黒いＩＳからの攻撃が襲い掛かる。

「一夏、離脱！」

「ああ……！！」

鈴に促されて距離を取った一夏は、ここであることに気付く。

「鈴！　後ろだ！！」

「えっ！？」

そこには、悪趣味な黄色いＩＳが大剣を振り下ろそうとしていた。

（やばっ！）

直ぐに対処し様にも、この距離では双天牙月は間に合わない、一夏も距離的に無理だ。

そしてそのまま、大剣は鈴に向かって振り下ろされる。

（やられる！！）

そう思い、思わず目を瞑る。

だが、何時まで経っても衝撃は来なかった。

「……えっ？」

不審に思い、鈴が目を開けてみると、そこにいたのは……

「油断大敵だな」

そこにいたのは、灰色のＩＳ「灰桜」を纏い、両手に持った二本の刀で、敵が振り下ろした大剣を防ぐ直人だった。

「な、直人」

「お前！　何時の間に！！」

「積もる話は後だ、それより、いい加減に離れろ！！」

そう言うと、直人はＩＳの大剣を弾き返す。

「喰らえ！！」

そしてそのまま、手に持ってる宗近にエネルギーを纏わせ、その

まま横に薙ぎ払う。
　すると、エネルギーの刃がそのまま、黄色いＩＳに向かって飛んでいった。
　だが、当然その攻撃は回避される。
「ちっ、まあ、あんな器用な動きができるんだ。これくらい、避けられないわけないか」
　そう言って左手に持ってた刀を放すと、刀はそのまま右肩の装甲に装備された。
「鈴、大丈夫か？」
「えっ？　う、うん」
「そうか、そりゃ良かった」
　目立った外傷もなく、攻撃を喰らった様子もないのを目視で確認し、鈴からも無事だと聞いたため、ほっと安堵する。
「にしても直人、何時の間に入ってきたんだ？」
「ああ、あの二機が侵入して来た辺りからか、突然ピットの扉が開いたんで、遮断シールドが張られる前に全速力で突っ込んで入ってきた」
　一夏からの問いに、直人は事のあらましを簡潔に答える。
「にしても、あいつ……」

そう言って直人が睨んだのは、あの黄色いＩＳだった。

「直人、あいつの事知ってるの？」

「いや、初めて見るが、あんなものを作る奴は、古今東西あいつしかいないな」

鈴の問いかけに答える直人の表情には、呆れと怒りがこもっていた。

「ったく、こんな騒動起こしやがって。今度会ったら八つ裂きにした後簀巻きにしてふん縛って師匠の前に突き出してやる」

「な、直人、一体どうしたんだよ」

「あんた、最近いう事が物騒よ」

思わぬ直人の言葉に、一夏も鈴もドン引きだ。

「ま、それは置いといて、一夏、零落白夜は後何回使えそうだ？」

「今のエネルギー残量だと、あと一回が限界だ」

「そうか、幾らなんでもそれはきついな」

「どうすんの？　直人が加勢してくれたのは嬉しいけど、このままじゃジリ貧よ」

空気を一新させた後、三人は状況を確認するが、先ほどまで戦っ

ていた。一夏と鈴のシールドエネルギーはほぼ残っていなかった。

「二人とも、無理なら下がっても良いんだぞ。あんな二機、俺一人でも十分切り捨てられる」

「冗談！　誰が逃げるってのよ！！　あたしはこれでも代表候補生よ！！」

「俺が途中で投げ出すような奴じゃないってのは、お前がよく知ってるだろ！」

直人の言葉に、甘えるどころか俄然やる気を出す二人。

「はぁ、やれやれ、そう来ると思った」

だが、二人の返答に呆れながらも、直人は再び刀を構えなおす。

「なら、一夏は鈴の背中位は守れよ。お前は俺が守ってやるからよ」

「おお！」

「まったく、あんたたちは……ひぃ！？」

そんな会話をしていると、再びＩＳ二機からの攻撃が来る。

「来るぞ！！」

「ああ！！」

「解ってる！！」

直人の言葉を合図に、三人は再び、ＩＳに立ち向かっていくのだった。

第十一話　切り裂く白、吠える龍、舞い散る桜（後書き）

桜爛の間

作者「今回もまた目安箱だけです」

直人「またか、やり方を変えた方が良いかもしれないな」

作者「大丈夫、もう決まったから」

直人「ほう、それで、今日の質問は何だ？」

作者「はい、我が小説の常連になりつつある、三月語様からです。『今日からＰＳＮ復旧！けどＰＳＰは改造状態だから接続できない！次の選択肢があったらどうする？

1．諦めて現状維持に徹する
2．無理にロックを解除する
3．改造を解除して大人しく公式に戻す』だそうです」

直人「これについては作者に任せる」

作者「任された。えーっとですね、実際やったことはありませんが、私でしたら3を選ぶと思います」

直人「作者はＰＳＰを完全なゲーム機として使ってるからな、しかもここ最近は手つかずだし」

作者「そうなんだよねー。ところで改造ってなんですか？　まさか

本体をバラシテ、とかじゃないですよね」

直人「ンなわけないだろ」

作者「ま、冗談はさておき、次回で対抗戦、と言うより、謎のＩＳとの戦闘は終了、そして、直人と鈴の会話が入ります」

直人「うぅ、そう言えば、俺呼び出しくらったんだっけ」

作者「ま、次回をお楽しみに、ご感想、ご指摘、後後書きコーナーへの応募、お待ちしております」

第十二話　決着　そして氷解（前書き）

この話で、アニメ四話目、つまり原作第一巻の話が終わります。

謎のＩＳとの激闘の行方は？　そして、鈴と直人の溝は？

それでは、お楽しみください。

第十二話　決着　そして氷解

直人の参戦により、一夏達と謎のＩＳの戦いは拮抗していた。

黒いＩＳを一夏と鈴が、黄色いＩＳを直人が請け負い、それぞれ戦いを再開したのだ。

だが、拮抗はしていたが、実質千日手になりつつあった。

一夏と鈴は、これまでの戦いでシールドエネルギーを消耗しており、両者ともこれ以上の消費を避けるため、碌な反撃ができないでいた。

一方の直人はシールドエネルギーの消費は然程でもないが、近づく好機を掴めず、せめてもの攻撃と、エネルギーの刃と四本の刀で攻撃するが、黒いＩＳと同様、人とは思えない動きでひらりとかわされてしまう。

《ちょっと直人！　あんたちゃんと狙ってるの！！》

《狙ってるっての！　でもあいつの動きがちょこまかしてて当てられないし、そもそも俺は距離を取っての戦いは専門外だ！！》

いつまでも攻撃を当てられない直人にいらいらした鈴が怒鳴るが、直人もそれに怒鳴り返す。

実際、直人の本分は接近戦であり、距離を取っての戦いは四本の刀で補っているが、あまり距離を取っての戦いは得意とは言えない。

《と言うか、俺の事より自分の方に集中しろ！　よそ見してると黒こげになるぞ！！》

《うっさいわね！　解ってるわよ！！》

（はぁ、何やってんだよ……？）

こんな感じで言い争いをする二人に、一夏は心の中で突っ込みを入れるが、ここにきて、奇妙な違和感に気付く。

《……なあ、鈴、直人》

《何よ？》

《何だ？》

そして、二人に疑問を投げかける。

《あいつらの動きって、何か機械染みてないか？》

《何言ってるのよ？　ＩＳは機械じゃない》

一夏の疑問に、鈴が至極正論で答える。

《そう言うんじゃなくて。あれって……本当に人が乗ってるのか？》

《はあ！？　人が乗らなきゃＩＳは動かな……》

《一夏》

一夏の疑問に鈴が再び正論を言おうとした時、直人が言葉を遮った。

《俺も、同じことを考えてた》

《直人。あんたも何言ってるのよ！》

直人の言葉に鈴もさっきと同様に聞き返す。

《いや、ちゃんと根拠はある》

《何よ？》

《まず、あいつらの動きを見てて、おかしいと思わないか？》

《動き？　……あっ！》

ここで、鈴も直人の言葉を聞き、その違和感に気付く。

《そう言えば、さっきからあたしたちが話してる時は、あんまり攻撃してこないわね》

《仮にもこのＩＳ学園に襲撃してくるような輩だ。俺たちが狙いだというのは解ったが、態々作戦を考える時間、ましてやこんな雑談をする暇を与えると思うか？》

《それは……ないわね。長引けばシールドが解除されて、自分たちが不利になるだけだし》

いくらシールドレベルが４に設定され、誰も入れないとはいえ、時間がたてば、クラッキングで解除されることは向こうも知っているはず。

もし、これが熟練されたプロならば、こちらに余計な作戦を考える時間も与えず、真っ先に一夏と直人を狙うだろう。

だが、向こうはそんな気もなく、三人が話してる時はあまり攻撃をしてこない。

まるで、こちらの話に興味があるかのように。

《それに、これは俺の主観なんだが……》

そして直人は、自分の主観からの根拠を口にする。

《あの二機、生きてるものの気配がしないんだ》

《……直人》

《あんた、暫く会わない間に電波を……》

《おいこら。人をラジオか何かみたいに言うな》

鈴の言葉を心外とばかりに遮り、直人は補足を始める。

《世界中を旅してると、必然的に野宿とかが多くなるんだ。そして野宿してると、野生動物に襲われる危険がある。そういう気配を察知できないようにならないと。俺と真白は、今頃ライオンかハイエナの餌になってるって》

《そうなのか？》

《まあ、そう言われれば、そうかもね》

《それで、さっきから戦いながら、相手の気配を探ってたんだが、どうも生きてる人間の気配がしないんだ》

確かに直人主観で信憑性は薄いが、前の説明の事もあり、あながち馬鹿にはできない。

《……でも無人機なんてありえない。ＩＳは人が乗らなきゃ絶対に動かない。そう言うものだもの》

だが、やはり鈴はいまいち納得できていないようだ。

だが、実際彼女の言うように、無人のＩＳなど、今まで聞いたことがない。

《鈴。確かに常識的に考えればそうだろう。でもな、常識＝全てじゃないぜ》

《どういう意味よ？》

《常識だからって、非常識を否定する要素にはならないってことだ。まだ世間に広まってないだけって可能性もあるだろ？》

だが、直人は常識にとらわれる事に警鐘を鳴らす。

確かに、常識だからと言って、非常識を否定する事はできない。

現に、女性しか動かせないとされたＩＳの常識を覆したのが、今目の前にいる二人なのだから。

《……仮に無人機だとして、それなら勝てるって言うの？》

《そうだな、無人機なら、どれだけ壊そうが犠牲は出ない。つまり……》

《全力でやれる！！》

直人の言葉に相槌を打つように、一夏が答える。

《全力でって。今まで本気じゃないような言い方ね》

《ようなじゃなくて、そうなんだよ》

鈴の言葉に、直人が言葉を訂正する。

《一夏の武器、雪片弐型の単一仕様能力（ワン・オフ・アビリティー）“零落白夜”は、その特性上、威力が高すぎて訓練や学内対戦で全力は出せない。そして俺の灰桜のスピードは、全開でいけば一瞬で勝負が決まる。でもそれだと意味がないから、いつも相手に合わせてるんだ》

鈴が疑問符を浮かべていると、直人が理由を簡潔に説明する。

《でも、相手が無人機なら加減する必要は無い。一夏も俺も、全力で仕掛けられる。そうだろ、一夏？》

《ああ》

直人の問いかけに、一夏も確信を持って答える。

《零落白夜だか何だか知らないけど、その攻撃自体が当たらないじゃない》

《俺は大丈夫だ。灰桜の最大スピードなら、奴が反応するより早く攻撃できる。問題は一夏の方だが……》

《次は当てる……それでいいだろ？》

《《言い切ったな（わね）》》

一夏の出した答えに、二人は確認するように言う。

《じゃあそんなことありえないけど。あの二機が無人機だと仮定して攻めましょうか！》

《よし、さっきと同じように、一夏と鈴は黒い方を、俺は黄色い方を叩く！》

《ああ！！》

《オッケー！！》

こうして作戦が決まり、一気に三人が攻めかかろうとした。

その時……

《一夏！！》

突然、大声で一夏を呼ぶアナウンスが聞こえた。

三人が振り向くと、管制室に居た筈の箒がアナウンス席にいて、肩で息をしながら一夏に怒鳴っていたのだ。

《男なら、男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとする！！》

「あの馬鹿！！」

これに真っ先に直人が不味いと悟り怒鳴るが、すでに黒いＩＳが、アナウンス席に攻撃を仕掛けようとしていた。

「鈴！　やれえっ！！」

「解った！」

一夏の言葉に、鈴は衝撃砲の発射体制を取る。
すると、その射線上に一夏が割り込んできた。

「ちょっ、ちょっと馬鹿！　何やってんのよ、退きなさいよ！！」

「いいから撃て！！」

「ああもう！！　どうなっても知らないわよっ！！」

そして最大出力で放たれた衝撃砲は、当然射線軸上にいた一夏の背中に命中する。

「あいつ、無茶な事考えるな……」

そのトンでも行動に、直人もただただ呆れるしかなかった。
そして一夏は、そのまま一気に黒いＩＳに突っ込み、零落白夜を発動した雪片で、一気に斬りつけた。　それにより、黒いＩＳの片腕を切り落とすが、そのままもう片方の腕で殴り飛ばされてしまう。
そして黒いＩＳは、片腕の照準を一夏に合わせ、至近距離からビームを放とうとする。

しかし、一夏の表情に諦めの色はなかった。

「狙いは？」

《完璧ですわ》

その通信と共に、黒いＩＳに、複数のビームが襲い掛かった。

それは、セシリアのブルー・ティアーズだった。

「セシリア、決めろ！！」

「了解ですわ！！」

一夏の合図とともに、セシリアのスターライトｍｋＩＩＩの閃光が放たれ、黒いＩＳを貫いた。

「よっしゃ！！」

《まだよ！！》

黒いＩＳが倒れたのを見て、一夏は喜ぶが、鈴がすぐさま警告する。

そしてその警告を表すように、黄色いＩＳが、再び大剣を振り下ろそうとする。

《一夏！　逃げなさいよ！！》

鈴が直ぐに逃げるように言うが、一夏は逃げようとしない。

「必要ねえよ。だって俺には、最高の剣が付いているんだからな。そうだろ？　直人」

その言葉と共に、振り下ろそうとしていたＩＳの大剣は、腕ごと地面に落ちた。
そしてその後ろには、直人が立っていた。

「さて、マグロの解体ショーならぬ、ＩＳの解体ショーとしゃれ込むか！！」

そう言って、直人は右手に三日月宗近、左手に童子切を持って、ＩＳに斬りかかった。

回転を加えながらの剣撃で、ＩＳの右足を斬り落とす。
すると、ＩＳは左手のビーム砲を直人に向けるが……

「遅い！！」

いつの間にか後ろに回っていた直人はそのままビーム砲と肩の装甲を繋ぐケーブルのようなものを斬る。

「これで、お前はそいつを撃てないだろ！　これで終わりだ！！」

そしてとどめとばかりに、ＩＳの胴体を斬る。
そして、上半身と下半身が泣き別れたＩＳは、そのまま倒れこむのだった。

《間に合ってよかったですけど、ギリギリのタイミングでしたわよ？》

「何、セシリアならやれるって思ってたさ」

少し呆れ気味に通信してくるセシリアに、直人は微笑みながらそ

う言った。

《そ、そうですの……と、当然ですわ／／／》

「ははっ」

《直人》

そんな風に談笑していると、今度は一夏から通信が入る。

《やったな》

「ああ、これで一件落ちゃ……」

と、ほっと一息ついたその時……

―警告―　ＩＳの再起動を確認　ロックされています

「何！？」

ハイパーセンサーからの情報に、振り向くと、黄色いＩＳの左腕のビーム砲に、エネルギーが収束されていた。

「んなくそおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

考えを張り巡らすより先に身体が動いた。
直人はそのまま全速力でＩＳに突っ込んだ。
そして、目の前が閃光に包まれるのを見ながら、そのまま意識は暗転した。

「ん……こ、ここは？」

暫くして、直人は目を覚ました。
いまだに意識が寝ぼけているわしく、状況把握に努められずにいた。

「目を覚ましたか、馬鹿弟子」

「……師匠？」

突然声がしたので振り向いてみると、そこにいたのは、自分の師、織斑千冬だった。

「ここは？」

「保健室だ。お前はあの時、再起動したＩＳの攻撃を正面から喰らって吹っ飛ばされ、そのまま気絶したのだ」

「そうでしたか……っ！？」

上半身を起こすと、体に激痛が走る。

「無理するな。吹っ飛ばされてアリーナの壁に凄い衝撃で叩きつけられたんだ。暫くは地獄になるだろう」

「は、はぁ……そうだ、皆は！　あの後、どうなったんですか！！　あたっ！」

激痛により意識が覚醒したのか、直人は千冬に質問攻めをする。

すると、千冬に出席簿で頭を軽くたたかれた。

「落ち着け。お前と一夏以外は無事だ」

「えっ？　俺はともかく一夏も？」

「あの二機のＩＳだが、ほぼ同時に動き出したのだ。一夏も、お前と同じように奴の攻撃に突っ込んでいった」

「それで、一夏は？」

「お前と同じだ、軽い打撲で数日は地獄になる。それと、あの二機のＩＳは、あの後動かなくなった」

「そうですか……」

ＩＳの事はともかく、一夏に酷い怪我がないと解り、心の底から安堵の表情をする。

「人の心配より自分の心配をしたらどうだ？　とはいえ、無事で何よりだ。弟二人に死なれては、寝覚めが悪いからな」

「はっ？　弟二人？」

千冬の言葉に直人は疑問を呈す。

一夏は当然として、何故自分も弟勘定に入っているのかわからなかった。

「何だ？　お前は一夏の義弟なのだろ？　ならば私にとっても義理の弟という事になるのではないか？　それとも何か？　私が姉では不満か？」

悪戯っぽく答える千冬に直人は少し焦る。

「い、いえ！　不服ではないですが。俺にとっては、姉と言うより、師匠と言う認識の方が強いので」

「ふっ、相変わらず生真面目な奴だ。では、私はそろそろ席を外す」

「あっ、はい」

そう言って立ち上がると、振り返ることもせず、千冬はその場を後にするのだった。

「ふぅ、俺も焼きが回ったかな？」

先ほどの戦闘の様子を振り返りながら、直人はそう呟いた。

「前の俺だったら、もっと万全を期する筈だったのに、あの程度で気を抜くとは……」

ふぅとまたため息をつく。

そして、ぼーっと天井を見つめていると……

「直人」

突然、また声がしたので振り向くと、そこには鈴が立っていた。

「体の方は大丈夫？」

「ああ、鍛え方が違うからな」

鈴に心配される中、直人は無用とばかりに答える。

「そう言えば、対抗戦は中止か？」

「当然よ。あんなことがあったんだから」

「そりゃそうだな」

「まったく、一夏といいあんたといい、どうしてあたしの周りの男どもって、こうも馬鹿ばっかりなのかしらね？」

「一夏が馬鹿と言うのは否定しないが、一緒にされると複雑だな」

どことなく談笑しているようにも見えるが、やはり直人の表情はどこか浮かなかった。

「そう言えば、対抗戦前の話、覚えてる？」

「！！　あ、ああ……」

対抗戦前の話。

対抗戦が終わったら、話があると言っていたことだ。

「回りくどいの嫌いだから、単刀直入に言わせてもらうわよ」

「な、何だ……」

「あんたさ、あの時の事、まだ引きずってるでしょ？」

その言葉で、直人は完全に確信を得た。

「お前も、覚えてたんだな」

「まあね。にしても、あんたって相変わらずよね。律儀と言うか、真面目すぎるというか」

「……お前は何とも思わないのか？」

憶えてるようだが、まるでもう気にしてないという風に言ってくる鈴に、直人はそう聞いてくる。

「昔の事をいつまでも引きずる趣味は無いわよ。それに、もうどう

でもいいしね」

「でも、俺はお前を……」

それでも直人にとって、「鈴を泣かせた」と言う事実が、やはり重くのしかかっていた。

「あのね、小学生の時の話よ？　ちょっとしたことで喧嘩につながったり、まして喜怒哀楽が激しかったりするのは当たり前じゃない？」

「でも……」

「ああもう！！」

踏ん切りがつかない直人に、痺れを切らした鈴が詰め寄ってくる。

「とにかく！　あたしはもう気にしてないから、この話はもう終わり！！」

「いや、そんなこと言われても……」

「何時までも昔の事引き摺られて、避けられてたんじゃこっちも良い気しないわよ！！　だからもう終わり！　あんたもこれ以上引き摺らない事！！　全く！　本当に手間が掛かるんだから！！」

やや強引だったが、彼女の言うことも最もだった。

「……鈴」

「何よ？」

しばらく沈黙してた直人は、やがて口を開く。

「その……今さらだけど、すまなかったな」

本当に今さら、だけど謝らずにはいられない。

そう思った直人は、鈴に謝罪の言葉を言った。

「ふぅ、本当に今さらね。別に要らないのに」

「そういう訳にはいかない性分なんでな」

軽口気味にそう言うが、その表情に、愁いや負い目のようなものは一切感じられなかった。

「また、これからよろしくな」

「ええ」

そう言って手を伸ばし、お互いに握手して、二人の溝は埋まったのだった。

「あっ、そう言えば」

「何？」

「お前が一夏とした約束ってなんだ？　差支えなかったら、教えてくれないか？」

「えっ！？　そ、それは……」

直人の問いかけに、鈴は顔を赤くして口籠る。

「いや、無理なら別にいいんだけど」

「……ちょっと耳貸して」

そう言ってきたので、耳を貸すと、鈴は小声で約束を教えてくれた。

その約束と言うのは「料理が美味くなったら、毎日自分の酢豚を食べてくれる」と言うものだった。

「ははーん。大方一夏の奴、それを毎日ただ飯食わせてやるって勘違いしたんだな」

「そうなのよ。全くあいつは！！」

「あのな、気が付かない一夏も一夏だが、お前もお前だと思うぞ？あの鈍感な一夏にそんなこと言ったら、そう解釈されても仕方ないだろ」

「うっ」

一夏と長い付き合いだっただけに、直人は一夏の相変わらずの鈍感さにあきれる反面、回りくどい言い方をした鈴にも問題があると言う。

「直人。あんたどうにかしてあいつの唐変朴、直せない？」

「善処はするが、難しいと思うぞ？」

「だよねえ、はぁ」

直人の望み薄な返答に、鈴は思わずため息を漏らす。

「はぁ、でもよく考えてみたら。こいつも唐変朴なんだっけ？　自覚ないみたいだけど……はぁ」

「ん？　なんか言ったか？」

「何でもない」

小声で呟きながら、鈴は呆れかえっていた。

唐変朴に唐変朴を直すのを頼むこと自体、間違いなのかもしれない。

そう思わずにはいられなかった鈴だった。

一方、ここはＩＳ学園の地下施設。

ここに、乱入して来た二体のＩＳの残骸が運び込まれ、山田先生

と千冬によって調べられていた。

「やはり、無人機でした。両機とも、未登録のコアを使っていました」

「そうか」

ある程度予測していたのか、千冬は然程驚く様子はなかった。

「それにしてもこちらのＩＳ。趣向はともかく、凄い技術が使われてるみたいです」

そう言って山田先生は、黄色いＩＳの武装データを見せる。

「このＩＳの武装には、二種類のエネルギー系統があるみたいなんです。普段は肩の装甲と繋がったケーブルから、肩のエネルギーコンデンサーに蓄積されたエネルギーを使って攻撃するのですが。万が一それができなくなった場合、本体のシールドエネルギーを消費して使用できるようになってるみたいです」

「そうか、だから桜庭がケーブルを切っても、武装が使えたのか」

「はい。これは一体……」

「……」

解析されるＩＳを、二人はただ見つめるだけだった。

第十二話　決着　そして氷解（後書き）

桜爛の間

作者「これでアニメ第四話。原作第一巻分が終わったー！！」

直人「しかし、今回は長いな」

作者「すまん。３０００字から５０００字で済ませるつもりだったのに、今回はどうしても長くなってしまった」

直人「まあ、別にいいが。それで、この話で、俺と鈴は仲直りできたのか？」

作者「何故疑問形？　まあ、ここは初めから書こうと思ってたところだし、取り敢えず握手までしたんだから、仲直りしたってことで良いんじゃないか？」

直人「まあ、そういうことにしておこう。さて、まずは質問コーナー『直人の目安箱』からだ！！」

作者「我が小説の常連、三月語様からだ、えーっと『もしポケモンが女の子になったとして、次の中で嫁にするなら？

1．無口な（無口なのは恥ずかしがり屋だからと信じたい）サーナイト（脳内ＣＶ：早見沙織）

2．何でもそつなくこなすクーデレなエーフィ（脳内ＣＶ：茅原実里）

3．必殺技が『りゅうせいぐん』という名のホーリージャッジメン

トなドジっ子なデンリュウ（脳内ＣＶ：水樹奈々）』との事だが？」

直人「そうだな、やはり2だな。何でもそつなくこなすのは悪い事じゃないし、こちらとしても助かる」

作者「とのことです。もう一つの質問は『今現在、ＩＳ熾天使で最も『バカ』だと思うキャラは？』だそうだ」

直人「学力的な意味で言わせてもらえば、やっぱり真琴だな。初めはロロットと思ってたんだが、理系ができるとのことなので、真琴に決まった」

作者「だ、そうです。次は『抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！』」

直人「今回は誰がやるんだ？」

作者「三月語様からの応募ですが、誰でも良いとのことなので、ここは小節の顔である直人にやってもらおう。はいこれ」

直人「ああ。……ちょっと待て、これ本当に言うのか？」

作者「はいはい、文句は後で聞くからやってやって」

直人「……解った」

直人「・・・貴様の水着になど、微塵も興味は・・・っ！・・・・これは日射病のせい・・・」

作者「えーっと。【バカとテストと召喚獣】より、土屋康太（ムッツリーニ）の台詞だそうですが」

直人「なんで俺なんだ？」

作者「できれば男にやらせてほしいという要望があったのですが、とても一夏はこんなこと言いそうにいなかったので、消去法で君に決まったわけですよ」

直人「そう……か」

作者「と、いう訳で、本日はここまで。次回は小説第二巻に入る前に、少し小話を挟みます。次は、季節外れになってしまいましたが、梅雨のお話です」

直人「皆様からのご意見、ご感想、ご指摘、そして後書きコーナーへの応募、お待ちしております」

第十三話　とある梅雨の日、真剣ＶＳ少女達の仁義なき戦い（前書き）

今回はオリジナルの小話、時期はずれましたが、梅雨のお話です。

そして次回はネタ満載の話になること請け合いです。

それでは、お楽しみください。

第十三話　とある梅雨の日、真剣ＶＳ少女達の仁義なき戦い

梅雨

「つゆ」或いは「ばいう」と読むこれは、日本を始めとする東アジアの広範囲に、五月から七月に掛けてめぐってくる雨期である。

梅雨は雨や曇りが多い期間であるこの時期は湿気が多く、カビや食中毒に注意する時期とも言われているが、この梅雨が明ければ、ある者にとっては楽しく、またある者にとっては厳しい夏がやってくる。

だが、梅雨のじめじめとした湿気にうんざりするものも多い事だろう。

そしてそれは、ここＩＳ学園も例外ではない。

これは、そんな梅雨時期に起こった騒動の一端である。

（（（（（（……気まずい　（な）（わね）（ですわ））））））

その日、１組の教室では、休憩時間に一夏、箒、セシリア、鈴、そして紅葉の五人が、異口同音にそう思った。

そしてその元凶は、今五人が集まってる、一夏の席の隣にいた。

「……」

隣にいる直人が、机に肘を立てて不機嫌オーラをまき散らしていたのだ。

その為に、周りがおしゃべりでどよめきあってる教室内で、その一角だけが、異様な空間を形成していたのだ。

「あの、一夏さん」

「ん、何だ？」

あまり大声では直人の勘に触るのでは思い、小声でセシリアは一夏に聞いてきた。

「どうして、今日……と言うより、ここ最近ですか、直人さんのご機嫌が悪いんですか？」

「ああ、そのことか。もうそんな時期だっけなあ」

と、何やら思い出したようなそぶりで言う一夏。

見てみると、箒と鈴も同じような顔をしていた。

頭に疑問符を浮かべていると、一夏が理由を話し出した。

「いやな、直人は梅雨の時期が嫌いなんだよ」

「そうなの？」

「正確には、梅雨の湿気の多さが鬱陶しいと言ってな。小学校の頃も、梅雨に入ると不機嫌そうになってたぞ。あそこまで不機嫌ではなかったが」

一夏の答えにきょとんとした顔で紅葉が聞くと、そこに箒が補足説明を加える。

「そうねー。いつもは結構仲良くしてたけど。この時期になると決まって「鬱陶しい、鬱陶しい」って、口癖のように言ってたわ」

「でも、あそこまで不機嫌なのは、俺も初めて見たぜ」

どうしてかと一夏が首を傾げていると、先ほど昔の事を話した鈴が、その原因を直球で口にした。

「あの髪じゃないの？」

それは、直人の肩甲骨辺りまで伸びた、特徴ある銀髪だった。

「そういや、小学校の頃はまだ短かったからな、あんなに伸びてたら、流石に鬱陶しさが増えてるよなあ」

「でもさ、そんなに鬱陶しがるぐらいならさ、直人なら切りそうじゃないの？」

「あっ、それあたしも思った」

「確かに、直人ならバッサリ切りそうだな」

鈴の言葉に、紅葉と箒も同調する。

「確かにな、直人がわざわざ髪を伸ばすなんて思えねえし」

「とすると……」

その言葉の後、後ろを向いたセシリアの視線を追いかけると。

「……」

それは一夏の真後ろの席に座ってる真白にたどり着いた。

相変わらず、何やら分厚い本を読んでおり、梅雨の湿気など気になっていない様子。

「ちょっと鎌掛けてみましょうか？」

そう言うやいなや、鈴は直人の近くに移動する。

「直人」

「ん？」

すると、無言で黙ってた時より、若干ではあるが、不機嫌オーラが薄まり、直人が反応した。

「なんか苛立ってるわね」

「知ってるだろ。俺はじめじめしてんのが嫌いなんだ」

普通の会話に聞こえるが、直人はいまだにご機嫌斜めであり、鈴もそれに留意して話を続ける。

「でも、昔はそんなに不機嫌じゃなかったでしょ」

「そりゃ苛立ちも増すだろ。これに湿気がこもって尚更いらいらする」

そう言って、髪を一束掴んで言う。

ここで鈴は、先ほど言った鎌を掛けることにした。

「だったらさあ、切っちゃえばいいじゃん」

そう言った刹那……

「駄目！！」

『！？！？』

突如、真白が大声を上げた。
普段おとなしく、滅多に喋らない彼女のその行動に、教室内にいた全員が驚いた。

「切っちゃ……駄目」

「どうしてよ？」

「どうしても……」

鈴が理由を問いただすが、真白は理由を言おうとしない。
しかし、その瞳には確固たる意志が宿っているようであり「絶対切らせない」と、心の声が聞こえてきそうだった。

「ま、そういう訳だ。俺が斬ろうとしても反発するから、切るに切れないんだ」

「そ、そうなんだ……」

鎌掛けが成功した鈴は、直人からその言葉を聞くと、そそくさと一夏達の所に戻っていった。

「やっぱり、真白さんが原因だったんですね。さっきは驚きましたけど」

「あの真白ちゃんがあそこまで取り乱すところ見たことないよ」

先ほどの鎌掛けの結果はある意味予想していた通りだったが、先ほどの真白の取り乱し様に、セシリアも紅葉も驚いていた。

「だが、何故真白は直人の髪を切らせたくないんだ？」

「俺に聞かれても……」

「「「「「うーん……」」」」」

と、五人が頭を抱え込み始めた時……

キーンコーンカーンコーン

次の授業開始のチャイムが鳴った。

「やばっ！　早く戻らないと千冬さんが来ちゃう！　じゃあね、一夏！！」

「ああ！」

そう言って、鈴は足早に教室を去っていき、他の三人もそれぞれ自分の席についていったのだった。

そして昼休み、事件は起こった。

「ねえねえ、さっくー、さっくー」

「ん？」

いつものように一夏達と昼食をとっていると、一人の生徒が声を掛けてきた。

「何だ、布仏」

その生徒の名は、布仏本音（のほとけほんね）、一組のクラスメートで、その眠たそうな顔とのんびりしたような様子から、一夏に「のほほんさん」と呼ばれてる。

ちなみにこの子、他人をあだ名で呼び、直人は「さっくー」一夏は「おりむー」と呼ばれてる。

「さっくーの髪って、すっごい綺麗だよね～」

「そうか？」

何気ない会話のように思われたが、ほとんどの女子生徒たちが、その会話に耳を傾けていた。

「さっくーって、何か特別なリンスとか使ってる～？」

「いや、普通に部屋に置いてあるのを使ってるが？」

「じゃあさ～、髪の手入れとかしてる～」

「いや、自分ではしてないが？」

その言葉が出た瞬間、食堂全体が凍りついた。

「ん？　なんだ、何か嫌な予感が……」

直人も空気の変化に不安を覚えるが、それは直ぐに的中することになった。

「「「「直人　（さん）！！！！」」」」

突如、箒、セシリア、鈴、紅葉が詰め寄ってきた。

「な、何だお前ら」

「直人、さっきの話、本当か！？」

「あ、ああ」

詰め寄ってきた箒の気迫にたじろぎながらも答える。

「「「「……」」」」

その直後、詰め寄ってきた四人表情を俯かせて黙る。

「お、おい、お前ら？」

突然の行動に何が何だかわからず。心配した直人が聞こうとすると。

「直人」

「なっ、なんだ、紅葉？」

「その髪、調べさせて！！」

「はあ！？」

突然のカミングアウトに驚く直人。

「そうだ！　何故手入れもしてないのにそんなに髪が整ってるんだ！！」

「私がこの髪をセットするのにどれだけ苦労がかかっているとおもっているのですか！！」

「あんた一体どういう髪質してるのよ！！　ちょっと見せなさい！！」

紅葉のカミングアウトの後に箒、セシリア、鈴がそう詰め寄るが。

「ふざけるな！！　何が悲しくて幼馴染とクラスメイトに髪を弄られなきゃならないんだ！！」

「「「「いいから調べさせろ（なさい）！！！！」」」」

「断る！！」

無茶苦茶な四人の要求を見事に突っぱねる。
だが、直人の敵は四人だけではなかった。

「者共！　桜庭君を捕えて、髪の秘密を解き明かすぞーーーーー！！」

『おーーーーーーーーーー！！！！』

食堂にいた1年1組のクラスメイト全てが敵だった。

「直人！！」

「覚悟しなさい！！」

「何を覚悟するのか解らないが、そう簡単に捕まってたまるかーーーーー！！！！」

その言葉と共に、直人は包囲網を突き破り、食堂を逃げ出すのだった。

今ここに、直人対箒、セシリア、鈴、紅葉、そして1年1組の女子たちとの、果てしない逃走劇が始まるのだった。

「はぁ、はぁ、何とか撒いたか？」

追手が来ないことから、振り切ったのかと様子を壁際から窺うと。

「はぁ！！」

「のわっ！？」

別方向から木刀を構えた箒が襲ってきた。

「大人しく捕まれ！！」

「断固断る！！」

振り下ろされる木刀を弾き、再び脱兎のごとく駆け出す。

直人は逃げまくり、今度はアリーナにやってくる。

「はぁ、はぁ、ここなら見晴らしが良いし、入口も限定される。何よりここならＩＳを展開しても、さして問題にはならないだろう」

と、冷静に分析しながら息を整えるべく深呼吸をしようとした、その瞬間。

「おわっ！？」

突如、自分の近くに青白いビームが着弾した。

「……まさかっ！？」

見上げてみると、不安は的中し、そこにはＩＳを纏った、セシリアと鈴がいた。

「直人さん！！」

「いい加減に観念しなさい！！」

「断るっつってんだろ！！」

そう言ってさっさと自分もＩＳを展開、バーニアをフルスピードで展開し、あっという間に二人の視界から消える。

「き、消えた！？」

「一体何処に消えましたの！？」

（……ここだったりするんだけどな）

それは、アリーナの外側だった。

アリーナの外を出るとともにＩＳを解除し、着地してさっさと身を隠したのだ。

（ふぅ、取り敢えず、このままだと不味いな。さっさとここから離れた方が……）

「あー！　さっくー、はっけーん！！」

「んなっ！？」

何とその場を離れようとしたとき、間の悪い時にのほほんさんに見つかってしまった。

『待ってーーーー！！！！』

「待つかボケーーーーー！！！！」

襲い掛かる大群に、直人はただ全速力で逃げるしかなかった。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……ったく、いい加減にしろっつうの」

上がる息を押さえながら、直人は毒づく。

すでにこれまでに、多くの襲撃をかわしながら、何とかここまで逃げてきた。

「しかし、どうしよう。このままだと捕まるのは時間の問だ……！！！！」

突然、何やら邪気を感じ、その場を避けると、そこにあった壁に風穴が明けられていた。

「直人発見！！」

その犯人は、十文字槍を構えた紅葉だった。

「さあ、大人しくお縄を頂戴しなさーい！！！！」

「ええい！　鬱陶しいんだよ！！」

襲ってくる槍の突きをかわしながら、再び逃走を図るのだった。

しかし、いくら直人といえど、全速力で逃げ続けて入れば、体力が早々持つわけがない。

「はぁ、はぁ、やべ、もう、体力が、はぁ、はぁ」

最早息も絶え絶えの直人、そしてその眼前には。

「追いつめたぞ!!」

「ここまでですわ!!」

「往生しなさい!!」

「残念でした!!」

『ふふふ……』

筹達４人を筆頭に、妖しい笑み（直人視点）を浮かべるクラスメイト達。

すでに壁際に追い詰められており、直人に逃げ場はなく、この包囲網を突破するだけの体力も残っていない。

「ちょ、待て、お前ら、取り敢えず落ち着け」

と、絶え絶えの声で何とか制止を掛けようとするが、箒達（ハンター）はじりじりとにじり寄る。

「ちょ、頼む、ま、待て、待ってくれーーーーー！！！！」

と、直人が断末魔に等しい叫び声をあげた。

その時……

『へブッ！？』

「……はっ？」

突如、箒達が１０代女子にあるまじき叫び声を挙げて蹲る。

そして、直人の目の前、彼女たちの後方に、その人は立っていた。

「もう授業の時間だぞ。何をやっているのか馬鹿者共」

そう、１年１組の頂点に立つ女性、担任の千冬が。

先ほどの悲鳴は、千冬の武器である出席簿が、彼女たちの頭に炸裂した音だった。

「授業に遅れた罰だ。ここにいる全員、後でたっぷり説教だ。それと桜庭、鳳、オルコット、お前たちはアリーナとは言え、許可なくＩＳを展開した分も加算するからな。篠ノ之と秋宮は壊した個所を修理しておけ、いいな？」

『は、はい……』

圧倒的な彼女の威圧感に、逆らえるものなど（当然ながら）いなかったのだった。

「はぁ、ったく、今日は厄日だ」

授業、および千冬の説教終了後、自室に戻った直人はベッドに身を投げ、そう呟いた。

「ふぅ、じめじめしてるから梅雨は嫌いだったが、別の意味で嫌いになりそうだな、こりゃ」

すでにこれまでの追いかけっこで流した汗をシャワーで洗い流し、その髪はしっとり濡れていた。

するとそこへ、ノックする音が聞こえてきた。

「……はぁ、来たか」

そう呟くと、直人は扉へ向かっていた。

さて、ここで少し種明かしをすると、実際に直人は特別なことをしてるわけでも、特別な髪質をしている訳でもない。
だがここで、のほほんさんとの会話を思い出してほしい。

直人は「自分では手入れしてない」と言った。

そう……「自分では」と。

「～♪」

「……はぁ」

部屋に入ってきた人物は、楽しそうに直人の灰色がかった銀髪を、ドライヤーとヘアブラシを使って手入れしていた。

「……なあ」

「何？」

「いつも俺の髪弄って、そんなに楽しいか？」

「うん♪」

「……一応聞くけど、切っちゃ……」

「駄目♪」

「だよなあ……はぁ」

直人は度々ため息をつきながら、真白による髪の手入れが終わるのをただじっとして待っているのだった。

第十三話　とある梅雨の日、真剣ＶＳ少女達の仁義なき戦い（後書き）

桜爛の間

作者「梅雨の話と言うより、髪の話になってしまったな」

直人「はぁ、今日は最悪の日だったな」

作者「まあまあ、そして、今回は真白の意外な一面をちらっと見せたわけですが」

直人「はあ、毎晩人の髪を手入れしに来るとは、ま、楽しそうだから、俺は良いんだけどな」

作者「ようござんすね。さて、まずは直人の目安箱、今回もまた、常連の三月語様から、頂きました」

直人「ほう、んで、今回はどんな質問だ？」

作者「えーっと」

Ｑ１．真白の性格が次のうちのどれかだったとして、一番マシだと思えるものは？また、その理由は？

１．ルティアタイプ、一途で恥ずかしがり

2．沙霧タイプ、過剰なレベルのぞっこんデレデレ
3．ロロットタイプ、伝統的なツンデレ

作者「とのことだが？」

直人「1だな」

作者「即答ですか、ちなみに理由は？」

直人「あいつの無口なところがそれでカバーできる。2だと多分、あんまり変化しないだろうし、3はすまないが、想像できない」

作者「とのことです。続いて二問目」

Q2．得意科目は？

直人「得意科目？　えーっと、普通の範囲でいいのか？　それとも、こっち（ＩＳの世界）基準でいいのか？」

作者「取り敢えず、後者でいいんじゃない？」

直人「解った。まず実技（ＩＳの）は当然として、日本史全般と世界史を少々、後英語、フランス語、ドイツ語、中国語もいけるぞ。理系は自分ではあまり得意な方ではないが、少なくとも一夏よりは良いという自信がある」

作者「凄いな」

直人「いろんな国を旅してたからな、外国語はそこに住んでた期間にもよるが、大概憶えられたぞ？」

作者「今度、新しい小説を書くとき、お前をヴァリアーに入隊させようかな？」

直人「やめてくれ、俺の心労が絶えなさそうだ」

作者「まあ、じゃあ、これが最後の質問だ」

Q3．もし自分の母親が『ネスツ闇の支配者』だったら？

直人「ああ、すまん。これは答えられない」

作者「何故？」

直人「元ネタをあまりよく知らないし、母親って言うのがどういうものかも知らないからな」

作者「ああ、そうか。直人の家族関係、そして過去については、また後ほど話します。取り敢えず直人の事ですから、反旗翻してでも止めようとするのではないでしょうか？　さて、次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」今回もまた、直人にすべてやってもらいます」

直人「おいおい、またか」

作者「誰でもって書いてあるんですが、あんまり似合うキャラが居なかったので」

直人「仕方ないな……おい、ちょっとこれは」

作者「はいはい、文句は後で聞いてやる。最初は二連続、どうぞ！！」

直人「死ぬか！消えるか！土下座してでも生き延びるかぁっ！！」

直人「アイテムなんぞ！使ってんじゃあぁぁっ！ねぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

作者「テイルズシリーズより、同シリーズ一インパクトのあるキャ

ラ、バルバトス・ゲーティアでした」

直人「一つ目は何だ？」

作者「すでに記憶がほとんどないが、場面を察するに、カイル達との最後の勝負に敗れ、神の眼で自害するばめんじゃないか？」

直人「二つ目は、ＰＳ２版デスティニーや、ヴェスペリアで放ってた秘奥義としての台詞だな」

作者「私のバルバドスはデスティニー２で止まってるので、カウンター技としての「アイテムなんぞ使ってんじゃねえ！！」しか知りませんが」

直人「しかしこれ、喉に結構来るな」

作者「何の何の、次も似たようなものだぞ。ではどうぞ」

直人「解った。あっ、一つ言っておくが奏、お前の言葉を少し借りるぞ」

直人「望み通りに・・・天から墜ちよっ！！」

特別Ｖｅｒ

直人「望み通りに・・・天からお塩！！」

作者「ＫＯＦからイグニスの台詞でした。作者はゲームを持っておらず、当初ネスツ闇の支配者やこの天からお塩と言うのもよく解りませんでしたので、やる前にいろいろ調べました」

直人「空耳と言うのは意外にあるし、ネタとしても多いが、これは流石に、と思ったぞ。うぅ、喉がつらい」

作者「と言う訳で、ゴッドボイス若本様祭りでした！！　他にも皆さん、直人の目安箱と共に、ご応募お待ちしております」

直人「さて、次回もオリジナルの小話何だな」

作者「おう、そして次回は、いよいよ直人が散々口走っていた「あいつ」が登場します。ギャグ全開の話にするので、楽しみにしていてください。後、明日少しアンケートを取りたいので、この小説をご覧になってる方、ぜひこぞってご参加ください」

直人「……来週の虎徹と菊一文字は血に飢えているな」

作者「やめい、誰も見に来なくなってしまうぞ。と言う訳で、次回は別名、直人暴走回です。それではこの辺で！！」

第十四話　天才（馬鹿）、来たる！！（前書き）

今回は後書きコーナーに、皆さんへのアンケートを取りたいと思います。

皆さん、こぞってご応募いただけると、ありがたいです。

第十四話　天才（馬鹿）、来たる！！

「諸君。おはよう」

『おはようございます！！』

その日、職員室に千冬が入ると。先に来てた他の教師たちが一斉に挨拶を返す。

そして、朝のＳＨＭの為に教室に向かおうとした時だった。

「ん？　どうした、山田先生」

「あっ、織斑先生」

自分のクラスの副担任、山田先生の様子がどこかおかしいことに気付き、声を掛ける。

「あの、学園に変なＦＡＸが届いたので、どうしようかと」

「変なＦＡＸ？　見せてみろ」

そう言って、山田先生から手渡された、ＦＡＸを見る千冬。

そこには、こう書かれていた。

ｌａｄｙ’ｓ　ａｎｄ　ｇｅｎｔｌｅｍａｎ！！

あ、ジェントルマンはいなかったんだっけ。ま、いいや。

ＩＳ学園の皆さーん。ただいまこの学園は、僕の手により、仕掛け満載のアトラクション施設へと姿を変えましたー！！

廊下、アリーナ、教室、ありとあらゆる場所に仕掛けてあるので、存分に僕を楽しませてねー。

あ、そうそう。僕を捕まえることができたら、すべての仕掛けを解除してあげても良いけどー、そんなこと無理だよねー、だって僕がどこにいるのか解んないもんねー。

じゃ、頑張ってねー！！

そこに書かれていたのは、何とも人を小馬鹿にしたような文章だ

った。

「……くだらん。こんな悪戯に付き合ってる暇など、我々にはない。ほら、いきますよ」

「えっ？　あっ、はい……」

流石と言うべきか、千冬はこのＦＡＸの内容を一蹴し、山田先生を伴って教室へ向かおうとする。

その時……。

「キャーーーーーーーーーー！！！！！」

突如、教師の一人が悲鳴を上げた。

「ど、どうしたんですか！！」

二人は悲鳴のした教師のところに駆けつけてみると。

「キャ！　ゴキブリ！！」

その原因を見た山田先生も驚き、腰を抜かす。

しかし、流石に千冬の目はごまかせなかった。

「二人とも、これは玩具です」

「「……は？」」

そう、二人が驚いたゴキブリは玩具だった。

「こんなものに騙されるなんて、貴方達はそれでも教師ですか？」

「「す、すいません……」」

「全く、さあ、早く仕事に……」

「キャーーーーー！！！！」

「こ、今度は何ですか！？」

再び、悲鳴のした教師のもとへ向かうと。パソコンがおかしくなっていた。

「これは、コンピューターウイルス……いや、ハッキングか」

「そんな！！　ＩＳ学園のセキュリティは、コンピューターであってもそう簡単にハッキングできるん物では……」

「これは、あのＦＡＸの内容、馬鹿に出来んな……」

うーん、と何か考え込む千冬。

「せ、生徒たちが心配です！　私は先に教室に行っています！！」

そう言って、山田先生は大慌てで教室に向かおうとする。

「待て！　山田君！！」

千冬が静止を呼びかけるも時すでに遅し。

「ふみゅ！？」

職員室の扉を開けた途端、彼女の頭に金ダライが落ちてくる。

「大丈夫ですか？」

「うぅ～……だ、誰が一体こんなことを……」

別の教師に開放してもらいながら、涙目になって頭を押さえる。

と、ここで、千冬が動き出す。

「山田君。すぐに教室に向かうぞ」

「えっ？」

「おそらくこの状況、打破できるのはあの二人しかいない」

そう言って一気に教室に向かって駆け出す。

「ま、待ってくださ……きゃ！！」

千冬を追って駆け出すも、今度は眼前に飛んできたペイント弾にあたる。

（もし、私の予測が正しければ……）

そんなことを考えながら、千冬は教室に向かって駆け出していくのだった。

数々の罠を避けながら。

余談だが、彼女の避ける罠は、ことごとく山田先生に当たっていくのだった。

「……遅くないか？」

「遅いなあ」

一方、職員室で起こった出来事、そして学園で起こってることなど知る由もなく、1年1組は先生を待っていた。

だが、何時もの時間に来るはずの山田先生も千冬も来ず、誰もが訝しはじめていた。

「一夏、クラス代表として様子を見て来たらどうだ？」

「いやあ、単に職員会議が長引いてるだけじゃねえのか？」

「規則と時間にうるさい師匠が、もうかれこれ１０分も待たせると思うか？」

「……ねえな」

「良いからさっさと行って来い」

「ったく、わーったよ」

そう言って、一夏が席を立ったその時。

「ふみゃ！？」

『！？』

何やらかわいらしいというか、どこかで聞いたことのある悲鳴が聞こえてくる。

「何だ？」

思わず気になり、直人と一夏が廊下を覗き込むと。

「キュウ……」

クリームやらペイントやらが付着した山田先生が伸びていた。

「山田先生！？」

「ちょ、大丈夫ですか！？」

「気絶してるだけだ、心配ない」

山田先生の安否を確認する一夏と直人のもとに、若干肩で息をしている千冬が立っていた。

「ししょ……織斑先生、これは一体」

「桜庭、丁度いいところに来た。これを見てくれ」

そう言って千冬は、先ほど届いた謎のＦＡＸを見せる。

「これは……」

そして、その中身を見た途端、直人の表情が変わる。

「織斑先生。これは一体」

「やはり心当たりがあるか。今朝職員室に届いてたんだ」

「織斑先生」

説明を聞いた後、直人の口から信じられない言葉が出た。

「抜刀、及び発砲許可をもらえませんか？」

「な、直人！？」

武器使用許可を求める直人に、一夏も驚く。

「あまり、校内で流血沙汰を起こしてほしくないんだが……何とかなるのか？」

「あいつがどこにいるのか、大体見当は付きます」

「……解った。但し、被害は最小限にとどめろ。良いな」

「委細承知」

許可をもらうと、直人は教室に戻る。

「真白」

「何？」

「あいつが来た」

「……」

それを聞くと、真白も静かに席を立つ。

「準備は？」

「できてる」

そう言うと、真白の手には二丁の拳銃が収まっていた。

そして直人も、腰に差した日本刀、虎徹と菊一文字を抜刀する。

「いくぞ！　目指すは屋上！！」

「うん」

「待ってろよ！　あんの馬鹿学者ーーーーーーーーーー！！！！」

そう叫び、怒髪天を突く勢いで爆走する直人と、その後ろをついていく真白。

「おっ、おい待てよ直人！！」

そして、その様子に呆気に取られていた一夏だが、何事かと気になり、その後を追いかける。

そして、さっきの叫びを聞いた箒、セシリア、紅葉、そして鈴までもが、一夏とともに、その後を追いかけていくのだった。

「～♪」

一方ここは、ＩＳ学園の屋上。

そこでは、一人の人物が、その様子を携帯端末から覗いていた。

「おっ、いよいよ動き始めたみたいだね♪」

その様子はさながら子供の様でもあった。

「いいよいいよー。さあ、早くここまで来なよ～、楽しみに待っているからさ～」

そう言いながら、その人物は携帯端末を覗き込んでいた。

そしてその頃、直人たちはいまだに学園の廊下を爆走していた。

次々と仕掛けられたトラップが発動し、丸太、弓矢、パイ、吊天井などが、そのたびに襲い掛かってくる。

しかし……

「弧月閃！　断空剣！　紫電一閃！　穿月！　五月雨！」

この通り、次々襲い掛かるトラップはことごとく直人によって粉砕させられていた。

ちなみに、何発か流れ弾が一夏達に襲って来たりもしたが、すべて真白によって撃ち落されていた。

そして目の前には、屋上へと続く扉。

「切り捨て、ごめーーーーーーん！！！！」

そしてそれを、二刀で一気に粉砕する。

「ふー、ふー」

凄い剣幕で直人は目の前を見つめる。

「おい、直人。一体どうしたんだ？」

「！！　そこにいるのは誰だ！！」

一夏が直人の様子を確かめようとする一方で、即座に人の気配を察した箒が直人と同様、険しい顔で目の前を見つめる。

「おーめーでーとー！　さっすが直人。よく僕のお居場所がわかったねー！」

「やっぱりお前か……」

おちゃらけたように言う目の前の人物に対し、直人はいまだに刀を構えたまま、目の前の人物を見つめる。

「いやー、あれだけの罠を突破するとは、やっぱり僕飲み込んだだけの事はあるねー。それじゃ、久しぶりの再会を祝して、あつーいハグをー！！」

「零閃！！」

ルパンダイブで飛んできた人物に、直人は神速の居合で斬りつける。

そして目の目の人物は、綺麗に上半身と下半身が泣き別れて墜落する。

「「「「「ってちょっと待てーーー（待ちなさーーーい）！！」」」」」

そしてその様子に、フリーズしていた一夏達が一斉に突っ込みを入れる。

「ん？　なんだ？」

「何だ、じゃありませんわ！！」

「あんた！　何学校で殺人事件を起こしているのよ！！」

セシリアと鈴にツッコミを入れられても、直人はケロッとしていた。

「二人とも、大丈夫」

「いや、大丈夫じゃないでしょ！！　あんたも何でそんなに落ち着いてるのよ！！」

「あれ、良く見て」

真白に指摘され、全員が先ほどの斬殺体を見てみると。斬られた

体の中から、機械が露出し、そこから火花が散っていた。

「これって、機械、ですよね？」

「って言うか、人形？」

このセシリアと紅葉の言葉で、全員が共通の認識をすることに成功した。

目の前に転がっている斬殺体は、唯の機械人形なのだ。

「いやー、相変わらず鋭い太刀筋だねー、本当に惚れ惚れしちゃう」

そして、屋上の扉がある建物の上に、その人物は移動していた。

「色々聞きたいことが山ほどあるが取り敢えずこっち来い。手足切り落として簀巻きにしてふん縛って師匠の前に突き出す」

「おー、怖。それは勘弁してほしいなー。亀甲縛りだったら、僕は喜んで受け入れるけど」

「よし、突き出す前に、一片斬らせろ。縦に綺麗に真っ二つにしてやる」

「だから、落ち着けって！！」

これ以上この二人に会話させると、さらなる惨劇が待っていそうだったので、直人を押さえこむ一夏。

「直人。こいつ一体誰なのよ？」

とりあえず、目の前の人物の事について鈴が直人に聞くが、それにいち早く、目の前の人物が返す。

「おーい、そこのツンデレぺったんこガール。人に名を聞く前に自分が名乗るのが礼儀って教わらなかったのかい？」

「あんたには聞いて無いわよ！　それと誰がぺったんよ誰が！！」

「そう言う台詞は、そこの金髪ロールのお嬢様か、そこのポニーテールちゃん位になってからいいなさーい」

「なっ！？　き、貴様！！」

「せ、セクハラですわ！！」

目の前の人物の、挑発ともセクハラともとれる発言に、鈴のみならず二人も怒りだす。

しかし、飄々としていて全く悪びれている様子のない相手に、鈴とセシリアはＩＳを展開し始め、箒はどこからともなく竹刀を取り出す。

「お、お前ら落ち着けよ！！　あんたもそれ以上神経を逆なでするな！！」

「ん？　おー……」

今一番まともな一夏が、直人を抑え込みつつ、箒達と謎の人物に自制を促す。

すると、一夏を見るなり、謎の人物が興味ありげに近づく。

「君が、織斑一夏君でしょ？」

「ど、どうして俺の名前を？」

「そりゃあ、束（たば）ちゃんからお話は聞いてるからねー！」

「束ちゃん？　直人、この人誰なんだ？」

訳が分からず、一夏は直人に問いかける。

そして、冷静になった直人も、その質問にため息雑じりで答える。

「こいつの名前は黄原端午。俺の腐れ縁で、広まっちゃいないが世界でも五本の指に入る天才で、混乱と騒動しか起こさないろくでなしの変人のトラブルメーカーのマッドサイエンティストで……」

途中から何やら酷い説明となっているが気にも留めず、直人は首から待機状態の灰桜を取り出していった。

「俺の灰桜（相棒）の製作者だ」

「へー……って」

「「「「「えーーーーーーーーーーーー！！！！！」」」」」

しばらくの沈黙の後、直人、真白を除く五人が絶叫を上げる。

「んで。お前は何しに来たんだ」

「勿論、悪戯を仕掛けるためさ！！」

「よーしよし、せめてもの情けだ。この一刀で斬り伏せてやる」

「と、言うのは8割方の理由。残り2割は、真白ちゃんに用があってきたのー」

「私？」

目の前の人物、端午はそう言って真白を呼ぶ。

「やーやー真白ちゃん。相変わらず白くて小さくてかわいいねー。抱きしめていい？」

「ん、良いけど」

「「「「「良いの（か）！？」」」」」

「では、いっただっきまーす！！」

周りのツッコミなど気にも留めず、端午は真白をムギュッと抱きしめる。

「おー、相変わらずいい抱き心地。このつやつやの髪と白い肌。まるでお人形さんを抱きしめているかのような幸福感。さいこーだよ！！」

かなり危険と思われるカミングアウトに、周りも引き始める。

「ねえ、直人」
「何だ？」
とここで、紅葉が直人に聞いてきた。
「あの人って、もしかしてロリコン？」
「いや、ロリコンじゃない」
「そうなの？」
腐れ縁とはいえ、やはり自分のＩＳの作成者をかばっているのかと思った次の瞬間。
「ロリコンで変人だ」
「……」
「言っておくが、あいつは殺して死ぬような男じゃないぞ。ゴキブリ並みの生命力だからな」
そんな会話の間も、端午は真白の抱き心地を堪能したのだった。
「ふぅ、さて本題だけど。手を出して」
「ん」
そう言って両手を出すと、端午はあるものを手に乗せた。

「これは？」

それは雪の闕所のような形をした、ブローチのようなものだった。

「前からほしいって言ってた。真白ちゃんの専用機♪」

「あっ……」

「「「「えっ！？」」」」

思い出したように言う真白とは別に、一夏と直人を除く四人は驚きの声を上げる。

「ま、初期化と最適化はまだだから、そこは自分でやってね。あ、それと、その子名前がないから、真白ちゃんがつけてあげてね。それじゃ」

「待て」

さも自然な流れで立ち去ろうとする端午を、直人は虎徹を突き付けて止める。

「まだ用件は済んでいない。大人しく捕まって、師匠の洗礼（拳骨か黒出席簿）を受けると言い」

「悪いけど。僕も忙しいから、別にこのまま消えていいよね？　答えは聞いてないから♪」

そう言って、端午はそのまま飛び降りる。

「ちょ！　あいつ正気なの！！」

鈴の叫び声と共に、一斉に下を向くが。

「アーイキャーン、フラーイ！！」

背中からジェットエンジンが吹き出し、そのまま飛んで行ってしまった」

「ちっ、逃がしたか」

「なんつーか、破天荒って言うか、滅茶苦茶な奴だなあ。って言うかあのノリ、どっかで覚えが……」

一夏が何やら思い出そうとしてる傍ら、箒が直人に近づく。

「直人」

「何だ？」

「お前も、苦労しているんだな」

「解ってくれるか。そうだよ、この苦労がわかるのはお前と師匠位のものだよ」

箒からの同情の言葉に、直人はうんうんと頷き、そのまま暫く二人出口の言い合いを始めるのだった。

「～♪」

一方で、真白は真白でご機嫌だった。
まあ、漸く待ちに待った専用機が手元にあるのだから、これで喜ぶなという方がおかしい。

「そうだ、名前無いんだったね。つけてあげないと……」

そう言いながら、真白はルンルン気分でその場を後にしていった。

余談だが、端午が消えたことでＩＳ学園に仕掛けられたトラップはすべて作動しなくなったが、千冬からの指示で、直人と真白がこれの撤去を行われたことは言うまでもない。

「あいつ。今度会ったら１６分割どころか８０分割してやるーーーーー！！！！！」

そんな叫び声が、聞こえたとか、聞こえなかったとか。

第十四話　天才（馬鹿）、来たる！！（後書き）

桜爛の間

作者「と、いう訳で、天才と書いて馬鹿と読む男、黄原端午登場の回でしたー」

直人「あいつ。今度会ったら三枚に卸してサメの餌にしてやる」

作者「君、本当にあいつには容赦ないねー」

直人「当たり前だ！　あいつの所為でどれだけ苦労したと思ってるんだ。今回のことだってそうだ！　後片付けが本当にどれだけ大変だったことか」

作者「でも、心底嫌ってるわけじゃないだろ」

直人「んまあ、灰桜を作ってくれたことに関しては、感謝してるけどな」

作者「さて、今回は私と君の二人だけではないのだよ」

直人「何？」

作者「さあ、いらっしゃーい！」

真白「ん」

直人「真白。アフレコ以来の登場だな」

真白「うん」

作者「さて、まずは『直人の目安箱』、常連の三月語様から、直人と真白に質問が来てるぞ。まずは直人から」

Q1．奏に起きた（恋愛的な）災難で、『これ一番酷いんじゃね？』と思えたのは？

直人「ルティアが酔っぱらった時、出なければ、ラウラと子作りするところだったこと。この二つが同列だな」

作者「ほう」

直人「どちらも甲乙つけがたいが、まああえて言うなら、やはり後者だろうな。高校生ででき婚なんてことになったらまずいし、何より真琴の暴走が怖いからな」

作者「成程、では次」

Q2．朝起きたら部屋の中に猫耳付きの真白がいて『にゃん』と言われたら？

直人「取り敢えず頭を撫でる。そして何があったのか聞く」

作者「猫耳についてはスルーですか」

直人「いや、まず何があったのか気に掛かるのでな」

作者「ほう、んで、次は三月語様の作品、【熾天使を駆る少年】の主人公、奏からだ」

直人「奏から？　どれどれ」

『勉強をしていたはずなのに何をトチ狂ったか突然ポケモンの擬人化ドットを打ち始めた作者をどう思うか？』

直人「奏。その気持ちよく解るぞ。こっちの作者も、テスト期間一週間前だというのに、碌に勉強もせずパソコンにかじりついてばっかりだったからな。その所為で夕食作るのが遅れたり、寝るのが遅れたり、碌な生活送っちゃいないからな」

作者「やめてくれ！　俺のライフはもうゼロを通り越してマイナスだから！！」

直人「だったらもう少しましな生活を送れ」

作者「善処します。さて、次は真白に対する質問だ」

Q1．なぜ直人の髪の毛を手入れするのが好きなのか？また、それは何時頃から？

真白「直人、髪綺麗なのに、自分じゃ手入れしない。そのまま傷んじゃうのは、勿体ないから……」

直人「時期については、俺が代わりに話そう。俺が真白と出会って数か月した時だ。真白は一緒に旅するようになってから本を読むようになったんだが、その日は何故か今まで興味すら示さなかったへ

アースタイル系の雑誌を読んでたんだ。それで、俺が風呂上って髪を拭いていたとき、突然髪をブラシで弄り始めたんだ。それから俺が風呂に上がると毎日髪を手入れするようになってな。ちなみに俺の髪が伸び始めたのもその頃だ、今までは俺が自分の髪切ってもさして気にも留めなかったのに、ある日切ろうとしたら涙目で首を横に振ってくるんだ。切りたくても切れず、今日までこうなったって訳だ」

作者「とのことです。ちなみに、それはいつの話ですか？」

直人「おおよそ、二年と六か月前かな？」

作者「だ、そうです。では次」

Q2．今現在、直人のことをどう思っているか？

真白「？」

作者「ああ、つまり。セシリアや紅葉みたいに恋愛感情を持っているのか、或いは箒や鈴みたいに、友達みたいな感覚かって聞いてるんじゃないか？」

真白「どっちも、ちがう」

作者「じゃあ何？」

真白「何ていうか。一緒にいると落ち着く。なんだか、お兄ちゃんみたいな感じ」

作者「まあ、つまり兄妹みたいな親近感、ってことか？」

真白「うん」

作者「まあ、直人も真白の事妹みたいな感覚で持ってるだろうし、いいかな。じゃ、次の質問」

Q3．通称奏ラバーズ（誰かが一度命名していましたが・・・忘れました）の中で、誰を応援したいか？また、その理由は？

真白「ルティア……」

作者「即答、そんでもって理由は？」

真白「一途なところを見てると。なんだか、応援したくなる。後、どこか私と似てる気がするから」

作者「だそうです。三月語様、いつも質問応募、誠にありがとうございます。次は、『抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！』

直人「今回は誰がやるんだ？」

作者「今回は君ともう一人呼んでます。いらっしゃーい！」

紅葉「どうもー」

直人「紅葉か、で、俺は何をすればいいんだ」

作者「気をつけなよ。今回君へのリクエストが多いから。はいこれ、一覧」

直人「おお」

作者「それでは、まずは楚良様のリクエストから」

直人「立ち止まるな。歩き続けろ」

作者「D.Gray-manから、アレンの父、マナ・ウォーカーの台詞です」

直人「これは良い台詞だな。生きている限り、常に歩き続けなければならないからな、人は」

作者「だな、次！」

直人「立って歩け、前へ進め。あんたには立派は足がついてるじゃないか」

作者「鋼の錬金術師から主人公、エドワード・エルリックの台詞です」

直人「これも良い台詞だな。前向きに生きていけってことだな」

作者「本当。楚良様、最高のチョイス、ありがとうございます。次はデュオ様からのリクエストです」

直人「この戦いで死ぬのは俺とここにある兵器だけで十分！」

作者「ガンダムWのデュオの台詞です。送ってくれた作者様と同じですね」

直人「これもある意味良い台詞だな。平和に不要となった兵器や自分達が死ぬのに、他者を巻き込むことを良しとしないわけだな」

作者「なかなかな覚悟と姿勢が現れてますね。さて、直人の活躍はここまで、次は紅葉に行ってもらいたい台詞があります。こもも様からのリクエストです」

紅葉「オッケー」

作者「では、どうぞ」

紅葉「生存戦略、しましょうか！」

作者「これは【輪るピングドラム】というアニメのヒロインの台詞だそうです」

紅葉「ああ、何か明るい感じの台詞。だからあたしをチョイスしたんだ」

作者「はい、作者はこのアニメを知りませんので」

紅葉「えー、どうだったでしょうか？」

作者「さて、当小説に感想とリクエストを送ってくださいました。三月語様、楚良様、デュオ様、こもも様、そして混沌の魔法使い様、ありがとうございます」

直人「それで、まえがきに書いたアンケートってなんだ？」

作者「えー、正確にはアンケートが一つ、募集が二つです。まず作中貰った真白のＩＳの名前を募集したいと思います。それと、肩の部分の武装について、案が二通りありますので、どちらが良いか、応募してください」

直人「おいおい、決めてたんじゃないのか？」

作者「一応はね、でもなんか納得いかなくなってね。この小説を読んでる方々に応募してもらおうかと、ちなみに、名前を付ける際は次の事に留意してください」

1．雪という単語が入る、或いはそれを連想させる単語を入れてください。

2．漢字名、外国語名、どちらでもいいですが、外国語名の場合、出来れば日本語でどう読むのかも明記してもらえると嬉しいです。
（例、ブルー・ティアーズ（蒼い雫）　みたいな感じで）

3．白い機体をイメージしてください。

作者「と、こんな感じかな？　アンケートする肩の武装案は以下の通りです」

1．防御型。ミサイル内臓。エネルギーシールドを張ることができる。出力を上げれば広範囲にエネルギーフィールドを形成して味方を守ることができる。

2．大火力型。エネルギー砲を内蔵。前面に連結、展開することで強力な砲撃を撃てる（コードギアスに出てくるナイトメア、モルドレットのシュタルクハドロン砲みたいな感じ）

作者「ほかにも、「こんな感じにした方が良い」というのがありましたら、遠慮なくご応募ください」

直人「で、もう一つは何だ？」

作者「間もなく、当小説のＰＶ数が五万を超えるのです。それに伴い、何か突破記念をやりたいと思っているのですが、何かやってほしい企画とかありましたら、ぜひご応募ください。今のところ、コラボがやり玉に上がっていますが、コラボ相手もほかの企画も無かったら。普通に座談会になると思います」

直人「ええー、いろいろ我儘の多い作者と思われるかもしれませんが、何卒、ご協力お願いします」

作者「さて、次回はいよいよ小説第二巻の初め、アニメ第五話の話。皆さんお待ちかね、作者も大好きな、あの子が登場します！！」

直人「ＩＳ学園に、再び波乱の予感が」

作者「それでは次回も、お楽しみにー！！」

第十五話　新たな出会い　（義兄の親友）（前書き）

一週またいでの更新、本当に申し訳ありません。

ですが、実家のパソコン二台はもうかなりよぼよぼといっても差し支えないほどで、新しく来たパソコンも、事情により迂闊に使えません。

なので、今後更新が不定期・もしくは金沢に戻るまで停滞の可能性はいまだ払拭されて無い、寧ろ余計に強まった訳です。

こんなリアル駄目作者の書いた作品ですが、今後とも呼んでいただけると幸いです。

さて、アニメ第五話に入るわけですが、これを含めた三話は、アニメの内容を踏襲しつつ「出会い」に重点を置いた話にして行こうと思います。

まずはタイトルにあるように、あの兄妹が登場します。作者の好きなあの子は、残念ながら来週（下手したらもっと先）になります。

第十五話　新たな出会い　（義兄の親友）

「悪いな直人、手伝わせちまって」

「いいさ、どうせ寮に居たって鍛錬ぐらいしかやる事がなかったしな」

疲労の色が見え隠れしながら隣を歩く一夏からの言葉に、直人は何てことないという風に返した。

日曜のこの日、二人は家の様子を見る為に外出許可をもらって織斑宅に戻っていた。

勿論二人の格好はＩＳ学園の制服ではなく、一夏は半袖に短パン姿、直人は上は半袖だが下はジーパン姿で、いつも腰に差してる日本刀は寮においてきてるため、髪の色を除けば何処にでもいる男性に見えた。

「しかしまあ、酷かったなあ。師匠の部屋は」

「千冬姉の前で言うなよ、酷い目に遭うから」

「お前じゃあるまいし、そうそう口を滑らすかっての」

釘を刺すように言う一夏に、直人は手厳しく返す。

この会話からも解るとおり、二人の疲労の原因は一夏の姉にして直人の師、そして二人のいるＩＳ学園の教師、織斑千冬の部屋の掃除である。

実は千冬、普段はあのように凛々しく厳しい人物であるのだが、

私生活では所謂「片付けられない女」なのだ。

というのも、一夏が中学に入るまでは、織斑家の家計は彼女によって支えられており。家事は専ら一夏の担当だった。

このため、学業があまり優秀ではないが家事料理が出来る弟とは対照的に、非常に優れた教師でありながら私生活はてんでだらしない姉が誕生してしまったという事だ。

当然、この辺りの事情は当時武者修行の旅に出ていた直人は知らなかったのだが、織斑宅の掃除中、その辺りの事を聞いた直人は少し呆れながらも納得してしまった。

「でさ、お前が良い場所知ってるって言うからついてきてるんだが、一体何処に向ってるんだ？」

「いいからついてこいよ、もう直ぐだから」

それで現在、織斑宅の掃除を終えた二人は、丁度時間も昼飯時という事で昼食をとろうという事になった。

当初、寮に戻って食堂でとろうと思っていた直人だったが、一夏が「良いところ知ってる」という事で、一夏の導かれるままに移動していた。

「ここか？」

「ああ」

一夏導きの元、二人がやって来たのは、「五反田食堂」と掲げられた暖簾のある店だった。

だが、店の前には「準備中」とかかれた看板が置いてあった。

本当に準備中なのか、或いは日曜なので定休日なのか。いずれにせよ、普通の客ならばこのような看板が置いてある店に入る事は無いのだが。

「おい一夏、準備中って書いてあるんだが」

「大丈夫だよ。ほら、早く入ろうぜ」

心配ないといわんばかりに看板を無視し、店の中に入って行く一夏。

直人も、妙に自信のある一夏の態度が気になりながらその後をついていく。

「お邪魔しまーす」

「ん？　おっ、一夏じゃねえか！」

一夏が店内に入ると、店の中にいた一人の男性が一夏の姿を見て驚きの声を上げた。

男は赤みがかった髪をしており、頭にバンダナのような布を巻いていた。

「よっ、弾。久しぶり、元気にしてたか？」

「よっ、じゃねえよ！　よ、じゃあ！　何か月もメールだけ寄越しやがって！！」

「悪い悪い、こっちも色々あったんだよ」

悪態をついてくる弾と呼ばれた男性に、一夏も親しげに接し、親しげに返す。

「しっかし久しぶりだな。聞いたぜ、あのＩＳ学園に入ったんだって」

「成り行きでな」

「まったく、羨ましいぜ。……ん？　そいつは？」

しばらく一夏と話し合っていると、弾は一夏の後ろにいた直人に気付く。

「ああ、ほら、前に話しただろ。小学校卒業したのと同時に旅に出てた俺の義兄弟だよ」

弾に軽く説明をすると、一夏は直人の方を向いて言った。

「直人。こいつは弾、俺の中学からの親友だ」

「あ、ああ……」

一夏に紹介され、少しぎこちなさげに答える。

「お前が一夏の、話は聞いてるぜ。俺は五反田弾って言うんだ、よろしくな！」

「あ、ああ……桜庭直人だ、よろしく」

しかし、直人のぎこちない様子など気にも止めず、弾は人当たり良く接してくる。

そんな弾に、ぎこちなかった直人も少し和らぎ、挨拶と握手を交わす。

「んで、久しぶりに家に来て、どうしたんだ？」

と、直人との自己紹介を終えた弾は、再び一夏の方を向いて聞いてきた。

「いやさ、久しぶりに家の様子を見に一旦戻ったんだけど、終わったら丁度昼時だったからさ、飯食いに来たんだ」

「おいおい、俺に家にただ飯食いに来たのかよ」

弾の問いかけに出てきた一夏の答えに、再び悪態をつく。

「ま、良いけどな。折角だから部屋来いよ、久しぶりにゲームしようぜ！」

「おお、良いぜ。負けねえからな！！」

久しぶりにゲーム勝負を挑まれ、一夏も望む所と勝負を受ける。

「直人もせっかくだから来いよ」

「ああ、いや、俺はここで待ってるよ」

と、弾は直人も誘うが、直人は一階で待ってると言う。

二人が楽しそうに会話してる様子を見て、自分がいるのはお門違いのような気がして、二人きりを邪魔するのは申し訳ない気がしていたのだ。

「いいから来いよ、色々話してえ事もあるし」

「そうだぜ、遠慮するなよ直人」

しかし、そんな気を知ってか知らずか、弾と一夏は直人を誘う。

二人に誘われては、直人も邪険にするわけにはいかず。

「じゃあ……失礼させてもらう」

と、こうして三人は二階へと上がって行った。

「へー、直人もＩＳ使えんのか」

「ああ、理由は一夏と同じで解らないんだけどな」

弾の部屋に入ると、一夏と弾はさっそくゲームを始め、直人は二人の後ろに座ってその様子を見ていた。

ちなみに二人がゲームに興じている間も、直人と弾の間では、学園での様子や一夏との馴れ初めなどを話し合い、彼の人当たりのよさに直人も初見のぎこちなさは無くなり、すっかり鈴や紅葉と話してるのと同じ感じで話すようになっていた。

「にしてもさ、お前ら以外皆女子だろ。本当に羨ましいぜ、良い思いとかしてんだろうなあ」

「「してねえよ」」

羨望の眼差しを二人に向けながら言う弾に、見事な義兄弟シンクロが炸裂した。

「嘘付け。お前のメールを見てるだけでも、楽園じゃねえか！　俺も行ってみたいぜ、招待券とかねえの？」

「「ねえよ」」

と、一夏を小突きながらの問いかけにまたも炸裂する義兄弟シンクロ。

実際、女性だらけの学園というのは、男にしてみれば正に極楽、楽園、理想郷といっても差し支えないかもしれない。

しかし、現実はそうはいかないもので、周りから見れば羨ましい

限りだが、当の本人達にしてみれば色々困惑したり、目のやり場に困ったりする事のほうが多い。
加えて、あの学園には千冬（鬼）がいるため、正直女性に現を抜かしてる余裕など心身ともに無い。

「でも、鈴が転向してきてくれて、本当に助かったぜ。話し相手少なかったもんな」

「ああ。鈴か、鈴ねえ……」

とここで、ＩＳ学園に転校して来た鈴の事を話題に出すと、弾が何やらにやにやしたような表情になる。

「鈴……か、はぁ」

「ん？　どうしたんだ直人？」

「なんでもない」

そんな中、直人は鈴の名前を呟くと、大きく溜息をする。

クラス対抗戦での一件の後に和解してからは、直人はよく鈴と話すようになった。

無論、あの日の出来事を全く気にしていないといえば嘘になるが、鈴本人が気にしていないといっているので、もう引き摺る事はやめにした。
そこは良いのだが、鈴との会話は、専ら彼女の一夏に対する愚痴が殆どなのだ。
これがまた、話し始めればあーだこーだと文句ばかり言うが、直

人が何かしら意見を言うと、顔を真っ赤にしながら素直じゃない口調で惚気に入るものだからある意味性質が悪い。

そんな愚痴をよく聞かされていただけに、それを思い出して少し気が滅入ったのだ。

まあ、彼が付いた溜息は鈴に対してというよりも、鈴にそれだけ文句を言われておきながら、なおも彼女から好意を持たれ、それに全く気付いてない一夏の鈍感さにたいしてのものであるのだが。

「お兄、お昼できたよ。さっさと食べにきなさ……い、一夏さん！？」

そんな会話をしていると、突然一人の少女がドアを蹴り開けた。弾と同じ赤みがかった茶髪をしたその少女は、弾に昼食ができた事を伝え、そのまま立ち去ろうとするが、部屋の中に一夏がいる事を確認すると、驚きの声を上げた。

「おっ、蘭、久しぶり。邪魔してる」

蘭と呼ばれた少女は、一夏の呑気な返事にも暫く呆然としていたが、やがて自分の格好を認識するや、大慌てで物陰に隠れ、身なりを整えた。

彼女の服装は、タンクトップにショートパンツという姿で、夏の暑さもあり機能性を重視したような格好であったのだが、お世辞にもその格好は、人前に出る格好とはとてもいえなかった。

「え、えーっと……い、一夏さん。き、来てたんですか？」

「今日はちょっと外出。家の様子を見に着た序でよってみた」

「そ、そうですか……／／／／／」

「蘭。お前なあ、ノック位しろ。恥知らずな女だと思われたくな……」

一夏の言葉に頬を赤らめる蘭に対し、弾は先ほどの妹の行為を注意するが、途中で言葉が途絶える。

というのも……。

「何で言わないのよ……」

「い、いや……言ってなかったか？　そっか、そりゃすまなかった。は、ははは……」

顔を羞恥で赤く染めながら、兄に恥かしさのあまり怒りの矛先をぶつける蘭の姿があったのだ。

と、兄妹でこんな会話が繰り広げられていた頃、蚊帳の外の直人はというと。

（はぁ、この子もか……。一夏、何でお前はいつもそうなんだよ……）

蘭の様子から、彼女も一夏にほの字の人間であると気づき、同時にそれに気付かない一夏の鈍感さに再び大きな溜息を洩らすのだった。

そして、一階の食堂に下りてきた男子三人は、そこで美味しくお昼の定食を頂いていた。

「あ、あの……一夏さん。ゆっくりしていってくださいね」

久しぶりに一夏と出会えた事が嬉しいのか、先ほどと同様頬を赤くしながら蘭は言った。

「着替えたんだな。どっか出かけるのか？」

「あっ、いえ。これは、その……」

一夏の指摘したとおり、今の蘭は先ほどの格好ではなく、半そでのワンピースを着ており、上げていた髪を下ろしてストレートヘアーになっていた。

「あっ、ひょっとしてデート？」

「違います！」

格好の変化について、だされた一夏の答えは、即座に否定された。

「なあ、直人」

「何だ？」

「一夏って、学校でもこの調子か？」

そんな一夏の鈍感さを目の当たりにした弾と直人はそんな会話を交わしていた。

「ああ。と言うより、小学校の時より酷くなってる気がするな。コイツの鈍感は筋金を通り越して形状記憶合金でも入ってるんじゃないか？」

「鈴も可愛そうに」

「何の話してんだよ？」

「「なんでもない（ねーよ）」」

二人にそう返され、一夏はただ頭に疑問符を浮べるばかりだった。

「そういえば一夏さん。そちらの銀髪の人は誰なんですか？」

とここで、蘭が直人の事について一夏に聞いてきた。

彼女自身、直人の存在には気が付いていたが、一夏の事に意識が言っていた為、直人の事を聞く暇が無く、直人も特に自分から名乗ろうとしていなかった為、今の今まで話題に出なかったのだ。

「ああ、紹介するよ。前に話した俺の義弟の桜庭直人だ」

「ど、どうも……」

「初めまして、五反田蘭と言います。話は一夏さんから聞いています」

「そ、そうか。なら、これから宜しく頼む」

「はい！」

少し元気目の声に押されながらも、やはり彼女の人当たりのよさに緊張もほぐれ、物の数分で蘭とも親しくなり、それから二人は時間一杯まで五反田食堂で時間を潰していたのだった。

だが次の日、更なる衝撃の出会いがあることと、そこから巻き起こる波乱を、この時の二人は知る由も無かった。

第十五話　新たな出会い　（義兄の親友）（後書き）

桜爛の間

作者「何とか更新できた……」

直人「一週跨いでおいてそれか……」

作者「だってさー、実家のパソコンは要領も一杯のもう既に何時ぶっ壊れてもおかしくないロートルのノーパソと、動作が滅茶苦茶遅いパソコン。新しく来たパソコンは姉から制限を掛けられ使うに使えない、一体これで如何しろと？　下宿先のマイパソコンより遥かに使い勝手悪くて、小説一話書き上げるのに苦労したよ」

直人「そこまで力説するか……だがまあ、確かに今まで使ってた自分のパソコンに比べれば、遥かに使い勝手は悪いようだな」

作者「はい、まあそう言う事なので、今後実家に帰省してる間は、更新が不定期、或いは停滞する恐れがありますので、ご注意下さい」

直人「さて、まずは目安箱から入るか、今回も三月語様から、質問を頂いているな」

作者「いつもありがとうございます。それではまず最初の質問」

Q1．直人から見て（ここ結構重要）ＩＳ熾天使の中で真白の髪の毛弄りをやられそうなキャラは？（結構気にしている・無頓着関係なしに）

直人「そうだな、アイツの髪いじりをされそうなのは……真琴、オリヴィエ、ルティア、沙霧、ロロット、こんな所じゃないか？」

作者「ほうほう、んじゃ次」

Q2．もし背部兵装が追加されるという話になったら以下のうちどれがいいか？

1．ジャスティス系列の『ファトゥム００』ｏｒ『ファトゥム０１』
2．Ｘあるいは ＤＸのような『サテライトキャノン』
3．Ｖ２の『光の翼』

直人「1だな、2と3は燃費が悪すぎてとてもじゃないが俺には扱えん」

作者「だ、そうです。さて、次はアフレコです。今回はこの方達に来てもらいました！！」

紅葉「やっほー、また来ました」

セシリア「ああ、ついに直人さんと同じ場所に……」

一夏「よっ、また呼ばれた」

作者「と、言うわけで、今回は直人とこの三人にやってもらいましょう、はいこれ、それぞれの台詞」

直人「……これは、少し言い難いな」

紅葉「ほうほう、これはこれは」

セシリア「こ、これを言うんですか！」

一夏「なあ、この横線の下になんで……」

作者「はいはい、準備終わったね。まずは紅葉から」

紅葉「オッケー」

紅葉「これだけは覚えておいて。アリスゲームの後は、必ず誰かがいなくなる。二度と、今のようには戻れないことを。」

作者「『ローズメイデン　トロイメント』より、蒼星石の台詞でした。作者は原作知らないのと少し精神的な磨耗により、今回はノーコメントでどんどん進ませていただきます。次、セシリア」

セシリア「あっ、はい」

セシリア「変わったのではなく・・・気付いた、という方が正解かしらね・・・。私が、何をすべきで、何をしたいのか・・・」

作者「こちらも『ローズメイデン　トロイメント』より、真紅の台詞でした。次は直人、二本立てでお贈りするぞ。あっ、一夏はそこに立ってて」

一夏「あ、ああ」

作者「じゃ、どうぞ」

直人「今日からお前は俺の奴隷だ。俺の生徒会で働いてもらう。」

直人「（一夏に向って）お前はサル並だと思っていたが訂正しよう。

・・・ミジンコ並だ。」

作者「これは『いつか天魔の黒ウサギ』から、紅月光の台詞でした」

直人「ちょっと待て作者、俺はこんな酷い事は言わんぞ」

作者「いや、でもさ。折角のリクエストなんだから答えないと」

一夏「ミジンコ……」

直人「ああ、すまん一夏。リクエストとは言え、酷い事言ってしまった」

作者「はいはい、次で最後だから頑張って。あっ、一夏、ちゃんと台詞訂正してある場所読むんだぞ」

一夏「な、何か恥かしいな……」

一夏「俺の命は・・・箒がくれたような物・・・・！箒を救えるなら・・・！彼女が失った9年、この先箒が笑って暮らせるなら・・・！この命！テメェにくれてやる！！」

作者「『いつか天魔の黒ウサギ』から、鉄大兎の台詞を一部偏向していってもらいました」

一夏「／／／

ここで皆さんにお知らせがあります。現在行なっている真白のＩＳの名称応募と武装案アンケートの締め切りを８月３１日までにしたいと思います」

直人「ＩＳの名前は、直接採用されなくても、武装の名称などに使われる可能性もあるので、どんどん応募してくれ」

作者「それと、ＰＶ数五万ヒット記念企画「オリキャラだけのコスプレ大会」への参加者も希望しています。ルールは活動報告をご覧になってもらうとして、駆け込みでも構わないので、参加したい人は織キャラと着せる衣装と元作品、織キャラに言わせたいその元キャラの台詞を書いて、今すぐ応募してください」

直人「さて、まずは五反田兄妹との出会いだったわけだが、次は？」

作者「勿論！　作者も好きなあの子です！！　来週更新できるように頑張ります！！」

直人「それじゃ、また次回」

ＰＶ数５０，０００ｈｉｔ突破記念特別企画　「オリキャラだけのコスプレ大会」

作者「というわけで、この私、エドワード・ニューゲートが書いている当小説のＰＶ数が、なんと五万を越えました！」

直人「描写もつたない作者の作品なのに、これだけの人が見て頂いているとは、本当に感謝のきわみだな」

紅葉「ありがとうございまーす！」

真白「（ペコリ）」

作者「というわけで、日ごろから当作品を見て頂いている皆様への感謝の為に、当企画を行ないたいと思います」

直人「成る程な」

作者「というわけで、ここからは男性部門と女性部門に分かれるので、俺たちはこっちに」

直人「は？　何言ってるんだ？　お前は司会進行だとしても、俺達は傍観者じゃないのか？」

作者「やだなー、何言ってるの？　君たち三人も参加者に決ってるでしょ」

真白「そうなの？」

作者「そうなの」

紅葉「ふーん、ま、面白そうだからいいけど」

作者「というわけで、君は私と一緒にこっち、真白と紅葉はそっちね。既に他の参加者達も待たせてるから早く行こう」

直人「あ、ああ」

真白「じゃあ」

紅葉「行ってきまーす」

作者「はい、というわけで、こちらコスプレ大会男性部門。司会は私、当小説作者エドワード・ニューゲートと……」

一夏「えっと……、原作ＩＳ主人公の、織斑一夏です」

作者「おいおい固いなあ。君それでもクラス代表になった男かい？」

一夏「いや、それとこれとは関係ないだろ？」

作者「ま、良いけどね。俺が大体仕切るから、君は感想以外は適当に相槌でも打っておいてくれ」

一夏「まあ、それで良いなら良いけど」

作者「さて、まずは当コスプレ大会に参加する人物を紹介します。ほい一夏、これが参加者リスト」

一夏「えっ！　俺が読むのかよ！？」

作者「当たり前でしょ。相槌打つだけとは言え、多少は君も司会進行を手伝ってもらわないと」

一夏「解ったよ。じゃあまずは、当小説の看板。鬼の一番弟子にして、俺の義弟、そして至上稀に見る唐変朴、【ＩＳ　桜の花纏う真剣】の主人公、桜庭直人（さくらばなおと）！」

直人「ちょっと待て一夏、何だその紹介文は！」

一夏「い、いや、本当にそう書いてあるんだよ！」

直人「……作者？」

作者「的を射ているだろ？」

直人「失礼な！　って言うか、こんなの師匠に見せたらお前殺されるぞ。それに唐変朴って一夏じゃあるまいし」

一夏「ちょっと待てよ！　それどういう意味だよ！！」

作者「どっちもどっちだ。ほら一夏、ちゃっちゃと進める」

一夏「何か納得いかねえけど。次は当小説の常連、三月語様より、天災のブラコンを姉にもつ女顔ゲーマーにして一夏、直人を越えるキング・オブ・唐変朴。姉と七人のラバーズに振り回される女難尽くしの日々を送る男。【ＩＳ－インフィニット・ストラトスー　熾天使を駆る少年】の主人公、二崎奏（にいさきかなで）！」

奏「突然作者に飛ばされて来たんだが、激しく意見したいな、さっきの紹介には」

直人「よっ、奏」

奏「おお、直人。いつも見てるよ」

直人「俺もだ。お互い、苦労するな」

奏「ああ」

作者「はいはい、友好を深めるのは向こうでやっててね、そこは邪魔になるから。じゃ、どんどん行ってみよう！！」

一夏「えーっと、次はサザンクロス様より、不屈の魂と揺らぐ事なき信念を持つ、人外集団「月光組」の若頭にして天才束、の悪戯の弟子。現在六人の女性と交際中のハーレム野郎。【ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼】の主人公、月光夜明（げっこうよあけ）！」

夜明「ちーっす」

直人「よく来てくれた。こんな作者の企画に参加してくれてすまない」

夜明「いいよいいよ。太陽の言葉じゃねえが、実際楽しそうだしな」

奏「しっかし、こうしてみると二人とも結構似てるな」

直人・夜明「「そうか？」」

作者「あー、似てるのはまあ、何と言うか。さ、そんな事より次々」

一夏「あ、ああ。えーっと、次はＤ－５様より、天才の家系に生まれ、天才の義弟として育つ。十人中、否、百人中百人が振り返る天才美少女。【ＩＳ　～インフィニット・ストラトス～　一角獣の輝き】の主人公、篠ノ乃優希（しののののゆうき）！」

優希「僕は男です！！」

作者「はいはい解ってますよ、男の娘ですよね」

優希「うぅ～～～（泣）」

直人「おい、優希を泣かすな。向こうの箒が飛んでくるぞ」

作者「心配御無用。この会場全体を包囲壁で囲ってあるから、いかにバーストモードの箒と言えどそう簡単にはこれない筈だ」

一夏「だ、大丈夫かなあ……」

直人「ほら、優希。こんなパソコンに向うしか能の無い現実駄目人間作者の言う事なんか真に受けるな」

優希「うぅ、はい」

作者「くっ、俺の手で生み出されたくせに容赦ねえ。一夏、次！！」

一夏「逆切れすんなよ……えーっと、次で最後だ。こもも様より、凶鳥の名を継ぐＩＳを扱う少年。冷静な表面の内側に熱いものを秘めるムッツリスケベ野郎。【ＩＳ　～インフィニット・ストラトス～　バニシング・トルーパー】の主人公、クリスこと、クリストフ・クレマン！」

クリス「ムッツリスケベって、唐変朴のシスコンに言われたくないな」

一夏「それ俺か！　俺の事か！！」

作者「まあまあ。とりあえず以上、この五人の参加者で執り行いたいと思います。

直人「皆、こんな馬鹿作者につき合わせてしまってすまない」

奏「いや参加するって決めたのはこっちの作者出しな」

夜明「俺は前から好きにして良いって作者が言ってたしな」

優希「うぅ、僕は悪い予感しかしない」

クリス「天命だと思って諦めろ」

作者「はいはい、じゃあそこにそれぞれの衣装が入った袋があるから、一人ずつ持ってって向こうの更衣室で着替えてね」

直人「えーっと、俺はこれだな。奏、優希、お前達のはこれだ」

奏「おっ、サンキュー」

優希「ありがとうございます」

夜明「んで、俺はこれか。ん？　如何したんだ？」

クリス「いや、なんでもない（これ中身知ってるなんて言ったら何て言われるか）」

作者「そんじゃ、ちゃっちゃと着替えてきて」

直人「はいはい」

ここからは更衣室の様子を音声でお送りします。

直人「何か、俺の更衣室広くないか？」

作者「そんな事無いよ～」

直人「まあ良いが。どれ、俺の服は……ほお、これは俺好みだな。変なのじゃ無くてよかった」

奏「俺のはっと……流石腐っても家の作者だ。俺のつぼをしっかり心得てやがる」

夜明「さーって、俺のは……これって、着るの面倒くさそう」

優希「うぅ～、僕はやっぱりこういうのだよ。何度も言うけど、僕は男だーーーーー！！」

クリス「……」

直人「よし、これで着替え終了……ってなんだお前ら！　ちょっ！　こら、やめろ！　人の髪を勝手いじるなーーーー！！」

作者「ふふふ……」

一夏「（一体何されてんだ？）」

奏「よし、まあ、特に着替えにくいもんでも無いしな」

夜明「これでよしっと。おお、自分で言うのもなんだけど、結構似合ってるな」

優希「うぅ、何で僕ばっかりこんな格好を……」

クリス「後はこれを付けて……っと」

作者「準備できたか？」

直人「ああ」

奏「できたぞ」

夜明「俺も」

優希「僕もです……」

クリス「いつでも」

作者「よし、じゃあまずは直人からだ。頼むぞ！」

直人「ああ、わかったよ。こうなった以上、最後までやらせてもらう」

作者「うむ、よい心がけだ。それでは一夏、カーテンオープン！」

一夏「お、おお。カーテンオープン！」

直人「んで、今更だがこれは何の格好なんだ？」

一夏「黒い着物の上に青い上着を羽織ってて、手に持ってるのは…鍔の無い日本刀？　作者、何なんだ？」

作者「うむ。これはアニメ【ぬらりひょんの孫】の主人公、奴良（ぬら）リクオの格好だ。ちなみに一夏が言った鍔の無い日本刀というのはヤ

クザ用語で長ドスと言うものだ」

直人「また作者が選びそうなものだな」

一夏「じゃあ、その髪型って……」

作者「おお、妖怪の時の髪型を再現してみた」

直人「そうか……だから俺の更衣室は広かったのか、変な奴らが入ってきて髪に何か塗りたくられてこの髪型にされたんだが」

作者「まあ似合ってるんだから良いじゃん。さて、このコスプレ大会では元キャラの台詞をアフレコとして言ってもらいます。直人、その紙に書いてある事を言えよ」

直人「わかってるよ。アフレコならよく言ってるしな、別にやる事自体構わない」

作者「それではアフレコ、どうぞ！」

直人「全ての妖怪は、俺の後ろで百鬼夜行の群れとなれ！」

作者「ＣＭでも使われたキャッチフレーズ。このアニメを知ってる人なら、誰もが一度は聞いた事はあるのではないでしょうか？」

一夏「うわー、髪と服装でスゲー似合ってる」

直人「ああ、自分でも怖いな」

作者「まあ、本当はもう一つ言ってもらいたいアフレコがあるんですが、それはまた別の機会という事で、次、奏！」

奏「おお、良いぜ」

一夏「それじゃ、カーテンオープン！」

奏「うーん、流石俺の作者。何処までも俺のツボをわきまえてやがる」

一夏「黒目のシャツにスパッツ姿。これって……」

作者「言わずもがな【新機動戦記ガンダムW】の主人公、ヒイロ・ユイの格好だ」

一夏「でもアイツ、時と場によって色んな服着てなかったっけ？」

作者「まあ、工作員みたいなもんだったからね。でも一番この格好が印象深い気がしてな」

直人「まあ、流石奏だ、似合ってるな」

奏「おお、ありがとう。お前のそれも似合ってるぞ」

直人「おっ、そうか」

作者「はい、それじゃあアフレコをやってもらいましょう」

奏「あの台詞だな、いつでも良いぞ」

作者「それでは、どうぞ！」

奏「ゼロよ・・・俺を導いてくれ・・・！」

作者「おお、これも有名な台詞だ、これも最早説明要らずだな」

一夏「だな、でもコイツの場合、一番の台詞はあれじゃあ」

作者「まあ、作者様からの希望だから、それを捻じ曲げてまでやるものじゃないでしょ。次、夜明」

夜明「オッケー」

一夏「んじゃ、カーテンオープン！」

夜明「どうだ？」

一夏「赤と黒の外套か、これは？」

作者「【Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ】のアーチャーだそうだ。外見だけなら結構似合ってるぞ」

直人「おい、失礼だぞ」

夜明「いいよいいよ、んで、俺のアフレコはこの紙に書いてある事か？」

作者「おお、それじゃどうぞ！」

夜明「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ.
体は剣で出来ている
Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ,　ａｎｄ　ｆｉｒｅ
ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ
血潮は鉄で、心は硝子
Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｂｌａｄｅｓ.
幾たびの戦場を越えて不敗
Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ.

ただ一度の敗走もなく
Ｎｏｒ ｋｎｏｗｎ ｔｏ Ｌｉｆｅ.
ただ一度の理解もされない
Ｈａｖｅ ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ ｐａｉｎ ｔｏ ｃｒｅａｔｅ ｍａｎｙ ｗｅａｐｏｎｓ.
彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う
Ｙｅｔ, ｔｈｏｓｅ ｈａｎｄｓ ｗｉｌｌ ｎｅｖｅｒ ｈｏｌｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ.
故に、生涯に意味はなく
Ｓｏ ａｓ Ｉ ｐｒａｙ, ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅ ｗｏｒｋｓ.」
その体は、きっと剣で出来ていた

作者「同作品の宝具発動時の台詞だそうだ」

一夏「長げー」

直人「舌噛まなかったか？」

夜明「いや」

作者「なら良いけど。次は優希だな、準備は良いか？」

優希「ちょ、ちょっと待ってください。まだ、心の準備が……」

作者「ええい！　後がつっかえてるんだ！　一夏、カーテンオープン！！」

一夏「お、おお。カーテンオープン！」

優希「へ？　うわわ……！？」

優希「うぅ～、あんまりじろじろ見ないでください……／／／／／／」

作者「これは【マクロスF】のヒロイン、ランカ・リーのステージ衣装（星間飛行バージョン）だそうだ」

一夏「い、違和感ねー」

優希「（グサッ）うっ！」

作者「って言うか、似合いすぎ。アンタ本当は性別女じゃないの？」

優希「（グサッグサッ）うぅ！　僕は男です！！」

作者「そんな格好で主張しても説得力無いよ？」

優希「（グサッグサっグサッ）グハッ！？」

直人「おーい優希、大丈夫か？」

優希「うぅ～～～（涙目）」

作者「はいはい、寸劇はそのぐらいにして、ほい、これがアフレコの台詞ね」

優希「……えぇ！？　む、無理ですよ！！」

作者「無理でも言うの！」

優希「うぅ……解りました」

作者「それでは、どうぞ！」

優希「き……キラッ☆……」

作者「……」

優希「うぅ……恥かしい／／／／／／」

作者「……」

一夏「？　作者？」

作者「（プシャアアアァァァァア）」

優希「ヒッ！？」

一夏「お、おい！　大丈夫か！？」

暫くお待ち下さい――（――＾――）――

作者「ふぅ、恐るべき破壊力だった。とりあえず、次で最後だ」

一夏「おお、次はクリスだ、準備は良いか？」

クリス「ああ、こっちは問題ない」

作者「それでは、カーテンオープン！」

一夏「カーテンオープン！」

クリス「っと、どうだ？」

一夏「全身を覆う黒いマントとバイザー、これって？」

作者「【機動戦艦ナデシコ劇場版】のテンカワ・アキトの服装だな。凄い似合ってるじゃないか」

直人「ああ、普段の冷静な所も相まって、中々様になってるぞ」

クリス「そうか？」

作者「はい。それじゃあ、アフレコやってもらいましょう。どうぞ！」

クリス「もう君に、ラーメンを作ってあげることはできない」

作者「劇場版の一幕です。中々切ない場面のようですね」

一夏「ようですねってしらねえのかよ」

作者「スパロボＭＸとＡＣＥ３で何が起こったのかわかるけど、劇場版を見たわけではないので」

一夏「成る程」

作者「と、これで男性部門は終了です」

直人「やっと終わったか」

奏「疲れたな」

夜明「そうか？　俺は中々楽しかったけど」

優希「あの、もう着替えて良いですか？」

作者「そうだね、そんじゃあさっさと着替えてきて」

クリス「ああ」

作者「さて、次は女性部門に視点を移しましょう。是非、お楽しみ下さい！！」

鈴「と、言うわけで、こちらオリキャラだけのコスプレ大会女性部門の会場よ。司会はアタシ、凰鈴音と……」

セシリア「私、セシリア・オルコットですわ。あっ、それと……」

箒「あ、アシスタントの篠ノ乃箒だ。よろしく頼む」

鈴「さて、んじゃちゃっちゃとやるわよ」

箒「その前に一つ良いか？」

鈴「何よ？」

箒「どうして私がアシスタントなんだ？」

鈴「ここに書いてある紙によると、作者曰く「セシリアをアシスタントにすると文句言われるし何を混ぜるか解らないから」だそうよ」

セシリア「失礼な！　私が何か良からぬものを混ぜるとでも！？」

鈴「ちょっ！　アタシに突っかからないでよ！　この紙に書いてあるんだから！！」

セシリア「ふふふ、いいですわ。作者さんには、後でたっぷりとお話してもらいますから……」

箒「しかし、アシスタントと言っても、何をやれば良いのだ？」

鈴「そんな難しい事じゃないわよ。私達が読む紙とか渡してくれればいいから」

箒「まあ、そのぐらいで良いのなら」

鈴「さて、少し脱線しちゃったけど、早速始めるわよ。まずは参加者の紹介から！」

箒「これが参加者のリストだ」

鈴「サンキュー。ええっとまず一人目は、当小説で一番人気の美少女キャラ。雪のように白い肌と髪を持つ無口っ子。【ＩＳ　桜の花纏う真剣】より、風花真白（かざはなましろ）！」

真白「……（ぺこり）」

箒「相変わらず。礼儀正しいな」

真白「うん……」

鈴「ま、もうちょっと愛嬌があれば良いんだけどね。じゃあ次、セシリア宜しく！」

セシリア「わ、私が！？　え、えーっと、当小説ヒロイン候補その一。明るいムードメーカーでありながら、その持ち味を活かしきれてない少女。同じく、【ＩＳ　桜の花纏う真剣】より、秋宮紅葉（あきみやこうよう）！」

紅葉「いやいやいや！　持ち味を活かせないのは作者の所為でしょ！　何私が悪いみたいなこと書かれてるの！」

セシリア「そ、そんな事私に言われましても！」

紅葉「作者、後でお話決定」

鈴「まあ、自業自得ね（作者の）。じゃあ、次行くわよ。次はこの小説の常連、三月語様から二名。まず一人は、序盤から登場の奏ラバーズ最古参。元気一杯だが、現在病化が進行中のアホっ子、【ＩＳ－インフィニット・ストラトス－　熾天使を駆る少年】から、中咲真琴（かさきまこと）！」

真琴「えー！　何その紹介！！」

鈴「全部真実でしょ。この前そっちの小説で公表されたテストの答案、酷かったわよ」

真琴「うっ……」

セシリア「次の方ですが……こんな紹介した怒りますわよね」

鈴「でもやらなきゃなんないのよ」

セシリア「解ってます。もう一人はラバーズ新参者にしてゼロを扱える唯一（？）の存在。理数系最強、でも漢字は壊滅的の自称万年１４２ｃｍ。同じく【ＩＳ－インフィニット・ストラトスー　熾天使を駆る少年】より、ロロット・オルメス！」

ロロット「ちょっと、何その紹介文！　アタシに喧嘩売ってるの！　開けられたいのね、風穴開けられたいのね！！」

セシリア「ち、違います！　これを書いたのは作者で……」

ロロット「問答無用！！」

鈴「ちょっと落ち着きなさいよ！」

ロロット「うっさい、貧乳！」

鈴「（ブチッ）　なんですってーーーーー！！！！」

箒「鈴、お前まで暴走するな！　ロロットも落ち着け！」

鈴・ロロット「「おっぱい魔神は黙ってなさい！！」」

箒「！！？　貴様らそこに直れ！　緋宵の錆にしてくれる！！」

鈴「来るなら来なさい！　衝撃砲でふっ飛ばしてあげるわ！！」

ロロット「全員まとめて風穴開けてあげるわ！！」

セシリア「ちょっ！　皆さん落ち着いてください！　だ、誰か止めてくださーい！！」

直人「お前ら……何やってんだ」

紅葉「あっ、直人」

真琴「かなちゃんも」

奏「おいロロット！　お前人様のトコまで来て何暴れてんだ！？」

ロロット「うるさい！　邪魔するならアンタにも風穴を開けるわよ！！」

直人「箒も鈴も何があったのか知らんが、暴れるのをやめろ！」

箒「斬る！！」

鈴「一気に吹き飛ばす！！」

ブチッ！

紅葉「あっ」

直人「てめぇら……そんなに暴れてえのか……」

奏「なら……望み通りに……」

真琴「か、かなちゃんがキレた」

真白「直人も……」

紅葉「そ、総員退避ーーーーー！！」

「射干玉（ぬばたま）の闇に光一つ…！！」

「天んんんんからぁぁお塩おおおおおっ！！」

ドゴオオォォォォォン！！

三人「「「ギャーーーーー！！」」」

暫くお待ち下さい＞（＿　＿）＜

鈴「えー、大変お見苦しい所をお見せしました」

箒「面目ない……」

セシリア「鈴さん、箒さん、凄いたんこぶが……」

ロロット「いったーーーーー！」

真白「これが……天からお塩」

紅葉「本当に凄ーい」

鈴「もう、気を取り直していきましょう。最後はサザンクロス様より、燃えるような炎髪灼眼と高校生にあるまじきボディラインを持つ少女。背中に漢気の二文字を背負うそこらの男よりも男らしい、

自称夜明の正妻。【ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼】より、夕暮太陽（ゆうぐれたいよう）！」

太陽「さっき凄い音と悲鳴が聞えたんだが、一体何が起こったんだ？」

紅葉「知らない方が良いかと。それにしても本当に凄い身体つき、羨ましい……」

太陽「そうか？　私から見れば、お前も十分良い体をしてると思うが？」

紅葉「そうかな？」

ロロット「何アンタ達！　その無駄にでかい脂肪！　あてつけ！　アタシに対するあてつけ！！」

鈴「そうよ！　何でアンタ達そんなにでかいのよ！！」

太陽「別に好きででかくなったわけじゃない」

箒・紅葉「うん、うん」

ロロット「むきー！！　寄越しなさい！　半分でいいから寄越しなさい！！」

太陽「虚刀流奥義　飛花落葉！」

ロロット「へブっ！？」

太陽「生憎だが、私の体を好きにして良いのは夜明だけだ」

奏「見事に決ったな」

直人「流石と言うべきかなんと言うか、それにしても愛されてんな、夜明」

夜明「まあな」

太陽「何だ、来てたのか」

夜明「おお」

真琴「大丈夫？」

ロロット「大丈夫なわけ……ないでしょ……」

鈴「約一名死に掛けてるけど、とりあえずこの五人でやるわよ」

セシリア「衣装はそちらの袋にありますので、手にしたらそちらの更衣室で着替えてくださいね」

紅葉「えーっと、アタシはこれね」

真白「私……これ」

真琴「私はこれで、これロロットの」

ロロット「一体何が入ってるのよ？」

太陽「そして、私はこれか」

箒「更衣室はこっちだ。何かあったら私を呼べ、手伝ってやる」

紅葉「オッケー」

真白「うん」

真琴「はーい」

ロロット「解ったわよ」

太陽「心配するな。お前の手を煩わせないさ」

男性部門同様、更衣室の様子を音声のみでお楽しみ下さい。

紅葉「どれどれ……何これ？　ドレスにしては何か質素と言うか、何と言うか……」

真白「これは……軍の制服みたい……」

真琴「私はっと、何だろう……？」

ロロット「何これ？　制服？　ＩＳ学園のじゃないわね、なんなのよこれ？」

太陽「私は……ほう、これはこれは……」

紅葉「着替え終了っと。うーん、中々似合ってるじゃん♪」

真白「出来た……」

真琴「一応着れたけど……何これ？」

ロロット「サイズぴったりね、でも何なのこの服？」

太陽「ふむ、これは私好みだな。夜明に見せたらなんていうのだろうな」

鈴「終わったー？」

紅葉「終わったよー」

真白「私も……」

真琴「私もー」

ロロット「アタシもよ」

太陽「私も終わったぞ」

鈴「よし、それじゃあまずは真白かいくわよ」

セシリア「箒さん。カーテンオープン！」

箒「解った」

真白「……どう？」

鈴「どれどれ、ＴＶアニメ【機動戦艦ナデシコ】のホシノ・ルリの格好だそうよ」

セシリア「普段下ろしてる髪をツインテールにして、可愛いですわね」

真白「そう？」

鈴「そうよ。さて、そろそろアフレコいきましょうか」

箒「これが台詞だ」

真白「うん……」

鈴「それじゃ、ちゃっちゃとやっちゃって」

真白「バカばっか……」

鈴「ルリが言ってる決まり文句ね。『もうこれ本人じゃないの？』

って思うくらい似合ってたわ」

セシリア「そうですわね」

箒「うむ」

鈴「さて、次は紅葉よ。準備は良い？」

紅葉「いいよー」

セシリア「それでは、カーテンオープンですわ！」

紅葉「どうかな？　似合う？」

鈴「まあ、似合ってるか似合ってないって言えば似合ってるわね。所でこれ何なの？」

セシリア「【ティルズ　オブ　エターニア】の、ファラ・エルステッドの衣装だそうですわ」

鈴「ああー、あの押しの強い子ね。まあ、紅葉のキャラにぴったりじゃない」

紅葉「どうもー。で、アタシのアフレコは？」

箒「これだ」

紅葉「どれどれ……オッケー」

鈴「じゃ、どうぞ」

紅葉「うん、いけるいける！」

鈴「これも決め台詞ね、本当よく似合ってるわ」

紅葉「えへへ」

セシリア「さ、次は真琴さんですわよ。準備は宜しくて？」

真琴「良いよー！」

鈴「それじゃ、カーテンオープン！」

箒「カーテンオープン！」

真琴「どうかな？」

鈴「黒いドレスね。これは元ネタ何なの？」

セシリア「【ローズメイデン】の銀様こと水銀燈（すいぎんとう）の衣装ですわ」

鈴「……ああ、なるほどね。ってことはアフレコも大体予想できるわね」

箒「とりあえず渡しておくか。これだ」

真琴「んい」

鈴「それじゃ、どうぞ」

真琴「ジャンクにしてあげる・・・！」

鈴「元キャラがよく言う台詞ね。ついでに真琴本人も言ってるわよ。詳しくは三月語様の小説【ＩＳ－インフィニット・ストラトス－熾天使を駆る少年】を御参照下さい」

セシリア「次はロロットさんですわね、一体どんな格好なのでしょうか？」

鈴「さあ？　とりあえず開けるわよ。カーテンオープン！」

箒「カーテンオープン！」

ロロット「どう、文句ある？」

鈴「これは【緋弾のアリア】に出てくる学校『東京武偵高校』の制服ね」

セシリア「わざわざロロットさんの身長に合う様に作られているようですわね」

鈴「まあ、着れないよりは良いけどね。箒、アフレコの台詞渡して」

箒「ああ、これだ」

ロロット「これに書いてある事を言えば良いのね」

鈴「そうよ。それじゃ、どうぞ！」

ロロット「アンタ、アタシの奴隷になりなさい！！」

鈴「同作品の主人公、神崎・H・アリアの台詞のようね」

セシリア「ようとは？」

鈴「あたしも知らないのよ。あたし達のアニメ・漫画知識は作者のと同じなんだから」

セシリア「り、鈴さん……メタな発言はちょっと……」

奏「んで、何で俺を指差して言ってるんだ？　ロロット」

ロロット「気分よ気分。こういうのはそれっぽく言ったほうが良いでしょ？」

奏「まあ、そうかも知れねえが……」

真琴「駄目ー！　かなちゃんは私のなのー！！」

奏「ぐぼぉ！？」

直人「奏！！」

鈴「何か事故が起こったみたいだけど、気にせず進めるわよ」

直人「ひどいな」

鈴「気にしてたら何時までも話が進まないでしょ。というわけで、最後は太陽よ」

太陽「私はいつでも良いぞ」

セシリア「それではどうぞ！」

箒「カーテンオープン！」

太陽「ふふん、どうだ」

鈴「【Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ】のセイバーの格好だそうよ」

セシリア「本人の髪の色もそうですが、凄く似合ってますわね」

太陽「まあ、元キャラが男装している女性だからな」

夜明「なるほど、太陽にはうってつけってわけか」

太陽「夜明、今夜は覚悟しておけよ」

夜明「……」

鈴「さ、そんなことよりアフレコタイムよ」

箒「これが台詞だ」

太陽「ああ」

鈴「それでは、どうぞ！」

太陽「我が才を見よ！　万雷の喝采を聞け！　座して称えるがよい……黄金の劇場を！！」

鈴「これは宝具発動時の台詞だそうよ」

直人「凄いな、衣装といい台詞といい、ここまで様になってる奴もそうそういないんじゃないか？」

箒「同感だ」

夜明「まあ、太陽だからな」

全員『……納得』

セシリア「さて、これで女性部門も終わりですわ。皆さん、もう着替えてきて結構ですわよ」

紅葉「オッケー」

真白「うん」

真琴「ほーい」

ロロット「解ったわよ」

太陽「もう少し着ていてもよかったんだが、仕方ない」

直人「さて、俺たちは先に出てるか」

奏「そうだな」

直人「じゃ、先に失礼する」

鈴「オッケー」

作者「皆様、お楽しみいただけましたか？　以上で当企画は終……

「「作者ー！！」」な、何だ！？」

ロロット「何よあの紹介文！　アタシに喧嘩売ってるの！　風穴開けられたいの！！」

優希「僕は男です！　女の子じゃありません！！」

作者「煩いなー、これでも飲んでなさい」

優・ロ「むぐぅーーーーー！？！？！？！？」

バタリッ

直人「おい作者！　今二人に何を飲ませた！！」

作者「さて、何でしょうねえ」

奏「おい、これ、酒瓶じゃねえか」

直人「ちょっと待て、この二人が酒飲んだら確か……」

優・ろ「「にゃーん！！」」

奏「ぬおっ！？」

箒「うわっ！？」

直人「奏！　箒！」

夜明「な、何だ？　どうなってんだ？」

直人「優希とロロットはな、酔うと猫っぽくなるんだ」

クリス「何だそりゃ？」

ろろっと「ニャッ！　ニャッ！　ニャッ！」

奏「こ、こら、叩くな！」

優希「うにゃ～」

箒「ど、どうすればいいのだ？」

紅葉「膝の上で甘えるだけだって言うから、とりあえず膝枕してあげたら」

箒「わ、解った……」

優希「にゃ～、ごろごろ」

箒「（か、可愛い……／／／／／／）」

作者「さーて、厄介者が消えたわけで（ポンポン）……なんだ？」

紅葉「作者、ちょっと向こうでお話しようか？」

作者「えっ？　ちょっ、何処へ……あああああああ！！！！」

直人「あー、作者が連行されたので、これで終わりにさせてもらう。
これからも、当小説をよろしくお願いします」

作者「……」

真白「返事が無い……ただの屍みたい」

直人「紅葉、お前何をした？」

紅葉「ん？　何も？」

直人「いや、何もやって無いのにこんなになるわけ……」

紅葉「何も……！」

直人「お、おう……」

ＰＶ数５０，０００ｈｉｔ突破記念特別企画　「オリキャラだけのコスプレ大会」

如何でしたか？　楽しんでいただけたのなら幸いです。

キャラを貸し出していただいた、三月語様、サザンクロス様、こもも様、Ｄ－５様、ありがとうございました。

それと三月語様、Ｄ－５様、勝手にお宅らの小説のネタを使わせていただきました。

もし駄目ならば直ぐに削除いたしますので、お申し付け下さい。

次回の更新はどうなるか解らないので、とりあえず未定と言う事にしておきます。なので来週更新できない可能性もありますので、御容赦下さい。

第十六話　新たな出会い　（金の貴公子）（前書き）

作者「ふふふ、遂に……遂にキターーーーー！！！！」

直人「なっ、何だいきなり！！」

作者「皆様、御待たせしました！　そして私も待ちかねました！
いよいよ、いよいよあの子が登場します！！」

直人「だ、誰だよ、あの子って」

作者「ふふふ、来た来た来た！　遂に来た！！　我が世の春が来た
ーーーーーーーーーー！！！！！」

直人「少し落ち着け！！　車軸の雨！」

作者「グハッ！」

直人「全く。えー、この馬鹿作者に代わり、定時（９時）に更新できなかった事を深くお詫びいたします。それと、今回はパソコンの関係で文章が短く、クオリティが低いと思われるでしょうが、呼んで楽しんでいただけると幸いです。それではどうぞ」

第十六話　新たな出会い　（金の貴公子）

「ふあ～……」

五反田兄妹と友好を深めた次の日。

直人はいつもどおり登校し、席に座っていたが、時々普段はしないはずの欠伸をかみ殺していた。

「どうしたんだ直人？　欠伸なんかして」

「知らん。昨日も定時に寝たはずなんだがな……」

「いつも何時に寝てんだよ」

「7時ぐらいに夕食だろ。8時から9時まで鍛錬して、その後入浴して……大体10時半ぐらいにいつも寝てる」

ここで少し補足を加えるなら、9時半前になると真白が直人の髪の手入れをしにやってくる。

「じゃあ疲れてんじゃねえのか？　俺の訓練にも付き合ってもらってるし」

「俺はそれほど柔じゃねえよ。それより一夏、聞きたい事が二つある」

「何だ？」

話を一旦止めて一夏に向き直ると、その後ろ側に視線を向けて聞

いてきた。

「昨日、箒と何があった？」

「……はあ？」

質問の意図が読めず、思わず一夏はそんな声をあげる。

「いやさ、さっきから箒のお前を見る目が時々違う感じがするからさ、昨日何かあったのかと思ってな」

そう言って直人が再び視線をやると、直人の視線に気付いたのか、こっち側を見ていた箒が慌てて視線をそらす。

昨日、部屋の調整がついたとかで箒が部屋を移動し、晴れて一夏は一人部屋になったのは早朝聞いた。

恐らくその際、何か一夏が失言したのかと思い、聞いてみたのだ。

「いやさ、昨日箒から、今度の学年別トーナメントで優勝したら……」

「ふんふん」

「……付き合ってもらうとか言われてよ」

「ふーん……何？」

一夏の言葉を聞いた瞬間、直人は我が耳を疑った。

「す、すまん一夏、もう一度いってくれないか？」

「だからさ、今度の学年別トーナメントで箒が勝ったら、俺と付き合ってもらうとか言われてさ」

「な、何ー！？！？　お、おわっ！？」

再び聞いた一夏の答えに驚きを隠せず、驚きのあまりそのまま倒れこんでしまう。

後ろには何もなく、そのまま床に頭を打ち付けてしまう。

「だ、大丈夫か！？」

「いてて……それ、本当か？」

「あ、ああ……」

後頭部を押さえながら立ち上がり、直人は事の真偽を確かめる。

特に嘘は言っていないので一夏も肯定の言葉を口にする。

「そっかー、箒がなー……」

普段、男勝りで中々素直になれない彼女の性格を鑑み、改めて驚きの言葉を洩らす。

（いや、でも……コイツの事だからきっと……）

「如何したんだ？」

「いや、なんでもない。それともう一つなんだが……」

そう言うと、直人は周りをきょろきょろすると、一夏と共に頭を

屈めて聞く。

「この空気、何か心当たりあるか？」

「知るかよ」

一夏がそう答えると、二人は揃って、はぁ、と溜息を付いた。

教室に入ってから、クラス内の女子が二人に時々熱視線を送っているのだ。

実はどういうわけか、現在学園内では、「学年別トーナメントで優勝したら、織斑一夏、桜庭直人と付き合える」という噂が広まっていた。

先ほどからその話題で盛り上がっており、先ほどの箒に関する二人の会話も、その喧騒に掻き消されて殆どの生徒には聞えてなかった。

「察するに、箒さんの一世一代の告白を何者かが盗み聞きし、噂として広めたら背びれ尾ひれが付いて直人も巻き込んだ。そんなところかな？」

「そんなところだと思う」

二人の後ろでその会話が聞えていた真白と紅葉を除いては。

「席に着け、ＨＲを始めるぞ」

一組がとある話題で盛り上がっていると、一組担任にして、一夏の姉、直人の師匠である織斑千冬が姿を表す。

するとさっきまで騒がしかった教室が、彼女の鶴の一声……否、鬼の一声によって静まり返り、大人しく自分の席に着く。

「今日は何と、転校生を紹介します！」

教壇に立ってそう言うのは、副担任の山田真耶だった。

（転校生？　またか？）

転校生という単語に、直人はふと疑問が浮かぶ。

先月、中国から鈴が転入してきたばかりだというのに、また転校生が来るのかと、少し疑問に思った。

「……えっ？」

しかし、そんな素朴な疑問も、教室に入ってきた件の転校生を見て吹っ飛び、思わず驚きの声を上げる。

何故なら、入ってきた転校生というのは……

『男』だったからなのだ……

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしくお願いします」

一組全員がフリーズする中、転校生、シャルルは礼儀正しく挨拶をする。

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を……」

『キャーーーーー！！！！！』

「えっ！？」

説明中、教室に響き渡る黄色い声に、思わずシャルルも面食らってしまう。

そして、黄色い声を発した女子一同の興奮は頂点に達していた。

「男子！　三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！！」

最早この興奮は留まる所を知らないのではないか？　と、思うくらい騒ぎ立つ女子一同。

まあ、ＩＳ学園、ひいてはＩＳという存在の特徴を考えれば、この興奮も理解できないものではないのだが。

「騒ぐな静かにしろ！」

とここで、鬼教師千冬が一喝し、ようやく静けさを取り戻す。

「今日は二組と合同でＩＳ実習を行なう。全員着替えて、第２グラウンドに集合。それと織斑、あと桜庭」

「はい」

「何でしょうか？」

授業連絡の後、千冬は一夏と直人を呼び、二人もそれに反応する。

「デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だしな」

「あっ、はい」

「委細承知」

二人は特に断る理由もない（あっても抵抗は無駄だが）ので、二つ返事で了承する。

「君達が織斑君と桜庭君だね。初めまして、僕は……」

「ああ、悪い、自己紹介は後回しだ。一夏」

「おお。行こうぜ、女子が着替え始める」

シャルルの自己紹介を遮り、直人が名前を呼ぶと、一夏がシャル

ルの手を引っ張って三人で教室を出る。

「俺たちは、アリーナの更衣室で着替えだ。実習のたびにこの移動だから、早めに覚えてくれよな」

「まあ、そう直ぐに慣れないだろうけど、これからこの三人で移動する事になるだろうから、そう心配するな」

「う、うん……」

廊下を移動しながら一夏が説明し、直人が今後の事を話、心配ないと言う。

だが、当のシャルルは何処か落ち着きがなかった。

「何だ、そわそして。トイレか？」

「ち、違うよ」

と、何かいいかけたその時だった。

「あっ！　噂の転校生発見！」

「しかも織斑君と桜庭君と一緒！」

何処からか噂をかぎつけた他のクラスの生徒達が集まり始める。

「皆、こっちよ！」

「者どもであえであえー！」

「……ここは何時から武家屋敷になったんだ？」

そんな直人のぼやき半分の突っ込みも、どんどん集まってくる女子達の騒ぎ声に掻き消されて行った。

とここで一夏と直人は偶然開いてる横道を発見する。

「行くぞ！」

「おお！」

「う、うん」

直人の言葉を合図に、三人は横道に入ってさっさとアリーナへ向う。

「何で皆あんなに騒いでるの？」

「そりゃ、男でＩＳを動かせるのって、今のところ俺たち三人しかいないからな」

「えっ？　……ああ、そっか」

「とにかく急ぐぞ、一時間目から出席簿は御免被りたいからな！」

直人の言葉に一夏も激しく同意し、三人はそのままアリーナに向って走り去って行くのだった。

「何とか振り切ったな」

「ああ」

ここはアリーナの更衣室。
あの後も他のクラスや上級生の追撃をかわし、何とかこの更衣室に辿り着いた。

「御免ね、いきなり迷惑掛けちゃって」

少し疲れ気味の二人を見て、シャルルが謝ってきた。
あの騒がしさの原因が自分にあると解って、申し訳ない気持ちになっていた。

「いいって。それより助かったぜ。この学園に男二人は辛いからな」

「そうなの？」

「ああ。お前も直ぐに解るよ、あの好奇の視線は結構辛い」

と、経験者二人の体験談を聞き、その時のやつれたような顔を見て、シャルルも苦笑いを浮べる。

「まあ、とにかく、これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って

呼んでくれ」

「俺は桜庭直人。直人って呼んでくれて構わない」

「うん。よろしく一夏、直人。僕の事もシャルルでいいよ」

と、自己紹介もそこそこに、ＩＳ学園で二人しかいない男子は、新たな男子クラスメートであるシャルルと友好を深めるのだった。

おまけ

着替え中の教室にて。

「うーん……」

「如何したんだ？　紅葉」

「いやさ、あの転校生君の事なんだけど……」

「転校生？　確か、デュノアだったか？」

「うん。何かどっかで聞いた覚えがあるんだよねえ」

「知り合いか？」

「そうじゃないんだけど、デュノアって名前が聞き覚えあって。確か、実家の関係で……（ガクッ）」

「なっ！？　ど、如何した！！」

「御免。実家の事思い出したら、ちょっとあの甘甘空間の事を思い出して、胸焼けが……」

（い、一体どんな実家なんだ……？）

胸を押さえながらｏｒｚになってる紅葉を見て、そう思わずにはいられない箒だった。

第十六話　新たな出会い　（金の貴公子）（後書き）

桜爛の間

作者「何とかできた、そして遂にシャルルが来たー！！」

直人「作者。お前そんな趣味が……」

作者「違うからね！　そっちの趣味はないからね！！」

直人「まあ、そんな事は如何でもいいとして、学校に三人目の男子、少しは俺たちも気が許せそうだよ」

作者「まあ、今はそれで良いだろうけどね」

直人「ん？　何だその言葉、妙に引っ掛るが」

作者「んーや、なんでもない。さて、それより、いつもの目安箱、今回も常連、三月語様から二つ頂いた。まずは一つ目」

『原作にもあった『弾マリオ現象』はあったのか？』

直人「何だ？　この弾マリオ現象って？」

作者「原作で、蘭に睨まれて縮こまってる姿を、一夏があの有名な紅い帽子の髭のおっさんに例えた事を、三月語様が私的に名付けたそうだ」

直人「なるほど、いいえて妙だな」

作者「んで、どうだった？」

直人「縮こまってる風ではなかったが、たじたじだったな。あれだけで解ったよ、コイツは妹に頭が上がらないんだなって」

作者「とのことです。では次」

『『〇〇は俺の嫁』とか言えるものはあるか？』

直人「何だこれ？」

作者「要するに、この子は自分の嫁だ！　って言うほど好きな人とかいるかって奴だな」

直人「奏にとってのルティア（シャワーズ）みたいなものか？」

作者「まあ、そうだな」

直人「いない」

作者「即答かよ」

直人「だってなあ。真白は旅仲間で妹みたいなもんだし、箒、紅葉、鈴は幼馴染、セシリアは仲良くしてもらってるクラスメート、としか思ってないからな」

作者「はあ。とまあ、こんな感じです。三月語様、いつも御質問、ありがとうございます！」

直人「次はアフレコ委員会か、だれがするんだ?」

作者「今回も三月語様からのリクエストで、するのは君だ」

直人「わかった。どれどれ……」

作者「それでは、どうぞ!」

直人「Ｓｔｏｐ ｉｔ，Ｒａｙ・・・ Ｅｖｅｎ ｉｆ ｙｏｕ ａｒｅ ｆａｃｉｎｇ ａ ｂｉｔｔｅｒ ａｓｐｅｃｔ ｏｆ ｌｉｆｅ・・・ Ｄｒｕｇｓ ａｎｄ ｍｕｒｄｅｒ ａｒｅ ｆｏｕｌ ｗｉｔｈｏｕｔ ａｎｙ ｅｘｃｕｓｅ・・・ ｄｅｓｅｒｖｅ ａ ｒｅｄ ｃａｒｄ ｆｏｒ ａ ｌｏｓｅｒ・・・」

（訳：ダメだよ、レイ・・・ たとえどんなに辛く悲しい事があったとしても・・・ 麻薬と犯罪はやっちゃならねー反則（ファール）・・・ みっともねーレッドカードだよ・・・）

作者「【名探偵コナン】のコナンの台詞だそうだ」

直人「英語か……」

作者「うん。マンなら誰でもいいとの事だったんだけど。正直、一夏には無理なんじゃないかと思い。君にやってもらった」

直人「同感だな」

作者「さて、ここでこの小説を呼んでもらってる皆様に最終通告です。現在、真白のＩＳの名前と肩部武装アンケート及びアイデア募集を行なっています」

直人「詳しい事は、第十四話の後書に載っているのでそちらを参照にしていくださし」

作者「期限は今日中ですので、感想でもメッセージでも、どちらでも良いので御応募下さい」

直人「さて、次回でアニメ六話も終わりか」

作者「おお、そして次回登場はあの眼帯娘。そして、一組の教室で一波乱あり！」

直人「何？　どういうことだ？」

作者「それは次回のお楽しみ！　それではまた次回ー！」

第十七話　新たな出会い　（銀の冷氷）（前書き）

作者「今回でアニメ第五話も終わりです」

直人「それはいいんだが作者、そろそろ夏季休講期間が終わるが、多少は勉強したか？」

作者「……（プイッ）」

直人「目をそらすな！！」

作者「ま、それはさておき、早ければ９月１６日かその前日あたりで我が城（一人暮らし）に戻れるかもしれないので、実家のパソコンでの執筆は、恐らく来週の水曜で終わるかもしれません。そうなれば、この遅いパソコンでの執筆ともおさらばです！　これまでの執筆などで学んだ事を元に、更なる精進をしたいと思いますので、応援、よろしくお願いします！！」

直人「それで、勉強はどうなんだ？」

作者「（プイッ）」

直人「だから目をそらすな！！」

第十七話　新たな出会い　（銀の冷氷）

更衣室で着替えを終えた一夏、直人、シャルルの三人は、他の女子達と共にグラウンドにいた。

二組と合同ということで、当然だが、いつものメンバーに加えて鈴の姿もあった。

「今日から実習を開始する」

『はい！』

千冬のかけ声に、その場にいる全生徒が返事をする。

「まずは実演をしてもらう。凰！　オルコット！」

「「はい！」」

「専用機持ちなら直ぐに始められるだろ、前に出ろ！」

千冬かやお呼びが掛かったのは、代表候補生である鈴とセシリアだった。

「はぁ、めんどいなあ。何でアタシが……」

「何か、こういうのは見せ物みたいで気が進みませんわね……」

しかし、お呼びが掛かった当の二人は、片や面倒くさそうに、片や気乗りしない様子で前に出る。

そんな二人を見て、呆れ気味の千冬が叱咤する。

「お前ら少しはやる気を出せ……あいつらにいいところ見せられるぞ（ボソッ）」

「「っ！！？」」

後半は、当人達にしか聞えない声だったため他の生徒は聞こえてないが、それを聞いた二人の態度は一変する。

「やはりここはイギリスの代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の差を見せるいいチャンスよね、専用機持ちの！」

いい所を見せるチャンス。そういわれた二人は俄然やる気を出す。

現金と言ってしまえばそれまでかもしれないが、気になる相手にいいところを見せたいと思うのは、人間心理として当然である。

まして二人は恋する女子高生、その気持ちは尚更強かったりする。

「うわー。織斑先生、自分の弟と弟子をだしに使ったね」

二人の様変わりした反応を見て、紅葉は千冬が何と呟いたのか容易に想像がつき、ぼそりと呟く。

「ガフッ！？」

刹那、紅葉の眉間に黒い出席簿が炸裂する。

「秋宮、何か言ったか？」

「い、いえ……なんでもありません」

眉間を押さえながら、紅葉は若干涙目になって答える。

その姿に、一夏や直人、箒をはじめとして、その場にいた生徒全員が、「ご愁傷様」という視線を紅葉に送ったのだった。

「それでお相手は？　鈴さんとの勝負でも構いませんわよ」

「こっちの台詞よ！　返り討ちにしてあげる」

「慌てるな馬鹿ども、対戦相手は……」

千冬が大戦相手を発表しようとした、その時……。

「ぁぁぁあああああ！！？」

悲鳴と共に、上空から何かが高速で地面に向ってきてる。

「あれって……山田先生？」

「だね……」

直人が目を凝らしながらポツリと呟くと、紅葉の後ろにいた真白もそう呟いた。

「ど、どいてくださ～～～～～～い！！」

そしてその間も、山田先生は絶賛垂直降下……否、垂直落下中であった。

「なんか、やばそう……」

「三十六計逃げるに如かず！！」

「総員退避ー！！」

真白がポツリと呟いたのを皮切りに、直人はすぐさまその場を離れ（シャルルの手を引くのを忘れず）、紅葉は生徒全員に退避指示を出す。

程なくして、山田先生はそのまま地面に激突し、噴煙が舞い上がるが、幸い巻き込まれた生徒はいなかった。

約一名を除き……。

「ふぅ、間一髪だった」

「ねえ直人。一夏は？」

「……あっ」

シャルルに言われて気づくも、時既に遅しだった。
山田先生の墜落地点、もっと言えば一夏のいた地点には、未だに噴煙がもくもくと上がっている。

「まあ、大丈夫だろう。アイツああ見えて結構タフだから」

少し考える動作をした後、そう結論付ける直人に、シャルルは冷や汗を垂らしながら噴煙巻き起こる地点を見つめる。

しばらくして噴煙が晴れるとその中心地では……

一夏が山田先生を押し倒し、胸を鷲掴みにしているかのような構図ができていた。

「おー、これが世に言うラッキースケベってやつか。いやあ、一夏君同じクラスだと学ぶ事が多いな～（ー∀ー）ニヤニヤ」

「って言うか、あれ確実に山田先生のほうがぶつかったんだよな？だったら普通逆じゃないのか？　何で一夏が上に乗っかってんだよ」

「さあ……」

中心地の様子を見て、紅葉は楽しそうにニヤニヤ顔で呟き、直人は構図が逆になってる事に呆れ顔になりながら呟くと、隣にいた真白が首を傾げる。

一方、注目の的となってる件の二人だが、一夏は困惑した様子なのだが、山田先生はどういうわけか頬を赤くして何かぶつぶつ呟いていた。

「って言うか一夏、何時まで固まってる心算だ！　さっさと退いてやれ！」

「わ、解ってるって！」

暫く硬直状態だったのを見かねた直人が叫ぶと、一夏も再起動して起き上がる。

「いぃちかーーーーーーーー！！」

しかしその直後、怒り心頭の鈴が双天牙月を連結させ、一夏目掛

けて投擲する。

「ってちょっと待て鈴！　お前一夏を殺すつもりか！？」

「鈴なら、やりかねない」

「ってそんなこと言ってる場合じゃないからね！？」

まさかの事態に三人は漫才じみた会話を交わしてる間も、なお双天牙月は一夏目掛けて飛んでいく。

ＩＳ学園で殺人事件発生。

誰もがそう思った瞬間、突如銃の発砲音が聞えたと思ったら、双天牙月が軌道を逸らして地面に突き刺さっていたのだ。

そして、それを実行したのは……。

「大丈夫ですか、織斑君。怪我はありませんか？」

山田先生だった。

「は、はい。ありがとう、ございます」

突然の事に、一夏も驚きを隠せず、御礼もしどろもどろになる。

他の生徒もそれは同じで、普段と違う彼女の一面に、驚きを隠せ

ないでいた。

「山田先生は、元代表候補生だ。あれぐらいの射撃は造作もない」

「む、昔の事ですよ。それに代表候補生どまりでしたし」

愕然としている生徒達に、千冬は山田先生の経歴の一端を口にする。

それに対し山田先生は、謙遜しながらそう言う。

「さて小娘ども、そろそろ始めるぞ」

「えっ？　二対一でですか？」

千冬の言葉に、セシリアが疑問を口にする。

今の話を総合するに、実演はこの三人、しかもセシリアと鈴の二人掛りで山田先生と戦うという事になる。

「いや、流石にそれは……」

「安心しろ、今のお前達ならすぐ負ける」

いくら教員相手とは言え、二対一で戦う事に鈴は抵抗があるようにいうが、千冬がそういったので二人はむっとなる。

「では……始め！」

そして、千冬のかけ声と共に、三人は上空へ飛んでいった

結果だけを述べると、専用機と訓練機、二対一というアドバンテージがあったにも拘らず、山田先生の勝利に終わった。
流石元代表候補生と言うべきなのか、山田先生は二人の攻撃を難なくかわし、二人が衝突した所に一撃を放ち、見事二人を撃墜したのだった。

しかも、撃墜された当の二人はというと、「そっちが悪い！」と、言い争いを始める始末だった。

「不毛だな」

「底が浅い」

「程度が低い」

「醜い醜い」

上から順に、直人、箒、真白、紅葉がそう呟くのだった。

「これで諸君にも、教員の実力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

そしていがみ合いを続ける代表候補生二名を放置し、千冬が生徒全員にそう言う。

「次に、グループに分かれて行動してもらう。リーダーは専用機持ちがやる事、では別れろ！」

この号令の直後、一夏、直人、シャルルの所に女子達が集中した為、出席番号順に並ぶよう指示されたのは言うまでもない事だった。

「……どういうことだ」

授業が終わって昼休み、箒は憮然としていた。

授業中、一夏と同じグループになった箒は、その最中に一夏と一緒に昼食をとろうと言った。

無論、一夏にも断る理由がなかったため二つ返事で了承、箒は「よし」っと小さく喜んだ。

ところが、いざ昼休みになってみると、一夏は他の顔見知りメンバーを連れてやって来たのだ。

このため、一夏と箒は当然として、直人、真白、紅葉、セシリア、鈴、そしてシャルルの計八人が集まってお昼を取っていた。

ちなみに現在一行がいるのは屋上、この時間帯は弁当もちの女子がそれなりに集まっている筈なのだが、おそらくシャルル目当てで食堂に集中しているのだろう、屋上はこの八人の貸しきり状態となっていた。

「大勢で食ったほうが美味いだろ」

それでもって、このメンバーを連れてきた一夏の理由がこれだ。

本人に悪気はないのだから余計にたちが悪い。

「それに、シャルルは転校してきたばっかりで、右も左も解らないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

そして、一夏があげたもう一つの理由もこれまた理に適っているため、箒はそれ以上何も言えなかった。

「箒、諦めろ。一夏はこういう奴だ」

「解っている。解っているが……」

怒りに震える箒に、心中を察した直人が肩に手を置いて落ち着かせる。

そして彼女の意図を理解した真白とセシリアも申し訳無さそうな視線を送るが、無論、この場に居る誰にも責任はない。

強いてあげるなら、彼女の意図に気付かず無邪気にこういう事をする、一夏の鈍感さだろう。

「えーっと、本当に僕が同席して良かったのかな？」

一方でこの空気を呼んだのか、シャルルがそう聞いてきた。

まあ、顔見知りばかりの面子のなかで、自分だけ今日転校してきたばかりなので、居て良いのか思うのも無理からぬ事だった。

「いやいや、男子同士仲良くやろうぜ。今日から部屋も一緒なんだし」

遠慮がちに聞くシャルルに、一夏は事もなさげに言う。

ちなみにさっき言った部屋割りについてだが、これは教師達の間で長い議題となったのは別の話。

「ありがとう。一夏って優しいね」

そんな一夏にお礼を言うシャルル。

その笑顔に、同性ながらドキッとしてしまう一夏だった。

「うぅ～～～」

「紅葉、大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないよぉ……まだ眉間が痛い……」

一方で、授業中に食らった出席簿の痛みが未だに引かない紅葉に鈴が心配する。

「って言うか何なの？　聞えないように言った筈なのに、織斑先生って地獄耳！？」

「かもな」

眉間を押さえながら文句を言う紅葉に、心当たりがあるのか直人はそう呟き、一夏は苦笑していた。

「それより早く食わないか？　あまりもたもたしていると、授業に遅れるしさ」

「うん……」

直人の言葉に真白が同意、他の面々も同じ思いだったため、早速各々が持ってきた弁当を取り出し始める。

「一夏、はいこれ」

「おっ、酢豚だ！」

「そ、今朝作ったの。食べたいって言ってたでしょ」

鈴が持ってきた弁当箱には、彼女の得意料理である酢豚が入っていた。

「直人さん。実は私も、今朝はたまたま早く目が覚めてしまいまして、こういうものを作ってみましたの。よかったら、召し上がってください」

そう言ってセシリアが持ってるバスケットを開けると、その中にはサンドイッチが入っていた。

「ほお、それじゃ、少しもらうぞ」

そう言って直人はサンドイッチを一つ手に取り、それを口に運ぶ。
ところが、それを口にした途端、直人の顔面が蒼白になる。
見た目は非常によいのだが、その味はなんとも形容しがたいものだったのだ。

「如何ですか？　どんどん召し上がって構いませんよ！」

「あ、ああ……また今度もらうよ。ほら、俺も弁当持ってきたし」

しかし、よほど自信があるのか、嬉しそうに言ってくるセシリアに、はっきり「不味い」という事はこの男にはできない。
やんわり断りを入れると、持ってきた弁当の包みを取り出す。

「ん？　何であんた二つも包みがあるのよ？　って言うか、あんた料理できたの？」

するとそれを不思議に思った鈴が聞いてくる。
真白以外の面々も、直人が料理してるイメージが無いため、その疑問に激しく同意していた。

「失礼な！　何時までも昔のまんまだと思うなよ」

しかし、それを心外に思った直人は二つの包みを解く。
一つにはおにぎりが三つ入っており、もう一つには普通に弁当箱が入っていて、中身は鮭の塩焼き、ほうれん草のおひたしなど、和風な料理が所狭しと入っていた。

「あ、あんたこれ全部作ったの？」

「ああ、まあ毎日ってわけじゃないけどな。ほれ、一夏」

「おっ、サンキュー」

その見栄えのよさに一同が驚愕してる最中、直人はおにぎりの一つを一夏に渡す。

「で、でも、味の方は如何かしらね？　直人、一つもらうわよ」

「わ、私も一口宜しいでしょうか？」

「ああ、別に良いぞ」

了承を得て、二人は直人の弁当のおかずを口に運ぶ。

「……お、美味しいですわ」

「ま、負けた……」

二人はその味を認識した途端、何か負けた気がしてｏｒｚとなるのだった。

「おお、直人のも凄いけど、真白ちゃんのも美味しそう！」

「そうかな？」

気落ちしてる二人はさておき、真白の弁当の中身を見た紅葉が再び驚きの声を上げる。

直人のに比べると中身は普通なのだが、玉子焼きに小さめのコロッケ、ブロッコリーにプチトマトと、カラフルで見栄えがよく、栄

養バランスも考えられてる内容だった。

「というか紅葉、お前はそれでいいのか？」

「ふえ？」

一方で、一夏に弁当を食べてもらっている箸が、紅葉の手に持ってるものを見てそう呟く。

というのも、この場に居る八人のうち五人が弁当を持ってきているのに対し、紅葉は購買部で買ってきたパンと、自販機で買った牛乳という、明らかに「それ朝飯だろ？」という声が聞えてきそうなものだった。

「いや、でもさあ、お弁当作ってる暇もないしさ。とりあえず、お腹に入れば大丈夫だと思うから」

「だからってそれはないだろ、いくらなんでも体が持たないぞ。ほれ」

「えっ！？」

本人は大丈夫と言いながらも、流石にお昼がパンと牛乳だけというのは不味いと思った直人は、鮭の塩焼きの身を解して紅葉の目の前に持ってくる。

「ん？　食べないのか？」

「い、良いの？」

「いいに決まってるだろ。ほら」

突然の事態に困惑していたが、紅葉は箸渡ししてきたそれを口に入れる。

「「ああっ！！？」」

とこれに、セシリアと鈴が同時に素っ頓狂な声を上げた。

何故鈴が声をあげたのかというと、実はほぼ同時に、一夏が唐揚げを箒の口に運んでる所を目撃したからなのだ。

「い、いいものだな」

「だろ？　本当に美味いよな、この唐揚げ！」

「唐揚げではないのだが……いいものだ」

一夏に食べさせてもらった事が相当嬉しく、箒の顔は綻んでいた。

「どうだ？」

「お、美味しいよ？」

「そうか、それは良かった」

（うわぁ、直人に食べさせてもらっちゃった……えへへ／／／／／／）

一方の紅葉も、直人に食べさせてもらった事が嬉しくて、若干悦に浸っていた。

それを横で悔しそうに鈴とセシリアが見つめる中、シャルルがこ

こで意図せずして爆弾を投下する。

「あ。これって、日本で恋人同士がやるっていう、「はい、あーん」ってやつなのかな？　仲睦まじいね」

「シャルル、それ今禁句」

「えっ？」

真白がそう言うが、時既に遅し。

「な、何でこいつらが仲いいのよ！」

「そうですわ！　やり直しを要求します！！」

先ほどの爆弾発言に、鈴とセシリアが食って掛かる。

すると、この原因を作ったシャルルが……

「それなら、皆おかずを一つずつ交換しようよ。食べさせあいっこなら良いでしょ？」

このシャルルの妥協案により、その後、屋上の一角で食べさせあいっこが始まったのだった。

余談だが、この食べさせあいっこの際、真白の弁当を食べた一夏とシャルルは絶賛し、箒はその味に驚愕し、鈴とセシリアは再びｏｒｚとなり、紅葉は「今度真白ちゃんに料理習おうかな？」と考えたのだった。

シャルルが転向してきた次の日。

「ええっと……今日も、嬉しいお知らせがあります。このクラスに、また新しいお友達が増えます」

教室に入ってきた山田先生は、新たにやって来た転校生を紹介する。

「ドイツからやって来ました、ラウラ・ボーデヴィッヒさんです」

その転校生、ラウラ・ボーデヴィッヒの姿に、一同は目を奪われていた。

身長はお世辞にも高いとはいえないが、顔は間違いなく美人の部

類に入り、長い銀髪が、よりそれを際立たせる。
だが、クラス一同の注目を引いているのは、彼女の左目を覆う眼帯だった。
この容姿に加え、二日連続の転校生という事で、あちこちで囁き声が聞える。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「（教官？）」

千冬の言葉に、ラウラは短く呟くが、その際に千冬の事を「教官」と呼んだ事に、一夏と直人が共に疑問を抱いた。
尤も、一夏はその疑問が口に出ていたが。
そんな中、一言で自己紹介を終えたラウラが、そのまま一夏の所にやってくる。
そして、何の迷いもなく、右手を一夏の顔目掛けて振る。

だが、その右手が一夏の頬に当たる寸前、その手は別の手に止められていた。

「……なんだ貴様」

邪魔された事にラウラは邪魔した人物を睨むが、その人物、直人は怒気を帯びた声で返す。

「なんだってのはこっちの台詞だ、いきなり初対面の相手を殴ろうとするなんてどういう了見だ？　それとも、ドイツでは人を殴るのが挨拶なのか？」

その怒気をはらんだ瞳に、教室に居る大半の生徒達は戦々恐々としていた。
その怒気は紛れもなく、クラス代表決定戦の時、一夏を笑った全員に、そしてセシリアに対して放ったそれと同じだった。
セシリアにいたっては、あの時の事を思い出したのか、顔が少し青ざめて震えていた。

しかし、そんな怒気を意にも介さず、ラウラは直人をまじまじと睨む。

「灰色の髪と瞳、つり上がった目つき……そうか、貴様が桜庭直人か！」

「何？　どうして俺の名を……」

知っていると聞こうとしたその時、ラウラに殴られた。
さっきと違って意識が向いていなかったため、防ぐ事もできず、そのまま受けてしまう。

「私は認めない。貴様があの人の弟だと、そして貴様があの人の一番弟子などと、認めるものか！」

一夏に、そして直人にそういった後、ラウラは自分の席に向う。

「おい！　ちょっと待……」

が、直人が殴られて、今度は一夏が黙っていなかった。
ラウラを呼び止め、文句を言おうとしたその瞬間……

教室全体が凍りついた。

「あれっ？　何か寒くない？」

「そうだね、さっきまで涼しかったのに？」

「せ、先生。ちょっとって言うか、かなり寒いです！」

「おかしいですね？　冷房が効きすぎているんでしょうか？」

突然の体感温度低下に、生徒達、そして山田先生が困惑する。

実際は教室の気温は全く下がっていないのだが、クラスに居るほぼ全員が凍えるような、氷点下の中に居るような寒さと冷たさを感じていた。

しかし、一夏と千冬、そして直人は、何故こうなったのか理解した。

そしてそれは、一夏と直人の後ろに居た。

「な……なんだ貴様！」

「……」

それは真白だった。

真白は、一夏が文句を言おうとラウラを呼び止めようとした瞬間、そのラウラを凄まじい怒気と殺気を込めた視線で睨みつけていた。

ラウラも強がって睨み返してはいるが、真白の視線はそんな強がりさえ吹き飛ばしてしまうほどの殺意をはらんでいた。

彼女の殺気に当てられたラウラは、まるで足が凍り付いているかのように動かなくなり、若干ながらそんな真白に恐怖さえ抱き始めていた。

もし、殺気というものが実体を持っていたら、ラウラは間違いなく穴ぼこか、原形も留めないほどに切り刻まれている事だろう。

それほど、彼女の放つ殺気は鋭く感じられた。

「真白、やめろ」

暫く沈黙が続いていたが、やがて直人が口を開いた。

「いや……」

だが、決してその殺意の視線をラウラから放そうとせず、普段なら素直に聞く直人の言葉を拒否する。

「みんなが困ってる」

「でも……」

「俺は大丈夫だ。だからもうやめろ。なっ」

尚も渋る真白に、子供をあやすかのように直人は説得する。

「……解った」

暫く黙っていたが、納得できない思いを持ちつつ、真白はラウラに送っていた殺気を込めた視線を引っ込める。

すると、教室の体感温度も通常に戻ったのだった。

そしてラウラも、動けるようになったと認識するや、早足で自分の席へ向かい、着くのだった。

この日、一年一組に暗黙のルールが出来上がった。

『風花真白を怒らすべからず』というルールが。

第十七話　新たな出会い　（銀の冷氷）（後書き）

桜爛の間

作者「と、言うわけで、実地演習とお昼、そしてラウラ登場の回でした」

直人「定時に更新できなかった事を、心よりお詫び申し上げます」

作者「さて、今回は後半に専ら力を入れました。如何だったでしょうか？」

直人「ボーデヴィッヒだったか？　あいつ、何であんなことしたのか知らんが、墓穴を掘ったな」

作者「確かに、教室全体を凍らせるほどの殺気って、自分で書いといてなんだけど、末恐ろしい子だな」

直人「はぁ、これから如何なっていくんだ？」

作者「さあ？　さて、それでは後書コーナー「直人の目安箱」！
今回も三月語様からいただきました！　まずはこちら！！」

1．奏的な感じで『ポ○モン』が実態・擬人化した時、どんなのがいいか？

1．セイバー（ＦＡＴＥの）的な感じの、『高貴』な性格のハブネーク

2．真白的な感じの『無口』な性格のピカチュウ（ツインテ）

3．幸俚のヴィルミナに代表される、『お嬢』な性格のキュウコン

なお、ここで選択された解答は、次回完全一致な物をお送りいたします

作者「『なお、ここで選択された解答は、次回完全一致な物をお送りいたします』だって」

直人「そうだなあ……真白みたいな感じなら、どう接すれば良いのかわかってるから、2かな？」

作者「との事です。では次！」

2．もし、突然真白が『明日結婚することになった』と言ったら？（のちにウソだと分かったとして）

直人「うーん……多分、驚きのあまり何度も聞きなおすと思うな。嘘だと解ったら脱力するかもな」

作者「怒らないのか？」

直人「怒る云々以前に、１３歳の子供に手を出そうという輩の感性

を疑うな。法律的な事は兎も角として、そいつは社会的に不味い気がするんだよ」

作者「ああ、何となく解るなあ。と、目安箱は今回はこれにて終わり。次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会です！！」」

直人「今回は誰が出てくるんだ？」

作者「えーっとだな……三月語様からのリクエストだ、まず一つは、『寸劇的なものでお願いします』だって。衣装も届いてる」

直人「なんだこりゃ？　って言うか、誰が着るんだ？」

作者「それは……この方たちだ！！」

真白「どうも……」

端午「やっほー！　おっひさー！！」

作者「と、言うわけで、今回は真白と、久々登場黄原端午です！」

直人「霞断月！！」

端午「ギャー！？」

作者「って、登場早々何してるんだ！！」

直人「放せ！　一度こいつを微塵に切り刻まないと気がすまん！！」

作者「ええーい落ち着かんかーーーーー！！！！」

暫くお待ち下さいｍ（＿＿）ｍ

作者「ふぅ、直人を何とか抑えた。さて、着替えも終わったようですし、やってもらいましょう！」

真白「・・・マスター・・・」

端午「ん？」

真白「ビィーム・・・、撃ってくれるかニャ・・・？」

端午「かしこまりニャーっ！！おぶぱっ！！」

作者「えーっと、『カーニバルファンタズム』のネコアルクとネコアルク・カオスだそうだ」

直人「確か、ホームページを見た限りでは、月姫とＦＡＴＥのキャラが登場するＯＶＡだったな」

作者「はい、自分、両方ともウィキで見た程度なので、よくは解っていませんが」

直人「だが、見事な人選だと俺は思うぞ？　こんなキャラ、端午にしかできん」

作者「ええ、我ながら何とネタにしやすいキャラを作ってしまった事だろうか。さて、次は君にやってもらうぞ、はい、衣装」

直人「こ、これを着れば良いのか？」

作者「そうだよ」

直人「わかった」

作者「終わったようなので、それでは始めたいと思います。どうぞ！！」

直人「交わらざりし命に、今もたらされん・・・刹那の奇跡、時を経て、ここに融合せし未来への胎動！　義聖剣！　僕は過去を断ち切る・・・散れ！真神煉獄刹！！」

作者「【テイルズオブデスティニー2】または、【テイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー3】に登場する「ジューダス」の秘奥義連続コンボの台詞だ」

直人「奥義が『魔人滅殺闇』、秘奥義が『義憐聖霊斬』『真神煉獄刹』の二つだったな。だからこんな格好に仮面までつけてたのか、最後の最後で壊れたが」

作者「本場でもそうだったからね。でも自分似合ってたぞ？」

直人「そうか？　まあ、自分では柄じゃないって思ってるが」

作者「まあまあ。さて、今回はここまで」

直人「あっ、それと前回まで応募してた、肩武装案のアンケートについて、お詫びがあります」

作者「ええ、私、肩の武装案と明記してたので、誤解してた方も多かったと思いますが、正しく明記すると、左右のアンロックユニットの事でした」

直人「まったく、ちゃんと明記しないから、読者の方々にも迷惑をかけるんだ」

作者「はい、全くです。というわけで、私の説明不足の所為で、皆様に多大な御迷惑をおかけした事を、この場を借りて、お詫び申し上げます」

真白「でも、もう一つ報告があるよね？」

作者「はい、実は次の話から三週間使って、真白のＩＳの名前についてアンケートをとりたいと思います！」

直人「今からでも良いんじゃないか？」

作者「まあ、そうなんですけど、これから書くアニメ第六話分を書いて、次のアニメ第七話でお披露目しようと思ってるから、次の三話分でアンケートしようかと」

直人「成る程」

作者「と、言うわけで、明日この後書コーナーで、真白のＩＳの名前についてアンケートをとりたいと思います。読者の皆々様、こぞって御参加下さい！」

直人「んで、次はアニメの第六話に突入か。ボーデヴィッヒの事も

あるからな、少し不安だ」

作者「その事なんだけど。次回からの三話は、一夏に主点を置こうと思うんだ」

直人「何？　ってことは……」

作者「うん、君の出番を削るかもしれない」

真白「どうして？」

作者「いやさ、ちゃんとわけがあるんだよ。本当は主人公である君を出したいけど。今後の話しの展開を考えると、どうしても一夏に主点を置かないと書けないんだよ」

直人「まあ、何か事情があるならあまりとやかくは言わないが……大丈夫か？」

作者「やれるだけやってみます。それに今はどうかは知らないけど、前に「一夏の影が薄い」っていう感想をもらったからね。ここらで原作主人公として挽回させてあげようかと」

直人「まあ、とりあえず。一夏、しっかりやれよ」

作者「ま、それは兎も角として、早ければ、次のＩＳ更新で、この実家での執筆は一旦終了となります！　それでは、また次回でお会いしましょう！！」

作者「あれっ？　直人は？」

真白「あそこ……」

直人「弧月双閃！　真空破斬！　虎牙破斬！　紅蓮剣！　雷神剣！　鳳凰天駆！」

端午「おっと、よっと、あらよっと。ほらほら、如何したの～？」

直人「時雨蒼燕流、攻式三の型、遣らずの雨！」

端午「おっと危ない」

直人「唸れ！　鳴神！！」

端午「あらよっと♪」

直人「待ちやがれてめえ！　大人しく斬られろー！！」

端午「へっへー、悔しかったら当ててごらーん！！」

直人「やろーテメーぶっ殺ーす！！」

作者「うわー、ひょっとしたら直人が一番のネタキャラになってしまうかも」

真白「そうならないように気をつけてね？」

作者「誠心誠意を持って善処します。まともである彼のキャラを壊すのは、私も忍びないですからね」

第十八話　特訓模様（前書き）

今回はアニメ第六話目に突入。

まずは一夏の訓練模様。

そして後半、ラウラ登場により、アリーナに二次災害発生。

それと、後書コーナーの方で、今日からアンケートを取りたいと思います。

皆様、こぞって御応募ください。

第十八話　特訓模様

ラウラの行動に端を発した、「一組ブリザード事件」（命名：のほほんさん）から暫く経ち、ＩＳ学園は一応の落ち着きを見せ、平穏に生徒達は授業を受けていた。

まあ、平穏と言っても、学園に三人しかいない男子の存在で、十分慌ただしかったりするのだが、それでもそれを除けば、学園に問題らしい問題はなかった。

ラウラと真白の確執を除いては……

あの事件以降、ラウラが一夏と直人に敵意剥き出しなのは言うまでもない。

廊下ですれ違ったりする際は、必ずと言って良いほど敵意むき出しの視線を送るのだ。

しかし、それも一瞬の事だ。

直人と常日頃行動してる真白は両者と一緒に居る事が多いため、必然的に彼女と目を合わせる事も多く、目を合わせた瞬間、初めて

のときと同様、殺気の籠った視線を彼女に送り、周囲一体の体感温度を氷点下まで低下させる。

そしてその視線を感じるや、ラウラはそそくさと必ずその場を早足で去って行く。

それで済む話なのだが、何分これは二人が顔をあわせるたびに起こるので、一夏や直人を始め、巻き込まれた生徒の中には、「地獄を見た……」、「あれが阿修羅を凌駕するって奴なのね」、などとうわ言を呟きながら保健室に運ばれるものまでいたという。

そして土曜日、この日は午後は完全に解放されている為、多くの生徒が実習に利用している。

当然、一夏達も例外ではなく、今日もいつものメンバーで集まって一夏の特訓を行なっていたのだが……

「こう、ズバー！　っとやってから、ガキン！　ドカーン！　という感じだ！」

擬音ばかりの説明をする箒。

「何となく解るでしょ？　感覚よ感覚。　はぁ！？　何で解んないのよ馬鹿！」

考えるな、感じろ！　と言わんばかりの説明をする鈴。

「防御のときは、右半身を斜め上、前方に5度。回避の時は、後方へ２０度ですわ！」

そして理論重視の説明をするセシリア。

三者三様の説明を同時に聞かされている一夏の反応は。

「率直に言わせてもらう……全然解らん！」

三人の全く違う説明を一斉に聞かされているのだ。

聖徳太子ならいざ知らず、一夏の反応は至極当然のものだった。

「何故解らん！」

「ちゃんと聞きなさいよちゃんと！」

「もう一回説明して差し上げますわ！」

しかし、当の三人は自分たちの説明は全く問題ないと思ってるのか、また一斉に説明を再会する。

これの繰り返しだった。

「うーん、こりゃ徒手格闘が得意な三十後半の少佐でも読んだ方が良いんじゃないか？」

「寧ろ、魔弾の二つ名を持つ、二丁拳銃使いの金髪の副官のほうが……」

「いやいや、ここはやっぱり栗色の髪をサイドポニーにした、白い服の戦技教導官でしょ？」

その様子を見ていた直人、真白、紅葉の三人が、知っている人は知っていそうな三人を挙げつつ、同じ説明を繰り返す三人にあきれ返っていた。

「一夏、ちょっと相手してくれない？　白式と戦って見たいんだ」

とここで、一夏に声を掛けたのは、オレンジ色の専用機に身を包んだシャルルだった。

「シャルル！　解った」

無論、一夏も断る理由がないので、快く快諾する。

「というわけだから、また後でな」

そう言って三人から離れ、一夏とシャルルは模擬戦のため配置につく。

「あれって、ラファールか？」

「うん。色とか形とか大分変わってるけど、確かにラファールだね。カスタム機かな？」

シャルルの専用機を見て、直人と紅葉は、一目でラファールと見

抜いた。
確かに機体色、細部の形状などは異なっているが、それは間違いなく、学園でも使われている訓練用のＩＳ、「ラファール・リヴァイヴ」だった。

「直人ー、合図してくれない？」

「ん？　おお、解った」

とここで、シャルルから開始の合図をして欲しいと頼まれ、それを了承するや、手を挙げる。

「二人とも、準備はいいか？」

「おお」

「うん、いいよ」

「それじゃ……始め！」

合図すると、まず一夏が先制攻撃を仕掛けたところから始まった。
それをシャルルは左腕のシールドで防ぐ。

「あの馬鹿、また馬鹿正直に正面から突っ込みやがって」

一夏の動きを見て、直人は溜息を付きながらつぶやく。

白式の武装は雪片二型のみのため、攻撃するためには必然的に近づかなければならない。
しかし、先制攻撃とはいえ、正面から突っ込むのあまりよろしく

ない。
正面からであれば、防御するなり回避するなり、対処は十分可能だからだ。

「あっ、専用機と言えば……」

模擬戦の様子見てる途中、何か思い出したように真白の方を向く。

「真白ちゃん。あの人からもらったＩＳは如何したの？」

「ん？」

紅葉が聞いたのは、以前ＩＳ学園に現れて騒動を巻き起こした、あの黄原端午から受け取った真白の専用機の事だ。

と言うのも、専用機をもらったのだが、真白がそれを展開してる姿を見た事がないのだ。
この前の実習でも、一応専用機持ちにもかかわらず、直人の班でサポートをしていたのだ。

「まだ、初期化（フォーマット）と、最適化（フッティング）が、済んでないから」

「そうなの？」

「うん。今日、時間を見つけて、やろうと思う」

聞けば、機体の情報を確認していたり、一夏の特訓の為に改善点を調べてたりしてた為、初期化と最適化をする時間がなかったんだという。

しかし、そろそろ学年別トーナメントが迫っており、機体の稼動を見る為に、今日中に行なうとの事だ。

「おっ、二人とも飛び始めたぞ」

直人の言葉に二人が振り向くと、一夏とシャルルは空中に飛び出していた。

そしてシャルルが機関銃を呼び出し、それを一夏に向けて放っていた。

これに対し、一夏はその攻撃を防御していた。

「おいおい、こういうときは動き回ってかわすもんだろ。また馬鹿正直に防ぎやがって」

「当たらなければ如何という事はないのにねえ」

直人と紅葉の言葉は尤もだった。

マシンガンなど、連続で弾を発射するタイプは一発の威力が低い為、動き回っていれば当たってもそれほどのダメージはない。

だが、防御に徹しれば当然弾を全て受ける事になるため、必然的に受けるダメージも大きくなる。

次々と襲い掛かる弾丸に、一夏のシールドエネルギーはどんどん削られていく。

「こんのおおぉぉぉぉ！！」

これに対し、一夏も受けっぱなしではなく、どうにかシャルルに斬りかかる。

しかし、シャルルはこれをひらりとかわし、今度はアサルトライ

フルを呼び出し、一夏に向けて撃つ。
ところがこれを、一夏は再び防御の姿勢をとってこれを受ける。

「だから、どうしてそこで防御するんだ？　アサルトライフルはマシンガンより連射性能が低いんだから、動き回ればまず当たる事はないだろ！」

「なんていうか、一夏君って、言動も動きも本当に馬鹿正直だよねえ」

「うん」

そんな言葉の後、シャルルが何かを発射した。
見た限りでは、この前の実習で山田先生が、鈴とセシリアに向けて放った、グレネードランチャーと思われた。

「決ったな」

「決ったね」

「決った」

三人の言葉と同時に、一夏のいた場所で爆発が起こったのだった。

「つまりね、一夏が勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからなんだよ」

「うーん、一応解ってる心算なんだが……」

模擬戦の結果は、まあ言わずもがな、一夏の負けだ。
模擬戦終了後、何故が勝てないのか、その理由をシャルルから教わっていた。

「この白式って、後付武装（イコライザ）がないんだよね？」

「ああ、拡張領域（バススロット）が空いてないらしい」

白式の装備が雪片二型だけの最大の理由。
それは、先ほど言った拡張領域が空いてないため、後付武装が装備できないのだ。

拡張領域（バススロット）とは、先ほど言った後付武装（イコライザ）を装備する為の容量の事で、これがあれば、空いている容量分、後付武装を装備できるのだ。

「一夏、ちゃんと解ってるんだね」

「まあ、あの二つはわりかし早く覚えてたからな。何て教えたんだ？」

「えっ！？　ふ、普通だよ！　普通に教えたんだよ！　あは、あはは……」

直人に聞かれ、紅葉は何故か誤魔化すように言う。
それもそのはず、実際、一夏がまだ何も解ってなかった頃、紅葉がこの二つを何と説明したのかと言うと。

後付武装（イコライザ）の説明

「要するに、ロボットアニメでモブの機体がマシンガンだったりバズーカだったりを装備してる事あるでしょ？　要はああいうのと同じもの。まあ、有態に言えば普通に使われてる武器ってとこね」

拡張領域（バススロット）の説明

「これはね、パソコンとか、ＨＤＤの容量みたいなものね。パソコンは容量があれば色んなものをダウンロードしたりできるし、ＨＤＤも容量があれば録画を溜め込めるでしょ？　これも同じで、容量があいてる分だけ、この後付武装を量子変換（インストール）できるってわけ」

と、このようにたとえ話の交えてのものなので、真白とは違う意味で解り易かったというのは一夏談である。
しかし、こんな説明をしてたといえば、直人に呆れられるのは火を見るより明らかと思い、紅葉は一生懸命はぐらかしたのだった。

「多分だけど、それって単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の方に容量使ってるからなんだよ」

「ワンオフ？」

「ＩＳが操縦者と最高状態になったとき、自然発生する能力。白式の場合は零落白夜がそれかな？」

「はっはーん。真白と紅葉もそうだけど、お前の説明ってわかりやすいな！」

それはさておき、シャルルは白式の拡張領が空いていない理由と、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）の説明をする。
その際、シャルルの教え方の上手さに、一夏は絶賛する。

「ふん。私のアドバイスは聞かないくせに！」
「あんなに解り易く教えてやったのに！」
「私の理路整然とした説明に何の不満が！」
が、これに箒たちが不満を投げ掛ける。
彼女達にしてみれば、一所懸命に教えてるのに理解できないと言われたのに、シャルルに対してはこれなのだ。
不満を洩らすな、と言うほうがおかしいかもしれない。
だが、これに直人、真白、紅葉の三人は同じ事を思った。
（（（じゃあお前ら（皆）は自分の説明で解るのか？）））
セシリアは理論的であるから、まだある程度できるだろう。
だが、箒と鈴は自分たちのやり方で解るのか、と甚だ疑問だ。
解るならそれはそれで問題な気がするが……
「でも零落白夜って、自分のシールドエネルギーまで攻撃に使う滅茶苦茶な能力だぜ」
「織斑先生が使ってたのと同じ能力だよね？」
「ああ。師匠もそれでモンド・グロッソ大会を優勝したそうだし」
そう、この零落白夜は、一夏の姉にして直人の師、織斑千冬が、現役時代使ってたＩＳと同じ能力なのだ。
「確かにシールドエネルギーを使っちゃうのは厄介だけど、シール

ドを無効化してエネルギーに直接ダメージを与えられるんだよ？十分反則だよ。っていうかこれで制限なかったらチートよチート！」

「いや、そこまで言わなくても……」

紅葉の力説に、一夏も直人たちもたじたじだった。

だが、紅葉の言う事も尤もだ。

シールドを無効化してダメージを与える。

絶対防御により搭乗者が死ぬ事はないが、シールドエネルギーを大きく削ぎ落とせるという点では、間違いなく、現段階最大の攻撃力をほこる事は疑いない。

「でも、姉弟だからって同じ能力になるなんて早々ないんだけどなあ……」

「そうだよねえ、何でだろ？」

シャルルの疑問に紅葉も同意し、他の皆（一夏を除く）も「そう言われれば……」的な顔になって考え込む。

「まあ、そこは開発者なりあの馬鹿なりに調べさせればいいだろ。今の課題は、一夏が射撃武装の特性を理解してないって事だろ？」

が、このまま話を続けていては何時まで経っても先にすすまないと思い、直人が話を戻す。

「あっ、そうだね。じゃあ一夏、ちょっと練習してみようか？」

直人の尤もな意見に同調するように、アリーナに降り立った一夏とシャルル。

射撃用の標的が出現すると、シャルルは自分が使ってたアサルトライフルを一夏に渡す。

「他の武器って、使えないんじゃなかったっけ？」

「普通はね。でも所有者がアンロックすれば、登録してる人全員に使えるんだよ」

説明を受け、納得した一夏はアサルトライフルを受け取る。

「構えはこうでいいのか？」

が、今の今まで雪片しか握った事がないため、いきなり不慣れな銃を握ってしどろもどろになる。

「えっと、脇を締めて。それと左手はこっち。解る？」

そんな一夏をシャルルが後ろから構え方を教える。

そうやって教えてもらいながら、一夏は出現した標的にライフルを撃つ。

「どう？」

「おお、なんていうか、あれだな。とりあえず、速いって感想だ」

一通り撃ち終えた後、一夏は率直な感想を伝える。

「真白、これ見て如何思う？」

「うん、初めてにしては、悪くないと思う」

その一方、一夏の射撃成績を見て、直人と真白はそう呟く。
多少逸れた所もあったが、サポートありとは言え、その成績は決して悪いとは言えない。

「直人もやってみねえか？」

「ん、俺か？」

とここで、一夏が直人に振ってきた。

「まあ、別にいいが」

「じゃあ貸してあげるよ」

「いや、これがあれば十分だ」

シャルルがアサルトライフルを直人に渡そうとするが、直人はそう言って、主武装である三日月宗近を見せる。

目の前に射撃用の標的が現れると、直人は宗近を両手に持ち、精神統一するように目を瞑り、息を整える。

「破っ！！」

そして大きく振りかぶり、かけ声と共に一気に振り下ろすと、エネルギーの刃が標的目掛けて飛んで行く。
命中したのは、百点の横、一夏と同じ７５点だった。

その後、現れた標的に同じ要領で放つが、最終結果は一夏と似た

り寄ったりだった。

「うーん、駄目だな。やっぱ距離をとっての攻撃は苦手だ」

乏しくない結果に、直人は乾いた笑いを浮べる。

尤も、これは常日頃から本人も公言してるし、シャルル以外のメンバーも、クラス対抗戦の時の、あの謎のＩＳ二機との戦闘以外はこのエネルギーの刃を使ったところは見たことない。

「って言うかあんた、それなら何でそんな機能つけてるのよ？」

「やっぱりさ、いくらなんでも近接オンリーは不味いだろうと思って、あの馬鹿に距離をとっても攻撃できるようにって提案したんだ。まあ、刀を飛ばしてるから、今にしてみればいらなかったかもな」

鈴からの質問に、直人は理由を説明する。

しかし、実際距離をとっての攻撃は、両肩の装甲に懸架されている四本の刀を飛ばして攻撃してるため、不要だったと、再び乾いた笑いを浮べる。

「ねえ、ちょっとあれ！」

すると、アリーナにいる女子達が騒がしくなっており、全員がピットの方を見上げている。

一夏達もその方向を見上げると、そこには、黒いＩＳをその身に纏ったラウラがそこにいた。

「嘘っ！　ドイツの第３世代型じゃない！！」

「まだ本国でトライアル段階って聞いたけど？」

女子達の囁き声が聞えるが、意にも介さず、ラウラは一夏達の方を睨む。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

「あいつね！　いきなり一夏引っ叩こうとしたって奴は！！」

「……」

一方、セシリアと箒、そして話を聞いていた鈴は、ラウラに敵意をぶつける。

いきなり他者を殴る相手を快くは思わないだろう。

殴られたのが意中の男性ともなれば、尚更だ。

しかし、紅葉はそんな事より、隣の様子が心配だった。

そーっと視線を隣に移してみると、やはり真白が、殺気を帯びた瞳でラウラを睨んでいた。

彼女の周りに吹雪が吹き荒れ始めてるのが見えるのは気のせいだと、紅葉は全力でそう思いたかった。

「織斑一夏、桜庭直人」

「なんだよ？」

「ん？」

一方のラウラは、彼女達の視線を意にも介してない様子で、二人

に対し口を開く。
一方の二人も、あまりにも攻撃的な彼女にいつもと違う、反感を持った目で返す。

「貴様達も専用機持ちか。なら話は早い。私と戦え」

突然、二人に勝負を挑むラウラ。
それに対し、当の二人はと言うと。

「嫌だね、理由がねえよ」

「右に同じく、無益な戦いはしない主義だ」

「貴様らになくとも、私にはある」

二人は戦う理由がないと断るが、それで引き下がる彼女ではなかった。

「アホかお前は。貸切ならいざ知らず、他の生徒も使ってるんだ。こんな所でドンパチやらかしたら他にも被害が出るだろ。周りの迷惑考えろ」

「それに今じゃなくても、もう直ぐ学年別トーナメントがあるんだから、その時で……」

二人は至極真っ当な理由で、あくまで戦わない方針をとる。

このアリーナにいるのが三人なら兎も角、今は大勢の生徒も使っている。
こんな状況で戦えば、たとえ留意して戦ったとしても、巻き込ま

れる生徒が続出するのは明白だ。

それでなくても、もう直ぐ学年別トーナメントが行なわれる。その時に戦う機会が巡ってくだろうから、今ここで戦う必要性は何処にもない。

専用機持ちの中ではダントツで弱い一夏でも、一般生徒に後れを取るとは思えないし、直人は言わずもがなである。

「そうか、ならば……」

すると、ラウラはとんでもない行動に出た。

突如、右肩の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）に装備されてるカノン砲を起動させ、一夏と直人に向けて発射した。

しかし放たれた弾丸は、一夏の方はシャルルが割って入り防御、直人の方は宗近で真っ二つに両断され、それが届く事はなかった。

「いきなり戦いを仕掛けてくるなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね！」

「全くだ、頭の中までホクホクのジャガイモなんじゃないのか！」

いきなり攻撃を仕掛けてきラウラに、シャルルと直人は戦闘態勢をとる。

嫌だと言ってるのに言ってるのに、いきなり攻撃を仕掛けるよう相手にニコニコするほど、シャルルもお人好しではない。

「フランスの第2世代型ごときで、私の前に立ちはだかるとはな」

「未だに量産化の目処も立たない、ドイツの第3世代型よりは動けるだろうからね」

「何……！！」

シャルルの挑発に眉をひそめるが、突然、彼女が顔を横に逸らす。

刹那、彼女の顔の側を一発の弾丸が掠めた。

その方角を全員が追って行くと、そこには……。

「外した……」

いつの間にか、シャルルのアサルトライフルを手に取り、射撃の構えを取っている真白がそこにいた。

「あ、あれ？　何時の間に！？」

それを見て、自分の手元を確認してみると、いつの間にかなくなっていた自分のアサルトライフルに、先ほどのラウラへの怒気など吹っ飛び、素っ頓狂な声を上げる。

「貴様……丁度いい、あの時私に恥を掻かせてくれた礼に、先に貴様から始末してもいいんだぞ！」

「やれるならやればいい。今度こそ、頭を打ち抜く！」

双方只ならぬ殺気を出して、カノン砲とアサルトライフルを構える。

その周囲一体は、最早氷点下も越しているのではないかと言うほ

ど、凄まじい冷気が吹きすさんでるようだった。

ちなみに普段と違い、ラウラは真白の殺気に立ちすくんではいなかった。

それほど怒りに震えているのか、はては真白が生身なのに対し、自分がＩＳを展開してる事に優位性を実感しているからなのか。

いずれにせよ、二人は一歩も引かぬ様子で構えを解かない。

「おい、ボーデヴィッヒ」

そんな中、今にも発砲しだしそうな雰囲気の中、突如ラウラを呼ぶ声がする。

ラウラが振り向き、他の皆もその声の方向を振り向くと、そこには、真白と似たり寄ったりの殺気を出しながら、両肩の刀を浮遊させている、直人がそこにいた。

「てめえが俺たちを如何思おうが、そんな事は知ったこっちゃない。認めないというなら、未来永劫そうしてればいい」

淡々と、しかし、怒気強く呟き続ける。

「だが、お前が一夏を、真白を、俺の守ろうとするものを傷付けたりしてみろ……」

「そのごついＩＳごと潰すぞ！！」

肩に装備されてる刀の一本、鬼丸を手に取り、ラウラに切っ先を向けながら放った直人の一言は、その場に居た全員に、恐怖と戦慄を覚えさせた。

その後、この騒動は、監視していた管制官がラウラたちを注意した事で一応の決着を見た。

だが、この時の直人の姿を見て、一夏と箒は恐怖で表情も体も固まり、紅葉と鈴とセシリアは今にも泣き出しそうな顔で互いに抱締めあいながらガタガタ振るえ、シャルルも同様に恐怖のあまり泣き出したい思いだった。

そして、アリーナにいた生徒の9割が、ラウラと真白の絶対零度空間に晒された上に、直人のピリピリどころか突き刺さらんばかりの殺気にあてがわれ、気絶。

保健室はてんてこ舞いとなり、意識を取り戻した生徒たちも……。

「鬼が、鬼が……」

「か、体が、動かない……」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

と、うわ言を呟きながらガタガタ震える始末で、保健室の先生も、事情を聞こうとした山田先生以下数人の教師たちも、事情を聞くの

は困難を極めたという。

第十八話　特訓模様（後書き）

桜爛の間

作者「恐ろしや恐ろしや……」

直人「おい、今回から一夏主点になるんじゃないのか？　これだといつもと変わってないようだが？」

作者「それはこの次の後半あたりになると思います。今回はシャルルを交えての特訓風景を書きました」

直人「まあ、ここなら俺が排される要素は無さそうだしな」

作者「それでは、後書コーナーに移りましょう。今回は目安箱だけです！　応募者はお馴染み、三月語様からです！　まずは一つ目」

Q1．今まで恐怖を感じたことがあるか？あるとしたらそれは何か？（奏的にはセシリアの料理とオリヴィエの料理、銀化した真琴、とのこと）

直人「恐怖を感じた事か……あるぞ？」

作者「あるのか！？」

直人「俺だって人間だ、恐怖を覚える事ぐらいあるさ」

作者「まあ、そりゃあそうだろうけど。それで？」

直人「小さい頃、まだ箒が転校する前の話なんだが。あるとき、まあ、当時いつもの事なんだが、束さんが師匠にいつもの如く悪戯を仕掛けたんだ。

作者「ああ、あの人ならやりそう。それで？」

直人「その悪戯がまた非情にどうしようもなくてな、いつも被害に遭って拳骨一発で済ませてた師匠も流石に堪忍袋の緒が切れてな、木刀片手に束さんに制裁を下したんだ」

作者「マジっスか！？　いや、それならいつもの事じゃ」

直人「いや、さっき言っただろ、拳骨一発で済ませてたって。その時は凄かったぞ。木刀で何度も何度も叩いて、逃げようとするや顔面にアイアンクローをブチかまして、挙句にボディブローまでかましてたからな」

作者「……」

直人「その時の表情とその行動は今でも覚えてる、って言うか思い出したくない。ちなみにその時一緒に見てた一夏は、師匠のあまりの変わり様に顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになってて、いつもはしっかりしろと叱咤してた箒もそれを咎めず、一夏を一生懸命慰めていたぞ」

作者「お、恐ろしい一面を垣間見てしまった気がする。つ、次！！」

Q2．奏を見て、見習いたい点・見習いたくない点はどこか

直人「見習いたい点は頭がいい事と、真剣に取り組める事、見習いたくない点は特にないな」

作者「奏が真剣に取り組んでる所ってあったっけ？」

直人「ルシエラと模擬戦する事になったとき、真剣に取り組んでたじゃないか？」

作者「ああ、あの時ね。んで、見習いたくない点がないという事については？」

直人「あいつにそう言うところなんてないだろ？」

作者「まあ、ゲーマーである事がよほどのマイナス点になるとは思えないしな。じゃあ次は、真白に答えて貰います」

真白「うん、わかった」

Q3．真白に質問、ＩＳ熾天使のメンバー（奏含む）で髪の毛を梳いてみたいのは？

真白「奏と、ルティアと、エリィと、オリヴィエと、沙霧と、ロロット」

直人「どうしてだ？」

真白「ルティアと沙霧は、単純に髪質が良さそうだから。他の四人は、ちゃんとした手入れして無さそうだから」

作者「いやー、オリヴィエはちゃんとやってそうだけどなあ」

真白「そうかな？」

作者「ま、そう思ったならそれでいいけどね。さて、今回はアフレコ委員会はお休みです。目安箱と共に、皆様の御応募、お待ちしております」

直人「んで、ここからが本題だな」

作者「おお！　先週の話で放したとおり、この後書コーナー「桜爛の間」で、真白のＩＳの名称を決めるアンケートを取りたいと思います！　候補は次のとおりです」

候補その一：『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』（ドイツ語で白雪姫）

候補その二：『雪那（せつな）』

候補その三：『雪颯（ゆきはやて）』

候補その四：『弾丸の吹雪（ブリザード・バレット）』

候補その五：『白き流星（ヴァイス・メテオーア）』

作者「以上の五つです。この中から、真白に似合うと思う名前に一票を投じてください」

直人「投票締め切りは二週間後だから、９月２８日の１１時まで。今すぐ投票するもよし、ゆっくり時間をかけて選んでもオッケーだ」

作者「ここで真白のＩＳについて、少し紹介しておこうと思います」

・射撃戦主体

・基礎カラーは白

・アンロック・ユニットに機能あり

作者「と、こんな感じです。詳しい詳細は、本編での登場時と、いずれまたキャラ・ＩＳ紹介をする時にお伝えします」

直人「って言うか、アンロックユニットに機能ありってなんだ？」

作者「詳細はいえないけど、何か全員のＩＳ見てるとさ、セシリアとか鈴のは兎も角として、ラウラのＩＳのアンロックユニットって、何か機能があるようには見えないんだよ。なんていうか、あのレールカノン砲を装備する為みたいな印象があるんだよ」

直人「まあ、一夏の白式も、見た限りスラスターっぽいけど」

作者「ま、それは兎も角として、皆様の票を、お待ちしております。次回、シャルルのとんでもない秘密が明かされる！！」

直人「なんだ、その秘密って！」

作者「それはまだ秘密。あっ、それと次回の後半あたりから、一夏の方に主点を置きたいと思ってます。なので君の出番は次のアニメ分まで待ってね。

直人「まあ、別にいいが……気になるなあ」

作者「と、言うわけで、次回も楽しみに待っててくださーい！！」

第十九話　真剣の過去（前書き）

えー、皆様にお詫びしなければならないことがあります。

先週の話にも話した通り、アニメ第六話分は直人の出番を減らし、一夏の出番を増やす予定でしたが。

その予定を変更し、一夏の出番は次の話にしたいと思います。

そして今回の話はタイトルを見ていただければ、どういう内容か解るかと。

第十九話　真剣の過去

「すまん皆、迷惑をかけた」

「御免なさい……」

アリーナを出て皆で集合した直後、直人と真白が謝ってきた。

理由は単純、アリーナでのラウラとの衝突の時の事だ。

あの後、管制官に注意されたことで、「興が冷めた」と言って、ラウラはアリーナの中へ消えて行った。

だが、真白と直人の殺気に当てられたアリーナを使用していた生徒たちの大半が気絶し、保健室へ搬送される事態になった。

その後冷静になったところへ、山田先生から何があったのか事情聴取を受けたことで、完全に頭が冷めた二人は、その被害を被ったであろう一夏達に謝罪したのだ。

本来なら、保健室に運ばれた全員に謝罪するべきだろうが、保健室は阿鼻叫喚の事態になっていてそんな余裕はない上に、やっていてはきりがないので、まず彼らから謝ったというわけだ。

「いや、別に気にしてねえよ。な、箒」

「ああ。お前は昔からそうだからな」

「そう言ってもらえると助かる……と言いたいところだが、あそこの三人を見てると、とてもそうは言えないな」

直人の視線の先には、いまだに顔を青ざめて震えている、紅葉、セシリア、鈴の姿があった。
幸い、暫くしてどうにか復活はしたが、やはりアリーナの時の二人の殺気の恐怖が未だに拭えないのか、明らかにその顔には恐怖が浮かび上がっていた。

「三人とも、本当にすまん」

「い、いや……良いんだよ別に」

「そ、そうですわ！　直人さんの怖さは、身に染みて存じておりますし……」

「あ、あれくらいで怖がるほど、アタシは肝が小さくないわよ！　だから心配しなくていいの！」

紅葉とセシリアは必死に気を遣い、鈴は虚勢にもならない虚勢を張っている。
まあ、明らかにおびえているのが目に見えているので、直人はあまり正直に受け止められなかった。

「シャルル、御免。勝手にライフル、使っちゃって」

「い、良いんだよ。それにしてもすごいね。生身で撃つなんて」

真白の謝罪にシャルルは事もなさそうに言い、その一方で、真白が生身でアサルトライフルを撃ったことに素直に感心していた。

「真白は銃火器の扱いが得意なんだ。銃に掛かりゃあ対物ライフルだろうがＩＳのライフルだろうが、何でも使えるぞ」

「そういや。あの人がやってきた時も、すげえ命中率だったよな」

一夏は端午襲来のときの事を思い出していた。

あの時も、一夏達に襲い掛かる罠の数々を、手にした拳銃でものの見事に撃ち落していたのだ。

「それはそうと直人。何故あそこまであいつに敵意をむき出しにしていた。あれではまるで……」

「箒」

箒が何か言おうとしたとき、直人はそれを止めた。

「それ以上は言わないでくれ」

「しかし……」

「解ってるんだ、自分でも。でもな、なぜかあいつを見てると虫唾が走るんだ。どういう訳かな」

そう言うと、直人はそのままその場を去っていった。

「あっ、直人！」

そしてその後を、一夏は追いかけていくのだった。

「なあ、直人。今のどういう意味だよ？」

一夏は直人の言葉の真意を確かめながら、ともに寮への道のりについていた。

「どういう意味って？」

「ラウラって奴の事だよ！　あいつを見ると虫唾が走るって、どういう意味だよ！」

「そのまんまの意味だよ。なんでか知らないけど、あいつを見てると凄くいらいらするんだよ」

「どうしてだよ？」

「俺が知りたいよ」

一夏は納得出来なかったが、当の直人もそうとしか答えられなかった。

実際、直人もどうしてラウラの事でここまでイライラするのか解らず、尚更それでイライラする負の連鎖に陥っていた。

一夏も納得できなかったが、直人の言葉からいらいらしてる感じがわかり、それ以上は追及しなかった。

「それはそうと一夏。ボーデヴィッヒがあそこまで俺達を敵視するのに、何か心当たりはあるか？」

「……ああ」

いらいらしてる自分の気分を変えるため、直人は一夏に、ラウラがどうして自分たちを敵視するのか、心当たりを聞く。

別に本気で当てにしてるわけではなかったが、一夏が肯定の言葉を口にしたため、驚く。

「あるのか？」

「お前はどうしてか解らねえけど。俺の場合、多分……」

「……！！　一夏！」

一夏が理由を言おうとしたその時、直とは何かに気付き、一夏と共に近くの木と茂みに隠れる。

「何だよ直人！」

「あれっ」

直人が指差したその方向には、千冬とラウラがいた。

「何だあれ？」

「何か言い争ってるようだが……」

しばらく二人はその様子を見守っていたが、程なくしてラウラはその場を去っていった。
何があったのか二人はしばらくその場を見つめていたが。

「……そこの男子二人。盗み聞きか？　異常性癖は感心しないぞ」

気づいていたらしく、千冬に呼ばれ二人はぎょっとする。

「な、何でそうなるんだよ千冬姉！」

「学校では織斑先生と呼べ」

異常性癖という言葉に一夏が激しく抗議するが、すぐさま一蹴される。
直人の方も意見したかったが、一夏が先に言ってしまったため機会をなくした。

「下らんことをしている暇があったら、自主訓練でもしろ。このままだと月末のトーナメントで、初戦敗退だぞ」

「解ってるって！」

「桜庭。お前はアリーナで大勢の生徒を保健室送りにした罰として、反省文５０枚を用意しておく、後で来い」

「承知しました」

「なら良い」

それだけ言い残すと、千冬はそのまま立ち去ろうとする。

「なあ！　待ってくれ！」

ところが、その千冬を一夏が呼び止める。

「さっきの、ラウラって奴が言ってた、俺の事……」

「？？」

「千冬姉の弟とは認めないって。あれってやっぱり、俺の所為で千冬姉が、二度目の優勝を逃した事と……」

「終わった事だ。お前が気に病む必要は無い」

一夏の問いかけに、千冬はただそう言う。

直人も何のことかはじめ解らなかったが、話を聞いてる最中で、何の事か解っていた。

そしてそのまま、再び千冬は振り返りもせずに歩いていくのだった。

「一夏」

「ん？」

「それって、お前の誘拐事件の事か？」

「……やっぱ知ってたんだな」

「ああ、どこぞの馬鹿がドイツ軍のメインコンピューターにハッキ

ングしたお蔭でな」

それは、ある意味二人にとって忌むべき事件だった。

第2回モンド・グロッソ大会、まあ当然と言えば当然だが、千冬はその時も決勝戦に上り詰めた。

だが、決勝戦当日の日、一夏が何者かによって誘拐されたというのだ。

どこの組織がやったのかも解らず、謎の多い事件ではあったが、結果から言えば、ＩＳを纏った千冬が決勝戦を放棄し、一夏を救出したことで事件は解決、一夏も怪我はなかった。

だがこれにより、連勝確実と言われた千冬は不戦敗となり、かなり話題となったのだ。

そしてこの事件の際、一夏の軟禁場所に関する情報をドイツが提供し、その見返りとして千冬は、一年間、ドイツＩＳ部隊に教官として赴任したという。

「全部……俺の不甲斐無さの所為なんだよな」

「一夏……」

事件の当事者、そして彼女が二連覇を逃した原因と自覚してるだけに、一夏はひどく思いつめてる様子だった。

「一夏、不甲斐無いのは俺も同じだ」

「だって、俺が誘拐されたのは中学の事だぜ？　その時お前は……」

「いや、知ってたんだ。お前が誘拐されたこと」

「えっ？」

突然の直人のカミングアウトに、一夏も驚きの声を隠せない。

「あの馬鹿、端午がその情報を寄越してな。俺はすぐにでも助けに行きたかったんだ。だけど、その時真白と別で一緒にいた奴に「頭冷やせ」って気絶させられて。気が付いたら、師匠がお前を助けたって」

「……」

「俺の方がよっぽど不甲斐無いよ。お前を守るって誓っておきながら、いざお前の身に危険が起きたらこの体たらくだったんだから」

「直人……」

慰めでもない、正直な気持ちを打ち明け、愁いを帯びた顔をする直人に、一夏はそれ以上何も言えず、唯二人で暫く、その場に立ち止まっていたのだった。

「ねえ、箒さん」

「何だ？」

「直人って、昔どんなだったの？」

一方、ここは食堂。

そこで紅葉は、箒に昔の直人について聞いていた。

鈴とセシリアはまだ来ておらず、真白は現在、自分の専用機の初期化と最適化の為に席を外している。

「何故そんなことを聞く？」

紅葉の質問の意図が解らず、箒は紅葉に聞き返す。

「いやね、直人がボーデヴィッヒさんを見ると虫唾が走るって理由、もしかしたら、その辺りに関係してるのかなって」

「何故そこでそう結びつくんだ？」

箒には全く解らなかった。

直人のいらいらと直人の過去、それが何を意味し、どう結び付くのか、今の説明では見当がつかなかった。

「昔から、似てる二人は喧嘩するって言うでしょ？　同族嫌悪って言うのかな？　それにあの時の直人、ボーデヴィッヒさんと同じ気がしたんだよ。人を寄せ付けない何かがあるって感じ」

「……」

「ねえ？　実際どうだったの？」

紅葉の理由を聞いて、箒はそのまま沈黙した。

確かにあのとき、直人の瞳はラウラのそれと同等、いや、それ以上の冷たいものだと感じた。

彼が発していた殺気は、氷のように冷たく、それでいて、ナイフなどの凶器のように鋭かった。

紅葉自身、そう感じており、それはまるで、氷のように冷たいラウラのそれと同じに感じ得たのだ。

「……実際のところ、私と直人は、始めはあまり仲が良くなかった」

「そうなの？」

「と言うより、前の直人が、あまり一夏と千冬さん以外の人を寄せ付けなかった感じでな。一夏といつも一緒にはいたが、誰も自分に近寄らせようとはしなかった。お前の言った通りにな」

しばしの沈黙の後、箒は過去の自分と直人の関係を語り始める。

日本人でありながら、灰色掛かった銀髪に灰色の瞳、その容姿だけで人からは奇異の目に見られていたが、それ以上に、直人の醸し出していた雰囲気が、何より周りに近寄りがたい印象を与えていたそうだ。

「だから家の道場等で顔を合わせても、会話を交わすことはなかった。喧嘩に発展することはなかったが、それでも、あいつとは仲がいいとは言えなかった」

「でも、どうしてなの？」

紅葉の疑問も尤もだった。

箒の話を額面通りに受け取れば、直人は小学校の頃はかなり冷たかったことになる。

だが、子供でそんな雰囲気を出していたという事は、よほどのことがあったという事ではないだろうか？

その辺りが疑問だった。

「これは、一夏から聞いた話なんだが……」

箒が言うところによると、一夏は直人に、もっと多くの人と仲良くしてほしかった。

だが、あまりにも周りと馴染めてない直人を心配し、一夏は尤も自分に近かった幼馴染の箒に、直人についての事を教えたとのことだ。

そしてその原因は、これから話す、彼の過去にかかわっていた。

「直人は、孤児だったそうだ」

「えっ、孤児？」

「ああ。物心ついた時から孤児院にいて、一夏と出会うまではそこに居たそうだ」

箒によって語られる、直人の過去。

直人は小さいころから孤児院にいた。

親の顔は覚えたおらず、物心ついた時から孤児院に入れられており、そこでしばらくは暮らしていた。

「だが、人づきあいが悪かったうえに、髪と目の所為で、大分いじめを受けていたそうだ。だが、本人はそれを孤児院の従業員に打ち明けず、それに耐えていたそうだ」

「なんで？」

「自分の親が戻ってくると思っていたのか、それとも、相手にする気がなかったのか。いずれにせよ、そんな日々が続いていた」

聞くだけでも哀れとしか言いようのない事ばかりだった。

親の顔を知らず、誰とも仲良くなれず、あまつさえいじめにも合う。

自分だったら絶対に耐えられないだろうなあ、と、紅葉は考えていた。

「だがあるとき、いじめをしてくる子供の一人を、とうとう我慢の限界に来たのか、殴ってしまったそうだ」

「いや、まあ。我慢してれば爆発もするでしょ」

「ああ。その後、事情をよく知らない孤児院の従業員は直人に注意し、その時はそれで収まった。だがその後も、直人に対するいじめは続き、直人が手を上げるたびに、事態も直人もひどくなっていったそうだ」

「どういう事？」

事態が悪くなるというのは何となくわかる。

だが、直人もひどくなっていったというのは、どういう事だろうか？

疑問符を浮かべる紅葉に、箒は事の次第を話す。

「手を上げるたびに職員に注意され、始めは周りも黙っていたそうだが、次第に周りも直人を責めはじめた」

「まあ、理由がどうあれ、手をあげちゃったわけだからね」

「だが、その所為で直人は周りが敵に見えてきたそうで、次第に自分を責める奴らに手を上げるようになり、終いには大人にまで手を上げる相当の問題児になってしまっていった」

「……」

話を聞いて、紅葉は愕然としていた。

「だが、そんなある日、うわさを聞き付けた千冬さんと一夏が、その孤児院を訪れた」

「なんでまた？」

「それは解らない。だが、一夏達が見た時の直人は、今とは全く正反対だったそうだ」

「それって、つまり……」

何となく察しがついた紅葉だったが、その言葉を紡ぐ前に、箒は再び語りだした。

「ああ、あのラウラと同じように、冷たく、近づくものすべてが敵と言った感じだったそうだ」

「……」

やはりと言うべきか、その答えに沈黙するしかなかった。

だが、次の言葉には驚きを隠せなかった。

「そして、二人を見るやいなや、一夏の方に襲い掛かって来たそうだ」

「嘘！？」

「嘘などつくものか。一夏もその時は、ヒヤッとしたと言ってたからな」

今では実の兄弟同然に仲のいいあの二人にそんなことがあったなどと、紅葉は予想だにしていなかった。

それだけに、そんなことがあったのかと、驚きを隠せないでいた。

「だが、一夏に襲い掛かった直人を、千冬さんが拳一発で黙らせたそうだ」

「うわあ……」

一夏に襲い掛かる直人を、腕一本で鎮める千冬の姿を容易に想像でき、紅葉は冷や汗を垂らしながら苦笑する。

「その後、話を聞くために千冬さんはその場を離れ、一夏と直人は二人だけになった」

「それで？」

「しばらくは沈黙が続いていたそうだが、程なくして、直人が泣き始めたそうだ」

「あー、やっぱり痛かったんだ」

「違う」

千冬に殴られた傷が痛かったんだろうという紅葉の答えは箒に否定された。

「一夏によれば、その時の直人は痛みより、自分を救ってくれないことに泣いていたらしい。口々に、「どうして誰も助けてくれないんだ」って、悲痛な声で叫びながら泣いていたらしい」

「……それ、何となくだけど、解るなあ」

思うところがあるのか、紅葉はそう呟く。

「それで、泣いている直人を、一夏が介抱、と言うのも変だが、取り敢えず労わってやったんだ。それが、二人のなれ初めだそうだ」

「ああ、話の流れ的に何となくそんな感じかなって思ってたけど、やっぱり一夏君は優しいね」

「馬鹿なだけだ」

そんな感じに、箒と紅葉は会話を交わす。

「それで、一夏君が千冬さんに、直人を引き取ってほしいとお願い

して、妙に弟に甘い千冬さんは、それをしぶしぶ承諾、以後、織斑家に一人家族が増えたと、そんなとこ？」

「まあ、そんなところだろう。それで、これで何故直人が、あいつに突っかかってるのか、解ったか？」

「まあね」

直人の過去を話し終わった箒は、紅葉に問い尋ねる。

「やっぱりさ、ボーデヴィッヒさんを見て、昔の自分を見てる感じがしてるんじゃないかな？　それで虫唾が走ってると思うんだよ」

「確かに、直人は昔の自分を恥じているようだったからな」

「はあ、解ったのは良いけど、これ、確実にまだ波乱がありそうだよねえ」

「無いことを祈りたいがな……」

あってほしくないと願いながら答える箒だったが、この紅葉の言った一言が後に的中することを、二人はまだ知らなかった。

第十九話　真剣の過去（後書き）

桜爛の間

作者「やばい、後半滅茶苦茶になった感が」

直人「詰め込み過ぎだ」

作者「しかも今回はまた路線変更があったわけだからな、尚更だ」

直人「全く。少しは計画して書け」

作者「すいません。んで、今回は当初の予定を変更し、直人の過去を箒に暴露してもらいました」

直人「と言っても、紅葉に話しただけだがな。しかし作者、何で箒に語らせたんだ」

作者「正直、君の過去を知る人物は三人しかいない。その中で、一番話しそうな人物を消去法で選んだ結果こうなった」

直人「まあそれでも、箒は他人の過去とか秘密をあまりべらべらしゃべらないと思うがな」

作者「ああ、こりゃ今まで書いた中で一番拙いかも」

直人「これに懲りたら、今度からもっと考えて書け」

作者「はい。さて、後書きコーナー「直人の目安箱」、今回も三月語様のところから、エリィが質問を送ってきました！　まずはこちら！」

1．今まで見てきた他の作者さんの所で『これは無いわー』と思った出来事は？（ＩＳ作品に限る）

直人「これ……素直に答えていいのか？」

作者「うーん。いろいろ不味い気がするが、もらった以上はお答えせねば……」

直人「だよな。えーっとだな、【ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　不屈の翼】と言う作品に出てくるオリジナルキャラ、夕暮太陽の人外っぷりは無いと思ったぞ」

作者「ああ、納得できる」

直人「特に、『鮮血の陽光（ブラッディサンライト）』と呼ばれる状態の彼女は、末恐ろしいと思ったな」

作者「人にはできないようなことを平然とやってますからねえ。気になったらご覧になってください。ほんじゃ次！」

2．女性陣限定、上記と同じ条件で『〇〇のこの行動が羨ましい』と思ったその行動は何か？

作者「という事で、今回は真白、紅葉、箒、セシリア、鈴の五人に来ていただきました。それでは一人ずつ答えちゃってください」

真白「私は、これって言うのが思い浮かばない……」

紅葉「そうだねえ。【ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉＋ＯＮＥ】の主人公、神薙火蓮（かんなぎかれん）さんかな。スタイルも良いし、良い性格もしてるし、女性として憧れるなあ、ああいうお姉さん」

箒「私は、そうだな……【ＩＳ　四神の少女達】の、東野辰美（あずまやたつみ）だな。武術を収めていて、その腕も凄いが、力をふるう事のなんたるかをわかってるようだからな」

セシリア「【ＩＳ－インフィニット・ストラトスー　熾天使を駆る少年】の沙霧さんですわね。あの積極さが、すこし羨ましいです。少々行き過ぎてるのが玉に傷ですが」

鈴「あたしも真白と同じね、特にこれと言ったやつはいないわ」

作者「とのことです。それじゃ次！」

3．真白に質問、恋をしたいと思うなら、どんなタイプがいい？詳しくよろしく！！

真白「えっと……考えたことない」

作者「直球ですね」

直人「何となくでいいんだぞ？　お前がこういうのが良いって言うのを言えば」

真白「……直人みたいに、優しくて、強くて、何でも受け入れてくれる人」

作者「慕われてますねえ」

直人「ああ、まあな」

作者「さて、次の質問に入る前に、直人にはいったん退場してもらいましょう」

直人「何故？」

作者「良いから良いから。さて、じゃ次の質問！」

4．紅葉に質問、今自分が一番想いを寄せている人物に対して一番言いたい事は？この際はっきり言っちまえ！！

作者「だそうです」

紅葉「えっとね……直人ー。一夏君の唐変木で呆れてるけど、人の事言えた義理じゃないからねー！」

作者「……すっきりした？」

紅葉「まあね。あたし、直人に特にこれと言って不満は今のところないし」

作者「そうですか。さて、先週から、真白のＩＳの名前に関するアンケートを行っています。候補はこちら」

『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』（ドイツ語で白雪姫）

『雪那（せつな）』

『雪颯（ゆきはやて）』

『弾丸の吹雪（ブリザード・バレット）』

『白き流星（ヴァイス・メテオーア）』

作者「以上五つです。現在、『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』に一票入っております。締め切りは、９月２８日の、夜１１時までです。皆様のご投票、お待ちしております！」

直人「それと、後書きコーナーの質問とアフレコも募集しています。特にアフレコは最近来ていないので、投稿してもらえるとありがたいです。さて、次回は？」

作者「次回こそ正真正銘！　一夏主役の話、ついに、あの子の秘密が明かされます！　皆さん。お楽しみに！！」

ユニーク数１０，０００突破記念コラボ　桜の真剣と白き姫君と一角の少年の珍

遅くなりましたが、ユニーク数、１０，０００突破記念です。

今回は、楚良様の作品【ＩＳ　一角と少年】とのコラボです。

過去の話ではありますが、ある登場人物が、本編に先駆けて登場してしまいますが、それが許せないという方は、何卒お許しください。

それでは、どうぞ楽しんでいってください。

ユニーク数１０，０００突破記念コラボ　桜の真剣と白き姫君と一角の少年の珍

一期一会

一生に一度の出会いや機会という意味のことわざである。

もとは茶道に由来する言葉で、「あなたとこうして出会っているこの時間は、二度と巡っては来ないたった一度きりのものです。だから、この一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしましょう」という意味が込められた言葉である。

世の中、この一期一会という事はかなりある。

たった一度の出会い、また会えるかもしれないし、もう二度と会えないかもしれない。

だからこそ、偶然だろうが必然だろうが、人と人との出会いは大切にしていかなければならないのだろう。

そしてこれから話すお話も、ひょっとしたらまた会えるかもしれない……でももう二度と会えないかもしれない……そんな出会いが生み出した物語。

これは桜庭直人が、ＩＳ学園に入る前のお話。

「ふぅ、やっとついた」

「うん……」

灰色掛かった銀髪と瞳をした少年、桜庭直人と、彼の後ろをついてく、透き通るような白い髪をした少女、風花真白は、お互いにそ

う呟く。

直人はとある事情により、故郷である日本を離れ、世界中を旅して回っており、かれこれ二年近くたつ。

真白はその旅の途中で出会った少女で、始めは直人に対しても無表情だったが、今では普段は無表情だが、直人の言う事には受け答えし、僅かながら笑ったりするなど、年頃の女の子らしい一面を見せるようにもなっていた。

そして二人は今、ヨーロッパ主要国の一つ、フランスに来ていた。

「さて、まずは宿探しでもするか、と言いたいところだが……」

何はともあれ、まずは宿泊先を探そうというきわめて建設的な意見を言って、いざその行動を始めようとするが。

この時、二人はある問題を抱えていた。

「この国のお金、ない……」

「そうなんだよなあ」

そう、この二人はフランスの通貨を持ってない。

なのでどうにかしなければ、宿泊どころか、今夜はフランスの町で野宿という事にもなりかねない。

野宿は別に今に始まった事ではないが、なるべく町ではそれは避けたかった。

「適度にバイトでも探して稼ぐか」

「うん」

とりあえず尤も建設的というか、真っ当な方法を選び、二人は歩き始めるのだった。

しかし、早々都合よく仕事など見つかる筈もなく、二人はかれこれ数時間町を彷徨っていた。

「如何したもんかなあ……」

公園の一角に腰を下ろし、直人は困った顔をする。

仕事がなければ金は手に入らない、金が手に入らなければ宿はとれない。

既に公園の時計は１０時を指していた。

「いっその事何処かの家に、『今晩泊めてもらえませんか？』って頼み込もうか？」

「望み薄、だと思う……」

「解ってる、解ってて無い物ねだりで言っただけだ。気にしないでくれ……」

ここまでくると形振り構っていられない。
直人はそんな気持ちで言った一言だったが、見事に真白に現実味を帯びた言葉を言われて撃沈する。
そうこう悩んだり考えたりしてる内に、時間はどんどん過ぎて行く。

「あー、駄目だ。全くいい案が思い浮かばん！　本当に如何したものか……」

「直人……」

「なんだ？」

「そろそろお昼」

真白が指差した時計の時刻はすでに１２時前を指していた。

「そんなことといっても、金がないんじゃあなあ……どっかに賞金首でもいないかなあ？」

「そんな都合よくはいないんじゃ……」

また無い物ねだりを言う直人に、真白が再び現実味ある言葉を突きつけようとしたその時。

「～～～」

「「ん？」」

気が付くと、十数人の男たちに、二人は囲まれていた。

「～～～～～」

何か喋っているが、生憎フランス語なので、来たばかりの直人はよく解らない。

「なんだって？」

そこで直人は、ほぼ全ての世界言語に精通している真白に、目の前の男たちが何と言っているのか尋ねる。

「私を誘ってるみたい」

「軟派か」

何と言ってるのか真白伝いで知るや、直人は呆れて溜息をつく。何処の世界にも、可憐な花に虫はたかるものなのである。

「阿呆らしい、構ってられるか。行くぞ、真白」

「うん」

軟派してくるチャラ男達に目もくれず、直人は真白と共にその場を立ち去ろうとする。

だが、チャラ男たちは真白を呼び止めようと、無理矢理その手を引っ張る。

（……一発灸をすえるか）

チャラ男たちの行動に直人が灸をすえようと行動を起そうとしたその時。

「ん？」

突如、真白の手を掴んでいる男の手を別の手が掴んだ。

全員が視線を追うと、その先にいたのは、一人の真白と同い年ぐらいの男の子だった。

「～～～～」

当然その子も、フランス語で男に話しかける。

「何て言ったんだ？」

「『人の嫌がる事をしてはいけないって教わらなかったんですか？』だって」

真白が聞いた彼の言葉は、どうやら男たちを注意するもののようだ。

しかし、相手が子供と言う事あって、男達は邪険にあしらおうとする。

「～～～～」

「『そんな事やってると本当にもてませんよ』だって」

直人が顔を向けると、真白は言葉を翻訳する。

すると、男の一人が無理に子供を引き剥がそうと、肩に手をかけ

る。

すると、突然肩に手をかけた男が転倒した。

その理由は簡単、子供がその男の足を払ったのだ。

すると、周りにいた男達は殺気立ち、その内の一人がその子に殴りかかる。

が、その拳がその子にとどく事はなかった。

何故ならその手は、直人がつかんでいたからだ。

「真白」

「何？」

「コイツらにフランス語でこう伝えてやれ」

「『子供に手を出していいのはおいたが過ぎたときだけだ』ってな」

そういった直後、直人に手をつかまれた男は、綺麗に宙を舞った。

「はぁ、はぁ、ここまで来れば大丈夫か？」

「うん」

公園でチャラ男たちを数分でのしたが、その後我に返り、このままだとまずいという考えに至り、例の少年の手を引っ張ってここまで逃げてきた。

「あー、悪いな。何か巻き込んじまって」

「？？」

直人は少年に向き直り、謝る。

しかし、少年は直人の言葉がわからないらしく、首を傾げる。

「ああ、解らないか。真白、通訳頼む」

「うん、解った」

直人に頼まれ、真白は先ほどの言葉をフランス語で少年に伝えようとする。

すると……

「ああ、大丈夫ですよ。気にしないでください」

「おっ、日本語！」

突如少年が日本語で喋ってきた為、直人は驚きの声を上げる。

「なんだお前、日本語話せたのか？」

「はい。ちょっと知ってる人に日本人がいますので」

「そうだったのか。まあ何にしても、巻き込んで悪かったな」

「いえいえ。僕は当然のことしただけですから」

改めて頭を下げる直人に、少年は謙遜してそう答える。

そして改めて、直人は少年を見てみる。

琥珀、と言っていい感じのオレンジ色の髪。
瑠璃色の瞳に、女の子と見違えるほどの顔立ち。
着ている服が男ものでなければ、二人も女の子と間違えていたかもしれない。

「そうだ、自己紹介がまだだったな。俺は桜庭直人。コイツは風花真白。一寸した事情で、世界中を旅してる」

「僕はアルフォンス・ラプラス。親しい人は「アル」って呼びます」

「アルか、いい名前だな。俺の事は直人でいいから」
「はい！」
二人は自己紹介を終えると握手を交わすのだった。
「そうだ、直人……」
「なんだ？」
「お昼ご飯……」
「あっ……」
とここで、真白の言葉で、直人は目前の問題を思い出す。
「どういうことですか？」
「実は……」
直人はアルに、今の自分たちが置かれた状況を話す。
自分たちがフランスに着たばかりでお金がない事。
仕事を探したが早々見つかる筈もなかった事。
如何したものかと公園で悩んだが、結局いい案が思い浮かばず、
路頭に迷ってた事等を話した。
「そうなんですかあ」
「そうなんだよ。何処かに賞金首でもいないもんかなあ？」

「直人。それは……」

「ああ、解ってるよ。でもここまで来ると無い物ねだりでも愚痴を言わずにはいられないだろ？」

また真白に現実的な言葉をいわれそうになるが、直人はそれを遮る。

解ってもこの状況、愚痴の一つでも言わなければそのまま気分が参ってしまいそうなのだ。

しかし、そんな二人に手を差し伸べてくれる人物が、今日の前にいた。

「じゃあ二人とも。丁度僕もお昼食べようと思ってたところでしたし、奢ってあげますよ」

それを聞いた途端、直人は鳩が豆鉄砲を食らったような表情になる。

まさかあって数分しか経たない相手から、このような優しい言葉を掛けられるなどとは思いもしなかっただろう。

「い、いいのか？」

「はい。助けてもらったお礼もしたいですし、それに、困ってる人を放っては置けないでしょ？」

「アル……」

理由を聞いた後、直人はアルの肩に手を置き、こういった。

「その優しさ、何時までも忘れないようにな」

「あっ、はい」

突然真剣な顔でそういわれたため、アルも少しきょとんとしてしまう。

「そ、それで、如何するんですか？」

「まあ、金がないのも事実だし、情けないけど、ここはお言葉に甘えよう。真白もいいか？」

「うん」

とりあえず二人はオッケーをだす。

そして、アルが行きつけのお店に案内してくれるとのことで、直人は重ね重ね申し訳なくなり「この埋め合わせは滞在中必ずする」と言ったら、「期待してますよ♪」と、ちょっと悪戯っぽく言われたという。

「「……」」

とりあえず、アルの行きつけの店だというレストランで昼食を取っていた直人と真白だったが、眼前に写る光景を見て唖然としていた。

「ん？　どうしたんですか？」

「お前……よくそんなに食えるな」

そう、このアル、かなりの大食いだったのだ。

身長は真白と差して変わらないはずなのに、その小柄な体に反して食べる量がすごかった。

とにかくメニューを片っ端から注文し、しかも一人前ならともかく、一人で二人前とか三人前とか平気で頼み、次々と平らげていってるのだ。

「あはは。ほかの人にもよく言われます。自分では普通だと思ってるんですけどね」

「まあ、成長期だからかもしれないが、腹壊すなよ」

直人がそう言った矢先に、アルは料理を食べ終えてしまった。

しかも……

「おかわりください！」

「まだ食う気か！？」

この店の主人は気前がいいらしく、アルのおかわりに応じてくれた。

そして再び出されたおかわりを、さっさと自分の胃袋に収めてしまうアルを見て、直人はそれだけでお腹がいっぱいになりそうだったと言う。

「ところで、お二人はこれからどうするんですか？」

アルが一通り食べ終わるのを待ってると、そのアルからそんなことを聞かれた。

「取り敢えず、しばらくはフランス国内に滞在する気だが、何分金がないからな、どこかで稼がないといけないが、どうしたもんだろうか」

「うん……」

直人の言葉に真白が頷く。

二人は今回フランスに来たばっかりで金がなく、これでは宿も取れない。

「って言うか、二人はどうやって来たんですか？」

「どうやってって、普通に歩いてきてだが」

「えっ？」

その言葉に、さしものアルも言葉を失う。

普通ならパスポートなり、ビザなりを持ってたりするものではないのか？　という当然の疑問が浮かんできた。

「いや、日本から出るときは知り合いに手引きしてもらって中国に入って、後は自分の足で歩いている。ちなみに真白はその旅の途中で出会ったんだ」

そう言って彼女の頭を撫でる直人。

真白はそれが気持ちいいのか、抵抗もなくそれを受け入れる。

「い、一体、何のために？」

直人の旅が尋常ならざるものであることを確信したアルは、旅の目的を聞く。

「自分を鍛えるためだ」

「えっ？」

返ってきた答えに、アルは首を傾げる。

「俺さ、日本に義兄が居てな。旅に出るとき、そいつと約束したんだ。「お前の剣に恥じない位強くなって、必ず戻ってくる」ってな」

「……」

「それでな、自分を鍛える……正確には、自分を見つめ直すために旅してるんだ。日本に留まっていたって、結局は「井の中の蛙」止まりだからな。だから世界中を旅して、自分の強さがどこまで通用するのか旅してるんだ」

「ああ、だからそんなものを持ってるんですね」

そう言ってアルが指差したのは、腰に差してある二本の刀だった。

「ああ。まあ、こいつは俺の魂って言うか、とにかく、こいつのおかげでいろいろ助かった事例もあるし」

そんな感じで話していたが、暫くして、話は元に戻っていた。

「んで、金が無い件だが、何時までもアルに世話になってるわけにはいかないしな」

「僕は別に構いませんけど？」

「いや、お前は良くても、なんていうか、俺のプライドが許さないって言うか……」

人の世話になりっぱなしなのは自分の信条に反するのか、直人も顔を渋らせる。

「でも……お金がないなら……いつまでもこのままだよ？」

「だよなあ。どこかに仕事でもあればいいんだが……」

真白の言葉に、直人もそう言って考え込む。

しかし、仕事などそうそう見つかるはずもないので、考えても良い案は浮かばなかった。

「あっ、だったら……」

するとここで、アルがこんなことを言ってきた。

「ちょっと僕の手伝いをしてくれませんか？」

「……何故こうなった？」

「さあ？」

「何でしょう？」

店のカウンターに隠れながら、直人は聞くが、真白とアルは知らないといった風の返事をする。

二人が隠れてるカウンターの向こう側には。

「～～～！！」

「何て言ってるんだ？」

「『隠れてないで出て来い！』だそうです」

「ハチの巣になるって解ってて、誰がのこのこ出るかっての」

銃を手に持った男たちが怒ったようにそう言うが、のこのこ出ればどうなるか目に見えているため、当然三人は出てこない。

こうなったのは、今から一時間ほど前にさかのぼる。

「はい、直人さん」

「あいよっ！　真白！　これは二番テーブルのお客に」

「うん」

三人は先ほどとは別のレストランでバイトをしていた。

アルは調理場で料理を作り、それをウェイターの直人と真白がてきぱきとテーブルに運んでいた。

アルは良く、こう言ったレストランで配膳や料理の手伝いを受けることがよくあるそうで、ほんらいは配膳の役をするはずだったそうだ（なぜかミニスカのメイド服であったが）。

だが、配膳役は直人と真白が受け付け、アルは調理場に回り、即席とは思えない見事なコンビネーションで、次々と客の注文を捌い

て行った。

しかも、直人も真白も、必ず美が付く良い顔立ちをしている。そんな二人がウェイターともなれば、客からの評判も良く、店は通常より客が多く舞い込み、パンク寸前の状態だった。

だがそこへ、突如銃を持った三人組が現れ、銃をぶっ放しながら客たちを脅迫する。

見たところ、手に大きな袋のようなものを持ってることから、強盗か何かだと思われる。

多くの人々が、その様子におびえ、男たちの言うとおりにしているのだが、その状況でも活動し、尚且つ黙って見過ごせないのが直人である。

配膳用のお盆を犯人の一人に投げ、それが見事に男の一人の頭に直撃する。

その後、真白と共に流れるような動きでカウンターの裏側に隠れ、現在に至るのだった。

「外はすでに警察が包囲してるだろうから、逃げ場はいのになあ」

「そうだね」

男たちは尚も騒ぎ立てる。

「取り敢えず、武器を持ってきましたよ」

「おっ、サンキュー。気が利くな」

「いえいえ。それより、銃を使うんですか？」

「はっ？」

アルが持ってきた刀を受け取ると、直人はアルの質問に疑問符を浮かべる。

アルはもう一つの手に、銃が収まったホルダーを二丁分持っていた。

「ああ、それは俺じゃなくて……」

そう言ってる間に、そのホルダーをさっさと受け取ったのは。

「こいつだ」

真白だった。

「えっ？」

「真白は銃の腕がいいんだ。そこらの軍人やスナイパーより段違いだぞ」

直人が説明してる傍らで、真白は拳銃をホルダーから抜き、弾を確認する。

「えっ？　それを撃つの？」

「うん」

アルが驚くのも無理はなかった。

何故なら真白が今握ってる銃は、威力が高いが、反動が大きいことで有名な自動拳銃、「デザートイーグル」だったのだ。

「さてと、アル、お前戦えるか？」

「ええ、銃器類は一応」

「そっか。じゃあ真白、何か貸してやれ」

「うん。はい」

そう言って真白は、もう片方のホルダーから、「ベレッタＭ９２」をアルに貸してあげる。

「さて、敵は三人か。二人とも、俺が切り込むから、後ろから援護頼む」

「うん」

「はい」

そう言って相槌を打つと、直人は刀を鞘から抜くと、そのままカウンターを飛び出す。

「！！」

すぐさま男たちは銃口を向けるが、発砲はできなかった。

「っ！？」

「！！？」

銃の持ち手に、真白とアルが撃った弾丸が命中し、男三人は手に持ってた銃から手を放す。

「まず一人！」

そして一気に懐に飛び込んだ直人は、まず一人目の腹を峰打ちする。

「二人目！」

そのまま流れるような動きで後ろを取り、二人目を手刀で黙らせる。

「おっと！」

しかし、最後のリーダー格がその隙に落とした銃を手に取って発砲する。

だが、それをひらりとかわし、そのまま一気に近づく。

「これで、止め！！」

そして最後の一人を、そのまま柄頭を腹に打ち込み、気絶させる。

「ふぅ、鎮圧完了」

そう言い終わると、直人は手に持ってた刀を鞘に納める。

「お見事」

「いやなに、旅してるとこういうことが多いからな。それに、剣術には自信があるんでね」

アルに褒められ、直人はなんてことないように答えるが。

「直人、今、不味いんじゃ」

「……あっ」

よくよく考えてみれば、自分たちは思いっきり銃を発砲したり、刀を振り下ろしたりした。

一応急所は外したし、峰打ちもした。向こうも武器を持っていたので、使用に関しては正当防衛が成り立つかもしれない。

だが、武器を持っていることに関しては不味い、警察から詰問されたら、変な疑いを掛けられかねない。

「三十六計逃げるに如かずだと思うやつ。挙手」

直人の言葉に、真白とアルは一も二もなく手を上げる。

「よしっ、逃げるぞ」

直人の言葉と共に、裏側から三人はその場を後にするのだった。

警察が突入したのは、その数分後だったという。

「悪い。一度ならず二度も巻き込んじまって」

「いえ、気にしないでください」

レストランでの騒動後、どうにかして逃げ出した三人は、町のはずれにいた。

衣装などはさっさと着替えて、今はさっきまでの私服になってる。

その衣装はアルが「後日お店に返しておきます」、とのこと。

「それにしても、もういっちゃうんですか？」

「ああ、あんな騒動を起こした後だからな、ここに留まってたら、色々不味いだろ？」

事情を話せばわかるだろうが、流石に武器を持ち、それを発砲、或いは抜刀したことに関しては大勢証言者がいるので言い逃れはできない。

警察に捕まって厄介になる前に、さっさと町を出ることにしたのだ。

「でも、今から別の町に言ってたら、確実に今日は野宿になりますよ？」

「まあ、仕方ないさ。それに、野宿には慣れてるし」

そう言いながら、直人はポケットに手を突っ込み、あるものを渡す。

「これは？」

「さっきのバイト代、なんか逃げ際に店長が渡してきた。あっ、お前と真白の分はポケットに忍ばせておいたから」

そう言われて二人が確認すると、確かにポケットに入ってた。

「んで、これは俺と真白の食事代の分。受け取ってくれ」

「そんなの別に気にしなくていいのに」

「いや、そうもいかない性分でな。貰ってくれ」

そう言って、アルの手に代金を渡す。

「？　あの、それは？」

するとアルの目に、あるものが映った。

それは、三日月の形をしたネックレスだった。

「ああ、これか？　ちっと知り合いが作ったもんでな」

「知り合いが？」

「ああ。どうしようもない馬鹿だが、頭だけは良くてな」

そう言うと、そのネックレスを服の中にしまう。

「さてと、見送りはここまででいいよ。世話になったな、アル」

「ありがとう」

「いえ、それよりも……」

二人がこれから出発しようとすると、アルが一つ聞いてきた。

「また、会えますかね？」

「どうだろうな。でもま、会えたら嬉しいな。今度はもっといろんな話とかしたいしな」

「僕も、また会えると嬉しいです！」

「そうか。ま、取り敢えず、今はさよならだ。じゃあな！」

そう言って、直人と真白は、アルに見送られながら、町を後にするのだった。

「ただいまー」

「おかえり～！」

その夜、アルは一人の人物の所に戻っていた。

「アッ君どこ行ってたの～！　お腹すいたー！　早く何かつくってよ！！」

「はいはい。何が良い？」

「アッ君が作るものなら何でも～！」

アルと親しそうに話す人物は、もしこの場に直人がいたのなら、恐らく驚くこと間違いない事だろう。

「じゃあ、今日はシチューにしようか。直ぐ作るからもうちょっと待っててね」

「はーい！」

赤っぽい髪をして、頭に兎耳のカチューシャを付けた人物、格好は一言で表すなら、不思議の国のアリスである。

ある意味奇抜と言うか、一般の人なら理解を絶するであろうその衣装に身を包んでる人物の名は……

「はい、出来たよ。束姉」

「わーい！　いただきまーす！！」

この世界にある種の変革をもたらした、ＩＳの開発者、「篠ノ之束」その人だったのだ。

「うんうん！　やっぱりアッ君の作る料理は最高だねえ！」

「束姉、たまには自分で作ろうよ」

「嫌だ、興味ないし面倒くさい」

アルの作ったシチューを食べながら、駄々っ子のような返事をする。

呆れる人も多いかもしれないが、これが篠ノ之束という人物なのだ。

「あっ、そういえば今日。不思議な人に出会ったんだ」

「不思議な人？」

「あのね、灰色っぽい髪をした、腰に刀を差した人と、後、真っ白な髪の、僕ぐらいの女の子」

其れを聞いた途端、束はその手を止めた。

「ねえアッ君。その灰色の方って、名前言ってなかった？」

「うん。桜庭直人って言ってたよ。名前からして、日本人かな？」

アルの答えを聞いた途端。束ねの態度が変わった。

「おお！　アッ君！　直君に会ったの！！」

「えっ？　知り合いですか？」

「知り合いも何も、直君はいっ君の義理の弟、そしてちーちゃんのお弟子さんだからね。ああ、懐かしいなあ！」

「いっ君って、もしかして、束さんが言ってた。あのブリュンヒルデの弟さん？」

「うん、そうだよー」

アルは呆気に取られていたが、同時に納得した。

普段、束は結構排他的で、興味のある人物以外には徹底して冷淡な態度を取る。

その束が、興味を持ったばかりか、ここまで狂喜乱舞したのだ、彼女を知るものなら、びっくりするのも無理からぬことだった。

しかし、その人物が、その興味のある人物の身内という事で、アルも納得する。

「ねえねえアッ君。直君は今どこ？」

「あっ、もうこの町を出て行っちゃいましたけど？」

「えー、残念。久しぶりに直君の髪で三つ編みとかポニーテールとか、色々したかったのに……」

「あ、あはは……（良かった、知らせなくて本当によかった）」

ぶうたれながら呟く束に、アルは冷や汗を垂らす。

「まあいいや、直君にはきっとまた会えるだろうし、その時にしようっと」

「あはは、あっ、じゃあ僕、あの子の所に行ってきます。おかわりはあるので、自由にとってください」

「はーい」

そう言って、アルは一旦その場を離れるのだった。

途中、その後ろから「あっ、アッ君と一緒に着せ替えショーとかいいかも♪」と、言う言葉が聞こえたのを全力で無視することにした。

目的地に向かいながら、アルは、直人の事を考えていた。

「直人さんの首に掛かってたの、本人ははぐらかしていたけど。あれは間違いなく、ＩＳだ」

アルは直人が首から下げていたネックレスが、ＩＳの待機状態だとすぐに見抜いていた。

それと同時に、直人と言う人物について、解ったこともある。

ＩＳは本来、女性にしか扱えない。

だから待機状態の物を男性が持っていても、それは宝の持ち腐れだ。

ましてや、ＩＳは操縦者と共に成長するものなので、それはなおさらだ。

ならばなぜ彼が持っているのか、答えは簡単だ。

直人が、「男でＩＳを動かせる」という事だ。

「ふふ、驚いたなあ。まさか僕以外で、ＩＳを動かせる人がいたなんて……」

嬉しそうに言いながら、アルは目的地にたどり着く。

そこには、鎮座する。一体のＩＳが置かれていた。

「もしＩＳを持っているのなら、またあの人に会えるかもしれない。ううん、きっと会える」

アルは嬉しそうに、そして真剣な眼差しで、開いたディスプレイを見つめながら呟く。

「束姉の言葉じゃないけど、僕も、またあの人に会いたいなあ」

アルは直人に興味を持った。

それに、真白の事も非常に気に入った。

だが違いを挙げれば、彼がＩＳを動かせる男性であることにではない。

彼と言う、人柄に興味を持ったのだ。

「そのためにも、早く君を完成させてあげるね」

「一角」

そう呟きながら、アルはディスプレイを叩き、目の前のＩＳ「一角・零式」の調整を始めるのだった。

ユニーク数１０，０００突破記念コラボ　桜の真剣と白き姫君と一角の少年の珍

桜爛の間　特別編

直人「何だ？　この特別篇って？」

作者「今回は後書きコーナーは無し、その代わり、スペシャルゲストに登場していただきます」

直人「スペシャルゲスト？」

作者「それは……」

アル「やっほー」

直人「おっ、アル」

作者「ちょっと、紹介もしてないのに出てこないでよ！」

アル「あなたがもったいぶらすのが悪いです」

作者「くっ、生意気な……と言う訳で、今回は特別ゲストとして、【ＩＳ　一角と少年】の主人公、アルフォンス・ラプラスこと、アル君に登場していただきました」

直人「よろしくな！」

アル「はい！」

作者「さて、今回は直人の過去話と言う形でコラボしましたが、ところどころ、一角と少年の設定も流用させてもらいました」

直人「って言うかこれ、下手したらアルの本編参入フラグとも受け取れるんだが」

作者「そんなつもりはないし、そう言う予定もないけど、要望が強かったりしたら、考えるかも？」

アル「この人いつもこんな感じですか？」

直人「ああ、しかもいまだに本編、一文字も執筆してないんだ、いくら記念で初のコラボだからって、すこしはそっちにも振れって話だよな」

作者「いやあ、大学の後期講習が始まって、色々疲れたりしてさあ、なかなか手につかなかったんだよ」

直人「少しはやる気を出せ」

アル「楽しみにしてる人たちに失礼ですね」

作者「むぐぅ、二人が酷い……そんなこと言うやつらには、こうしてやる！」

ボフン！！

直人「うわっ！」

アル「何々！？」

作者「ふっふっふっ、さあ、二人の勇姿（？）を、ご覧あれ！！」

直人「おい、作者、一体何をし……ってアル！　なんだお前その恰好！！」

アル「そう言う直人さんも！！」

今の二人の格好。

直人→和服だが、肩の部分が着崩れて露出、胸元も結構あいている。

アル→ノースリーブにへそ出しの、フリフリ満載のメイド服。

作者「ふふふ、私を怒らせるとこうなるのだ、理解したかな？」

グリッ

チャキッ

作者「あり？　なんで君たちは刀を首筋に突き付けて銃を頭にめり込ませているのかな？」

直人「地獄がみてぇか？」

アル「少し頭、冷やそうか？」

作者「えっ、いや、ちょ、ちょっと待……」

あーーーーー。

直人「ふぅ、うちのバカ作者がすまん」↑着替えました。

アル「いえいえ」↑右に同じ。

直人「さて、作者も言っていたが、今回は俺の過去話で、そこにアルに参加してもらったわけだが」

アル「一体、お二人はどんな旅をしてきたんですか？」

直人「ああ、色々あったぞ、中東で武装グループに襲撃されたり、アフリカで夜中にライオンに襲われかけたり、イタリアでマフィアの抗争に巻き込まれたり」

アル「……壮絶ですね」

直人「まあ、良い修行にはなったけどな」

アル「それにしても、真白ちゃんって、デザートイーグル使うの？」

直人「まあ、普段はベレッタと並んで使ってるけどな、まあ拳銃だろうとスナイパーライフルだろうと、あいつに銃火器持たせたら、まず右に出る奴はいないな」

アル「す、すごいね……」

直人「まあな。さて、今回はここまでだが、最後にアルと、アルが主人公の小説、【ＩＳ　一角と少年】について、軽く説明しておくか。

アルフォンス・ラプラス。

楚良様の作品【ＩＳ　一角と少年】の主人公。
琥珀色の髪が特徴の男の娘。
性格は優しいが、怒らせるとシャルロットより怖いとは一夏談。
ＩＳは「一角・零式」

【ＩＳ　一角と少年】

作者は楚良様。
ストーリーは当小説と同様、アニメ準拠、途中からは原作とオリジナル展開。
ヒロインはシャルロット、他にもオリキャラが二名登場してます。

直人「うーん、ネタバレ感があるが、取り敢えずこんな感じか」

アル「そうだね」

直人「ええ、楚良様。もし不快でしたら、この部分は削除したいと思いますので、遠慮なくお申し付けください。ああそれと、真白のＩＳの名称アンケート、今回の予定変更に伴い、一週間延ばすことにしたそうだから、まだ投票してない人は、早めに投票をお願いします」

アル「さて、そろそろお開きだよ？」

直人「そうだな。次回は本編に戻るそうだ。俺は一切内容を知らされてないんだが……」

アル「まあまあ。それじゃ、またねー！」

第二十話　明かされる貴公子の秘密。（前書き）

皆様、大変お待たせいたしました。

本編、これでアニメ第六話分の終了です。

結局、これを作り上げた時、すでに夜中の3時を過ぎていたりしますが、必死に頑張って書いたので、どうか読んでください。

第二十話　明かされる貴公子の秘密。

日も傾きかけてきたころ、一夏は寮の部屋に戻ってきた。

だが、その顔は浮かなかった。

「……」

その理由は、ラウラが異様に自分を狙う理由と、寮に戻る前の直人の事だ。

あのラウラが自分を執拗に付け狙うのは、自分が誘拐された所為で千冬が大会二連覇を逃した事が許せないからだ。

それについては、本来は誘拐した方が咎められるべきだろうが、当時、助け出されるまで何もできなかった弱い自分を、一夏自身も許せないので、それについては甘んじて受け入れるつもりだ。

だが、その時旅に出ており、何も知らないと思ってた直人が、実は自身が誘拐されてたのを知っていたことについては、本当に驚愕した。

それについて、初め聞いたときは驚きを隠せなかったが。

（助けようとして気絶させられて止められたって言うけど……よく考えてみたら、寧ろその方が良かったのかもな）

直人は去り際に、「今さら言い訳になる」、と言っていたが、直人の事をよく知ってる一夏は、それが言い訳ではなく、事実だという事は解っていた。

それに、良くも悪くも、小さいころから直人は、一夏や千冬の為に自分の身を顧みず、相手に突っ込むことが多かった。

時としてそのために、ぼろぼろになることも少なくなかった。自分の事を思ってくれるのは嬉しいが、そんな姿を見るたびに、一夏は守られるだけの自分に、少なからず悔しさを感じるのだった。

（本当にあいつは、無茶ばっかりするしな。俺の事思ってくれるのは嬉しいけど、少しは人の気も知ってほしいよ）

恐らく、あの時の事を直人は、自分以上に悔んでいるのだろう。一夏としては自分の所為だから気にしなくていいと言いたいが、自分の落ち度に関してはかなり頑固になる直人の事だから、口で言っても早々受け入れられないだろう。

「明日あたり会ったら、ちっとど突いとくか」

いつもそうなのだ。

直人が何一夏関連で気に病んだりすると、いつも一夏はちょっと頭をど突く。

それで完全に気が収まるわけではないのだが、それでも、一夏が「気にするな」と言うと、直人もそれに従って気にしないようにする。

これが、この義兄弟のいつもだったりするのだ。

「良し、そうするか。三年ぶりだから、加減とか考えておかねえと」

いつしか一夏の頭の中は、さっきまでの暗い思考から、直人を如何ど突くかの方に神経がいっており、顔も自然といつもに戻っていた。

「ん？」

とここで、部屋のシャワールームの方から音が聞こえてるのに気付く。

自分は今ここにいるので、シャワーを使ってるのが誰なのか、すぐに察しがついた。

ルームメイトのシャルルだ。

そう察した一夏は、荷物を置き、ベッドに腰掛けるが、ここであることを思い出す。

「あっ、そうだ」

そう言って一夏は、棚からボディーソープを取り出し、浴室の脱衣所に入る。

この行動からも解る通り、今ボディーソープは切れているのだ。

「シャルル。ボディーソープ切れてるだろ？　替えの……」

そのことをシャワーを使ってるであろうシャルルに伝えようとする一夏だが、途中で言葉が途切れる。

と言うのも、一夏が入ってきたのとほぼ同時に、シャワールームから……

一人の「女性」が、出てきたからだ。

「……うわっ！！」

しばらく沈黙していたが、やがて裸体を見られてることに気付いた女性が、顔を赤くして自分の体を隠す。

「えーっと……これ……ボディーソープ」

「う、うん……有難う」

暫くして一夏が再起動し、ボディーソープを渡すが、両者とも、

その動きは非常にぎこちなかった。

「ああ……じゃあ、それじゃあな」

「う、うん……」

そうやって目の前の女性と会話しながら、一夏は浴室を出る。

だが後になって、混乱していた頭を整理し始める。

先ほどの女性は、この状況で考えるにシャルルだろう。

顔立ちや髪は似ていたし、何より胸元に、依然見せてくれた待機状態のＩＳがあった。

だが、シャルルは「男」の筈だ。

先ほどシャワーを浴びていた人物には、まぎれもなく、女性特有の膨らみがあったし、体つきも女性ぽかった、と言うよりそのものだった。

どういう事か、正直見た時はいろいろ衝撃的だったため考える暇がなかったが、冷製になって考えられる答えは、恐らくひとつ。

そうこう考えてるうちに、浴室からシャルルが現れる。

姿はジャージで、普段は束ねてる髪もほどいているが、やはり膨らみはあった。

そしてお互いベッドに腰掛けているが、先ほどの衝撃的な出来事からか、会話は無く、沈黙が部屋を支配していた。

「あ、あのさあ。お茶淹れようか？」

「う、うん……もらおうかな……」

やっと絞り出した会話もそんな感じだった。

そんなこんなで、一夏はお茶を淹れ、それをシャルルに渡す。

「はい」

「あ、ありがとう」

だが、シャルルが湯飲みを受け取ろうとした瞬間だった。

「！！」

「お、おい！」

一夏と手が触れた瞬間、思わずびっくりしたシャルルはお茶をこぼしてしまう。

そしてこぼれたお茶は、そのまま一夏の手に掛かってしまう。

「うわっ！　あちち……」

「あっ！　御免！」

びっくりしながらも、二人はすぐにキッチンの水道で一夏の腕を冷やす。

「大丈夫？　ちょっとみせて！　あぁ、赤くなってる」

自分が原因である為、シャルルは特に必死だった。

「本当にごめんね！」

「いやあ、大したことない、って言うかその……当たってるんだが」

すぐに冷やしたので大したことないと言うが、今の一夏には別の問題があった。

そう、当たってるのだ。

一夏の腕に、シャルルの女性特有の膨らみが……

「えっ？　……っ！？」

すぐにその言葉の意味を察し、胸のあたりを腕で隠すようにしながら、一夏から離れて後ろを向く。

「……一夏のエッチ」

「何でだよ！！」

シャルルの抗議の目と共に言われた言葉に、一夏も激しく抗議するのだった。

「で。なんで男のふりなんかしてたんだ？」

落ち着きを取り戻した後、一夏はシャルルから事情を聴いていた。

シャルルが女性であることは先ほどのごたごたで解ったが、その理由については図りかねていた。

「実家から、そうしろって言われて」

「お前の実家って、確か、デュノア社の」

シャルルの実家、デュノア社は、フランスのＩＳ開発企業である。

世界第三位のシェアを持つ企業で、今ＩＳ学園で訓練機として使われている機体「ラファール・リヴァイヴ」を開発した会社でもある。

「そう。僕の父がそこの社長。その人からの直接の命令でね」

「えっ？」

一夏はますます解らなくなった。

実家からの命令という事で、ＩＳの試験運用とか、そう言う関連の用事であろうという事は容易に想像がつく。

だが、何故男装する必要があるのだろうか？

そういうのが目的なら、普通に女子として送っても、何ら問題ないのではないか？

ますます疑問を浮かべる一夏だったが、次のシャルルの言葉に驚愕する。

「僕はね一夏。父の、本妻の子じゃないんだ」

「えっ！」

その言葉が意味するところは一つだった。

彼女は、デュノア社社長の、愛人の子、という事だ。

それからシャルルは、自分の身の内を、少しずつ明かしていった。

彼女がデュノア社に引き取られたのは、二年前。

それまでは父とは別々に暮らしていたのだが、彼女の母親が亡くなった時に引き取られた。

そして、検査の過程でＩＳ適正が高いことが解り、非公式にテストパイロットを務めていた。

だが、父と話したのはたったの二回、話をした時間は、一時間にも満たないという。

「その後すぐにね、経営危機に陥ったんだ」

「えっ？　でもデュノア社って、量産機のＩＳのシェアが世界第三位何だろ？」

「うん。でも、結局リヴァイヴは第2世代型なんだよ」

そう、幾らシェア第三位と言っても、デュノア社が作ってるラフ

ァール・リヴァイヴは、後期に開発された第2世代のＩＳ。
セシリアのブルー・ティアーズ、鈴の甲龍、そして今日見た、ラウラのシュバルツェア・レーゲンに代表されるように、現在世界ではＩＳの開発は第3世代型が主流になっているのだ。
彼女たちこのＩＳ学園にいるのも、機体のデータ収集が目的だったりするわけだ。

「あそこも、第3世代型の開発に着手はしているんだけど、中々形にならなくて、このままだと、開発許可がはく奪されてしまうんだ」

「それとお前が男のふりをしてるのと、どう関係があるんだ？」

ここまで来ても、まだ一夏には解らなかった。

この場に直人、或いは紅葉が居れば、恐らく理由も理解できたかもしれないが。
そしてシャルルは、自分が男装して、この学園にやってきた、真の目的を話す。

「簡単な話だよ。注目を浴びるための広告塔。それに、同じ男子なら、日本に出現した特異ケースと、接触しやすいからね。その使用機体と本人のデータを手に入れられるかもって」

ここまで彼女が話したことで、漸く一夏も、彼女の男装の理由、ひいては、それを指示したデュノア社の意図も理解した。

「そう、君と直人のデータを盗んで来いって言われてるんだ。僕はあの人にね」

それを聞いて、一夏は顔をしかめる。

それは彼にとって、どうしても納得できないことがあるときの顔だった。

「はぁ、本当の事を話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで嘘をついてて御免」

真実を打ち明けたことで、気が楽になったシャルルは、話を聞いてくれた一夏にお礼するとともに、今まで彼をだましていたことを謝罪する。

目的が目的とはいえ、自分にこうまでよくしてくれた人物を騙すのは、やはり心苦しかったのだろう。

「……良いのか？」

「えっ？」

「それで良いのかよ！　いや、良いわけない！」

「い、一夏!?」

だが突如、一夏の感情が爆発した。

しかしそれは、今まで自分をだましていた、彼女に対するものではなかった。

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そうだろうさ。でもだからって、何でもして良いって理由にはならないだろ！」

「一夏……」

そう、彼の怒りの理由は、彼女にこんなことを強いる、彼女の親に対するものだった。
そして、シャルルが本当の事を話したからなのか、一夏もまた、自身に関するあることを打ち明けた。

「俺と千冬姉も、両親に捨てられたんだ」

「えっ！？」

「俺の事はいい、別に会いたいとも思わない。それに、あいつに比べたら、俺はまだいい方だ」

「あいつって、直人の事？」

ここで一夏は、自分と千冬が、両親に捨てられたことを話すとともに、直人を話の引き合いに出した。

「ああ。あいつは……物心ついた時から孤児院にいて、髪と目の所為で苛められて、誰にも助けてもらえなかったんだ」

「えっ！？」

「俺と千冬姉が初めて会った時には、孤児院でも手を焼く問題児になってて、誰彼構わず襲っていたんだ」

「……」

シャルルから離れた後、一夏は直人の過去を話す。
あまりに今とかけ離れているその話に、シャルルも驚きを隠せな

かった。

「でも、あいつは本当は助けを求めていた。自分を一人にしてほしくなかったんだ」

「何でそう言えるの？」

「初めて会った後、あいつ、俺に襲ってきたんだけど、千冬姉に一発殴られて、そのまま動かなくなった。その後二人っきりになった時、あいつは泣きながら言ったんだ。「どうして誰も助けてくれないんだ」って」

「……」

「両親に捨てられても、俺にはまだ千冬姉がいたから、寂しさとか、辛いとか、そう言うのはあまりなかった。だけどあいつは一人だった。気の許せる奴も、頼れる大人もいなかった。その所為であいつは、俺以上に辛い思いをしてきたんだ。だから、俺がこいつの最初の理解者になろうって、その時子供ながらに思ったんだ」

「それで、直人を引き取ったんだ」

「ああ、必死に千冬姉に頼み込んだよ。何度も駄目だって言われても、必死に頼み込んでな。とうとう千冬姉も根負けして、一緒に暮らすようになったんだ」

「そうだったんだ」

両親に捨てられたことについては、一夏には千冬がいたから、寂しさはあまりなかった。

だが、直人は親兄弟がおらず、孤児院でずっと孤独な毎日を送っていた。

そして、髪と目の所為で虐めを受け、周りの大人にも助けてもらえず、自分をいじめる相手に手を出したことで、その孤立をさらに深めていった。

織斑家に来るまで彼は、自分を救ってくれる人物、自分を助けてくれる人物に会うことなく、ずっと孤独の中で生きてきた。

そんな彼に比べれば、自分はまだ恵まれてる方だと、一夏は思ったのだ。

「それで、お前はこれからどうなるんだ？」

と、自身と直人の事を一通り話し終えた一夏は、シャルルに、今後どうなるかを聞く。

「どうって……女だってことがばれたから、本国に呼び戻されると思う。その後は解らない。良くて牢屋行きかな」

理由がどうあれ、性別を偽って、本来は男子が入ることを許されない学園に潜入したのだ。

代表候補生の資格をはく奪されるのは当然としても、このままでは彼女が刑務所行きになるのは明かだった。

「だったらここに居ろよ！」

しかしそんな事、当人に非がないのに、親の都合で彼女が投獄されるなど、一夏が許せるはずもなかった。

「俺が黙っていればそれで済む！　もし仮にばれても、お前の会社

は手出しできないはずだ！」

そう言って一夏は荷物を漁り、生徒手帳を取り出す。
そして、そこに書かれている、あることを口にした。

「ＩＳ学園特記事項“本学園に在籍する生徒は、在学中において、ありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない”つまりこの学園に居れば、少なくとも三年間は大丈夫ってことだ。その間に何か方法を考えよう」

これこそが、彼が強気な理由だった。

ＩＳ学園は、地理上日本に存在するものの、日本を含め、あらゆる国家や組織などの干渉を受けない、と言う国家規約がある。
無論、完全に外部からの干渉を遮断することは不可能だが、それでもこの学園に居れば、デュノア社もフランス政府も、強引な方法で彼女の身柄を拘束することはできないのだ。

「よく覚えてたね。特記事項って、全部で５５個あるのに」

しかしシャルル本人としては、一夏がその特記事項を憶えていたことに驚いていた。
さっき彼女が言ったように、学園の特記事項は全部で５５個、そのすべてを憶えることは至難の業と言っても良いのだ。

「こう見えても勤勉なんだよ、俺は」

と、本人は言うが、実際のところは、この特記事項は直人に仕込まれたものだったりする。
直人曰く「覚えておいて益はあれ損はない」と言うので、完全に

記憶するまで、徹底的に仕込まれたのだ。

「一夏……庇ってくれて、ありがとう」

「ああ、いや……！」

シャルルにお礼を言われ、少し照れるが、ここで彼はあることに気付く、と言うか、気づいてしまう。

「胸！　胸が見えそうだって！」

「えっ？　……！！」

一夏に言われ、シャルルは再び自分の胸を隠す。

「そんなに気になる？」

「当たり前だろ！」

唐変木だ何だと言われているが、一夏だって健全な男子高校生。異性の体にまったく興味がないわけではないのだ。

「……ひょっとして、見たいの？」

「えっ！？」

「一夏のエッチ」

「何でだよ！　なんでそうなるんだ！」

だがそれを、あらぬ意味に受け取られたらしく、そんなことを言われ、思わず狼狽する。
しかしそこへ、外部から声が聞こえる。

「一夏ー、いるー？　一緒にご飯食べに行くわよー！」

その声は鈴だった。

その声を聴いた途端、一夏はシャルルをベッドに入れ、その直後に鈴がノックもせずに入ってきた。

「何やってんの？」

「い、いやあ、シャルルが風邪っぽいって言うから、布団を掛けてやってたんだ」

一夏の嘘に合わせて、咳をする真似をするシャルル。
今鈴に、彼女が女だとばれるわけにはいかない。
その為、苦し紛れではあったが、そう嘘をつくしかなかった。

「ああ、日本に来たの初めてだもんね。慣れないこと多くて疲れがたまったってわけか」

「そ、そうみたいなんだよ！」

「御気の毒に。あっ、一夏借りてくけど良い？」

「ごほっ、ごほっ、ど、どうぞ」

「良し！　じゃあ行くわよ！！」

「えっ！　あっ、おい！」

こうして鈴に引っ張られ、一夏は部屋を出て行った。

「な、何をしている！」

「何って、これから一緒にご飯食べに行くところだけど？」

食堂へ向かう途中、廊下で箒と紅葉に出くわした二人。

箒の質問にあっけらんと答える鈴だったが、問題はそこではなかった。

「だからと言って、何故腕を組んで密着する必要がある！！」

そう、今の鈴は一夏の腕に密着しているのだ。

腕を組むだけならまだ良いだろうが、流石にこれは許容しかねるようだ。

いや、前者もある意味譲りがたいだろうが。

「良いじゃない別に、幼馴染なんだし。それにセシリアが言ってた

わよ、「男性が女性をエスコートするのは当然です」ってね」

「どっちかって言うと、俺がされてるような……」

実際、そうなのかもしれないが。

「あれ？　シャルル君は一緒じゃないの？」

「えっ！　あ、ああ、何か、風邪を引いたらしくてな。今部屋で寝込んでるよ」

「そっかあ、慣れない異国暮らしで疲れちゃったんだね。後でご飯持っててってあげなよ」

「あ、ああ、そうだな」

シャルルがいないことに疑問を呈した紅葉に、一夏は少しドキッとした後、先ほどと同じ嘘をつく。

紅葉は（嘘とは言え）、それで事情を察し、後でご飯を持ってってあげようという事になった。

「そんなことはどうでも良い！　とにかく、私も付き合おう。今日の夕食は少々物足りなかったからな」

「良いの？　アンタさっき紅葉と食ってきたんでしょ？　太るわよ」

そんな紅葉と一夏の会話を無視し、箒は自分も付き合うと言ってくる。

しかし、せっかくの二人きりを邪魔されたくなく、鈴はそう言って箒をけん制する。

「心配は無用だ。これで居合の練習をして、カロリーを消費するからな」

「って、真剣だろそれ！」

そう、箒が持ってる包みから取り出したのは、一本の真剣だった。

「で、では……参るとするか」

「ちょっと、何やってるのよ！」

何をやってるかと言えば、鈴が組んでる腕と反対の腕に、箒も腕を組ませてきたのだ。

「男が女をエスコートするのは当然なのだろ？」

「待てよ二人とも、こんなの歩きづらいだけ……」

と、一夏が言った瞬間。両脇から抓られた。

「いてぇ！！」

「この状況で、他に言う事は無いのか！」

「全くあんたは、少しは自分が幸福だって自覚しなさいよ！」

そう言って、三人はそのまま食堂へと向かっていくのだった。

「あ、あはは……一夏くーん。そのうち君、冗談抜きで後ろから刺

されるかもねー……」

一夏の唐変木ぶりと、彼に次々降りかかるであろう女難の日々を予想しつつ、紅葉はそう呟くのだった。

「た、ただいま……」

「あっ、おかえり。どうしたの？」

「……気にしないでくれ」

しばらくして、トレイを持って一夏は部屋に戻ってきた。

その際、なぜか顔が青ざめてるようだったが、食堂で何があったのか、敢えて多くは語る必要は無いだろう。

「飯貰ってきたぞ」

「あ、ありがとう。いただくよ」

そう言って布団から出て、ご飯を食べようとするシャルルだった

が……

「っ！！」

ここで彼女は、非常に不味いことになったと気付く。

献立は焼き魚定食だが、そこに問題があるわけではない。

問題は、食事と一緒に載ってる、「あるもの」だ。

「どうした？」

「う、ううん」

そう言ってシャルルは割り箸を割るが、歪な形に割れる。

そして、ぎこちない動きで食事をとろうとするが、なかなかうまくいかない。

これを見て、一夏はすぐに解った。

「箸苦手なのか？」

「練習してはいるんだけどね」

そう、彼女は橋が苦手なのだ。

まあ、フォークやスプーンが基本の西洋人にとって、箸は使い慣れない事この上ないだろう。

いろいろあったとはいえ、一夏はそのことをすっかり失念してしまっていたのだ。

「悪かった、フォーク貰ってくるよ」

「えっ！　良いよそんな！」

一夏がフォークを貰ってこようとするが、自分の為に色々苦労してもらってるからか、シャルルは遠慮がちにそう言う。

それを見て、一夏は彼女に言った。

「シャルルはもう少し、人に甘えることも覚えた方が良いぞ。そんなに遠慮してばっかじゃ、損するって」

一夏にそう言われ、シャルルは少し考え込むように黙り込む。

別に謙遜が悪いわけではないが、彼女は事あるごとに自分を押し殺して、他人に迷惑を掛けないようにしている。

それはある意味では美徳とも言えるだろうが、あまり遠慮しすぎるのも、一夏にとっては見過ごせないのだ。

我儘になれとは言わないが、困ってる時に、遠慮せずに助けを求めるのは、何ら恥ずべきことではないのだから。

「最初は、俺に頼ることから始めたらどうだ？」

無論、いくらルームメイトとは言え、あって数日しかしてない相手に甘えるというのも、土台無理な話だ。

そこまでいかずとも、初めは自分に頼ることから始めればいい。

一夏はそう考えていた。

「じゃ、じゃあ……あの……」

「ん？」

その言葉に、何か言いづらそうにしながらも、意を決して、彼女はとんでもない一言を言うのだった。

「……一夏が食べさせて」

「……えっ？」

「甘えても良いって、言ったから……」

これはある意味、一夏にとって予想外だった。

確かに甘えた方が良いとは言った。

自分に頼ることから始めた方が良いとも言った。

だがまさか、自分に食べさせてほしいと言うとは、一体だれが想像できただろうか？

少なくとも、人の好意に全く気付かないこの唐変木に、そんなこと想像できるわけもないだろう。

「駄目？」

しかし、その一方でシャルルも、上目遣いで、捨てられた子犬のような目で一夏を見つめる。

その結果は……

「よ、良し。男に二言は無い！」

折れた。

別に頼れと言ったのは自分なのだから、それを反故にする気はさらさらないのだが、彼女の目を見て、断れるほどこの男は冷たくな

い。

むしろ、そんな人物は人の皮をかぶった鬼だと言いたい。

「じゃ、じゃあ……行くぞ。えーっと……あーん」

「あーん」

それはさておき、一夏はシャルルに言われた通り、箸に焼き魚の身を掴み、それをシャルルの口に入れる。

さながら、雛鳥にご飯を分け与える親鳥のようだった。

「美味いか？」

「うん。美味しい」

「そうか、良かった」

「その、次はご飯が良いな」

「おっ、飯か。よし来た、待ってろ」

そう言われて、手慣れた手つきで箸でご飯を掴む一夏。

その時シャルルが、これまでの社交辞令ではない、心から笑っていたことに、彼は気付くことはなかった。

「良いか？　あーん」

「あーん」

こうして、しばらくの間、寮部屋の一角で、甘い展開が繰り広げられることとなったのだった。

第二十話　明かされる貴公子の秘密。（後書き）

桜爛の間

作者「終わった……やっと書き終わったよ。ええ、今日は諸事情により、代わりに原作主人公、織斑一夏を呼んできました」

一夏「よ、よろしくー」

作者「さて、ついに美少年シャルル、その秘密が明かされたわけですが」

一夏「本当にびっくりしたぜ。まさか女だった何てな」

作者「それは同感。はっきり言って作者も、初めて見た時は男の娘にしか見えなかったし」

一夏「おい、字違ってねえか？」

作者「いえ、合ってますよ？　しかし、確かに親だからと言って、子供に何でも強いていいって言う理由にはならないよね。作者も虐待事件とかニュースで見ると、くだらない良いわけで容疑を否認する親に憤りをよく覚えます」

一夏「へー、意外と良心的なんだな」

作者「以外は余計です。さて、ＩＳ一の甘々シーンをどうにかして入れたわけですが」

一夏「甘々って……ただシャルルに飯食わせてただけだけど？」

作者「そんなこと言えるのは君だけだよ。まあ、こんな描写も拙い作者ですから、うまくできてるかどうかわかりませんが。さ、気を取り直して、「直人の目安箱」からだ」

一夏「おお、どんな質問なんだ？」

作者「その前に、さっさと呼んでおくか。皆さーん、出てきてくださーい」

直人「おお」

紅葉「やっほー」

一夏「直人に紅葉？」

作者「ああ、質問は二人に来たからね。まあ、君にかわりに答えてもらっても良いんだけどね」

一夏「俺がここにいる理由って……」

作者「まあまあ。さ、まずは一つ目！」

1．（直人・紅葉別々に答えてもらいます）
沙霧の様な女の子が突然現れて、直人に『好き』と出会い頭に告白されたら？

直人「……ありえないだろ？」

作者「そうですか？　まあ、取り敢えず答えちゃってください」

直人「うーん……まずどうして好きなのかを問うな。いきなりそんなこと言われても、困惑するだけだろ？」

作者「ご尤も、それで紅葉は？」

紅葉「私も、その子と直人に、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩするよ？」

作者「……今紅葉の後ろに何か見えた気がしたが、気のせいという事にしておこう。んじゃ次！」

2．お気に入りのお茶（↑ここ重要）は？

作者「です」

直人「何で茶の所が重要なんだ？」

作者「まあ良いじゃん、さっさと答えちゃって」

直人「やっぱり緑茶だな。日本人と言ったら緑茶だろ？　後は番茶だな。茶は別にウーロン茶だろうとほうじ茶だろうと何でも飲めるが、一番好きなのと言われたらこれだな。ちなみに真白は紅茶が好きだ」

作者「はい。質問をくれた三月語様、本当にいつもありがとうございます。次は「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」です！」

直人「今回はどんなアフレコなんだ？」

作者「今回は結構来てるぞ。まずは直人から」

直人「どれどれ……おお、これ位なら良いぞ」

作者「それでは連続で言ってもらいます。どうぞ！」

直人「礼を言う」

直人「たとえ普通は気絶する程のキズでも、おれは倒れちゃいけねェ。たとえ普通は死んじまうほどのキズでも、おれは死んじゃいけねェ。普通じゃねェ”あいつ”に勝つためには、普通でいるわけには、いかねェんだ！！！」

作者「両方とも、超人気漫画。【ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ】のゾロの台詞です。前者がアラバスタで、Ｍｒ．１との戦いに勝利した時、後者が、恐らくはっちゃんとの戦いの最中の台詞かと」

一夏「何だろう。すげえ違和感ねえ」

紅葉「だよねえ」

作者「じゃあ次は、全部一夏に言ってもらいます」

一夏「えっ？　俺？　……なあ、なんで俺こんなに台詞多いの？」

作者「何しろ今日は一夏の活躍補完の話だったからね、君に良い台詞を回したわけ。つべこべ言わずにさっさと準備してきなさい」

一夏「解った解った」

作者「それでは、どうぞ！」

一夏「これは命を誓う旗だから　冗談で立っている訳じゃねェんだぞ！お前なんかがへらへら笑ってへし折っていい旗じゃないんだぞ！！」

一夏「人はいつ死ぬと思う・・・?心臓を銃で撃ち抜かれた時・・・
違う。猛毒のキノコスープを飲んだ時・・・違う!!!・・・人に
忘れられた時さ・・・!!!!」

一夏「どんな船でも・・・・・・造り出す事に”善”も”悪”もね
ェもんだ・・・!!この先お前がどんな船を造ろうと構わねェ!!・
・・だが生み出した船が誰を傷つけようとも!!世界を滅ぼそうと
も・・・!!生みの親だけはそいつを愛さなくちゃならねェ!!!
生み出した者がそいつを否定しちゃならねェ!!造った船に!!!
男はドンと胸をはれ!!!!」

作者「これらすべてＯＮＥ　ＰＩＥＣＥからの台詞です。最初のは、ご存知主人公ルフィの台詞。二番目はチョッパーの恩人、Ｄｒ．ヒルルクの台詞。三番目は伝説の船大工と言われるフランキーの恩師、トムさんの台詞でした」

紅葉「どれもこれも良い名言よねえ」

作者「はい。しかし、最初はともかく、やはり一夏では役不足感が……」

一夏「じゃあ何で言わせたんだよ！」

作者「正直良い人選がいなかったから。としか言いようがないな」

一夏「……」

作者「さてと、今回も質問とアフレコ、双方にリクエストをくれた三月語様、本当にありがとうございます。他の皆様も、疑問に思ったことやアフレコなどがあれば、どしどしご応募ください」

直人「さてと、何度も言っているが、今日の夜１１時に、真白のＩＳの名前のアンケートは終了だ」

作者「いやあ、それがですね……」

紅葉「どうしたの？　なんか問題でも」

作者「……これを見れば解るよ。これは現在までのアンケートを集計した結果です」

1. 『Ｓｃｈｎｅｅｗｉｔｔｃｈｅｎ（シュネーヴィットヒェン）』　２票
2. 『雪那（せつな）』　２票
3. 『雪颯（ゆきはやて）』　２票
4. 『弾丸の吹雪（ブリザード・バレット）』　０票
5. 『白き流星（ヴァイス・メテオーア）』　０票

作者「という結果だ」

直人「これは……」

紅葉「見事に別れたねえ」

一夏「だな」

作者「ええ。しかしこのままだと、非常に困った話になるんですよ。真白のＩＳの名前お披露目は再来週の予定なんですが。このままだと非常に困ります。そこでもし、今日の夜１１時までに新たな投票が無かったら……」

直人「無かったら？」

作者「２週間の空きを使って、決選投票を行いたいと思います！なのでまだ投票してない皆様。どうか投票、よろしくお願いします！」

直人「ちなみに決選投票はいつまでだ？」

作者「今日の夜１１までが締め切りで、開始時間は明日の昼４時から、１０月１８日の火曜、夜１１時までとします。もし決選投票になったら、再びご投票、お願いします」

直人「さて、次はアニメ第七話。ブルーデイズ／レッドスイッチの話か」

作者「はい。ラウラとの確執、それが一気に表面化する話だと思ってください」

紅葉「つまり、直人と真白ちゃんがさらにブチ切れる話と？」

作者「はい。それでは次回も、頑張って更新しますので、応援、宜しくお願いします」

第二十一話　怒れる真剣、黒き雨と激突す（前書き）

今回はアニメ第七話　「ブルーデイズ／レッドスイッチ」の回、名前通り、直人とラウラが再び対峙します。

しかしそこに、意外な乱入者が姿を現す。

真白のＩＳの名前アンケート、来週の火曜、夜１１時までですので、まだ投票してない人は、投票御早目にお願いします。

第二十一話　怒れる真剣、黒き雨と激突す

一夏が、シャルルの秘密を知ったその翌日。
徐々に近づく学年別トーナメント。
それに伴い、クラス内も、「例の噂」で持ちきりだった。

「そ！　それは本当ですの！？」

「嘘ついてんじゃないでしょうね！」

「本当だってば！　この噂、学園中で持ちきりなんだって！」

それは、『今月の学年別トーナメントで優勝すると、織斑一夏、桜庭直人と付き合える』という噂の事だ。

そして当然、この話を聞いたセシリアと鈴も食いついてきた。

「それは、お二人も承知していますの？」

「それがね……どうも本人たちはよく解ってないみたい」

「どういう事？」

「女の子の中だけの取り決めってことみたいなのよ」

そんな風に噂の事で持ちきりとなっていると……

「おはよう」

「何を話してるの？」

そこへ、件の噂の中心人物その一である一夏と、シャルルがやってきた。

突然二人に声を掛けられ、セシリアと鈴以外の女子たちは蜘蛛の子を散らしたように逃げていく。

「じゃあ。あたし、自分のクラスに戻るから」

「そ、そうですわね。私も自分の席に戻りませんと……」

そう言って、鈴とセシリアもそそくさと逃げていく。

「何なんだ？」

「さあ？」

まるで自分たちを避けるかのようなその行動に、二人は何故かと首を傾げるのだった。

実際は、男子の二人（一人本当は女子だが）に聞かれたら不味いと思っただけなのだが、そんなことは露知らない二人なのだ。

「ん？」

「あっ……」

そしてそこに、少し遅れて、件の噂の中心人物その二、直人が教室に入る。

だが、一夏の顔を見た途端、かつて鈴に対してと同じように、ど

こか気まずそうな顔をして目をそらす。

「……」

そんな直人に、一夏は無言で近づき。

「……うりゃ」

「がっ!?」

突如、直人の額を、裏拳で小突く。

その様子に周りが呆然とする中、意外と痛かったのか、直人は小突かれた額を押さえる。

「っ……」

「痛かったか？　久しぶりだから、やっぱ加減が利かねえな」

「って、いきなり何するんだ！」

当然、いきなり裏拳をされた直人は、いつも通り飄々と言う一夏に声を荒げる。

「何って、昨日のやり残し」

「やり残しって……」

あっけらかんとばかりにそう言われたため、直人も思わず拍子抜けする。

「昨日の話はこれで終わり、だからもう気にするなよ」

それで直人も、一夏の言わんとすること、先ほどの裏拳の意味も理解した。

昨日の話、自分が一夏が誘拐されてたのを知っててそれを助けに行けなかったことだ。

思えばよく、自分はこうやって一夏に小突かれ、その都度「もう気にするな」と言われたことを思い出す。

一夏が気にするなと言ったから、なるだけ気にしないようにしてたが、それはもう昔の話。

しかも今回は理由もそうだが、その後に生じた結果、ひいてはそれによる余波の事もあり、元の性格と相まって、そう簡単にはできない。

「だけど……」

「あの時の事は、助け出されるまで何もできなかった俺も悪いからさ、お前がそんなに気にすることじゃねえよ」

そう言って、直人の肩に手を置く。

「千冬姉の言葉じゃないけど、終わった事だし、何時までも気にしたって仕方ねえだろ？」

「一夏……」

「その代わり、もし俺が不味いことになったら、その時は頼むぜ」

その言葉に、直人の中で、何かが吹っ切れる感じがした。

「当然だろ。あんな思い、もうこりごりだしな」

そう言う直人の表情は、さっきまでの暗い感じはなく、いつも通り、いや、それ以上に晴れ晴れとした感じだった。

「ありがとう一夏、本当にお前には、気づかされてばっかだな」

「そんなことねえよ。でもよかった」

その様子を見てた周りの女子たちは、「あれが男同士の友情かぁ」と、良いものを見たような表情で、その様子を見守っていたのだが……

「親睦を深めあってるところ悪いが……」

そこへ、鬼教官がやってきた。

「さっさとどけ、そして席に就け、馬鹿者共」

今日も今日とて、出席簿の綺麗な音が炸裂するのだった。

「うーん、厄介なことになったねえ」

「……他人事だな」

「いや、実際私から見ればそうでしょ？」

「それはそうかもしれんが……」

授業が終わって休み時間に、箒と紅葉は屋上にいた。

箒が校内に流れてる噂について悩んでいると、紅葉がそこへやってきて、なぜそうなったのか、紅葉が推測する理由を説明していたのだ。

説明を一通り聞き、さらにはこのことで真剣に悩んでる自分の横で、まさに他人事の様に言う紅葉に、はぁとため息をつく。

「何故だ……一夏と付き合えるのは私だけの筈なのに。それに、何故直人まで巻き込まれているんだ！」

「噂って言うのは伝言ゲームみたいなものだからね。尾鰭背鰭が付くのは仕方ないよ」

「しかし！！」

自分の告白が（かなり間違っているが）、噂と言う形で広まってしまったことに加え、そこに直人が知らぬ形で巻き込まれてしまったことに、箒はどこかいたたまれない気持ちになる。

しかし、紅葉の言うとおり、噂と言うのは、えてして尾鰭背鰭が付くもの、つまり、大げさに伝わるものだ。

何らかの形で、そう言う形になってしまっても、何ら不思議ではないと言えばそうなのだ。

「まあまあ。要は学年別トーナメントで勝てばいいんだしさ、そんな深刻になることもないでしょ」

「そ、そうだな！　優勝さえすればいいんだ！　元々、そう言う約束だしな！　うむ！」

紅葉の的を射た発言に、箒も俄然やる気を出す。

問題はいろいろ山積みだが、それはさておくとして、優勝さえすれば良い、そうすれば何の問題はない。

だが……

「？　……どうしたの？」

「い、いや……なんでもない」

「何でもないって顔じゃなかったよ。それに、目もどこか迷いがあった」

いきなり紅葉に真顔でそう言われたため、箒も思わずたじろぐ。

この紅葉、意外とこういう風に鋭いというか、どこか油断できないところがあったりするのだ。

「『心に迷いや慢心があれば、それは目に見える形となって現れる』、うちの馬鹿姉貴の受け売りだけどね」

そう言われ、箒はそのまま黙り込む。

確かに今自分は、あることで悩んでいた。

しかし、自分では平静を装ってたつもりだったが、別の意味で驚きを隠せない。

「まあ、無理に聞き出そうって言うんじゃないの。話したくないならそれで良いけどね。それじゃあね」

そう言って、紅葉は、その場を何事もなかったのかのように去っていく。

「……心に迷いがあれば、目に見える形になる……か……」

その言葉を反芻しつつ、箒はしばらく、屋上で一人立たずものだった。

「あら？」

「ん？」

一方、ここアリーナに、二人の人物が足を運んでいた。

鈴とセシリアだ。

「早いのね」

「てっきり私が一番乗りだと思っていましたのに」

「あたしはこれから学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「私も全く同じですわ」

その会話の後、二人の間に火花が散る。

元々、不仲と言うほどではないが、あまりそりが合わず、加えて負けず嫌いの二人だが、今回の学年別トーナメントに関する噂が、二人の間の火花をさらに激しくしていた。

「何？　あんた直人じゃ飽き足らず一夏まで手に入れようっての？　これだから貴族のお嬢様は欲張りなんだから」

「あら？　鈴さんも幼馴染のお二人を手に入れようとしてるのでは？　『二兎を追うものは一兎をも得ず』という言葉を知りませんの？」

無論、心から思ってるわけではなく、ある意味牽制と言うか、暗に、「一位は譲らない」、と言う意思表示なのだ。

しかしその時、鈴があることに気付く。

「あっ、でもさ。こういう場合どうなの？」

「何がですか？」

「さっきの噂を聞く限りだと、優勝したら一夏と直人と付き合えるって言ってたけど、優勝者って一人よね？」

「ええ。ん？　とすると……優勝者は必然的に、どちらかを選べるわけですか？」

「そうなるわよね。普通に考えれば」

そう、噂では、『一夏、直人と付き合える』という話だが、どちらと付き合えるか、両方と付き合えるかまでは明言されていない。優勝者は一人なのだから、一般的に考えれば、その優勝者は必然的に、どちらかを選ぶことになるはずだ。

しかしそうなると……

「残った方って、どうなるの？」

「それは……2位の方と付き合う、ってことになるのではないかと……」

断言ができるわけではないが、普通に考えれば、残った方は2位の人物とくっつくことになる。

本当にそうなるかどうかはいまだ解らずじまいだが、この考えに至った二人は、同時に、ある事を思いつく。

「……セシリア。少し提案があるんだけど」

「奇遇ですわね。私も同じことを考えていましたの」

そう言うと、二人は同時に切り出した。

「直人あげるから、あたしに1位を譲って！」

「一夏さんを差し上げますので、私に一位を譲ってください！」

何ともしょうのない提案である。

「何よ！　あんたの狙いは直人でしょ！　だったら1位ぐらい譲りなさいよ！」

「鈴さんこそ、一夏さんと一緒になりたいんでしょ！　なら順位など関係ないのではないのですか！」

どっちもどっち、どちらかが妥協すればそれで済む話なのだが、そりの合わない上に負けず嫌いの二人に、相手に頭を下げるなど、まずできるはずもなかった。

「大体！　何であんたが1位って決まってるのよ！」

「当然ですわ！　私は一夏や直人さんと同じく、入試で教官を倒したんですよ。つまり、1位になってもおかしくないと思いますけど！」

「あたしだって。初めに受けていればそれぐらいできたわよ！」

龍虎……基、狐と狸の化かし合いにしか見えないこの争い、しば

らく二人は言い争っていたのだが……

「解った！　じゃあこうしましょう！　ここで勝った方が1位になるってことで！」

「よろしくてよ。まあ、私が勝つのは目に見えてますけど」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるわ！」

結局、今この場で戦い、勝った方に1位を譲るという事になった。

「あれ？　それってある意味八百長じゃね？」と言う疑問が浮かんできそうだが、生憎二人にそこまで考えてる余裕はない。

二人はＩＳを展開、そして、今まさにぶつかり合おうとした。

その時……

「「！！？」」

突如二人の間を、一発の砲弾が掠め、着弾点に爆風が巻き起こる。

二人が砲弾の飛んできた方向を見ると、そこにはドイツのＩＳ「シュバルツェア・レーゲン」を纏うラウラ・ボーデヴィッヒの姿があった。

「どういうつもり！　いきなりぶっ放してくるなんて、良い度胸してるじゃない！！」

何の勧告もなく、いきなり攻撃されたことに鈴は怒りをぶつける。

しかし、そんな鈴の言葉を意にも介さず、ラウラは冷ややかに二人を見つめる。

「中国の甲龍に、イギリスのブルー・ティアーズか……ふん、データで見た時の方が、まだ強そうではあったな」

「何、やるの？　態々ドイツくんだりからやって来てボコられたいなんて、大したマゾっぷりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそう言うのが流行ってるの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方は、どうも共通言語をお持ちで無いようですから、あまり苛めるのは可愛そうですわよ」

見下したような態度で言ったラウラの一言に、鈴とセシリアも、お返しとばかりに挑発的な言葉を放つ。

それでなくとも二人は、自分の思い人を打とうとした、或いは打ったこのラウラに、良い感情など持ち合わせているはずもなかった。

だがそんな二人を知ってか知らずか、ラウラはさらに挑発的な言葉を放つ。

「貴様たちのような者が、私と同じ第3世代機の操縦者とは……数だけが取り柄の国と、古いだけが取り柄の国は、よほど人材不足と見える」

その言葉に二人がカチンときた傍ら、二人のＩＳのハイパーセンサーが、『最終安全装置解除』と言う表示を映すが、今の二人にそこまで気にする余裕などない。

「この人、スクラップがお望みみたいよ！」

「そのようですわね！」

怒りのボルテージが溜まりつつあった二人だが、自分の国を馬鹿にされたことで、その怒りはさらに溜まる。

「ふん。二人がかりでどうだ？　下らん種馬二匹の為に張りあうメスどもに。この私が負けるものか」

種馬とは言わずもがな、一夏と直人の事だろう。

この言葉が、二人の怒りの炎に、油どころかガソリンを注ぎ込んだ。

「今何て言った？　アタシの耳には、どうぞ好きなだけ殴ってくださいって聞こえたんだけど！！」

「この場にいない人間の侮辱までするなんて、その軽口、二度と叩けなくして差し上げますわ！！」

ついに、二人の我慢も許容値の限界に達する。

「とっとと来い」

「「上等　（ですわ）！！」」

その言葉と同時に、二人は一気に襲い掛かるのだった。

「一夏、今日も、特訓するんだよね」

「ああ。トーナメントまで、日がないからな」

「それでなくても師匠から、このままだと予選敗退だって言われてるしな」

「うんうん。一番頑張った方が良いよねえ、一夏君は」

一方、一夏、直人、紅葉、シャルルの四人が、仲良く並んで特訓の話をしていた。

間近に迫る学年別トーナメント。

結果を残すためにも、使える時間は特訓に回しておきたい。

一夏の言葉に続く形で直人、紅葉が言った言葉に、一夏もシャルルも苦笑していた。

すると……

「第３アリーナで代表候補生三人が揉めてるんだって！！」

そう言いながら走る女子を何人か見かける。

「……三人とも、何だろうな。俺、すっごく心当たりがあるんだが」

「俺も……」

「あたしも……」

「僕も……かな？」

嫌な予感を覚えた二人は、直ぐさま第３アリーナへと駆け出す。

アリーナの観客席につくと、そこには既に結構な数の女子が集まっていた。

そしてよく見える場所に四人、そこに遅れて箒もやってくるが、その突如、アリーナの方で爆発が起こる。

爆風が晴れるとそこにいたのは、予想通りと言うべきか、セシリアと鈴、そしてラウラだった。

「やっぱり……」

「あいつら……一体何やってんだ！」

予感的中とばかりに渋い顔をする紅葉の隣で、少し苛立ちを隠せない直人。

そんなことは露知らず、ラウラと対戦中の二人の一方、鈴が甲龍の目玉武器、衝撃砲「龍砲」を発射する。

しかし、発射された弾丸は、ラウラが腕を突き出すと、何かに阻まれたように、彼女の目の前で爆発した。

「龍砲を止めやがった！　何だあれは！！」

「……ＡＩＣ」

「あれが……」

「そうか！　あれを装備していたから、龍砲を避けようともしなかったのか！」

「……」

龍砲の弾が止められたことに驚く一夏の横で、シャルル、紅葉、箒が思い思いの言葉を口にする。

しかし、直人はただ黙りこみ、その様子を見守っていた。

だが心なしか、その表情には怒りの気が見え隠れしていた。

「ＡＩＣ？　なんだそれ？」

「シュバルツェア・レーゲンに搭載されている、第３世代型兵器だよ」

「正式名称はアクティブ・イナ―シャル・キャンセラー、頭文字をとってＡＩＣって呼ばれてる。ＩＳの基本システムの一つ、ＰＩＣの発展型で、相手の動きや攻撃を、強制的に停止させることができるの」

「そのため、慣性停止能力とも言われている」

一夏の問いかけに、シャルル、紅葉、箒が順に説明する。

シャルルと紅葉は、ともにＩＳ関連の企業出身という事もあり、箒も、姉がＩＳ関係者と言うだけあって、流石と言える説明をする。

だがそんな説明に、「ふぅん」と、あまり感心してないような返事をしながら、一夏は再びアリーナの方に目を向ける。

「解っているのか！」

「今見た。それで十分だ」

その返事に箒が語調強く聞くが、一夏はただ一言そう言って、真剣なまなざしで、戦いの行く末を見守る。

しかし一方で、戦いは更に苛烈さを増していった。

二対一と言う状況にありながら、ラウラは鈴とセシリアの攻撃をものともせず、二人を圧倒する。

だが、それはある意味当然かもしれない。

二対一、という状況とはいっても、二人は特に連携などは意識し

ておらず、いわゆる、「各々が勝手に攻撃を仕掛けてる」状態なのだ。
いくら数の上で有利でも、それを分散させてしまえば、その有利を自ら捨てることになる。
しかも、甲龍の龍砲は、ＡＩＣとの相性が悪く、それがこの状況に拍車をかけていた。

やがて、ラウラは鈴の足に絡ませたワイヤーブレードを使って二人をぶつけ、そのまま地面に叩き付ける。

しかし、尚も龍砲を撃とうとする鈴に対し、レールガンを使って龍砲を破壊するが、その隙にセシリアが、腰部のビットからミサイルを発射する。

至近距離なら、流石に反応的ないと考えての行動だったのだろう。

だが、ラウラは無傷だった。

実際はダメージを受けたのかもしれないが、深刻なほどではないという事なのだろう。

その後は、ラウラのワンサイドゲームとなった。

二人の首にワイヤーブレードを絡ませて引き摺り込み、徹底的に攻撃を与えた。

いや、それは最早、戦いと呼べるものではなかった。

「ちょっと何あれ！　完全にやりすぎじゃん！！」

「酷い！　あれじゃシールドエネルギーが持たないよ！！」

その様子に、紅葉もシャルルも声を荒げる。

しかし、二人、いや、この場にいる誰もが、そんなことを着に掛ける余裕はない。

何故なら、このまま続けば、もっと危険なことが待っているからだ。

「もしダメージが蓄積して、ＩＳが強制解除されれば、二人の命に関わるぞ！」

箒の言うとおり、このままの状態が続けば、二人は怪我どころか、命の危機にさらされてしまう。

そうなれば、二人がどうなるかなど、考えただけでも恐ろしい事だった。

「……あんな」

「直人？」

「あんなのが……あの人の教えた力だって言うのか」

しかし、ここで一夏は、直人の様子がおかしいことに気付く。

肩を震わせ、顔を俯かせていたが、明らかに怒ってる様子が目に

見えて解ってた。

「あんな暴力が……あの人の力だなんて言わせない。言わせてたまるか！！」

そう叫んだ刹那、光に包まれた直人は、そのままその場から姿を消す。

「何っ！？」

そして突然、ラウラが驚きの表情を浮かべる。

何故なら、彼女の目の前で逆リンチされていたセシリアと鈴はいなくなり、さらに、右肩のレールカノンが、真っ二つに斬られ、切られた砲身の下部が、地面に鈍い音を立てて落ちたのだ。

そして、ＩＳを纏った直人が、二人を抱きかかえ、アリーナの隅に居たのだ。

「二人とも、大丈夫か？　しっかりしろ！」

「うぅ……直……人？」

「直人……さん？」

「良かった。命に別状はないな。後で保健室に連れてくから、少しここで待っててくれ」

そう言って二人を下ろすと、直人は再びラウラに向く。

「おい、ボーデヴィッヒ」

「！？」

一方のラウラは、突然の事で困惑してたところへ、突如として、自分が目の敵にしている直人に声を掛けられ驚く。

何故あの二人があそこにいるのか。

何故レールカノンが斬られているのか。

何故、あの男がいつの間にアリーナにいるのか。

困惑する要素はかなりあるが、それでも顔をいつも通りの冷たい表情に変え、ラウラも直人の方を向く。

「俺言ったよな。俺を事をどう思おうと、何て言おうと勝手だが、俺の仲間に、友達に、大事な奴に危害を加えるなら、そのＩＳ事潰すって」

「だ、だから何だと言うのだ！」

虚勢にも思える言葉だったが、直人の言葉は、今まで誰もが感じたことのないような殺気を放っており、ラウラでさえ、少し恐怖を

感じた。

だがそれが、逆に思考を冷静にさせたらしく、今までの疑問が、すべて直人がやったことだと考えがまとまるのに、そう時間はかからなかった。

「なのに俺の幼馴染とクラスメイトをこんな目に遭わせて。覚悟はできてんだろうな？」

「ふん。それがどうした？」

殺気をビンビンに放ち、ラウラにドスのきいた声で放つ直人に対し、ラウラはいつも通りの、見下したような冷たい態度で対抗する。

「先ほどのスピードと、そいつらを助けると同時に、レールカノンを切り裂いた動きは認めてやる。だが、所詮はスピードだけが取り柄の欠陥機。その上、そんな雑魚の為に感情的になるとは。所詮貴様も、私とシュバルツェア・レーゲンの前では、有象無象の一人に過ぎん！」

「なら、その有象無象に斬られるてめえは、それ以下ってことだな」

「何？」

ラウラは先ほどの動きを称賛しつつも「取るに足らない」と決めつける。

しかし、その直後、取るに足らないと決めたその相手から、自分は有象無象以下だと言われ、眉をひそめる。

「貴様ごときが手に持つ鈍で、私を斬れると思っているのか？」

「俺には聞こえるぜ。てめえのすすり泣く声がな……」

すでに直人の方は、ラウラと争う姿勢を見せている。

右手に三日月宗近、左手に、肩に懸架されてる四本のうちの一本、「童子切安綱」を持ち、二刀流の構えを取る。

「面白い。貴様がここにいるという事は、あの男もいるんだろ？ちょうどいい。その減らず口を叩けなくして、奴への見せしめにしてくれる！」

「御託はいい。さっさと来い！」

ラウラはその言葉と共に、両手にプラズマ手刀を展開、既にキレていた直人も、二刀を構え突撃する。

しかし、二人の刃が交わろうとした瞬間……

二人の間で、大きな爆発が起きた。

「！？」

「何っ！？」

突然の事に驚き、二人は距離を取る。

一体誰の仕業なのか、二人はしばらく、爆発の起きた地点を見守っていたが。

「直人……下がって」

「っ！！」

突如声が聞こえ、直人もラウラも、アリーナにいた全員が、その声の発生源の方に顔を向ける。

そこはピットの上、そしてそこには……

「その女の相手は……私がする」

純白、という言葉が似合いそうな、白いＩＳに身を包んだ、真白の姿があった。

第二十一話　怒れる真剣、黒き雨と激突す（後書き）

桜爛の間

作者「ブルーデイズ／レッドスイッチに突入！　直人と一夏の和解（って言うほどの物でもない気がしますが）、ラウラＶＳセシリア＆鈴、そして、直人とラウラの対峙と、真白の登場でした！」

紅葉「一夏君と直人のあれは、うん、良かった。あれは見ててすごく良かった」

作者「うまくできてるかどうかは、正直自信ありませんが」

紅葉「でも、あそこで現れた織斑先生に「ＫＹ？」って心で思ったら、いきなり出席簿が飛んできた」

作者「それはそれは」

紅葉「織斑先生って、テレパシーの持ち主じゃないの？」

作者「うーん。思ったり思わなかったり」

直人「それ、間違ってないかもな」

紅葉「うわっ！？　直人居たの！？」

直人「ああ。だがなぜか作者から、「序盤はあまりしゃべらなくて良い」って言われてたからな」

作者「いやあ。今回は序盤から君を出すのは、憚るべきかなって思って。っとそんなことより、後書きコーナー行くぞ！　まずは「直人の目安箱」、三月語様からのご質問だ！！」

1．直人に

　テイルズ系の剣技が使えることは度々見ているので分かりますが、大体、ということは魔王爆炎槍（ＴＯＩＲルカ追加技）とか熱波旋風刃、閃空翔裂波とかも使える、ということですか？魔王灼滅刃とか神裂閃光斬とかも・・・？

直人「まあ、使えないこともないな。ただし、剣の動きだけで、炎とかそう言うエフェクトは出ないから、完全にできるとは言えないがな」

作者「そうだね。強いて人離れしてる点を挙げるとすれば、居合で鎌鼬みたいな斬撃を飛ばせることかな？」

直人「斬撃って言っても、要は少し鋭い風を起こせるだけだ。蝋燭の火位は消せるが、人を斬れるほどの殺傷性は無い」

作者「だそうです。さて、ここで一旦君には退場してもらいます」

直人「何？　どういうことだ？」

紅葉「良いから良いから」

作者「さて、直人が居なくなったところで登場してもらいましょう。どうぞ！」

セシリア「いきなり呼ばれましたが、一体なんですの？」

作者「今回は目安箱に、君宛の質問があったからね。それを答えてもらうよ」

2．セシリアに
前回の質問1で、（直人が好きだとお見受けしますが）同じ条件で貴女はどうしますか？

作者「恐らく先週の後書きコーナーで答えた、『沙霧の様な女の子が突然現れて、直人に『好き』と出会い頭に告白されたら？』って言う質問の事だと思うんだが」

セシリア「それはもちろん。直人さんとその方との関係を『包み隠さず』お話してもらいます♪」

作者「え、笑顔で怖いこと言うなあ……じゃあ次は、「抱腹絶倒！　アフレコ委員会！！」今回は女性陣に頑張ってもらいましょう。では参加者、カモーン！」

真白「来た……」

鈴「久しぶりね。こっちで出るのは」

作者「本日は真白、鈴、セシリア、そして紅葉に行ってもらいます。はい、これそれぞれの台詞ね」

紅葉「ふむふむ」

セシリア「えっ!?　こ、こんなことを……／／／／／／」

鈴「……ねえ、これ喧嘩売ってんの？」

真白「……解った」

作者「それではまず、トップバッターはセシリア！」

セシリア「えっ!?　わ、私ですか!?」

作者「ちゃっちゃと言っちゃいなさい。楽になるぞ？」

セシリア「うぅ……解りました」

作者「それじゃ、どうぞ」

セシリア「私は直人さんがいればいいんです・・・」

作者「【うたわれるものらじお】より、柚木さんの一言でした」

紅葉「元の作品でヒロインを演じてる人だね」

作者「ほかにも、リリカルマジカルの風の癒し手さんとか、「腸をぶちまけろ！」の人とかね」

セシリア「／／／／／／」

鈴「良かったわねえセシリア。告白できて（ー∀ー）ニヤニヤ」

セシリア「り、鈴さん！！」

作者「はいはい。じゃあ次は鈴ね」

鈴「えっ？　あたし！？」

作者「はい」

鈴「……どうしても？」

作者「どうしても」

鈴「……解ったわよ！　やればいいんでしょ、やれば！！」

作者「はい、ではどうぞ」

鈴「ちっちゃくないわよ！！」

作者「【ｗｏｒｋｉｎｇ┐！】で種島ぽぷらがよく言う台詞だそうです」

紅葉「作者、一応知ってるよね？」

作者「真面目には見ていませんが。ＢＳ１１で、あれの後に、ぬら孫　千年魔京やってるんだもん」

鈴「って言うか何コレ！　作者！　あんたあたしに喧嘩売ってんの！！」

作者「いや、真白はとてもこんな可愛く言いそうにないし、ラウラなんて論外だったから……」

鈴「くぅ……」

作者「じゃあ次は真白ね」

真白「うん、わかった」

真白「・・・私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない・・・。・・・ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

作者「【緋弾のアリア】より、レキが敵を弾く時の癖で言う台詞だそうです」

鈴「似合ってるわね」

セシリア「そうですわね」

真白「そうかな？」

作者「元を見てないから何とも言えないけど。次は紅葉ね」

紅葉「ほいほーい」

紅葉「二次元が初恋じゃダメですか！？」

作者「【うたわれるものらじお】より、これは三宅さんの台詞です」

紅葉「何だろうね。これを言った人、本編ではかなりの真面目キャラを演じてる筈なのに……」

作者「まあまあ、アニメのキャラ＝声優さんって訳じゃありませんから。それじゃあ最後は、また真白にやってもらいます」

真白「また？　良いけど……」

作者「それじゃ最後、どうぞ！」

真白「……好きって言ってにゃん♪」

作者「【うたわれるものらじお】で、柚木さんが言った一言、その二です」

紅葉「真白ちゃん……可愛い♪」

真白「そう？」

作者「はてさて、これで一体何人の人がハートキャッチされたのやら。ではいつもながら、質問とアフレコ、随時募集しております！」

紅葉「それと重大発表、真白ちゃんのＩＳの名前決選投票は、来週火曜、夜１１時をもって、締め切りとさせていただきます」

作者「現在四表集まっておりますが、まだ投票してない人がいましたら、ぜひ、ご投票お願いします」

紅葉「お願いしまーす！」

作者「そして次回は、乱入した真白が、ラウラと派手にドンパチやらかします！　真白のＩＳの初お披露目、そしてＶＳラウラ、果たしてどうなるのか、次回も頑張って執筆したいと思います！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0273t/

ＩＳ　桜の花纏う真剣

2011年10月12日09時52分発行